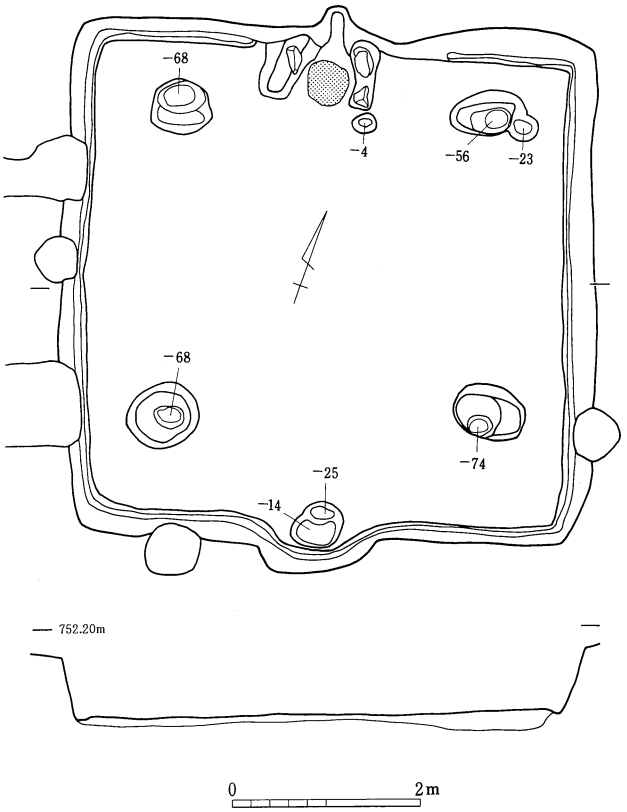
施　設：床面は平坦で、中央部は硬く、周辺部は軟弱であった。主柱穴が４基と全周する周溝が認められている。貯蔵穴・入り口などの施設は認められない。掘形は不規則な浅い凹凸が施されたものである。

遺物と時期：坏は半球形（348図１・２・３・４）が主体で、甕はやや厚手である。遺構の時期は７ｃ後半と考えられる。



第 258 図　131号竪穴住居跡

133号竪穴住居跡（第288図）　位置　ＶＥ−14

115号住居跡より古い。

カマド：北壁に築かれていたものと考えられるが、115号住居跡との重複により不明である。

施　設：床面は平坦で、中央部は硬く、周辺部は軟弱であった。主柱穴と考えられるPitは４基認められている。南壁の中央部の壁面はやや外側に膨らみ、その床面には１基のPitが見られることから入り口であったと考えられる。貯蔵穴は不明で、周溝は検出されなかった。掘形は施されていない。

遺物と時期：須恵器高坏の坏部（348図１）が得られた。遺構の時期は６ｃ後半と考えられる。

134号竪穴住居跡（第293図、PL83）　位置　ＶＪ−22

1071・1072・1073号土坑より新しく、106号住居跡より古い。

カマド：北壁の中央に位置し、左袖の先端に石の抜き取り痕が認められたことから、石を芯材とし粘土で覆って築かれていたものと思われる。燃焼部には支脚の抜き取り痕が1箇所検出されている。

施　設：床面は平坦で、中央部は硬く、周辺部は軟弱であった。主柱穴と考えられるPitが４基認められ、周溝は全周している。その他、貯蔵穴・入り口などの施設は検出されなかった。掘形は中央部は施されず、壁際が若干掘り込まれる程度であった。

遺物と時期：半球形の坏（348図１・２）と甕（３・４）が出土している。(4)の胴張り甕は内外面丁寧なミガキが施され、口縁部は手捏ねにより整形されている。遺構の時期は７ｃ後半と考えられる。

135号竪穴住居跡（第294図、PL83）　位置　ＶＪ−18

105・127・138・139号住居跡より古い。

カマド：北壁寄りの床面上に焼土塊が認められたことから北壁に設けられていたものと思われるが、105号住居跡との重複により不明である。

施　設：床面は平坦で、中央部は硬く、周辺部は軟弱であった。主柱穴は４基認められ、壁際には３基の補助穴が検出されている。南壁中央部には入り口施設が設けられていたものと考えられ、壁が突出しその床面には１基のPitが認められている。周溝は北壁を除き全周するものと考えられる。掘形は北壁中央（カマド周辺）から中央部が高く、周囲が深いタイプである。

遺物と時期：（348図１）の須恵蓋から遺構の時期は７ｃ末と考えられる。

136号竪穴住居跡（第294図）　位置　ＶＪ-18

139・130号住居跡より新しく、105号住居跡より古い。

カマド：他の遺構との重複により消失したものと考えられ不明である。

施　設：床面には凹凸があり、軟弱であった。北西コーナーと南西コーナーにはPitが検出され、西壁際には長さ140㎝の周溝状に溝が認められる。入り口など他の施設・掘形は認められなかった。

遺物と時期：甕（348図１）が１点図化できた。甕の口縁部の形態から遺構の時期は８ｃ中葉と考えられる。

137号竪穴住居跡（第293図、PL83）　位置　ＶＪ-21

128号住居跡より古い。

カマド：北壁の中央に位置し、袖先に石の抜き取り痕が見られることから石を芯材とし粘土で築いたものと思われる。燃焼部・煙道は遺構外に大きく張り出している。両袖の間隔は広く、火床には支脚の抜き取り痕が２基検出されていることから煮沸具二つ掛けの構造であった可能性が高い。

施　設：床面にはやや凹凸が認められ、全面が硬化している。主柱穴と考えられるPitは４基検出されている。周溝・入り口などの施設・掘形は認められなかった。

遺物と時期：在地産の暗文坏（348図２・３）、環状のつまみを持つ須恵蓋(5)、須恵鉢(6)が出土している。遺構の時期は８ｃ初頭と考えられる。カマドの灰からは石貝の可能性のある貝類の小片が検出されている。

138号竪穴住居跡（第294図）　位置　ＶＪ-18

135・139号住居跡より新しく、106号住居跡より古い。

カマド：北壁に設けられていたものと考えられるが、106号との重複で不明である。調査時の所見では139号住居跡の覆土内に本カマドの煙道先端が確認されており、北壁上端から約70㎝を測る長さのある煙道であったと考えられるが、図化出来なかった。

施　設：床面は平坦で、全体に硬くしまっていた。主柱穴と考えられるPitが４基確認されているが、北東のPitは床面ではなく周溝内に認められている。周溝は残存する部分で全て認められている。掘形は認められない。

遺物と時期：鉄製品は針（354図25）が出土している。土器では甕２点（349図１・２）が図化できた。甕の口縁部の形態から遺構の時期は８ｃ前半と考えられる。

139号竪穴住居跡（第294図）　位置　ＶＪ-17

135号住居跡より新しく、106・136・138号住居跡・1289号土坑より古い。

カマド：北壁の中央に位置し、袖先には面取りされた軽石が残り、石を芯材として用い粘土で築いたものと思われる。支脚の抜き取り痕が燃焼部で確認されたが、掘形の調査で火床部の下位から横に並列する支脚の抜き取り痕が2箇所認められている。掛け口の構造が二つ掛けから一つ掛けに造り替えたものと推測される。

施　設：床面には凹凸があり、硬化は弱い。主柱穴と考えられるPitは４基確認されたが、周溝などの施設は認められなかった。掘形は浅く不規則な形状であった。

遺物と時期：須恵坏（349図２）と薄手の甕(4)から遺構の時期は８ｃ前半と考えられる。

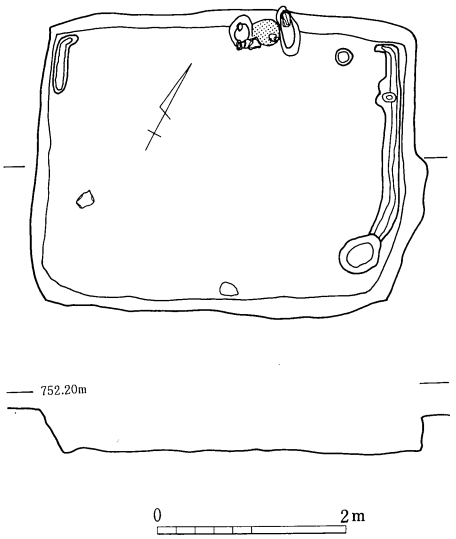
140号竪穴住居跡（第289図）　位置　ⅥA-16

121号住居跡より古い。東側は調査区外、北側は121号住居跡との重複で全貌は不明である。

カマド：不明である。

施　設：床面は平坦で、やや軟弱である。Pitは６基検出されたが、全貌がつかめないため機能の位置付けは不明である。周溝は認められず、他の施設については不明である。掘形は認められない。

遺物と時期：図化可能な土器の出土はなかったが、破片から遺構の時期は古墳時代後期と考えられる。



第259図　141号竪穴住居跡

141号竪穴住居跡（第259・289図、PL83）　位置　ⅥA-1

122号住居跡より古い。

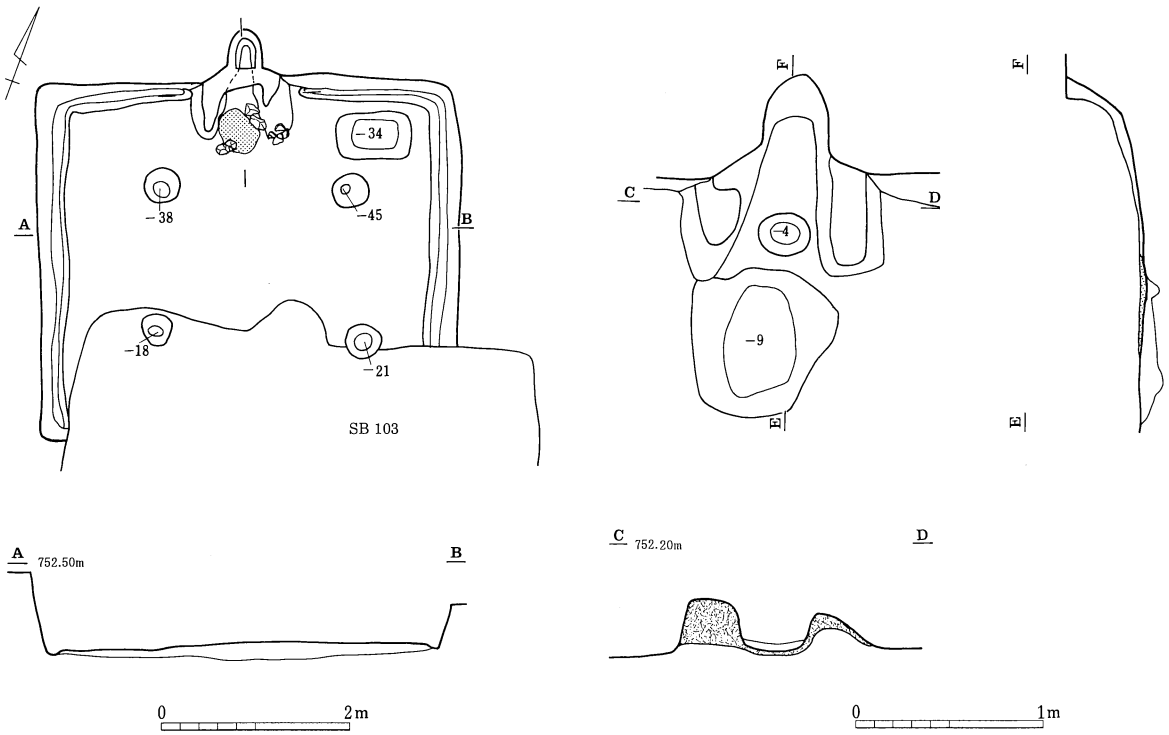
カマド：北壁の中央に位置し、袖先端に石の抜き取り痕が認められたことから、石を芯材として用いて粘土主体に構築されたものと考えられる。

施　設：床面は平坦で、硬化が認められた。Pitは南東コーナーに１基認められ、周溝は東壁と西壁の北半で検出されている。入り口・掘形は認められない。

遺物と時期：土器は調査段階のミスで122号住居跡と混ざってしまい、時期的な違いを認めることが出来なかった。新旧関係から遺構の時期は７ｃ後半と考えられる。

142号竪穴住居跡（第260・290図、PL83）　位置　ⅤⅠ-5

103号住居跡、1569号土坑より古い。

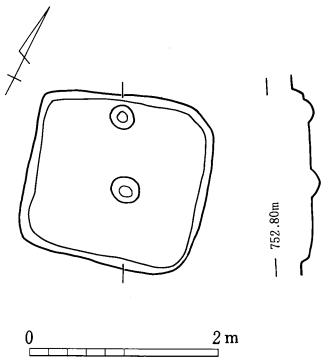


第260図　142号竪穴住居跡

カマド：北壁の中央に位置し、袖は地山を掘り残し粘土で構築したものと考えられる。粘土で作られた天井部の一部が残り、燃焼部中央には支脚の抜き取り痕が検出されている。炊き口手前の床面は深く掘られ灰が堆積していたことから、灰の掻き出しに伴い掘り込まれたものと考えられる。

施　設：床面は平坦で、中央部は硬く、周辺部は軟弱であった。主柱穴と考えられるPitが４基、カマドの右脇には深さ34㎝の貯蔵穴が検出された。周溝は全周する。掘形は貯蔵穴周辺と中央部が高く、周囲が深いタイプである。

遺物と時期：大型の鉢（349図１）が図化できた。遺構の時期は古墳時代後期と考えられる。



第261図　145号竪穴住居跡

143号竪穴住居跡（第284図、PL83）　位置　ⅥA-21

103・106・131・146・157・159・161号建物跡、1163・1164・1208・1412・1568・2001・2012号土坑より古い。

カマド：建物跡との重複により不明。

施　設：ほぼ平坦であった。柱穴・周溝などの施設は検出されなかった。掘形は認められない。

遺物と時期：時期を確定できる土器は見られず、遺構の時期は不明である。

144号竪穴住居跡（第284図）　位置　ⅥA-22

大半が調査区外のため全貌は不明である。

カマド：不明。

施　設：平坦であった。周溝は検出した範囲内では全て検出された。その他の施設、掘形は不明。

遺物と時期：時期を確定できる土器は見られず、遺構の時期は不明である。

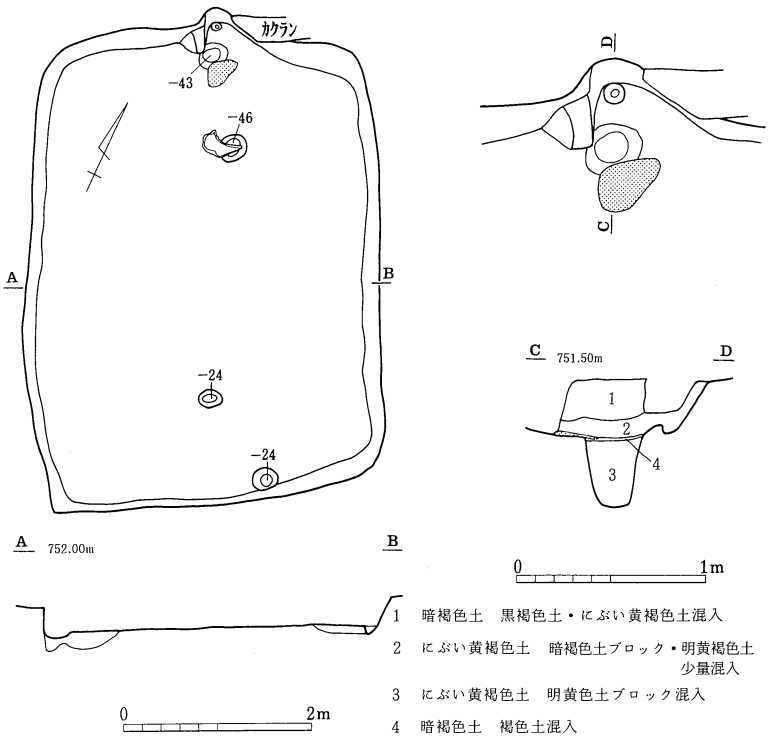
145号竪穴住居跡（第288図、PL83）

位置　ⅤE-24

重複はなく単独である。

カマド：北壁中央に深さ８㎝のPitが認められ土層には微量の粘土粒子が散見されることから、カマド掘形の一部と思われる。その他の痕跡は認められない。

施　設：床面は平坦であった。中央部に深さ11㎝のPitが検出された。その他の施設・掘形は不明。



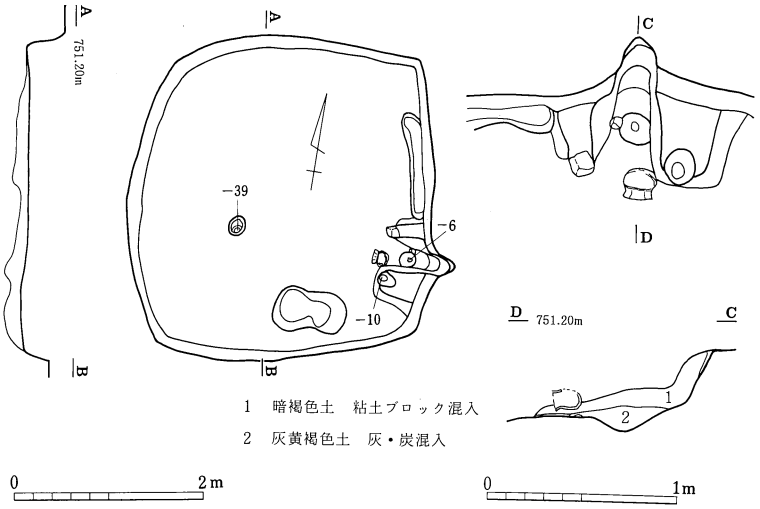
第262図　201号竪穴住居跡

遺物と時期：時期を確定できる土器は見られず、遺構の時期は不明である。

201号竪穴住居跡（第262・286図、PL83）　位置　Ⅲ Y−22

重複はなく単独である。

カマド：北壁の中央に位置し、袖の先端に石の抜き取り痕が認められたことから、石を芯材とし粘土で構築されていたものと思われる。支脚の痕跡が燃焼部の奥壁際で確認されている。火床下には深さ43㎝のPitが認められたが本跡に伴うものかどうかは不明である。



第263図　202号竪穴住居跡

施　設：床面は平坦で、中央部は硬く、周辺部は軟弱であった。主柱穴と考えられるPitが２基、南壁中央のやや東寄りには入り口に伴うと考えられるPitが１基検出されている。貯蔵穴・周溝は認められなかった。掘形は中央部が高く、周囲が深いタイプである。

遺物と時期：須恵坏（349図１・２）・蓋(3)が出土している。遺構の時期は9c前半と考えられる。

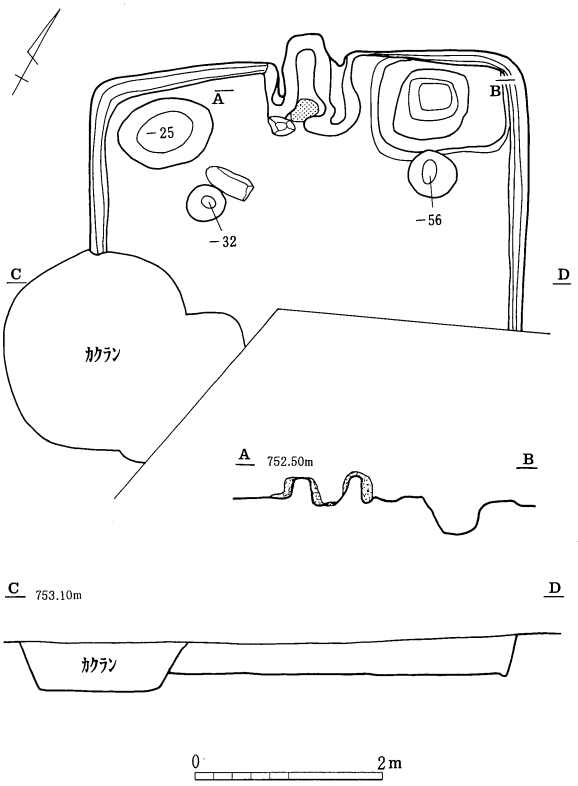
202号竪穴住居跡（第263・305図、PL84）　位置　ⅤD−5

重複はなく単独である。

カマド：東壁の南東コーナー寄りに位置する。袖は地山を掘り残し、先端に芯材の石を立て粘土で覆って構築したものと考えられる。支脚の抜き取り痕は燃焼部のほぼ中央に見られ、その横からは支脚に用いたと考えられる軽石が出土している。

施　設：床面は平坦で、全体に硬くしまっていた。不整形のPitが南壁の中央寄りに認められるが用途は不明である。周溝は東壁の一部にのみ検出された。掘形は浅く不規則な形状であった。

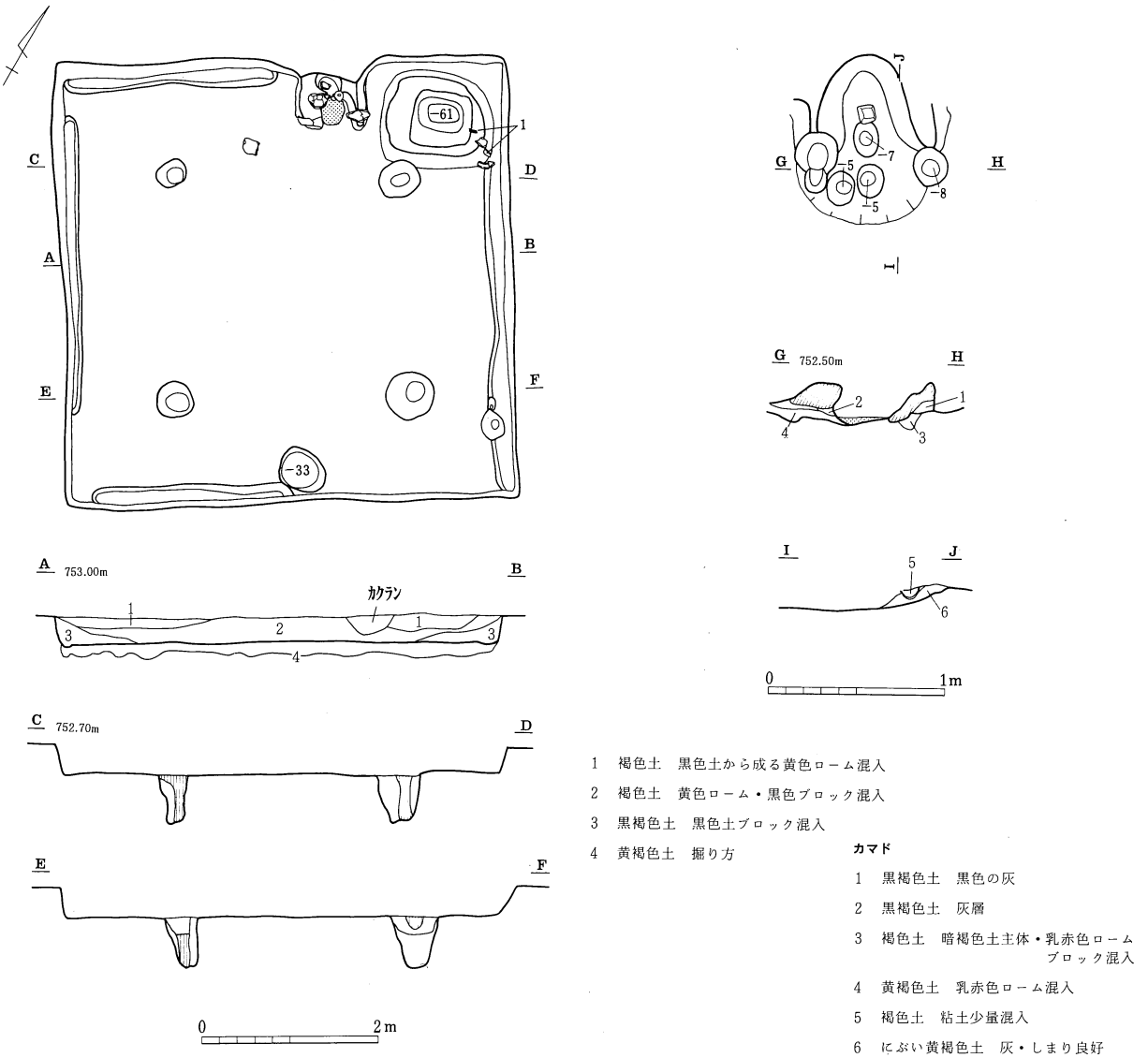
遺物と時期：カマド手前の床面から小型甕（349図１）、覆土から甕(2)が出土している。遺構の時期は７ｃ代と考えられる。カマドの灰からは炭化種実はヤマブドウ、ムギ類、オニグルミの小片が検出された。



第264図　301号竪穴住居跡

301号竪穴住居跡（第264・282図、PL84）　位置　ⅣA−2

南半部はカクラン・調査区外のため全貌は不明である。



第265図　302号竪穴住居跡

カマド：北壁の中央に位置し、袖は地山を掘り残し、先端に芯材の石を立て粘土で覆って構築したものと考えられる。

施　設：床面は平坦で、全体に硬くしまっていた。柱穴は２基検出され、貯蔵穴は北東コーナーに１基と北西コーナーに１基認められている。周溝は検出された範囲内では全周している。掘形は認められない。

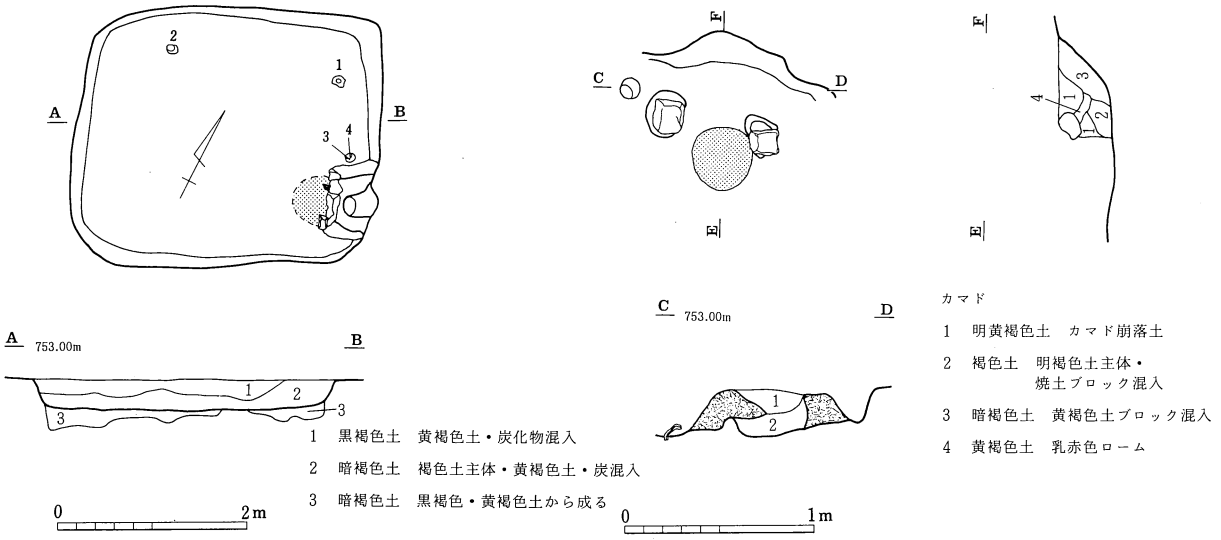
遺物と時期：時期を確定できる土器は見られず、遺構の時期は不明である。

302号竪穴住居跡（第265・275図、PL84）　位置　ⅢＥ－９

重複はなく単独である。

カマド：北壁中央の東寄りに位置し、袖は地山を掘り残し、先端には芯材の石を立て粘土で覆って構築したものと考えられる。1つの支脚が燃焼部に残され、掘形では他に数個の支脚の抜き取り痕と思われるPitが検出されている。煙道は上部を削平されているため明らかではない。

施　設：床面は平坦で、中央部は硬く、周辺部は軟弱であった。Pitは主柱穴が４基、入り口に関係すると思われる１基が南壁中央で確認されている。貯蔵穴は北東コーナーに設けられ、掘り込み上場の周囲は周堤状の高まりが認められる。周溝は北西・南西コーナーの一部と南壁東半を除いて確認できた。掘形は



第266図　303号竪穴住居跡

不規則な凹凸が施されたものであった。

遺物と時期：甑（349図１）・小型甕(2)・甕(3)が出土している。(2)の小型甕は南伊勢地方の北野甕といわれる甕で、内外面にハケが施され口縁端部が摘み上げられている。遺構の時期は７ｃ後半と考えられる。

303号竪穴住居跡（第266・281図、PL84）　位置　ＩＹ-25

重複はなく単独である。

カマド：東壁の南東コーナー寄りに位置し、袖先端に芯材の面取りされた軽石を立て粘土で覆って構築されている。

施　設：床面は平坦で、柱穴は認められなかった。貯蔵穴・周溝・入り口などの施設も認められない。掘形は全体に浅いが中央部が高く、周囲が深いタイプといえる。

遺物と時期：須恵坏が４点（350図１・２・３・４）出土している。遺構の時期は８ｃ後半と考えられる。

304号竪穴住居跡（第267・285図、PL84）　位置　ⅢＯ-24

重複はなく単独である。

カマド：北壁の中央に位置し、袖は地山を掘り残し、芯材として石を多用し粘土で覆った構造と考えられる。煙道はほぼ完全な状態で残存していた。構造は地山を粗く掘り込み、粘土で成形している。

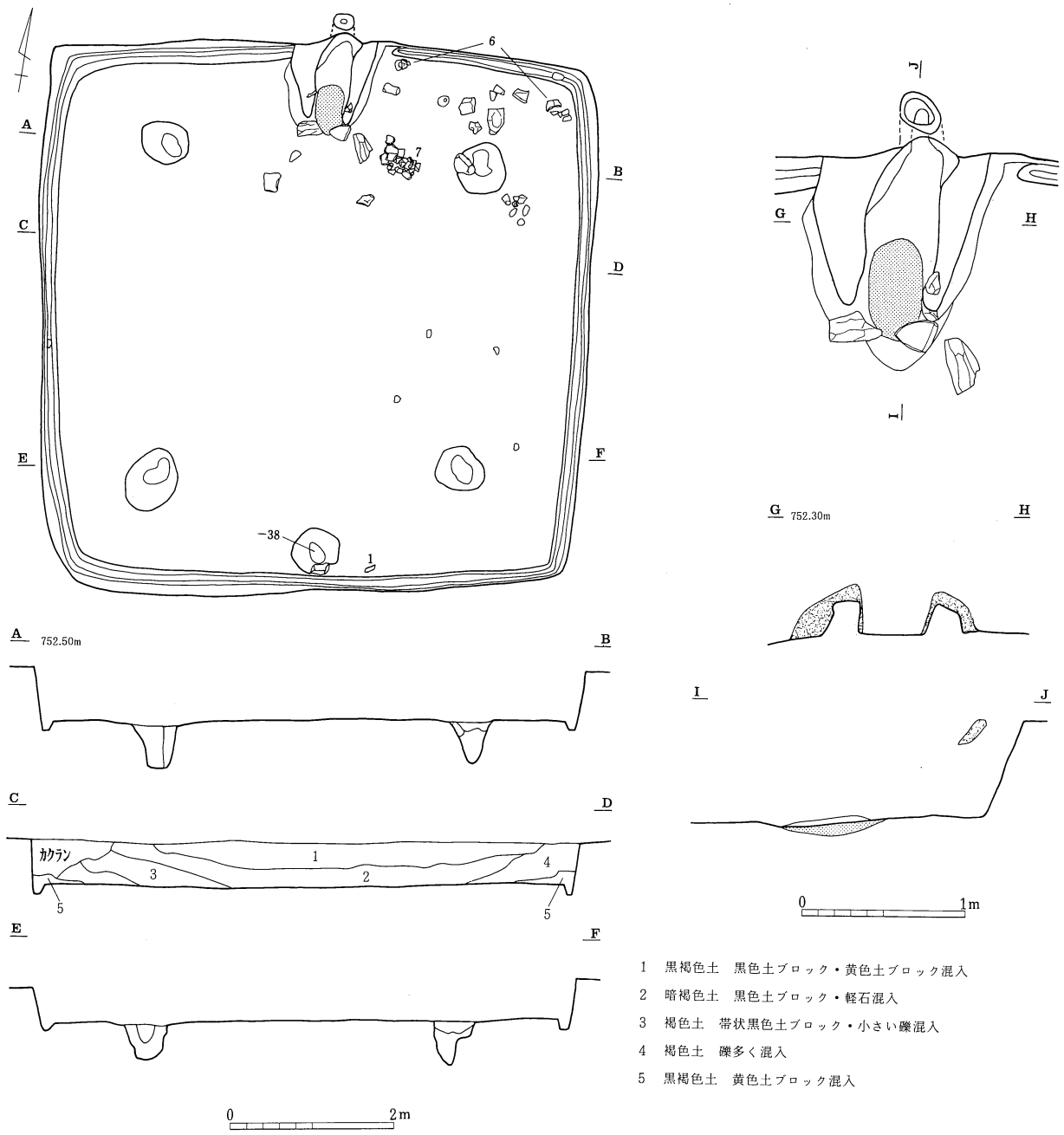
施　設：床面は平坦で、中央部は硬く、周辺部は軟弱であった。Pitは主柱穴が４基、入り口に関係すると思われる１基が南壁中央で確認されている。周溝は全周する。掘形は全体に浅く不規則な凹凸があるものである。

遺物と時期：坏・鉢（350図１・２・３・４）・甕（５・６）・把手付甕(7)が出土している。遺構の時期は６ｃ後半と考えられる。

305号竪穴住居跡（第268・285図、PL85）　位置　ⅢＯ-22

重複はなく単独である。

カマド：北壁の中央に位置し、粘土を主体的に用いて築かれたと考えられるが、残存状態は悪く旧状を推察することが難しい。支脚の抜き取り痕と考えられるPitは、燃焼部の中央と奥壁寄りに検出されている。



第267図　304号竪穴住居跡

施　設：床面は平坦で、全体に硬くしまっていた。住居中央には浅い皿状の凹が認められその中には焼土が堆積していたが用途は不明である。柱穴・周溝・入り口などの施設は認められなかった。掘形は凹凸が著しく、東壁寄りでは約50㎝程掘り窪められているが、その用途は不明である。

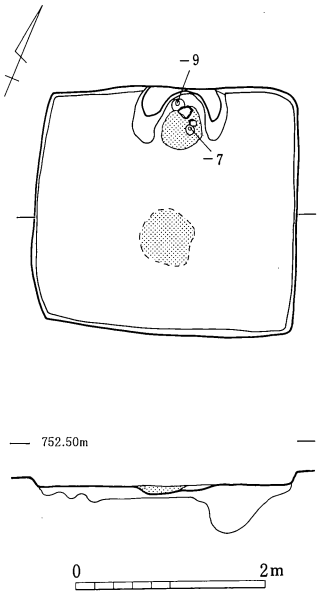
遺物と時期：坏（350図１）が出土している。遺構の時期は７ｃ中葉と考えられる。

306号竪穴住居跡（第269・285図、PL85）　位置　ⅢＴ－１

重複はなく単独である。

カマド：北壁の中央に位置し、袖部分には石の抜き取り痕と考えられるPitが認められることから、石を芯材として用いて粘土で構築されたものと思われる。

施　設：床面は平坦で、北半部では硬化が認められたが、南半部は削平を受けているため硬化の状況は不



第 268 図　305号竪穴住居跡

遺物と時期：時期を確定できる土器は見られず、遺構の時期は不明である。

308号竪穴住居跡（第271・283図、PL85）　位置　ⅢO−10

重複はなく単独である。

カマド：北東コーナーに位置し、袖の先端に石の抜き取り痕が認められることから、石を芯材として用いて粘土で構築されたものと思われる。煙道は短く、燃焼部の中央には１基の支脚が認められている。火床の下に掘り込みが認められたが、カマドに伴うものとは思われず別の施設と考えられるが詳細は不明である。

施　設：床面は平坦で、全体に軟弱である。柱穴と考えられるPitが２基確認された。貯蔵穴・周溝は認められない。南壁中央の東寄りでは偏平な河原石が確認されている。入り口に関わるものと考えられるが、憶測の域を出ない。掘形は10cmに満たない浅いものである。床面中央には深さ48cmの床下土坑が認められたが用途などは不明である。

遺物と時期：坏が８点（350図１～８）・甕(2)が出土している。遺構の時期は７ｃ代と考えられる。カマドの灰からは石貝と考えられる貝類の小片が検出されている。

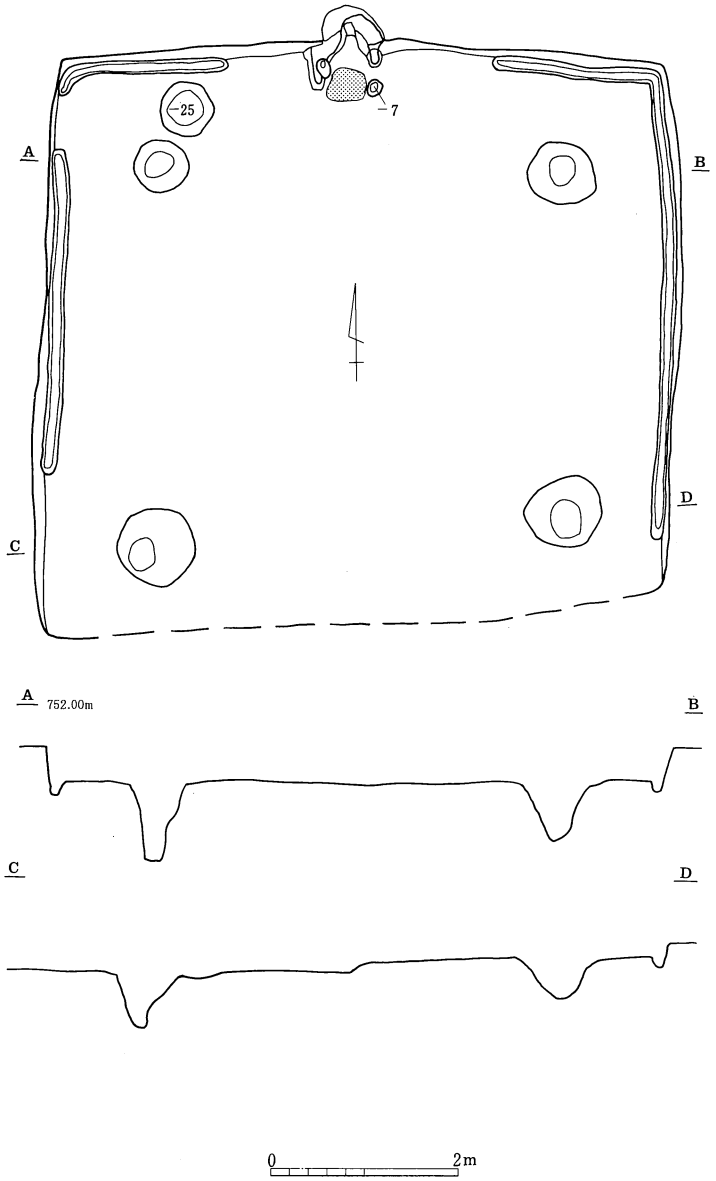
明である。主柱穴と考えられるPitが４基認められ、カマドの左側には貯蔵穴が１基検出された。周溝は南壁を除く壁際に部分的に認められている。掘形は中央部が高く、周囲が深いタイプである。

307号竪穴住居跡（第270・285図、PL85）　位置　ⅢO−22

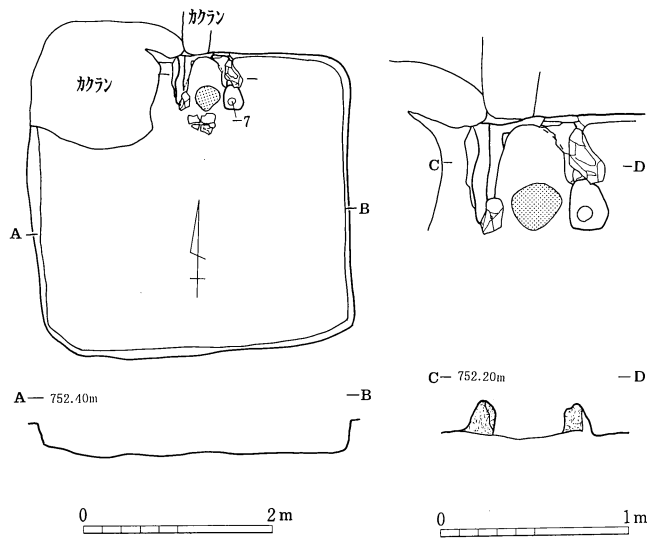
重複はなく単独である。

カマド：北壁の中央に位置し、石を多用し粘土で覆った石組みの構造と考えられる。

施　設：床面は平坦で、全体に硬くしまっていた。柱穴・周溝・入り口などの施設は認められない。掘形は施されていない。



第 269 図　306号竪穴住居跡



第 270 図　307号竪穴住居跡

胴張り甕⑽・大形の鉢⑼が出土している。遺構の時期は６ｃ後半と考えられる。

309号竪穴住居跡（第272・283図、PL85）　位置　Ⅲ O－5

重複はなく単独である。

カマド：東壁の南東コーナー寄りに位置する。粘土主体に構築されているが残存状況は悪く、明瞭に検出されたのは火床部のみで、袖に関しては左袖基部の痕跡が認められたが、右袖は崩落が著しかった。

施　設：床面は平坦で、全体に軟弱である。柱穴・周溝・入り口は認められなかった。床面の中央部には掘り込みを伴わないが焼土が検出され、その下の床は被熱していた。掘形は全体を10cmほど均一に掘り下げたものである。

遺物と時期：時期を確定できる土器は見られず、遺構の時期は不明である。

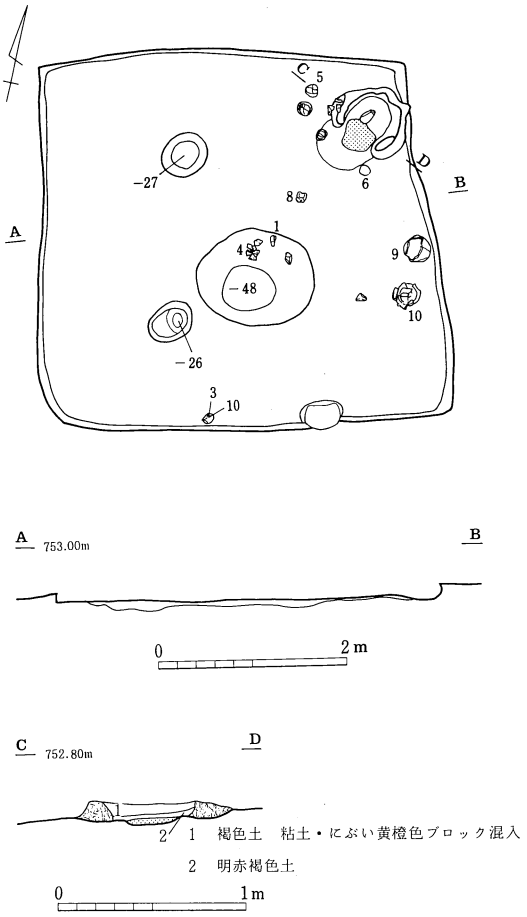
310号竪穴住居跡（第283図）　位置　Ⅳ F－21

調査区の制約から全貌は不明である。

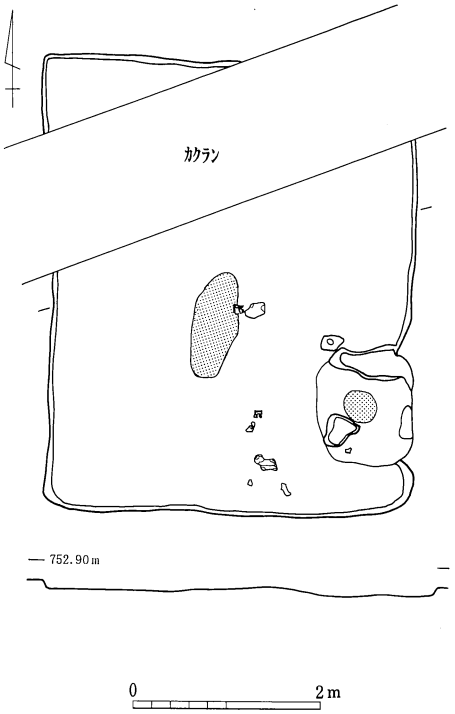
カマド：不明である。

施　設：床面は断面の観察で平坦と判断されたが、面的な把握はできなかった。Pitが２基と周溝が検出されている。他の施設については不明である。掘形は認められなかった。

遺物と時期：図化可能な土器の出土はなかったが、破片から遺構の時期は古墳時代後期と考えられる。



第 271 図　308号竪穴住居跡



第 272 図　309号竪穴住居跡

(2)　掘立柱建物跡

6号掘立柱建物跡（306・300図、PL86）

ＶＯ-23グリッドに位置する。重複関係では29号住居跡より古い。

規模は長軸2.6～2.8m、短軸1.6～2.0mを測り、平面プランは方形を呈し、Ａタイプに分類される。

１間×１間の側柱式で、柱間は長軸2.6m、短軸1.6mを測る。短軸の主軸方向は、Ｎ－20°－Ｗを示す。

Pitの平面プランは、円形・楕円形である。

7号掘立柱建物跡（306・299図、PL86）

ＶＯ-23グリッドに位置する。重複関係では29号住居跡より新しい。

規模は長軸2.2～2.3m、短軸2.1～2.2mを測り、平面プラン方形を呈し、Ａタイプに分類される。

１間×１間の側柱式で、柱間は、長軸2.2m、短軸2.1mを測る。短軸の主軸方向は、Ｎ－25°－Ｗを示す。

Pitの平面プランは、円形・楕円形である。

14号掘立柱建物跡（306・300図、PL86）

ＶＴ-14グリッドに位置する。重複関係では46号住居跡・65号掘立柱建物跡より新しい。

規模は長軸1.6m、短軸1.2mを測り、平面プランは方形を呈し、Ａタイプに分類される。

１間×１間の側柱式で、柱間は、長軸1.6m、短軸1.2mを測る。短軸の主軸方向は、Ｎ－24°－Ｗを示す。

Pitの平面プランは、円形・楕円形である。

16号掘立柱建物跡（308・301図、PL86）

ⅥＰ－１グリッドに位置する。重複関係では26号住居跡より古い。

規模は長軸2.0～3.8m、短軸3.5mを測り、平面プランは方形を呈し、Ｅ－Ⅰタイプに分類される。

１間×２間の側柱式で、柱間は、長軸2.0m、短軸1.5～2.0mを測る。短軸の主軸方向は、Ｎ－18°－Ｗを示す。

Pitの平面プランは、円形・楕円形である。

19号掘立柱建物跡（310・302図、PL86）

ＶＴ-19グリッドに位置する。重複関係では17号住居跡より古い。

規模は長軸1.7～4.5m、短軸3.7mを測り、平面プランは距形を呈し、Ｋ－Ⅰタイプに分類される。

１間×２間の側柱式で、柱間は、長軸1.7m、短軸1.7～2.0mを測る。短軸の主軸方向は、Ｎ－29°－Ｗを示す。

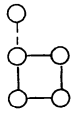
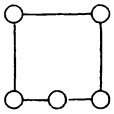
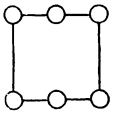
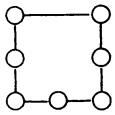
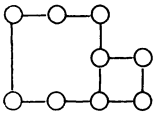
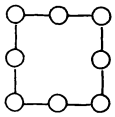
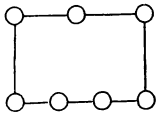
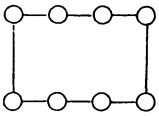
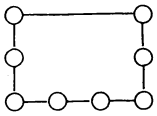
Pitの平面プランは、溝持ちを呈し柱部分は円形・楕円形である。

23号掘立柱建物跡（310・297図）

ＶＯ－３グリッドに位置する。重複関係では28・55号掘立柱建物跡・７号柵列（SA）より新しい。

規模は長軸5.5～5.6m、短軸4.0～4.1mを測り、平面プランは距形を呈し、Ｋ－Ⅰタイプに分類される。

掘立柱建物跡　分類模式表

タイプ		Ⅰ　側柱	Ⅰ’溝持	Ⅱ　総柱
A		6、7、14、15、25、29、31、54、55、69、72、78、79、81、86、113、117、139、153、159、172、181、187、191、252、253、254	42、109、116	
A′		75、90、169、170、176、188、189		
B		52、83、137、151、152、161、168、180		
C		48、62、118、119、122、131、133、147、148、162、167	41、125、165	
D		58、68、70、115、150、166、175		76
D′		138、163		
E		16、46、56、65、74、88、108、134、186、251	43、128	40、110、132
F			182	
G		121、164		
H		135、171		

3間×2間の側柱式で、柱間は、長軸1.7～2.0m、短軸2.0mを測る。短軸の主軸方向は、N－28°－Wを示す。

Pitの平面プランは、北・南壁側は溝持ちを用い、一部は円形・楕円形である。

25号掘立柱建物跡（306・298図、PL86）

Ⅵ K-17グリッドに位置する。重複関係では84号住居跡より古い。

規模は長軸2.3～2.4m、短軸2.1～2.2mを測り、平面プランは方形を呈し、A-Ⅰタイプに分類される。

1間×1間の側柱式で、柱間は、長軸2.3m、短軸2.1mを測る。短軸の主軸方向は、N－27°－Wを示す。

Pitの平面プランは、円形・楕円形である。

26号掘立柱建物跡（308・302図、PL86）

ⅤT-19グリッドに位置する。重複関係では43号住居跡より新しく、19号掘立柱建物跡より古い。

規模は長軸3.9～4.0m、短軸3.0～3.1mを測り、平面プランは距

形を呈し、Ⅰ-1タイプに分類される。

3間×1間の側柱式で、柱間は、長軸1.2～1.4m、短軸3.0mを測る。短軸の主軸方向は、N－27°－Wを示す。

Pitの平面プランは、円形・楕円形である。

27号掘立柱建物跡（309・298図、PL87）

VO-20グリッドに位置する。重複関係では66号住居跡より古い。

規模は長軸4.1～4.5m、短軸3.2mを測り、平面プラン距形を呈し、K-Ⅰタイプに分類される。

3間×2間の側柱式で、柱間は、長軸1.2～1.6m、短軸1.5～1.7mを測る。短軸の主軸方向は、N－15°－Wを示す。

Pitの平面プランは、円形・楕円形である。

36号掘立柱建物跡（309・296図、PL87）

VO-11グリッドに位置する。重複関係では42号掘立柱建物跡より新しく、71号住居跡より古い。

I		26、38	51	
J		61、185	47	
K		19、27、30、36、50、60、63、66、71、80、146、183、301	23、37、10	120
L				
M		59、101、103		

規模は長軸5.0m、短軸3.6～3.7mを測り、平面プランは距形を呈し、K-Ⅰタイプに分類される。

3間×2間の側柱式で、柱間は、長軸1.5～1.7m、短軸1.8mを測る。短軸の主軸方向は、N－29°－Wを示す。

Pitの平面プランは、円形・楕円形である。

37号掘立柱建物跡（310・295図、PL87）

Ⅵ K-Ⅰグリッドに位置する。重複関係では69号住居跡より古い。

規模は長軸4.4～4.5m、短軸3.2～3.3mを測り、平面プランは距形を呈し、K-Ⅰタイプに分類される。

3間×3間の側柱式で、柱間は、長軸1.4～1.6m、短軸0.4～1.4mを測る。短軸の主軸方向は、N－17°－Wを示す。

Pitの平面プランは、溝持ちで柱部分は円形・楕円形である。

38号掘立柱建物跡（308・303図、PL87）

VT-19グリッドに位置する。

規模は長軸4.9m、短軸3.4mを測り、平面プランは距形を呈し、Ⅰ-Ⅰタイプに分類される。

3間×2間の側柱式で、柱間は、長軸1.4～1.8m、短軸1.6～1.8mを測る。短軸の主軸方向は、N－25°－Wを示す。

Pitの平面プランは、円形・楕円形である。

43号掘立柱建物跡（307・302図、PL88）

VT-23グリッドに位置する。重複関係では555・562号土坑より新しく、77号掘立柱建物跡より古い。

規模は長軸3.3～3.4m、短軸2.8～3.0mを測り、平面プランは方形を呈し、E-Ⅰタイプに分類される。

2間×2間の側柱式で、柱間は、長軸1.6～1.7m、短軸1.3～1.5mを測る。短軸の主軸方向は、N－30°－Wを示す。

Pitの平面プランは、溝持ちで柱部分は円形・楕円形である。

50号掘立柱建物跡（309・300・309図）

VT-14グリッドに位置する。重複関係では15号性格不明遺構・15・66号掘立柱建物跡・147・2045号土坑より新しい。重複は認められず、単独である。

規模は長軸5.4～5.5m、短軸3.6～3.7mを測り、平面プランは距形を呈し、K-Ⅰタイプに分類される。

3間×2間の側柱式で、柱間は、長軸1.3～2.7m、短軸1.6～2.0mを測る。短軸の主軸方向は、N－20°－Wを示す。

Pitの平面プランは、円形・楕円形である。

56号掘立柱建物跡（308・296図）

VO-12グリッドに位置する。重複関係では323・327号土坑より新しく、270号土坑より古い。

規模は長軸3.9m、短軸3.2～3.3mを測り、平面プランは距形を呈し、E-Ⅰタイプに分類される。

2間×2間の側柱式で、柱間は、長軸1.8～2.0m、短軸1.4～1.8mを測る。短軸の主軸方向は、N－29°－Wを示す。

Pitの平面プランは、円形・楕円形である。

63号掘立柱建物跡（309・301図）

ⅥP-6グリッドに位置する。

規模は長軸4.8～4.9m、短軸3.4mを測り、平面プランは距形を呈し、K-Ⅰタイプに分類される。

3間×2間の側柱式で、柱間は、長軸1.6m、短軸1.6～1.8mを測る。短軸の主軸方向は、N－14°－Wを示す。

Pitの平面プランは、円形・楕円形である。

65号掘立柱建物跡（307・300図）

VT-14グリッドに位置する。重複関係では42・52号住居跡より新しい。

規模は長軸3.6～3.7m、短軸3.6～3.7mを測り、平面プランは方形を呈し、E-Ⅰタイプに分類される。

2間×2間の側柱式で、柱間は、長軸1.6～2.0m、短軸1.7～1.9mを測る。短軸の主軸方向は、N－31°－Wを示す。

Pitの平面プランは、円形・楕円形である。

101号掘立柱建物跡（311・288図、PL88）

ＶＥ-12グリッドに位置する。重複関係では113号住居跡より新しい。

規模は長軸6.6～6.7m、短軸3.9～4.6mを測り、平面プランは距形を呈し、M-Ⅰタイプに分類される。

２間×４間の側柱式で、柱間は、長軸1.8～2.1m、短軸1.4～1.8mを測る。短軸の主軸方向は、N－37°－Wを示す。

Pitの平面プランは、円形・楕円形である。

104号掘立柱建物跡（311.293図、PL89）

ＶＪ-17グリッドに位置する。重複関係では131号住居跡・1291・2030号土坑・105号掘立柱建物跡より新しい。

規模は長軸4.6m、短軸3.4mを測り、平面プランは距形を呈し、R-Ⅰタイプに分類される。

３間×２間の側柱式で、柱間は、長軸1.5～1.6m、短軸1.6～1.8mを測る。短軸の主軸方向は、N－28°－Wを示す。

Pitの平面プランは、円形・楕円形である。

106号掘立柱建物跡（310・284・289・292図）

ⅥA-21グリッドに位置する。重複関係では143号住居跡・1410号土坑・159号掘立柱建物跡より新しく、157号掘立柱建物跡より古い。

規模は長軸4.2～5.7m、短軸3.2～3.3mを測り、平面プランは距形を呈し、K-Ⅰタイプに分類される。

３間×２間の側柱式で、柱間は、長軸1.2～1.8m、短軸1.2～2.0mを測る。短軸の主軸方向は、N－16°－Wを示す。

Pitの平面プランは、一部溝持ちを用いて構築され、他は円形・楕円形である。

108号掘立柱建物跡（307・288・291図、PL89）

ＶＥ-22グリッドに位置する。

規模は長軸2.8～3.0m、短軸2.9mを測り、平面プランは方形を呈し、E-Ⅰタイプに分類される。

２間×２間の側柱式で、柱間は、長軸1.2～1.6m、短軸1.3～1.6mを測る。短軸の主軸方向は、N－15°－Wを示す。

Pitの平面プランは、円形・楕円形である。

110号掘立柱建物跡（306・288図、PL89）

ＶＥ-９グリッドに位置する。

長軸3.3m、短軸3.3mを測り、平面プランは方形を呈し、E-Ⅱタイプに分類される。

２間×２間の総柱式で、柱間は、長軸1.6～1.7m、短軸1.6～1.7mを測る。短軸の主軸方向は、N－15°－Wを示す。

Pitの平面プランは、円形・楕円形である。

118号掘立柱建物跡（306・291図）

ＶＪ−２グリッドに位置する。

規模は長軸3.3〜3.4m、短軸3.1mを測り、平面プランは方形を呈し、C−Ⅰタイプに分類される。

２間×１間の側柱式で、柱間は、長軸1.4〜1.9m、短軸3.1mを測る。短軸の主軸方向は、N−21°−Wを示す。

Pitの平面プランは、円形・楕円形である。

119号掘立柱建物跡（306・291図）

ＶＪ−２グリッドに位置する。重複関係では175号掘立柱建物跡より古い。

規模は長軸3.2m、短軸2.7mを測り、平面プランは距形を呈し、C−Ⅰタイプに分類される。

１間×２間の側柱式で、柱間は、長軸3.2m、短軸1.2〜1.5mを測る。短軸の主軸方向は、N−12°−Wを示す。

Pitの平面プランは、円形・楕円形である。

120号掘立柱建物跡（311・293図、PL89）

ＶＪ−21グリッドに位置する。重複関係では1040・2029号掘立柱建物跡より新しく、121号掘立柱建物跡より古い。

規模は長軸4.5m、短軸2.0mを測り、平面プランは距形を呈し、K−Ⅰタイプに分類される。

３間×１間の側柱式で、柱間は、長軸1.7〜2.0m、短軸2.0mを測る。短軸の主軸方向は、N−28°−Wを示す。

Pitの平面プランは、円形・楕円形である。

123号掘立柱建物跡（310・293図）

ＶＪ−16グリッドに位置する。重複関係では109号掘立柱建物跡より古い。

規模は長軸3.7〜3.8m、短軸3.1〜3.2mを測り、平面プランは距形を呈し、K−Ⅰタイプに分類される。

３間×２間の側柱式で、柱間は、長軸0.8〜1.5m、短軸1.5〜1.6mを測る。短軸の主軸方向は、N−24°−Wを示す。

Pitの平面プランは、円形・楕円形である。

138号掘立柱建物跡（311・291図）

ＶＪ−８グリッドに位置する。重複関係では1434・1492号土坑・133号掘立柱建物跡より新しい。

規模は長軸3.1〜3.2m、短軸1.4mを測り、平面プランは方形を呈し、庇のあるD-Ⅰタイプに分類される。

２間×２間の側柱式で、柱間は、長軸1.5〜1.6m、短軸1.4mを測る。短軸の主軸方向は、N−22°−Wを示す。

Pitの平面プランは、円形・楕円形である。

146号掘立柱建物跡（309・292図）

ⅥA−21グリッドに位置する。重複関係では143号住居跡・1228・2009号土坑より新しく、131号掘立柱

建物跡より古い。

規模は長軸6.0～6.1m、短軸3.9～4.0mを測り、平面プランは距形を呈し、K-Ⅰタイプに分類される。

3間×2間の側柱式で、柱間は、長軸1.7～2.1m、短軸1.8～2.1mを測る。短軸の主軸方向は、N－25°－Wを示す。

Pitの平面プランは、円形・楕円形である。

157号掘立柱建物跡（311・284・289・292図）

ⅥA-21グリッドに位置する。重複関係では143号住居跡・1341号土坑・106号掘立柱建物跡より新しい。

規模は長軸4.6m、短軸3.6～3.7mを測り、平面プランは距形を呈し、S-Ⅰタイプに分類される。

3間×2間の側柱式で、柱間は、長軸1.4～1.8m、短軸1.8mを測る。短軸の主軸方向は、N－11°－Wを示す。

Pitの平面プランは、北壁側の一部に溝持ちが確認され、他は円形・楕円形である。

162号掘立柱建物跡（307・291図）

ⅤJ-3グリッドに位置する。重複関係では134号掘立柱建物跡より新しい。

規模は長軸3.4～3.5m、短軸1.6～1.7mを測り、平面プランは距形を呈し、C-Ⅰタイプに分類される。

2間×1間の側柱式で、柱間は、長軸1.7m、短軸1.6mを測る。短軸の主軸方向は、N－21°－Wを示す。

Pitの平面プランは、円形・楕円形である。

164号掘立柱建物跡（308・291図）

ⅤJ-8グリッドに位置する。重複関係では138号掘立柱建物跡より新しく、133号掘立柱建物跡より古い。

規模は長軸6.0m、短軸2.1mを測り、平面プランは距形を呈し、G-Ⅰタイプに分類される。

3間×1間の側柱式で、柱間は、長軸1.4～2.8m、短軸2.1mを測る。短軸の主軸方向は、N－15°－Wを示す。

Pitの平面プランは、円形・楕円形である。

165号掘立柱建物跡（306・291・292図）

ⅤJ-4グリッドに位置する。重複関係では128号掘立柱建物跡より新しい。

規模は長軸3.1～3.2m、短軸2.8～2.9mを測り、平面プランは方形を呈し、C-Ⅰタイプに分類される。

1間×2間の側柱式で、柱間は、長軸3.1m、短軸1.4mを測る。短軸の主軸方向は、N－21°－Wを示す。

Pitの平面プランは、円形・楕円形で一部溝持ちを呈する。

167号掘立柱建物跡（307・291・292図）

ⅤJ-9グリッドに位置する。

規模は長軸4.5m、短軸3.6mを測り、平面プラン距形を呈し、C-Ⅰタイプに分類される。

2間×1間の側柱式で、柱間は、長軸2.1～2.4m、短軸3.6mを測る。短軸の主軸方向は、N－34°－W

を示す。

Pitの平面プランは、円形・楕円形である。

171号掘立柱建物跡（308・171図）

ＶＪ-20グリッドに位置する。重複関係では1346号土坑より新しい。

規模は長軸6.0～6.1m、短軸3.7～3.8mを測り、平面プランは距形を呈し、H-Ｉタイプに分類される。

１間×２間の側柱式で、柱間は、長軸6.0m、短軸1.7～2.0mを測る。短軸の主軸方向は、Ｎ－25°－Ｗを示す。

Pitの平面プランは、円形・楕円形である。

180号掘立柱建物跡（311・290・291図）

ＶＪ-７グリッドに位置する。重複関係では108号住居跡・1439号土坑・178号掘立柱建物跡より新しい。

規模は長軸3.9m、短軸3.0mを測り、平面プランは距形を呈し、B-Ｉタイプに分類される。

２間×１間の側柱式で、柱間は、長軸1.9～2.0m、短軸3.0mを測る。短軸の主軸方向は、Ｎ－18°－Ｗを示す。

Pitの平面プランは、円形・楕円形である。

182号掘立柱建物跡（308・293図）

ＶＪ-16グリッドに位置する。重複関係では101・131号住居跡より新しい。

規模は長軸5.6m、短軸3.9～4.0mを測り、平面プラン距形を呈し、F-Ｉタイプに分類される。

３間×２間の側柱式で、柱間は、長軸1.7～2.1m、短軸1.8～2.1mを測る。短軸の主軸方向は、Ｎ－18°－Ｗを示す。

Pitの平面プランは、円形・楕円形で一部は溝持ちである。

183号掘立柱建物跡（310・293図）

ＶＪ-21グリッドに位置する。重複関係では1033・1383・1394号土坑・186号掘立柱建物跡より新しく、1390号土坑より古い。

規模は長軸5.3m、短軸4.3～4.5mを測り、平面プランは距形を呈し、K-Ｉイプに分類される。

３間×２間の側柱式で、柱間は、長軸1.3～2.2m、短軸1.9～2.4mを測る。短軸の主軸方向は、Ｎ－22°－Ｗを示す。南東方向に庇を有するものと考えられる。

Pitの平面プランは、円形・楕円形である。

185号掘立柱建物跡（308・293図）

ＶＪ-21グリッドに位置する。重複関係では1383号土坑・121号住居跡より新しく、1115号土坑より古い。

規模は長軸3.2～3.7m、短軸2.5mを測り、平面プランは距形を呈し、J-Ｉタイプに分類される。

２間×２間の側柱式で、柱間は、長軸1.5～1.7m、短軸1.0～1.5mを測る。短軸の主軸方向は、Ｎ－15°－Ｗを示す。

Pitの平面プランは、円形・楕円形である。

186号掘立柱建物跡（307・290・293図）

ＶＩ-20グリッドに位置する。重複関係では109・183号掘立柱建物跡より古い。

規模は長軸3.5～4.4m、短軸3.3～3.4mを測り、平面プランは距形を呈し、E-Ｉタイプに分類される。

２間×２間の側柱式で、柱間は、長軸1.3～2.2m、短軸1.3～2.0mを測る。短軸の主軸方向は、N－10°－Wを示す。

Pitの平面プランは、円形・楕円形である。

187号掘立柱建物跡（306・290・293図）

ＶＩ-20グリッドに位置する。重複関係では183・186・188号掘立柱建物跡より古い。

規模は長軸2.6～3.0m、短軸2.4～2.8mを測り、平面プランは方形を呈し、A-Ｉタイプに分類される。

２間×２間の側柱式で、柱間は、長軸0.8～1.8m、短軸1.2mを測る。短軸の主軸方向は、N－14°－Wを示す。

Pitの平面プランは、円形・楕円形である。

251号掘立柱建物跡（307・283図、PL90）

ⅢO-４グリッドに位置する。

規模は長軸3.9～4.0m、短軸3.3mを測り、平面プランは方形を呈し、E-Ｉタイプに分類される。

２間×２間の側柱式で、柱間は、長軸1.9～2.0m、短軸1.5～1.8mを測る。短軸の主軸方向は、N－22°－Wを示す。

Pitの平面プランは、円形・楕円形である。

(3)　溝

２号溝（312・297図、PL92）

ＶO-８，９グリッドに位置する。

残存長は5.0m、幅は0.5～0.7m、深さ0.2mを測り、北東から南西に向って傾斜する。

覆土は均質な黒褐色土の単層である。

３号溝（312・286図、PL92）

ⅢＹ-12，13グリッドに位置する。

残存長は11.8m、幅は0.4～0.6m、深さ0.1mを測り、東から西に向って緩やかに傾斜している。

覆土は粒子の粗い暗褐色土である。

４号溝（312・283図、PL92）

ⅢＪ-９，14グリッドに位置する。

残存長は11.2m、幅は0.4～1.4m、深さ0.3～0.4mを測り、東から西に向って緩やかに傾斜している。

覆土は砂質な暗褐色土である。

５号溝（312・382図、PL92）

ⅢE-23.24グリッドに位置する。
残存長は10.5m、幅は0.7～3.0m、深さ0.2～0.4mを測り、東から西に向って緩やかに傾斜している。
覆土は砂質な暗褐色土である。

6号溝（312・282図）
ⅢE-18グリッドに位置する。
残存長は4.4m、幅は1.4～2.7m、深さ0.3～0.4mを測り、東から西に向って緩やかに傾斜している。
覆土上層は砂質の暗黄褐色土、下層は砂質黄色土主体で黒褐色土をブロック状に混入する。

7号溝（312・293～294図、PL92）
ＶＪ-23.24.25. ＶＯ-２.３グリッドに位置する。
残存長は22.0m、幅は0.6～1.0m、深さ0.2～0.5mを測り、東から西に向って緩やかに傾斜している。
覆土は暗褐色土主体で黄褐色土をブロック状に混入する。

(4)　土坑

1619号土坑（313・275図、PL91）
ＩＹ-25グリッドに位置する。重複は認められず単独である。
規模は長軸2.5m、短軸1.6m、深さ1.0mを測り、平面プランは楕円形を呈する。壁は緩やかに立ち上がり、底面は平坦で３基の小Pitが穿たれている。いわゆる、陥し穴と考えられている遺構である。
覆土上層はきめの細かい黒色土で、中層は褐色土と黒褐色土ブロックで構成される。下層は暗黄褐色土である。

(5)　性格不明遺構（ＳＸ）

便宜的に性格不明遺構としてあるが内容は多様である。

1号性格不明遺構（313・298図、PL91）
ⅥK-21グリッドに位置する。重複認められず単独である。
長軸3.0m、短軸2.4m、深さ0.9mを測り、平面プランは円形を呈する。従来より井戸跡・塵芥処理土坑とされる遺構である。
覆土上層はややしまりのある黒褐色土で、中層はやや砂質で地山の黄色土粒子を少量混入する暗褐色土、下層は砂質でしまりのある黒褐色土である。中層からは獣骨（ウシ）がまとまって出土している。

3号性格不明遺構（313・297図、PL91）
ＶＯ-25グリッドに位置する。重複関係は37号住居跡より新しい。
長軸3.1m、短軸3.0m、深さ1.5mを測り、平面プランは円形を呈する。従来より井戸跡・塵芥処理土坑とされる遺構である。
覆土上層はややしまりのある黒褐色土で、中層はきめが細かく炭化材・物を含む黒褐色土、下層はやや砂質な暗褐色土で赤・白色土をブロック状に混入する。

7号性格不明遺構（314・299図）

ＶＴ－３グリッドに位置する。重複は認められず、単独である。
長軸4.3m、短軸1.7m、深さ0.9mを測り、平面プラン不整形を呈する。粘土採掘坑と考えられる。
覆土上・中層はきめが細かく粘性のある黒褐色土で、中層の壁際には地山の黄色土をブロック状に混入する。下層は基本的にはきめの細かい黒褐色土で構成されるが、黄色土ブロックを多量に混入する。

８号性格不明遺構（313・304図）
ⅥＰ－17グリッドに位置する。重複は認められず、単独である。
長軸3.1m、深さ1.5mを測り、平面プランは楕円形を呈するものと考えられるが、東半は調査区外のため全貌は不明である。従来より井戸跡・塵芥処理土坑とされる遺構と考えられる。

９号性格不明遺構（313・304図）
ⅥＰ－22グリッドに位置する。重複関係は58号住居跡より古く、59号住居跡より新しい。
長軸2.4m、短軸1.9m、0.6mを測り、平面プランは不整な楕円形を呈する。粘土採掘坑と考えられる。
覆土は黒褐色土主体で地山の白・赤・黄色土をブロック状に混入する。覆土の様相から粘土採取のための採掘坑であったと考えられる。

11号性格不明遺構（315・295図）
ⅥＫ－1グリッドに位置する。重複関係は173・174号掘立柱建物跡より新しい。
長軸13.4m、短軸9.6m、深さ0.9mを測り、平面プランは不整形を呈する。粘土採掘坑と考えられる。
覆土の様相は、黒褐色土主体で地山の白・赤・黄色土をブロック状に混入する粘土採掘坑特有の規則性のない堆積で、数度にわたり掘削を繰返したようである。

50号性格不明遺構（313・291図）
ＶＥ－23グリッドに位置する。重複関係は認められず、単独である。
長軸2.6m、短軸2.3m、深さ0.8mを測り、平面プランは円形を呈する。従来より井戸跡・塵芥処理土坑とされる遺構である。

51号性格不明遺構（314・289図）
ＶＥ－20グリッドに位置する。重複関係は135・136号掘立柱建物跡、124号住居跡より新しい。
長軸5.9m、短軸2.3m、深さ0.6mを測り、平面プランは不整形を呈する。粘土採掘坑と考えられる。
覆土は黒褐色土主体で地山の白・赤・黄色土をブロック状に混入する。粘土採掘坑特有の規則性のない堆積で、数度にわたり掘削を繰返したようである。

53号性格不明遺構（314・292図、PL91）
ＶＪ－15グリッドに位置する。重複関係は114号掘立柱建物跡より新しい。
長軸5.7m、短軸5.5m、深さ0.6mを測り、平面プランは不整形を呈する。粘土採掘坑と考えられる。
覆土は茶褐色・黒色土ブロックから構成され、下位はほとんど地山の黄色土が主体となる。

54号性格不明遺構（313・288図、PL91）

ＶＥ-24グリッドに位置する。重複関係は137号掘立柱建物跡より古い。
長軸3.2m、短軸3.0m、深さ1.7mを測り、平面プランは円形を呈する。井戸状・塵芥処理土坑などと呼称される遺構である。

覆土上層は黄色粒子・パミスを少量混入する黒褐色土、下層は砂質でややきめの細かい黒褐色土で、底面のしまりは強い。壁際の土層には部分的に崩落によると考えられる黄色土のブロックが認められる。

55号性格不明遺構（314・291図）

ＶＪ-３グリッドに位置する。重複は認められず、単独である。
中央部の土坑は主体部と考えられ長軸1.7m・短軸0.5m・深さ0.5mを測り、溝の幅は0.6～0.4m、深さ0.5mで、周溝の最大径は6.0mを測る。平面プランは周溝が円形、主体部は距形を呈する。平安期の周溝を伴う墓跡と考えられる。

主体部の覆土は上層は黄色土粒子・パミスを少量散在させる黒褐色土で、下層は褐色土主体で黒褐色土ブロックを多量、黄色土粒子を少量混入する。溝部の覆土は砂質の黒褐色土で全体に黄色土粒子を混入する。

56号性格不明遺構（315図）

ＶＪ-３グリッドに位置する。53号性格不明遺構と重複するが新旧関係は不明である。
長軸4.8mを測り、平面プランは不整円形を呈し、粘土採掘坑と考えられる。本跡は粘土採掘坑としてはそれほど利用されておらず、火砕流堆積後のエアー抜けの様子が確認できたため、断面図を優先し平面図は図化していない。10層がエアー抜けの痕跡で、その上部の層（７・８層）はカマド構築材に用いられた粘質土にきわめて類似している。

57号性格不明遺構（314・293図、PL91）

ＶＪ-22グリッドに位置する。重複128号住居跡より古い。
長軸3.2m、深さ0.8mを測り、平面プランは不整形を呈する。おそらく128号住居跡に関わる粘土採掘坑と考えられる。

覆土は黒褐色土主体で地山の白・赤・黄色土をブロック状に混入する。粘土採掘坑特有の規則性のない堆積で、数度にわたり掘削を繰返したようである。北東部では良質な粘質土を求めてえぐるように掘り込んでいる。

58号性格不明遺構（313・289図、PL91）

ⅥＡ-11グリッドに位置する。重複は認められず、単独である。
長軸2.4m、短軸1.9m、深さ1.1mを測り、平面プランは円形を呈する。従来より井戸跡・塵芥処理土坑とされる遺構である。

覆土はにぶい黄褐色土で全体に均質である。

59号性格不明遺構（313・４図）

ⅢＳ-９グリッドに位置する。重複は認められず、単独である。
長軸1.4m、短軸1.3m、深さ0.6mを測り、平面プランは不整形を呈する。粘土採掘坑と考えられる。

66号性格不明遺構（313・282図）

ⅢU−25グリッドに位置する。重複は認められず、単独である。

長軸3.4m、短軸2.3m、を測り、平面プランは楕円形を呈し、底面は平坦である。井戸状・塵芥処理土坑などと呼称される遺構と考えられる。

覆土上層はきめの細かい粘性のある黒褐色土で地山の黄色土を粒子状に少量混入する。中層は砂質褐色土を主体とし黄色土粒子・パミスを混入する。下層は褐色土主体で黄色土粒子を多量に混入する。

(6)　鉄・金属製品

金属製品　第353・354図、PL113・114

本遺跡から出土した鉄製品は鉄滓も含めると108点を数える。遺物の出土点数の多い遺構としては7号住居跡が12点の遺物を出しているのが特に目に付く。また、47号住居跡は遺物の出土点数は4点だがそのうち2点は良好な状態で残存した鎌であった。変わった遺物としては鉄鐸が一点、舌とともに完形で出土した。

遺物の種類についてみると、やはり農具、紡織具、武器がその主なところである。以下、それぞれについて述べる。

農具：鋤先の出土はないが、鎌で良好な遺物が多かった。着柄角や形態、大きさがいくつかあり興味深い。刃渡りに注目すると稲や麦などの根刈りに用いられたと考えられるものばかりである。また、穂摘み具も1点出土した。

紡績具：紡錘車、紡軸の出土があった。紡錘車の紡輪の直径はそれぞれ異なるが芝宮遺跡群出土の紡輪の直径とほぼ同じで一定の規格があったものと解される。

工具：他に類例はないが細い溝を彫るための鑿らしい遺物が1点出土した。太い茎と大きな関をもつ。棒状不明品としたが、舞錐と考えられるものが41号住居跡から1点出土したほか、102号住居跡からは揉み錐と思われる断面角型の両端が尖った棒状の鉄製品が出土した。

刀子：住居跡から出土した刀子は、芝宮遺跡群と同様に小型で平造りのものばかりであった。やはり形態はいくつかに分けられる。ただ94号土坑出土の一点は刃渡り13ｃｍと大型の片鋳造りで形態もこの遺跡では他に例をみない。

鉄鏃：住居跡から多い遺構でも3点、たいていは1点ずつ鏃を出土している。鏃の形態は8種類ありそれぞれ図示したが、点数が多かったのやはり芝宮遺跡群と同様に切出しナイフ状の刃先をもつ細身の長頭鏃と、長い頸部をもつ圭頭鏃であった。この時期この地方ではそれらが一般的であったのだろうか。

その他の遺物：毛抜き形鉄製品、縫針、鉄鐸、火打ち金などの出土をみた。針は先端を欠いているが、目処の成形法がわかり、興味深い。鉄鐸は舌とともに出土した。鐸本体に懸架のための加工はなく、舌を縛った紐でともに吊り下げたのだろう。両刃の刃物も1点出土した。とくに用途を限定することができない汎用品であったのだろうか。

不明品　芝宮遺跡群と同様に板状、棒状の用途不明の遺物も多かったが、紙面の都合上割愛した。やはり木工・金工用具が含まれているのであろう。

銅製品　（第353図、PL114）

中原遺跡出土の銅製品は銭貨2点、帯金具2点、不明品1点、銀環1点、金環3点であった。芝宮遺跡群と同様に、遺構は検出されないが中世、近世の撹乱を受けたようで新しい遺物も混ざっていた。

帯金具：図示した丸輔と鉈尾が1点ずつ出土した。どちらもそれぞれの住居跡から単独に出土している。

丸輔は竈の埋立から、錠尾は住居の埋立から出土しており、投棄ないしは紛れ込みであろう。

金環・銀環：銀メッキを施したものは芝宮でも出土しなかった。また、破損したものの出土もなく図示した１点のみである。

銭貨：集落が営まれた時期の遺物で完形で出土したのは図示した「万年通寳」１点とは「和同開珎」が１点出土した。また、「寛永通宝」も出土している。

不明品：鋲が２本貫通した板状のものが１点出土。

(7)　石製品　（第355図、PL115）

石製品では、砥石・石斧・敲石・こも編み石・円盤状軽石製品・凹石・玉類・石臼などが出土している。

砥石は1点（355図６）図化できた。破片や疑わしいものは図化していないため、それらをなどを含めると数倍の量となる。(6)の石材は粘板岩で表面には使用時の擦痕が認められ、全面が光沢を帯びている。分類上砥石の範疇に入れたが詳細な用途は不明である。

打斧は数点出土したが、図化できたのは１点（355図２）である。調査中、掘形覆土内に打斧と考えられる製品が認められたが、石製品として取り上げていない。これら掘形中に認められた打斧は、住居跡構築の掘削具として使用されたものと考えられる。(2)は粘板岩製の打製石斧で125号住居跡のカマドから出土している。

敲石は２点（355図３，４）図化できた。球形(3)のものと棒状(4)の二者が見られる。(3)は103号住居跡から出土し、安山岩製で重量は926.5gを測り、磨石とも考えられる。(4)は64号住居跡から出土し、粘板岩製で重量は359.9gを測る。

こも編み石は1点（355図５）図化できた。(5)は断面台形の四角柱状で、他の大半のこも編石は細長い流線形の自然石を利用しているのに対しやや形状が異なる。図化したもの以外に多量に出土しているが、本文中の竪穴住居跡の項に数量のみ記載した。出土状態はほとんどが床面直上で出土している。重量150～250gを測るものが主体を占め、それより大きな製品も見られた。大きな製品は用途が異なるものと考えられる。

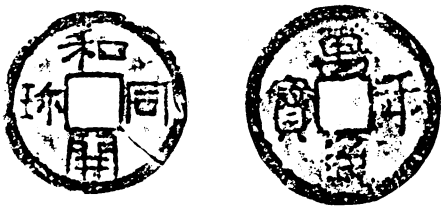
紡錘車は4点（355図７～10）図化できた。全て滑石製で、滑石製品の全ては断面が台形である。６世紀後半～８世紀代が多いが、９・10世紀でも認められている。（355図11）は軽石製のため不明としたが、あるいは紡錘車と考えられないこともない。

円盤状軽石製品が１点（355図12）図化できた。用途は不明で軽石を用いた円形のものを分類してある。竪穴住居跡で出土したものは、ほとんどが古墳時代後期の所産である。図化した1点の他にも多数出土している。

凹石は１点（355図1）図化できた。(1)は安山岩製で重量は756.2ｇを測る。長方形の立方体で全面面取りされ、一部に砥石に見られる擦痕が観察されることから、砥石からの転用品と考えられる。

玉類（355図）は臼玉は２点・勾玉は４点（瑪瑙製が１点・他３点は土製品）出土している。臼玉の２点は滑石製、である。

（355図20）は溶岩製の石臼であるが底が抜



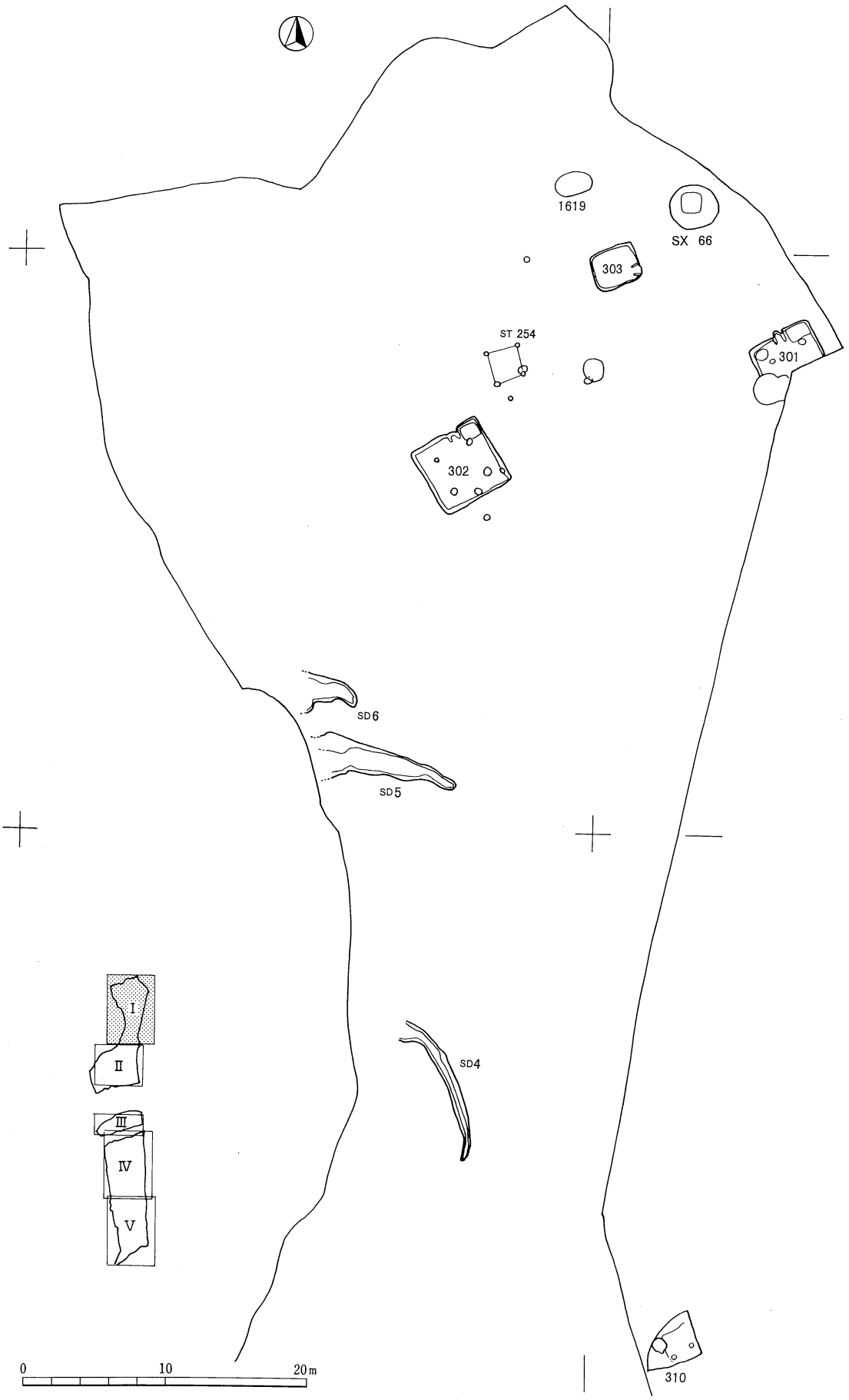
（第273図）　古銭拓影図

けているためドーナッツ状を呈している。底部は人為的に打ち欠いたものかどうかは不明。

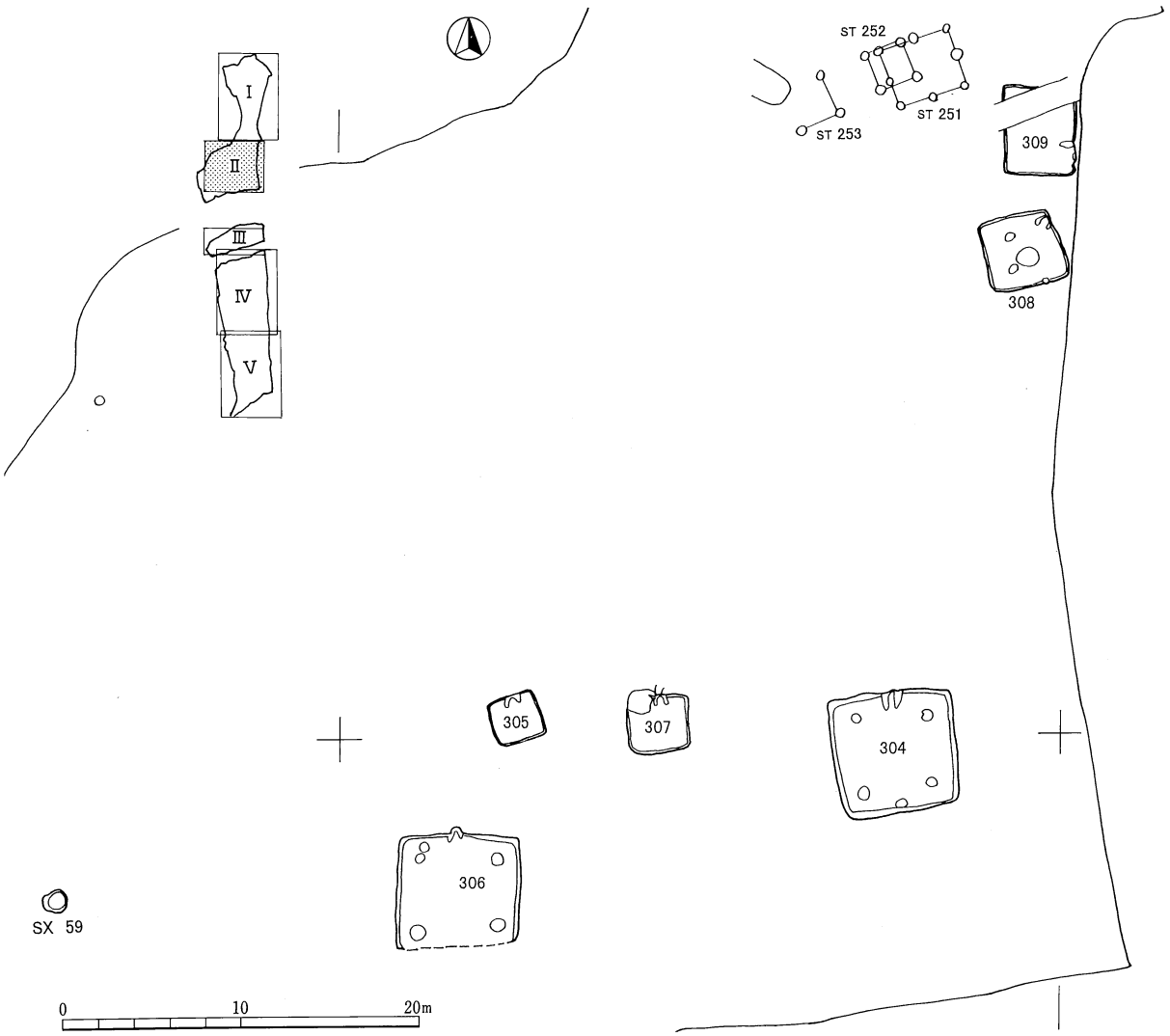
(8)　その他

銭貨は和同開珎（273図、PL114）が7号住居跡床面から、万年通寶（273図、PL114）が29号住居跡床面から出土している

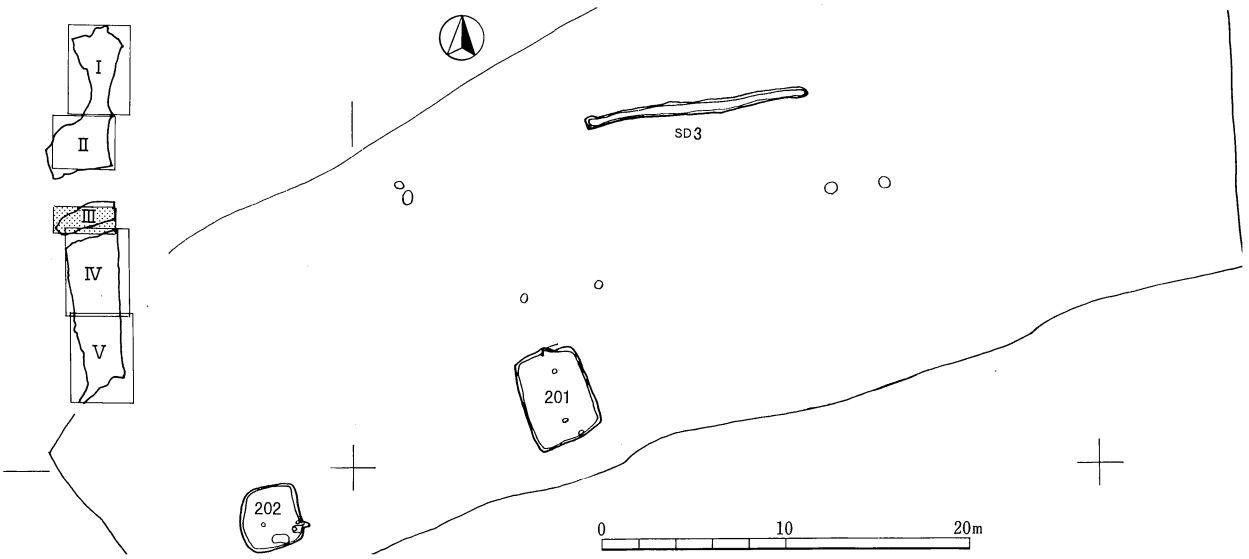
第 274 図　中原遺跡群全体図



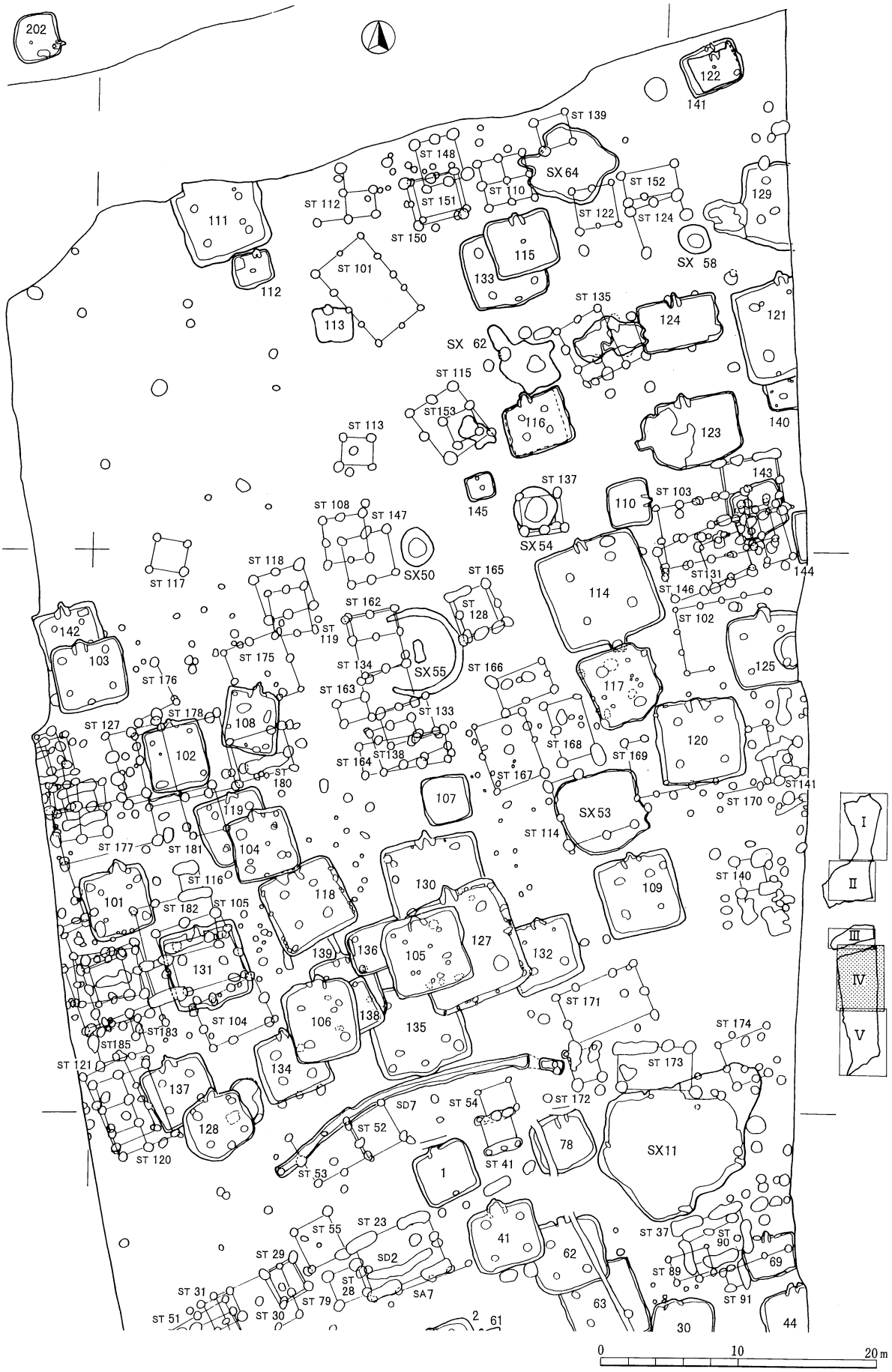
第275図　遺構配置 I



第276図　遺構配置 II



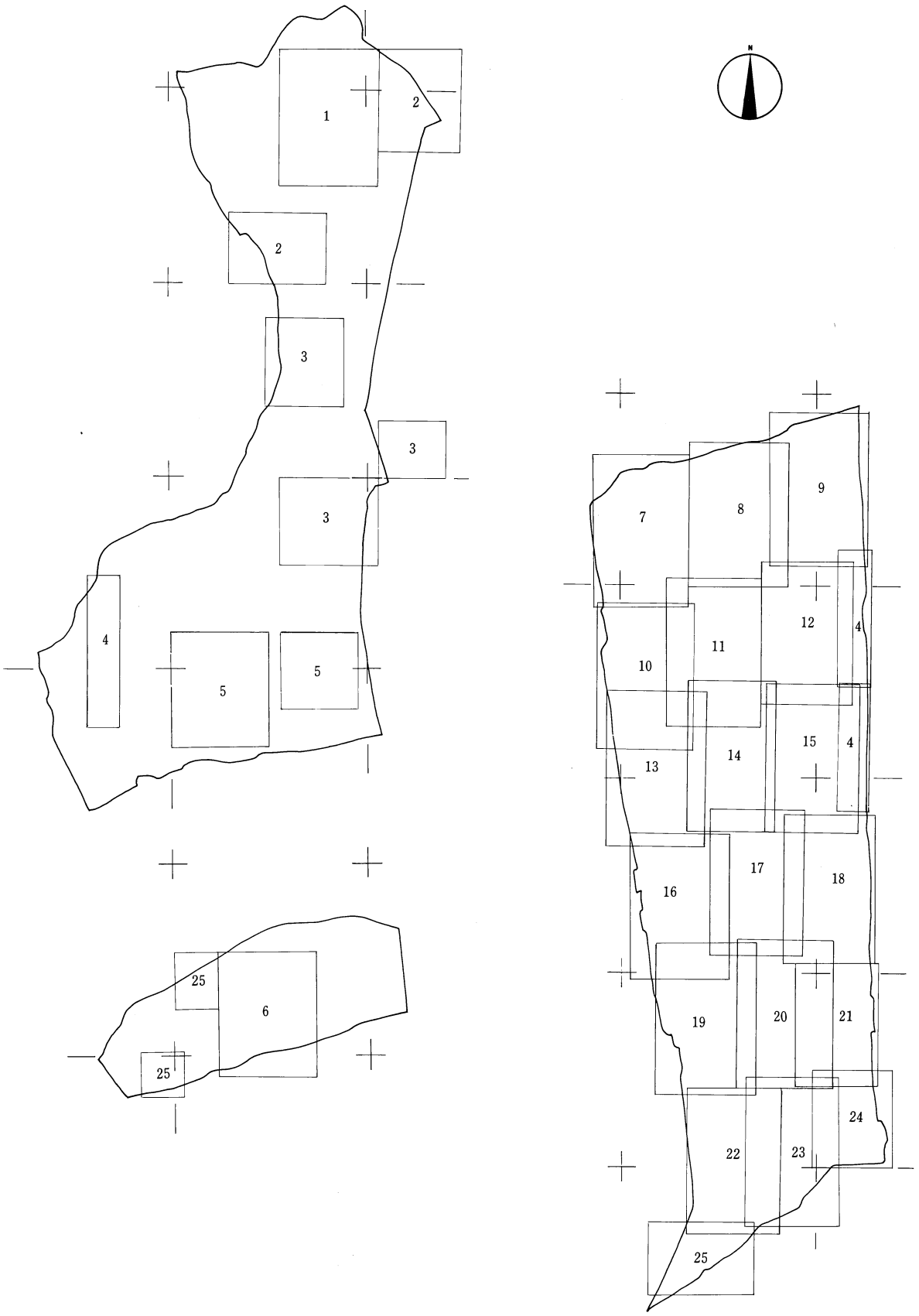
第277図　遺構配置 III


202
122
141
ST 139
ST 148
SX 64
ST 152
ST 110
ST 112
ST 151
ST 122
ST 124
129
ST 150
111
115
SX 58
ST 101
133
112
ST 135
124
121
113
SX 62
ST 115
ST153
116
140
ST 113
123
143
ST 137
145
110
ST 103
ST 108
ST 147
SX 54
SX50
ST 117
ST 118
ST 165
114
ST131
144
ST 146
ST 162
ST 128
ST 102
142
ST 119
103
ST 175
ST 134
SX 55
ST 166
125
ST 176
ST 163
117
ST 178
ST 133
ST 127
108
102
ST 168
120
ST 138
ST 169
ST 164
ST 167
ST141
ST 180
107
ST 170
119
SX 53
ST 114
ST 177
ST 181
104
ST 140
ST 116
130
109
101
ST 182
ST 105
118
139
136
105
127
132
131
ST 171
ST 104
106
138
135
ST 174
ST183
ST185
ST 173
ST 121
134
137
SD7
ST 54
ST 172
128
ST 52
78
SX11
ST 120
ST 53
1
ST 41
ST 55
ST 23
41
ST 37
ST 90
ST 29
SD2
62
69
ST 89
ST 31
ST 28
SA7
ST 79
63
ST 91
ST 51
ST 30
2
61
30
44
I
II
III
IV
V
0
10
20m

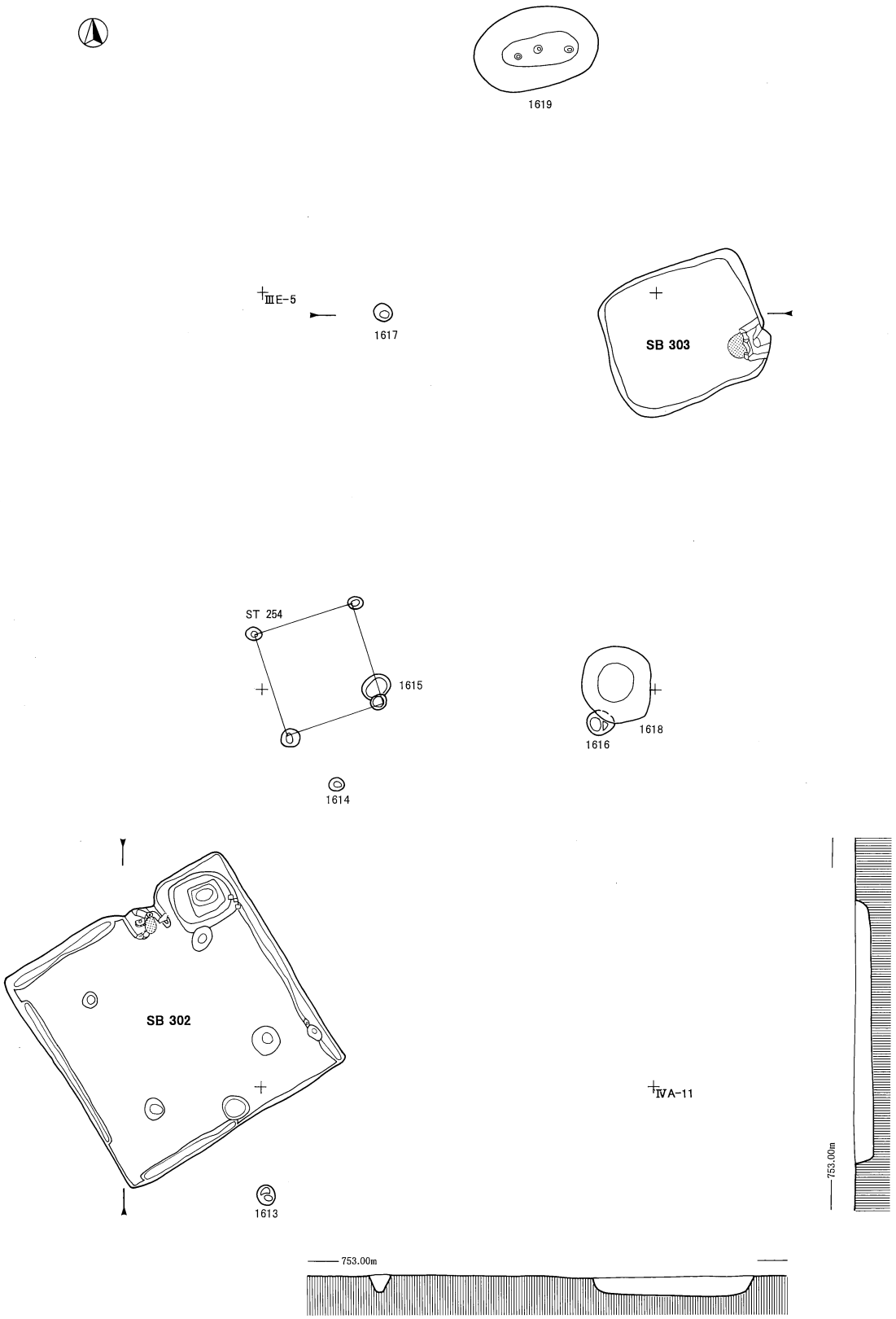
第278図　遺構配置 Ⅳ

ST 31
ST 30
ST 79
ST 28
ST 23
SA7
ST 61
ST 60
ST 51
ST 89
ST 91
SX12
ST 40
ST 36
ST 57
ST 62
ST 70
ST 42
ST 27
ST 25
SX1
ST 92
ST 6
ST 7
ST 78
SX2
SX 7
ST 8
ST 67
ST 68
ST 87
ST 64
ST 63
ST 11
SA4
ST 47
ST 88
SX 15
SX13
ST 72
ST 71
ST 10
SX 14
ST 9
ST 19
ST 81
ST 26
ST 18
ST 17
SD1
ST 48
SX 17
ST 3
ST 1
ST 4
ST 2
ST 5
0
10
20m
I
II
III
IV
V

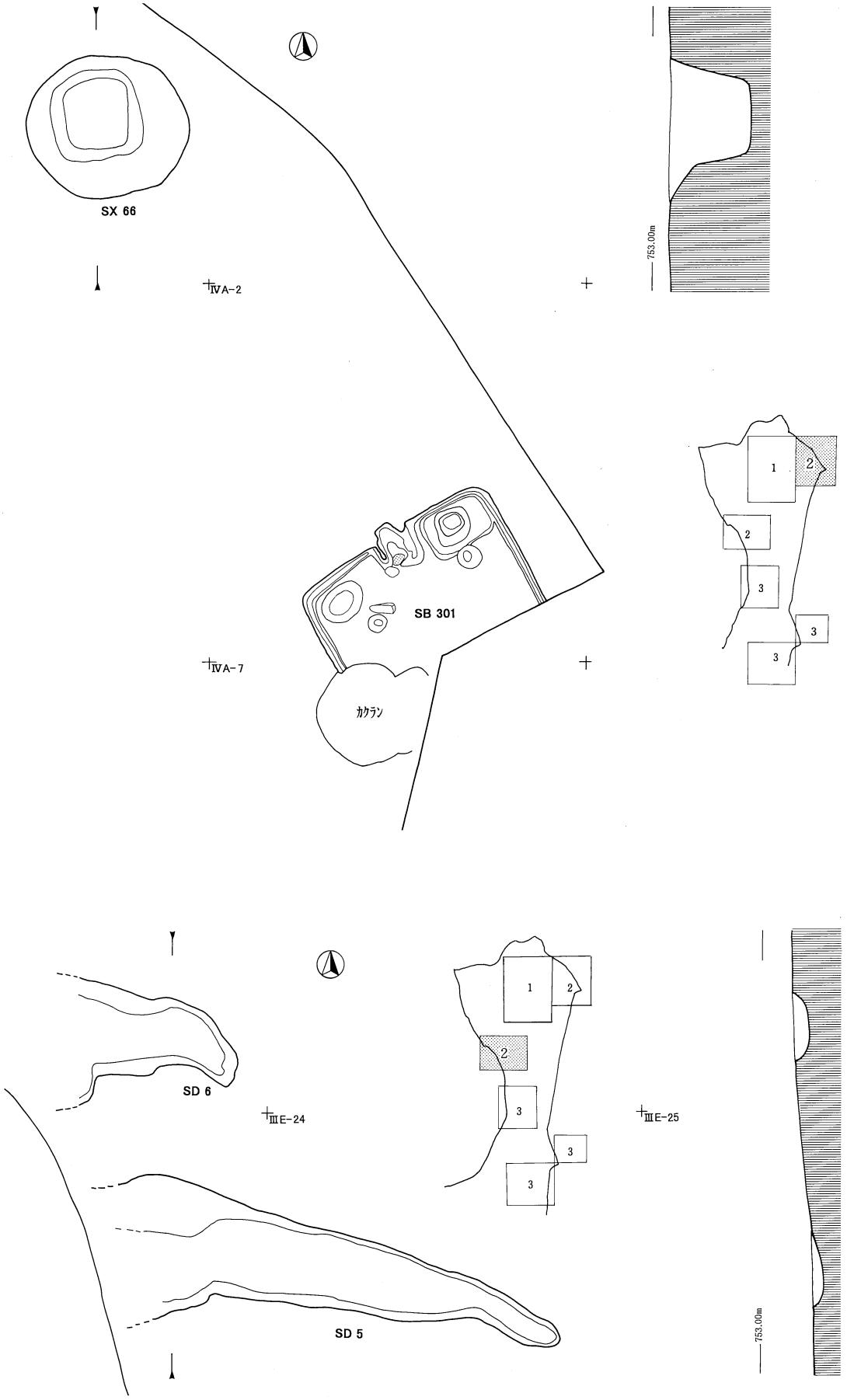
第279図　遺構配置 V


N
1
2
2
3
3
3
4
5
5
25
6
25
7
8
9
10
11
12
4
13
14
15
4
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25

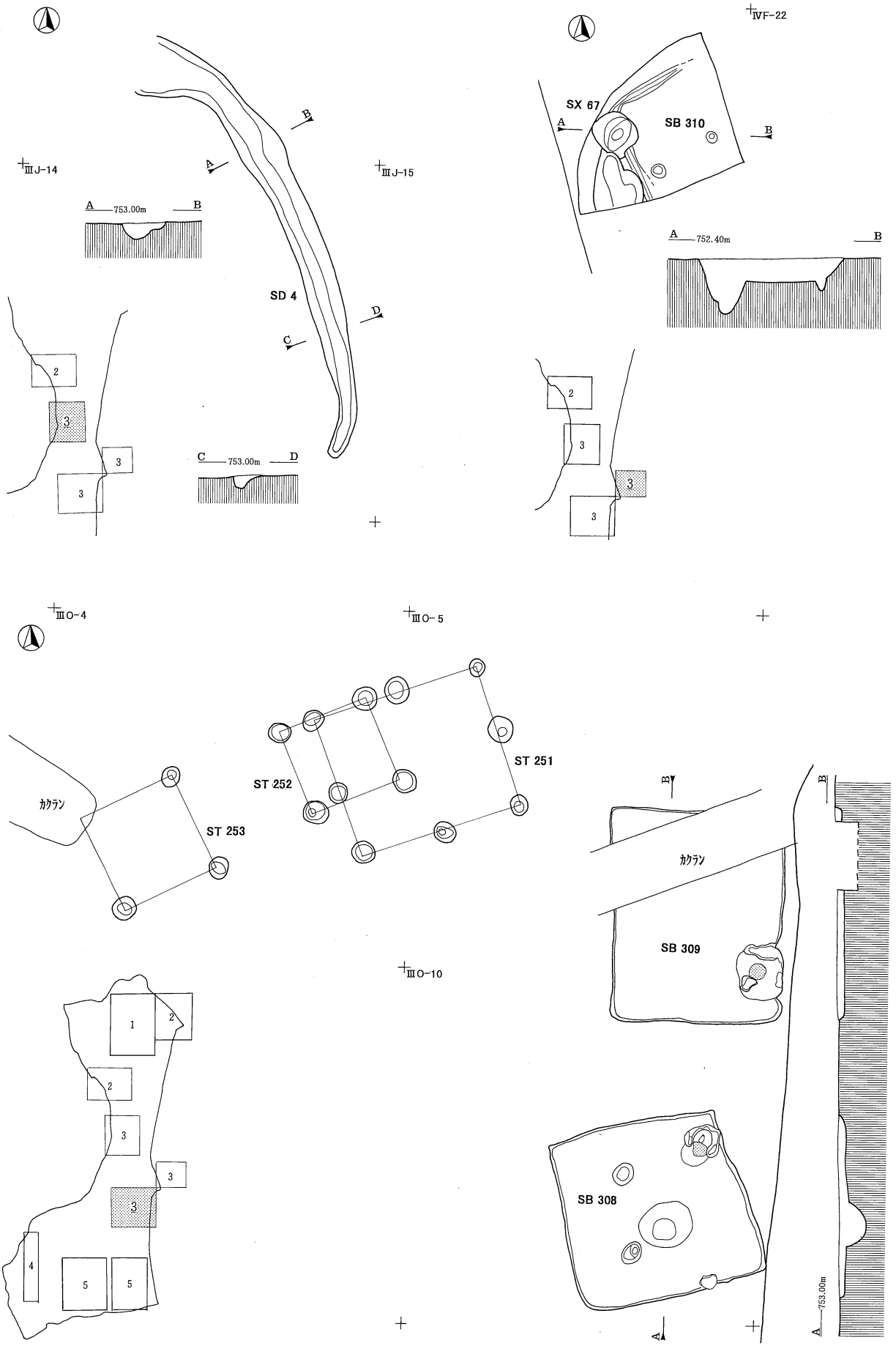
第 280 図　遺構図割付



第281図　遺構図　1　（1：125）

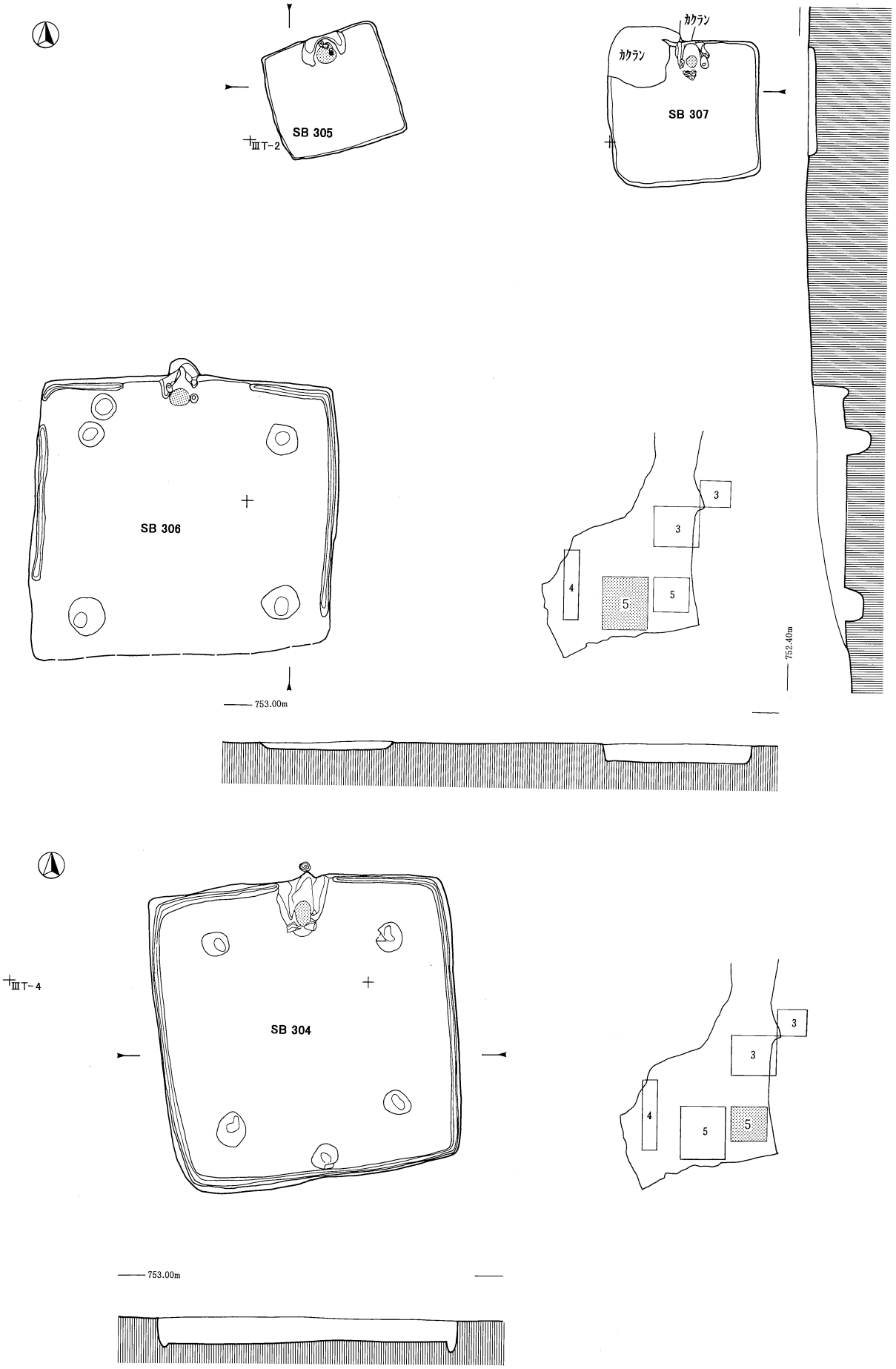


第282図　遺構図　2　（1：125）

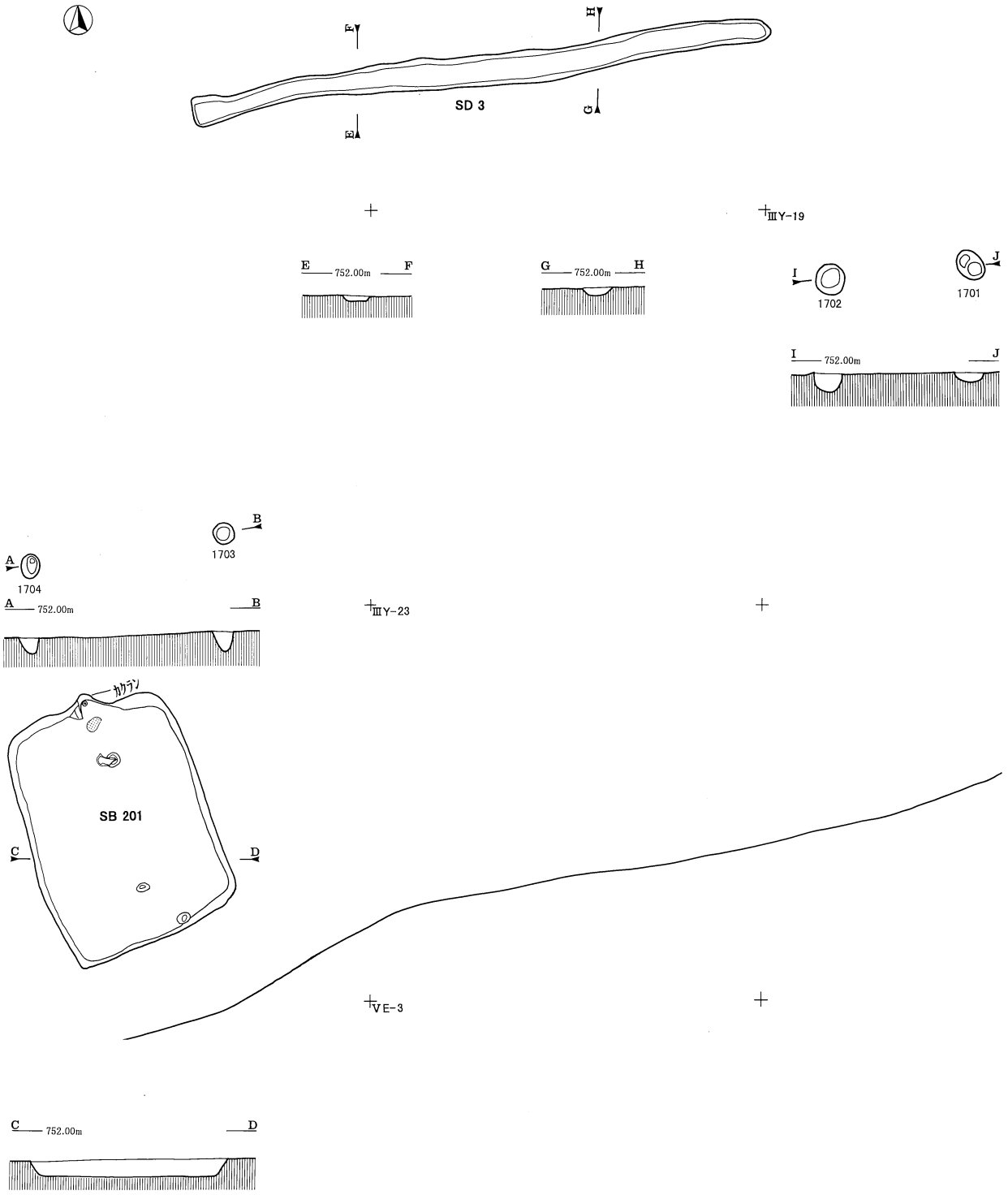


第283図　遺構図　3　（1：125）

第284図　遺構図　4　（1：125）

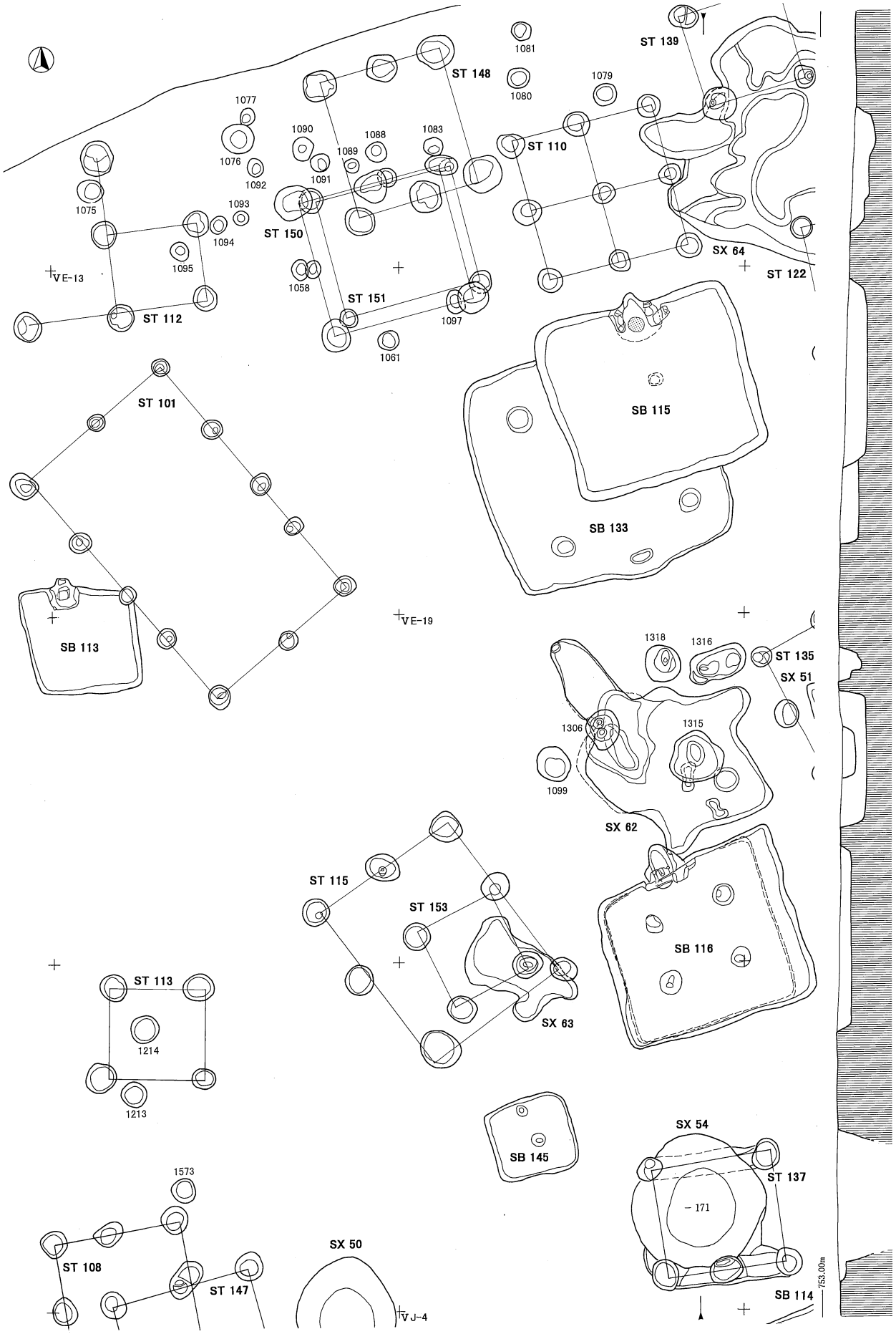


第285図　遺構図　5　（1：125）



第286図　遺構図　6　（1：125）

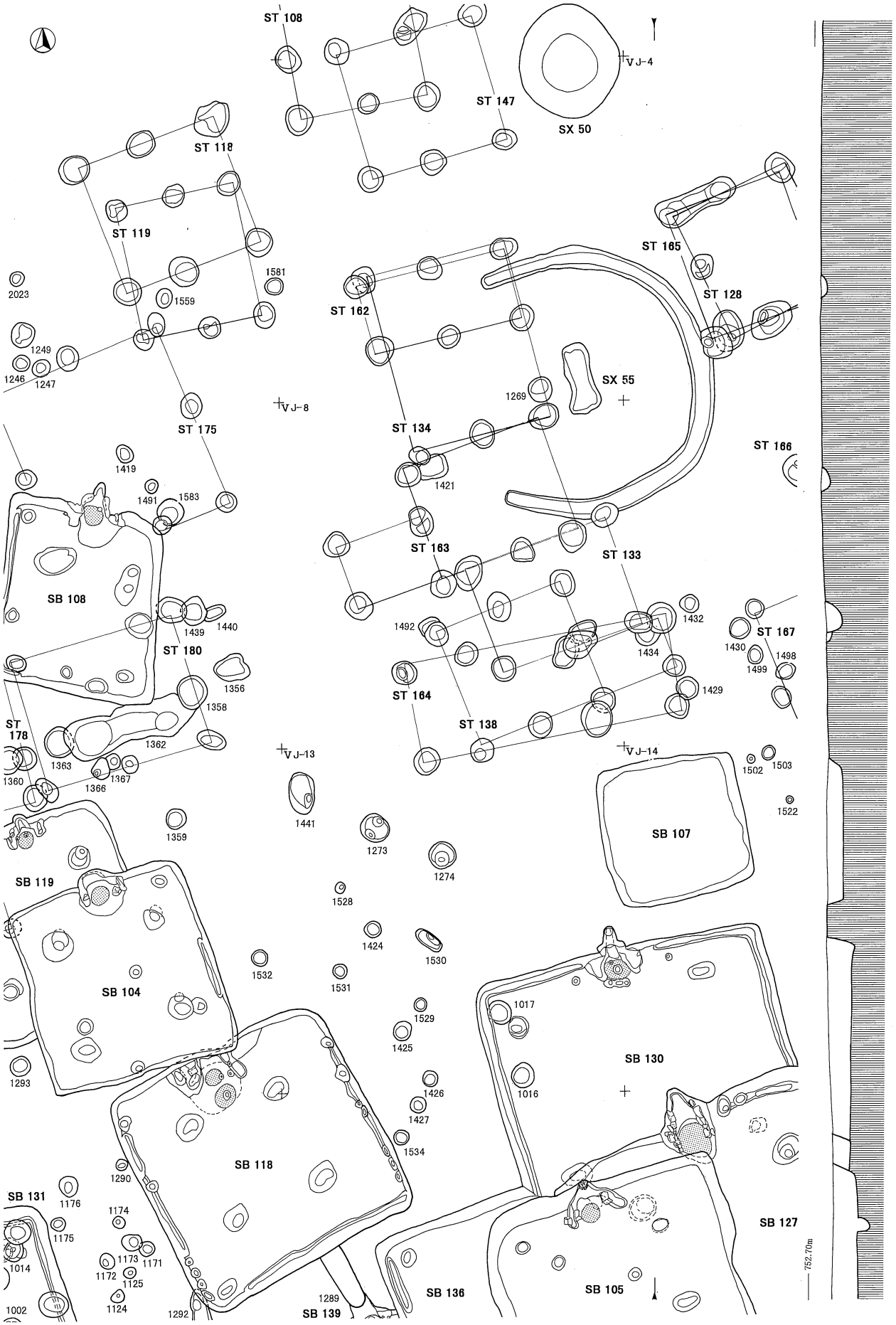
第287図　遺構図　7　（1：125）



第288図　遺構図　8　（1：125）

第289図 遺構図 9 (1：125)

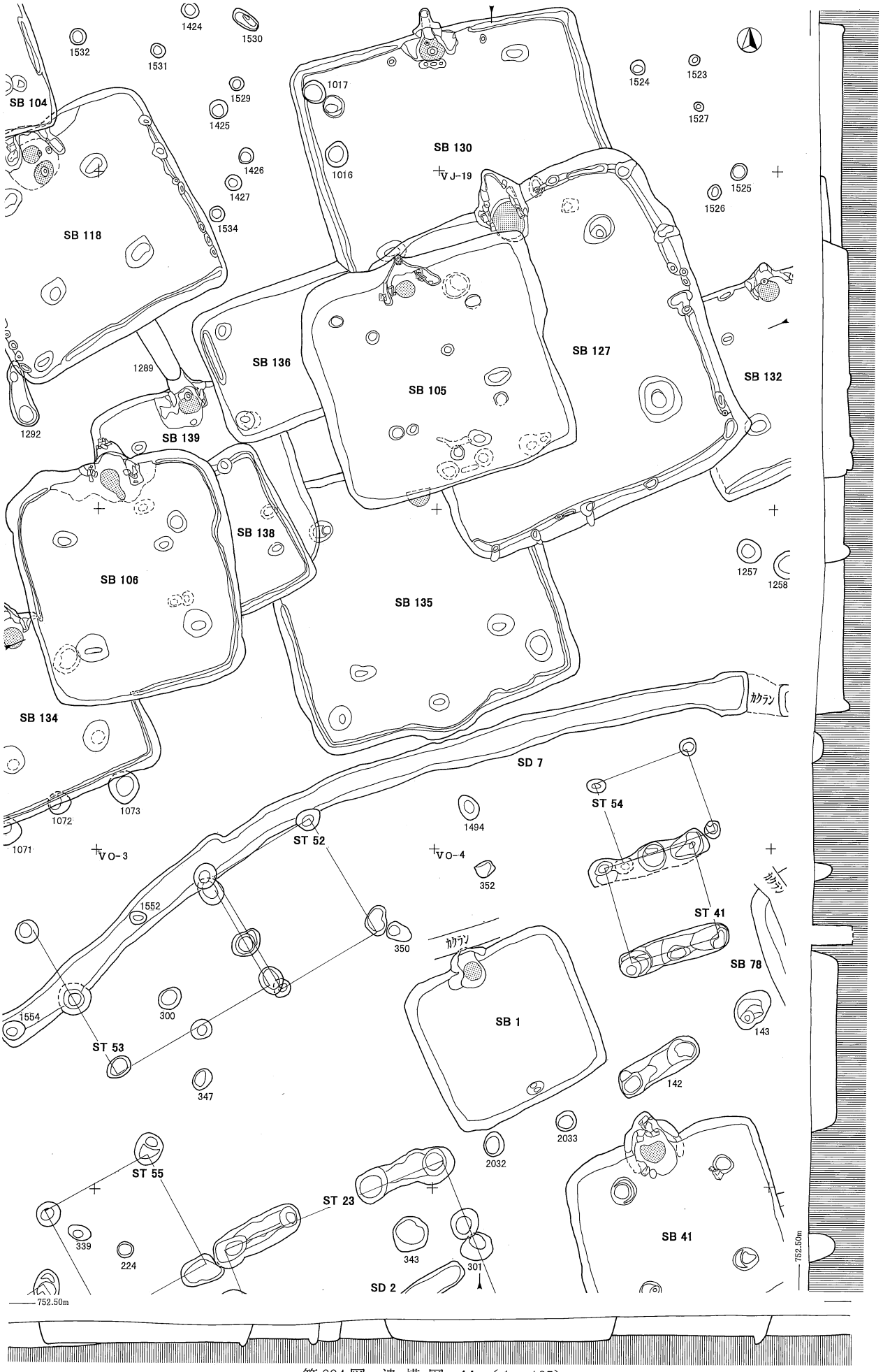
第290図　遺構図 10（1：125）



第291図　遺構図 11（1：125）

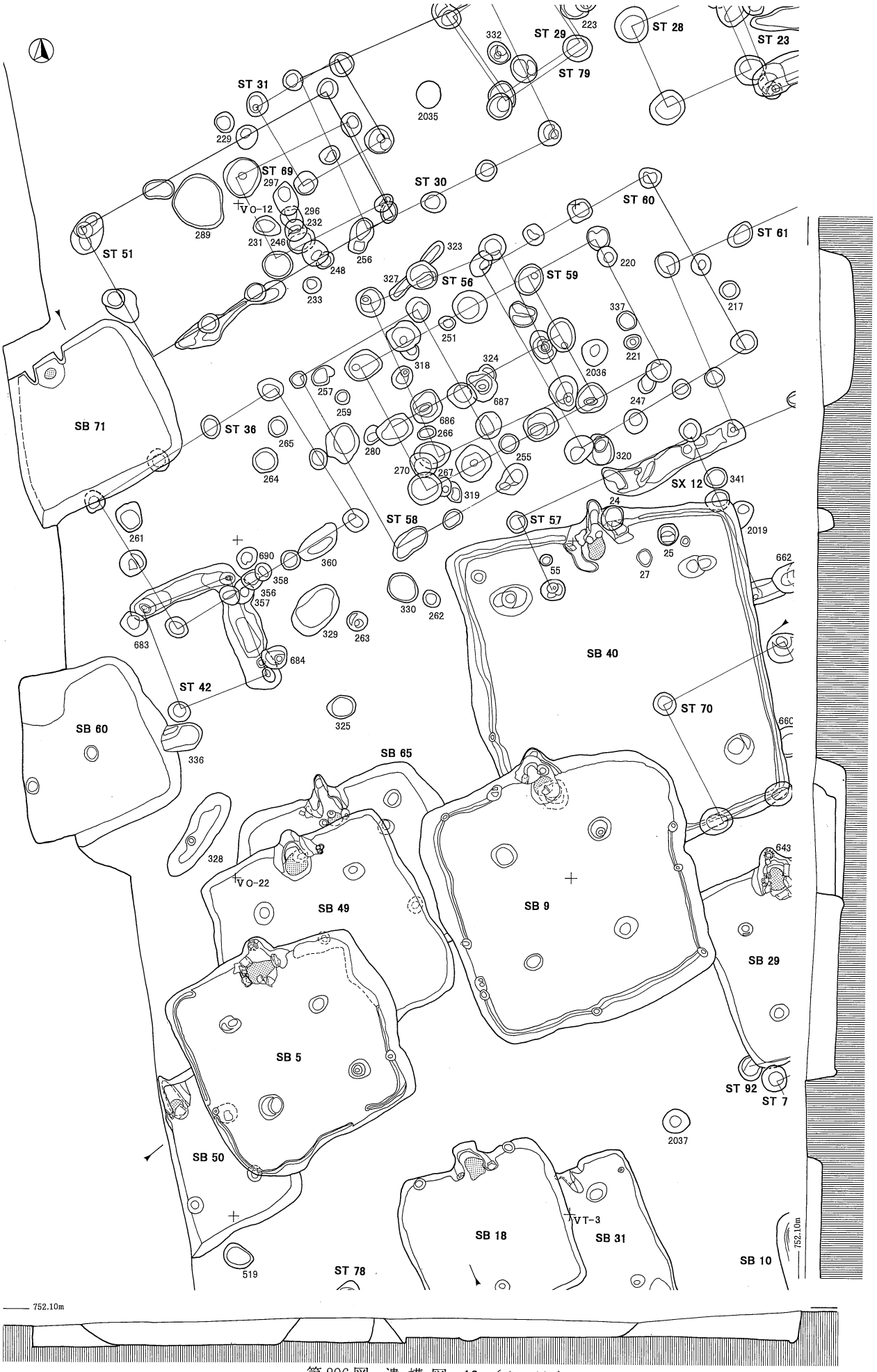
第292図　遺構図 12（1：125）

第293図 遺構図 13 (1：125)

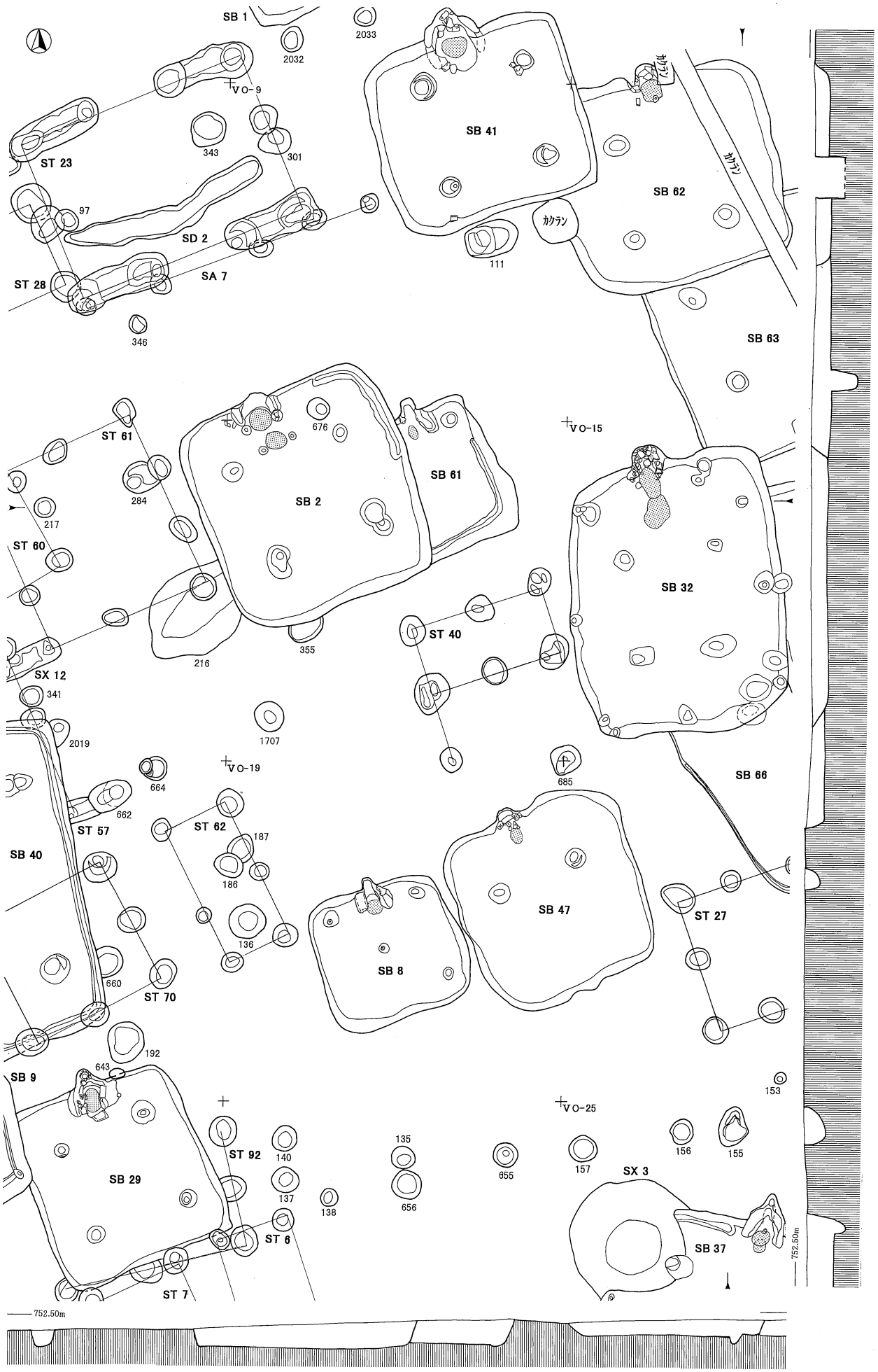


第294図　遺構図 14 （1：125）

第295図　遺構図 15 （1：125）

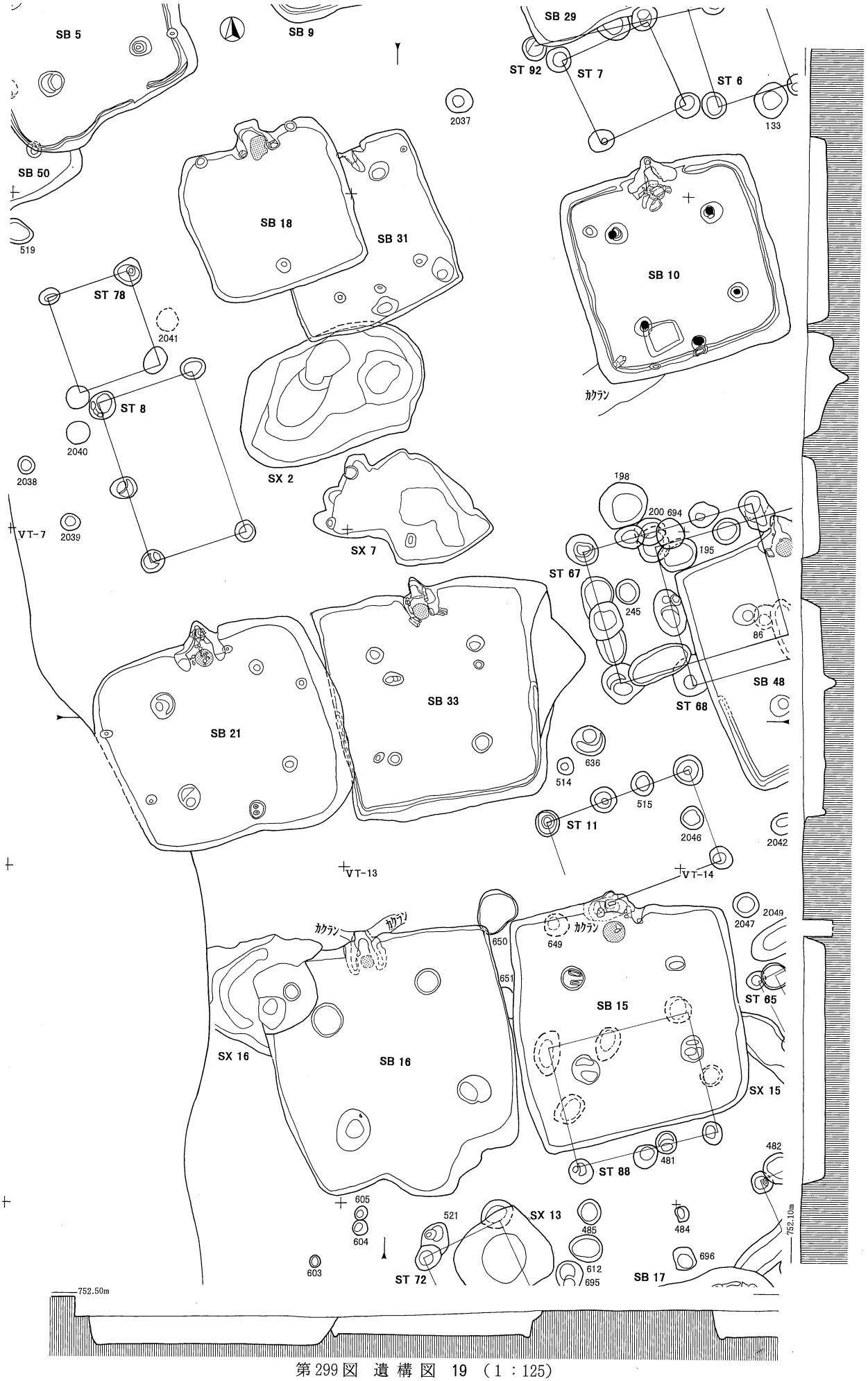


第296図 遺構図 16 (1：125)

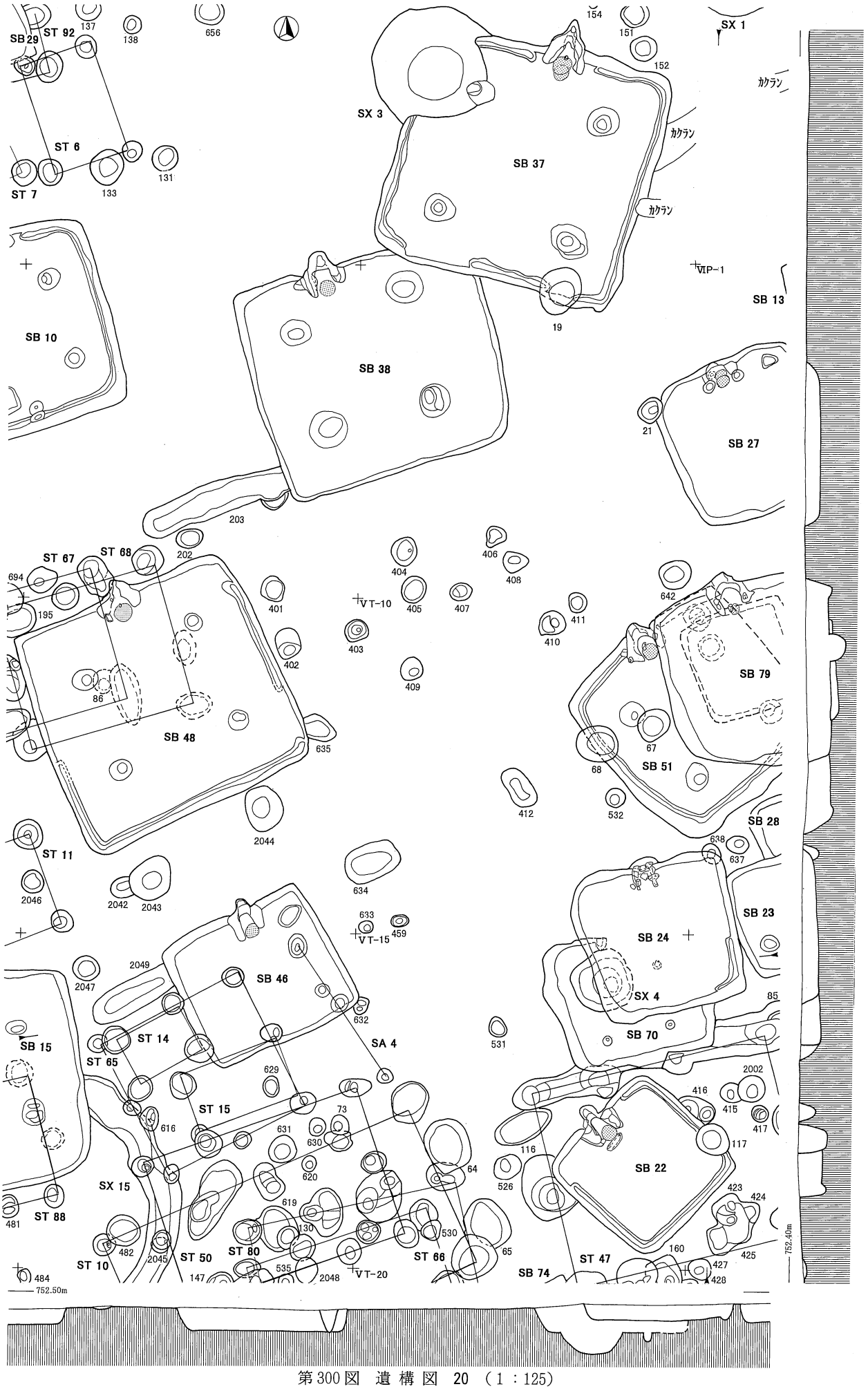


第297図　遺構図 17 （1：125）

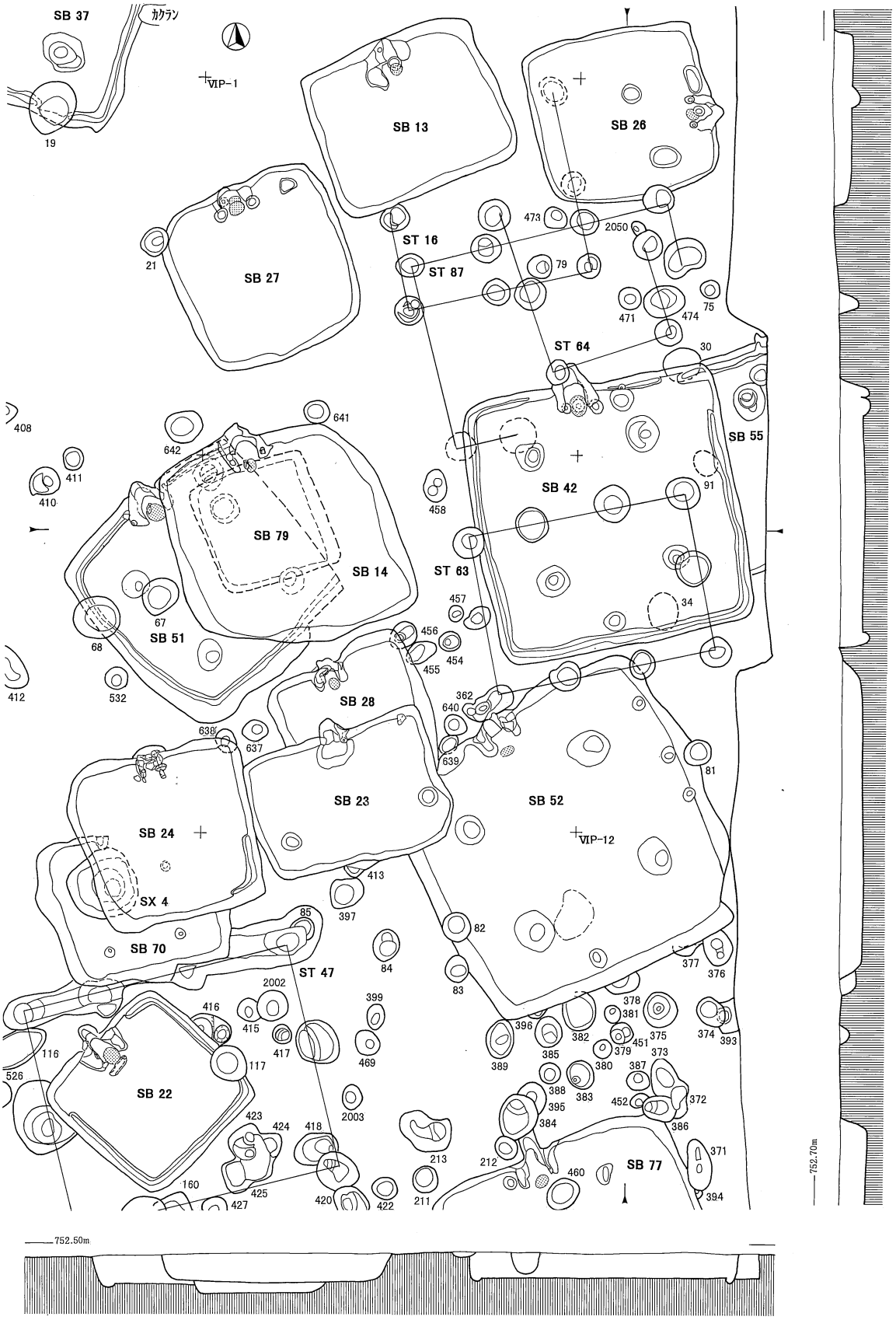
第298図　遺構図 18 （1：125）



第299図　遺構図 19 （1：125）



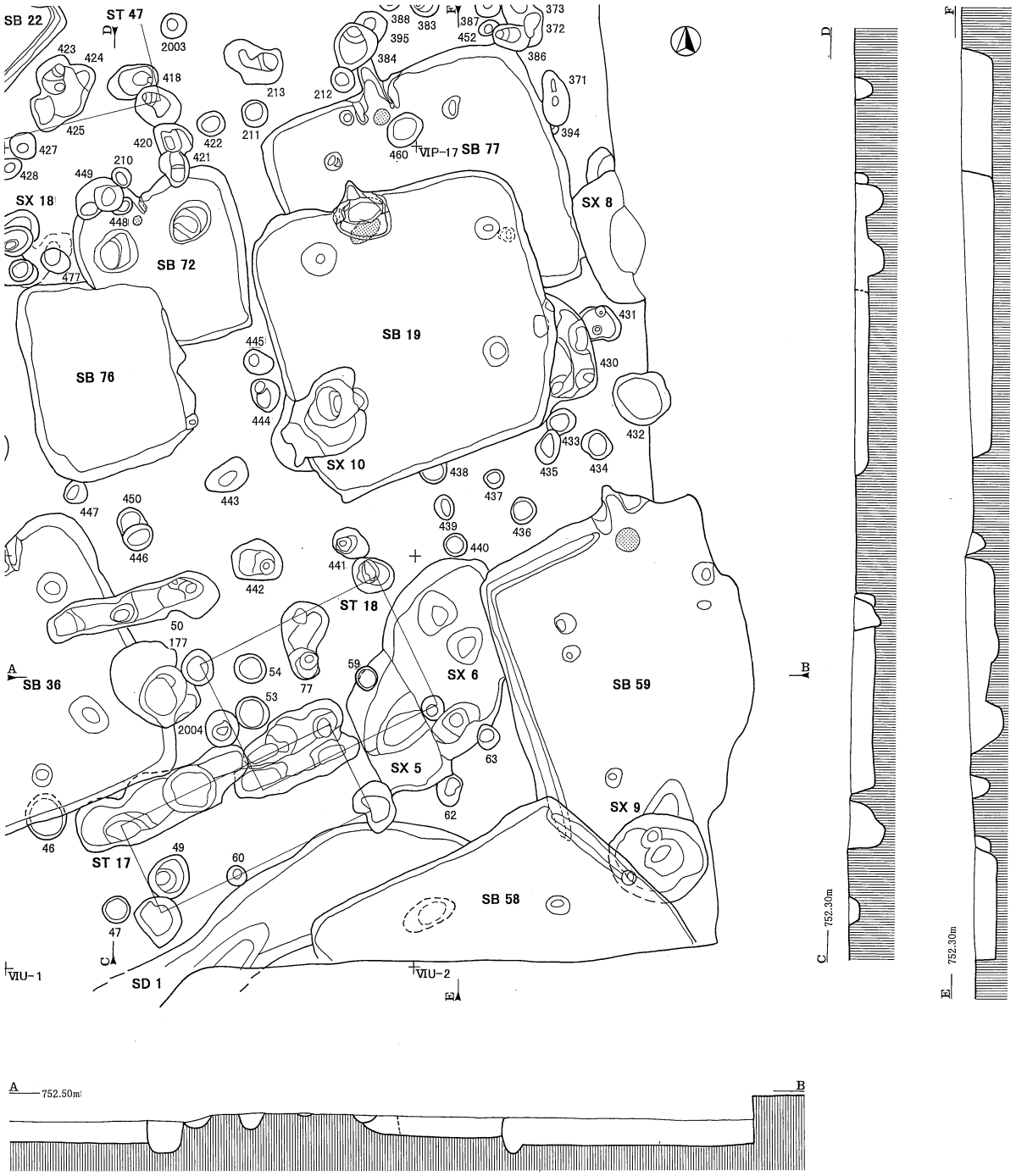
第300図　遺構図 20 （1：125）



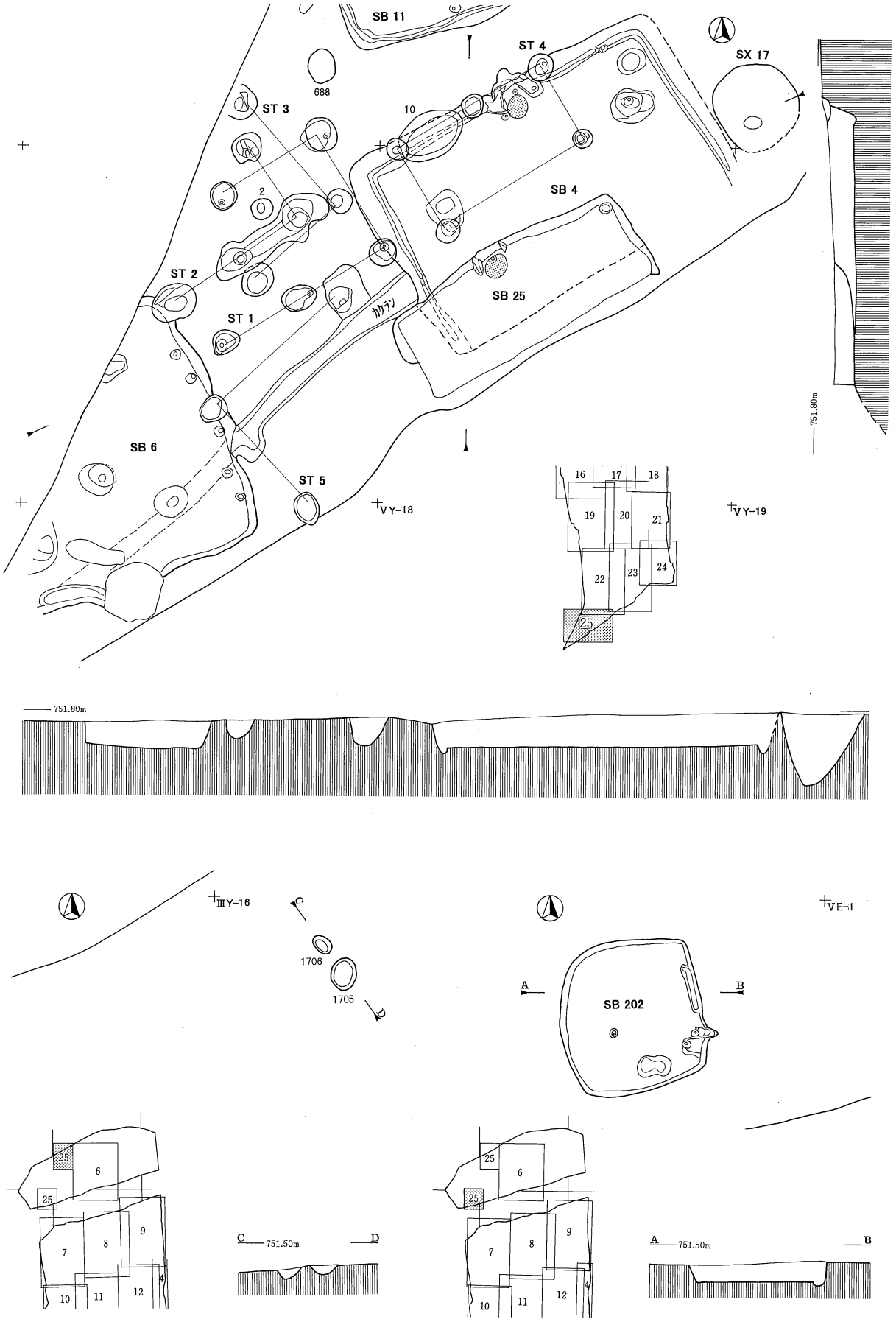
第301図　遺構図　21　（1：125）

第302図 遺構図 22 (1：125)

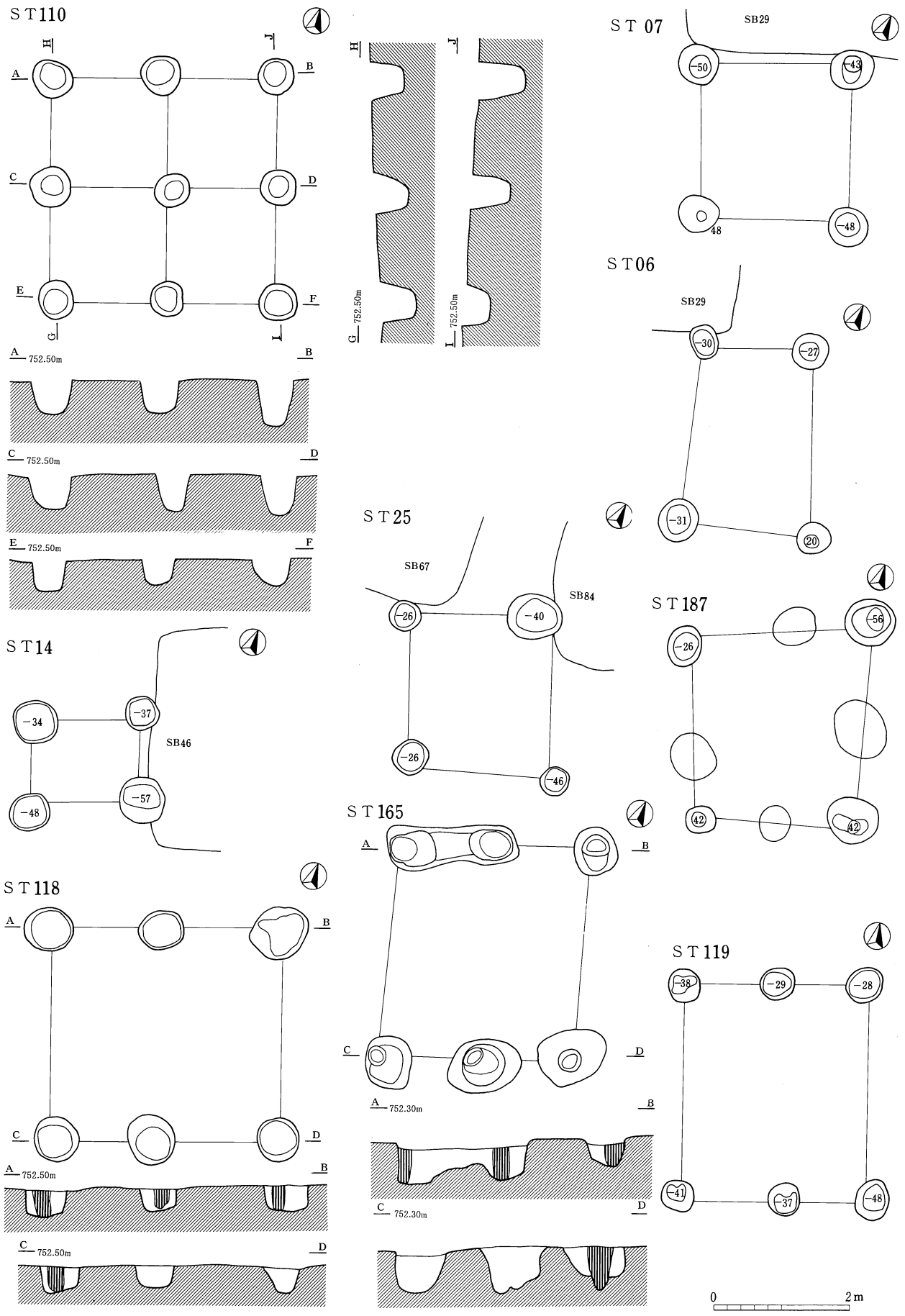
第303図　遺構図 23 （1：125）



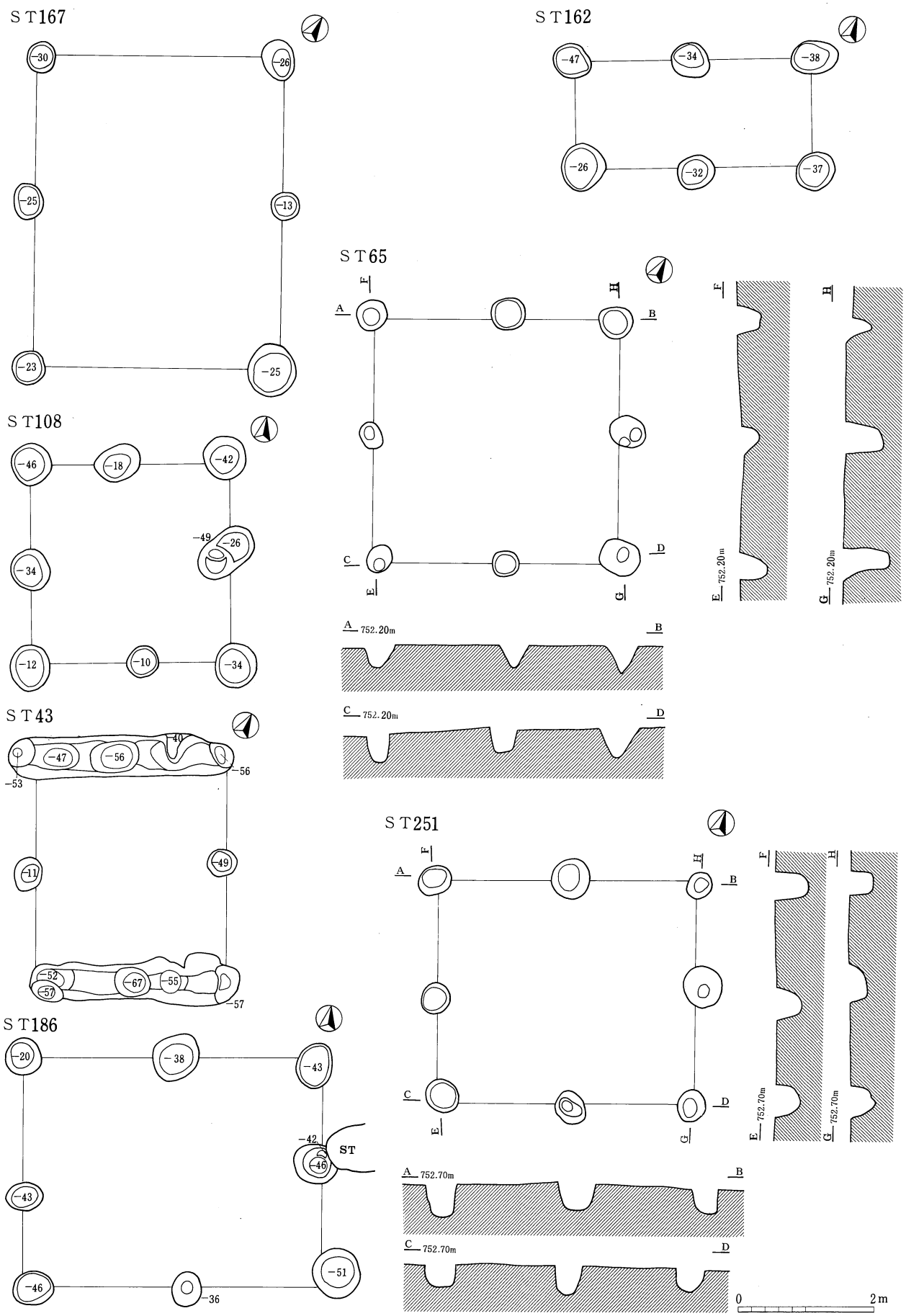
第304図　遺構図 24 （1：125）



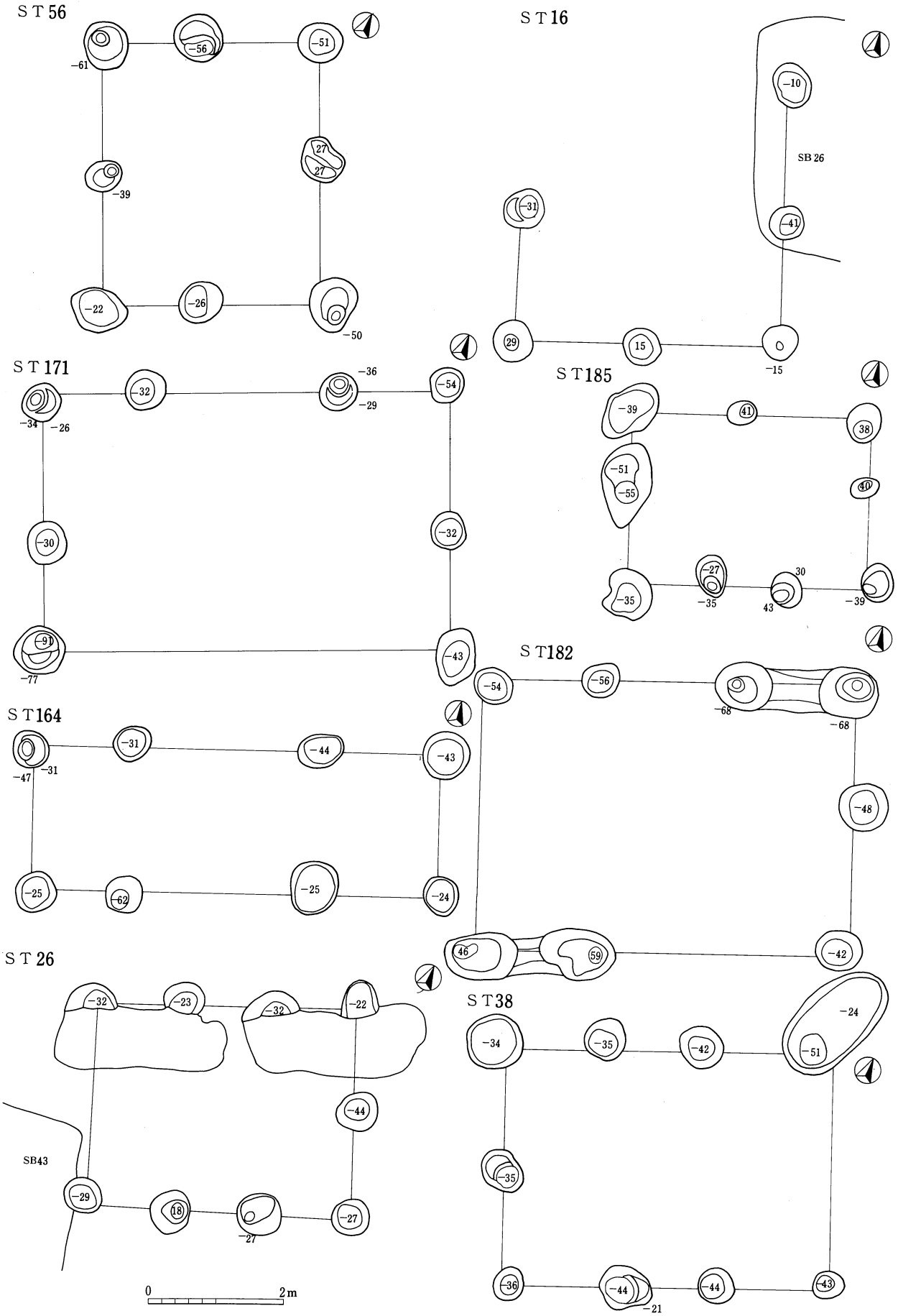
第305図　遺構図　25（1：125）



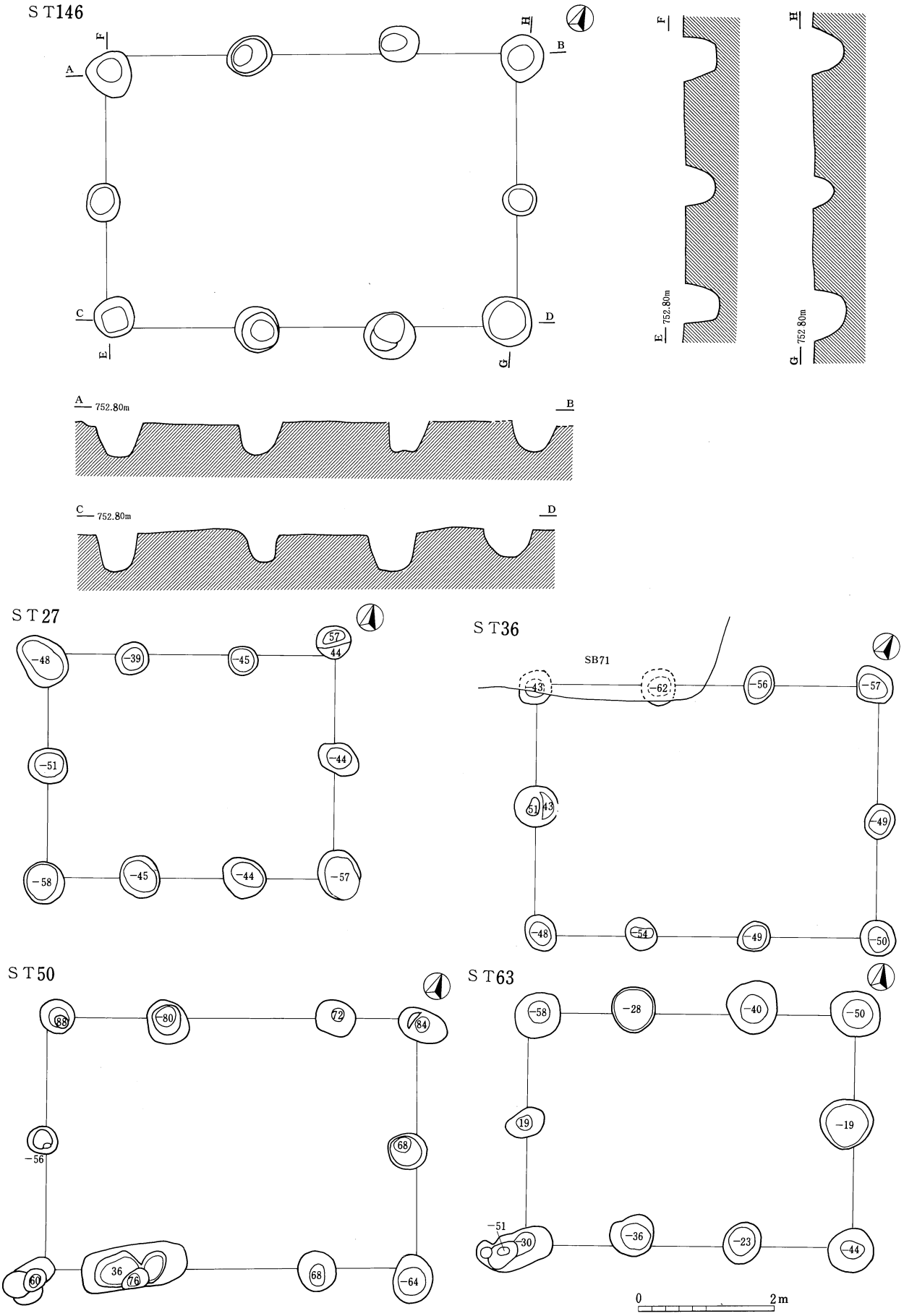
第306図　6・7・14・25・110・118・119・165・187号堀立柱建物跡



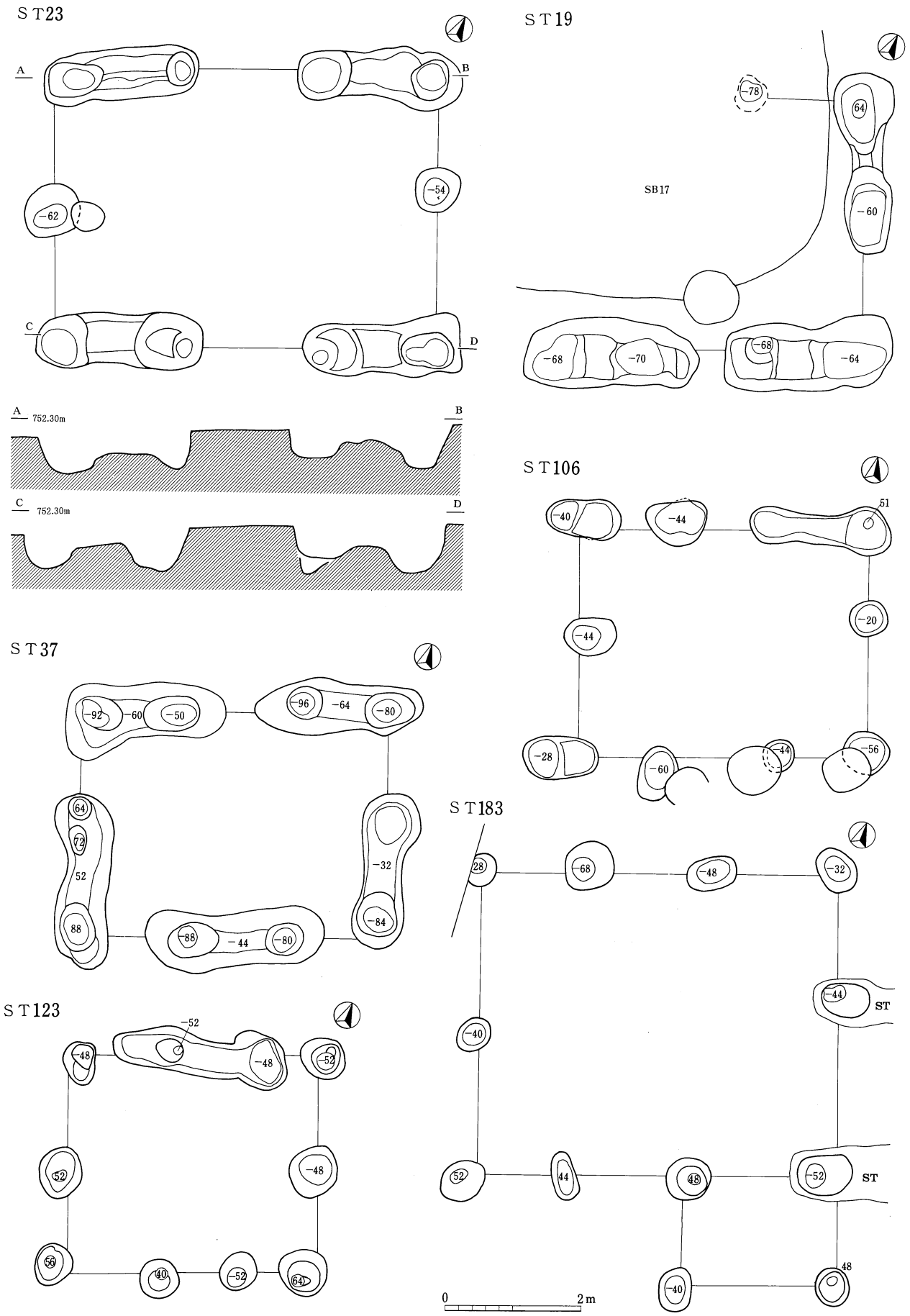
第307図　43・65・108・162・167・186・251号堀立柱建物跡



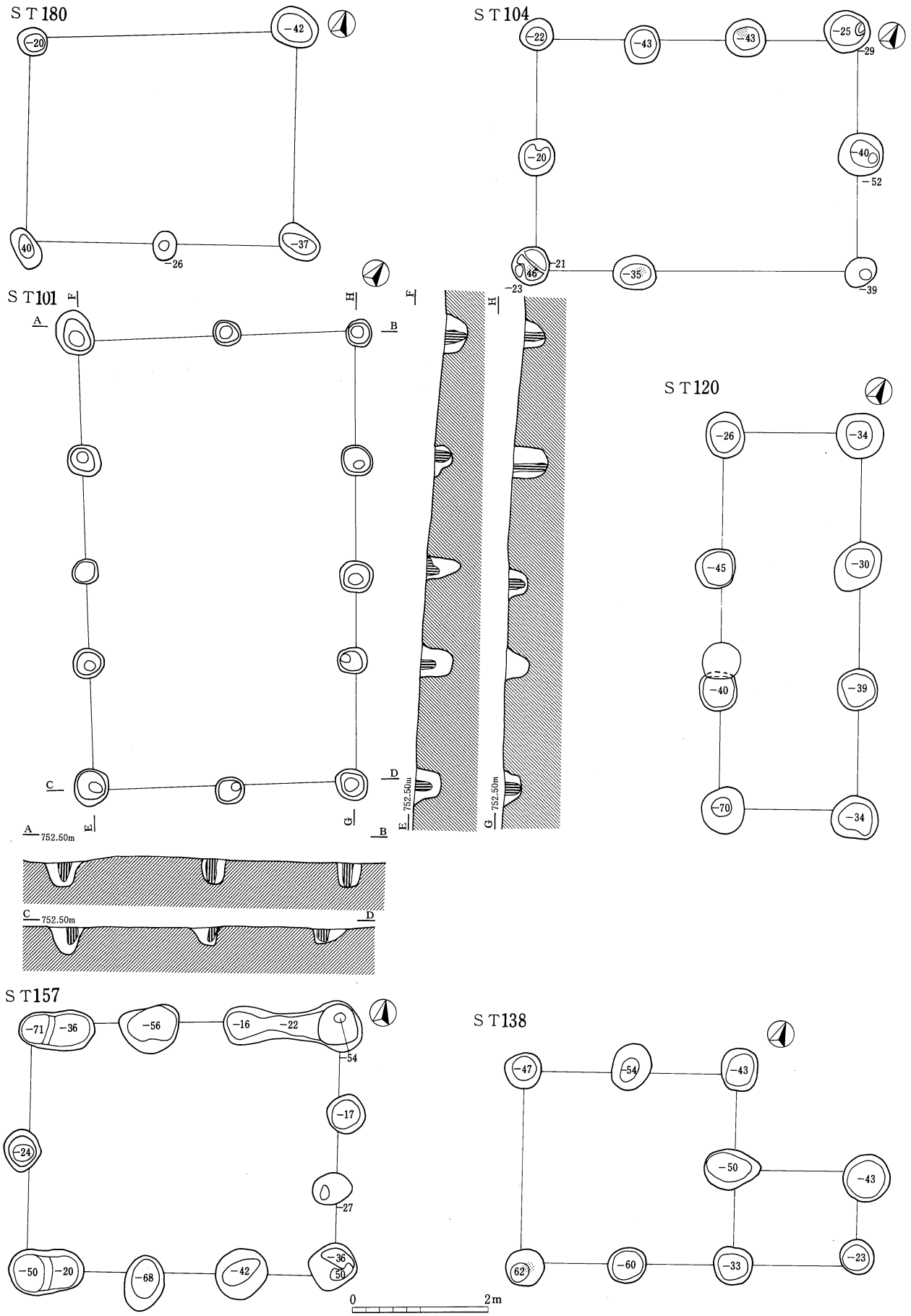
第308図　16・26・38・56・164・171・182・185号堀立柱建物跡



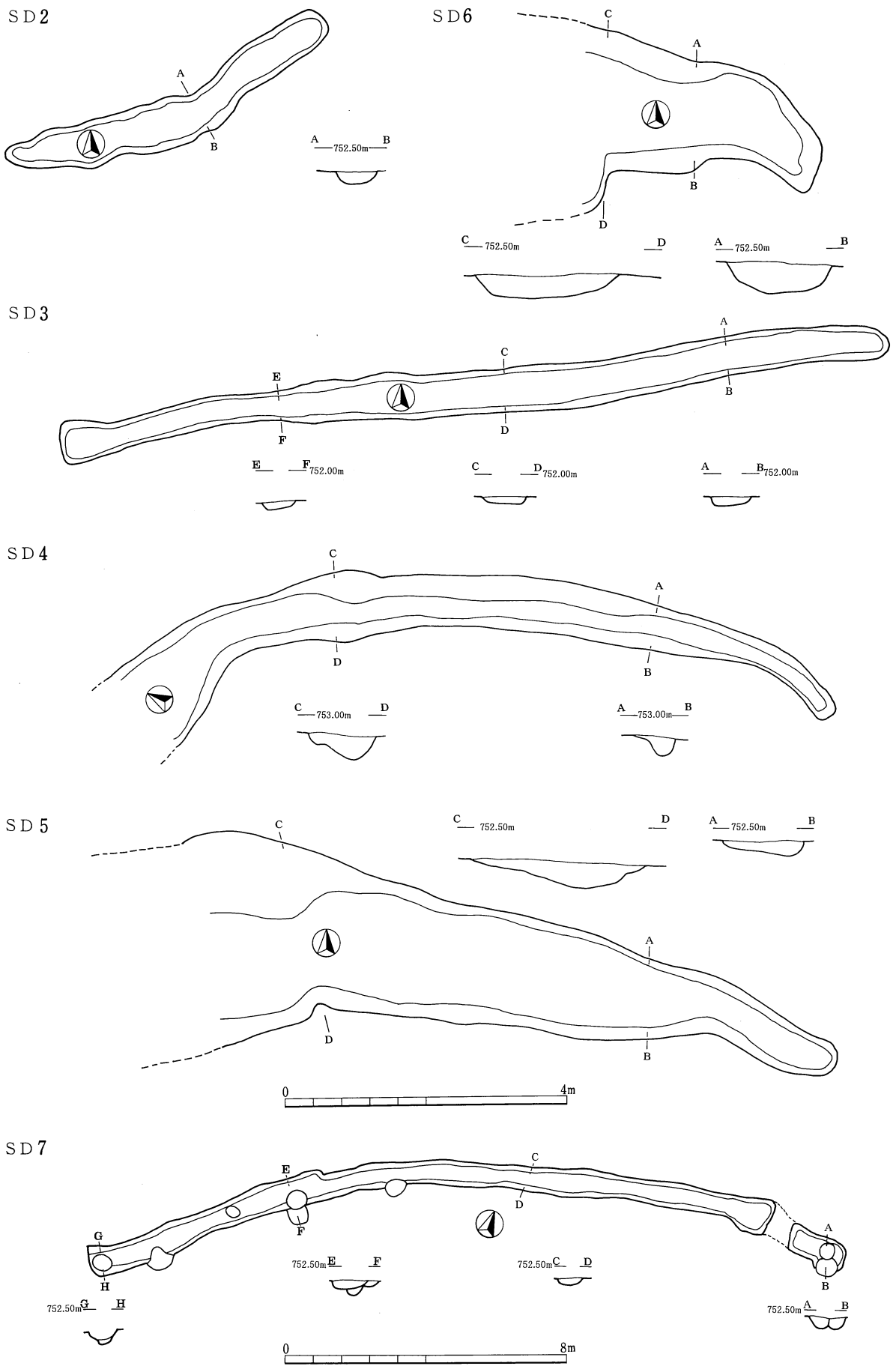
第309図　27・36・50・63・146号掘立柱建物跡



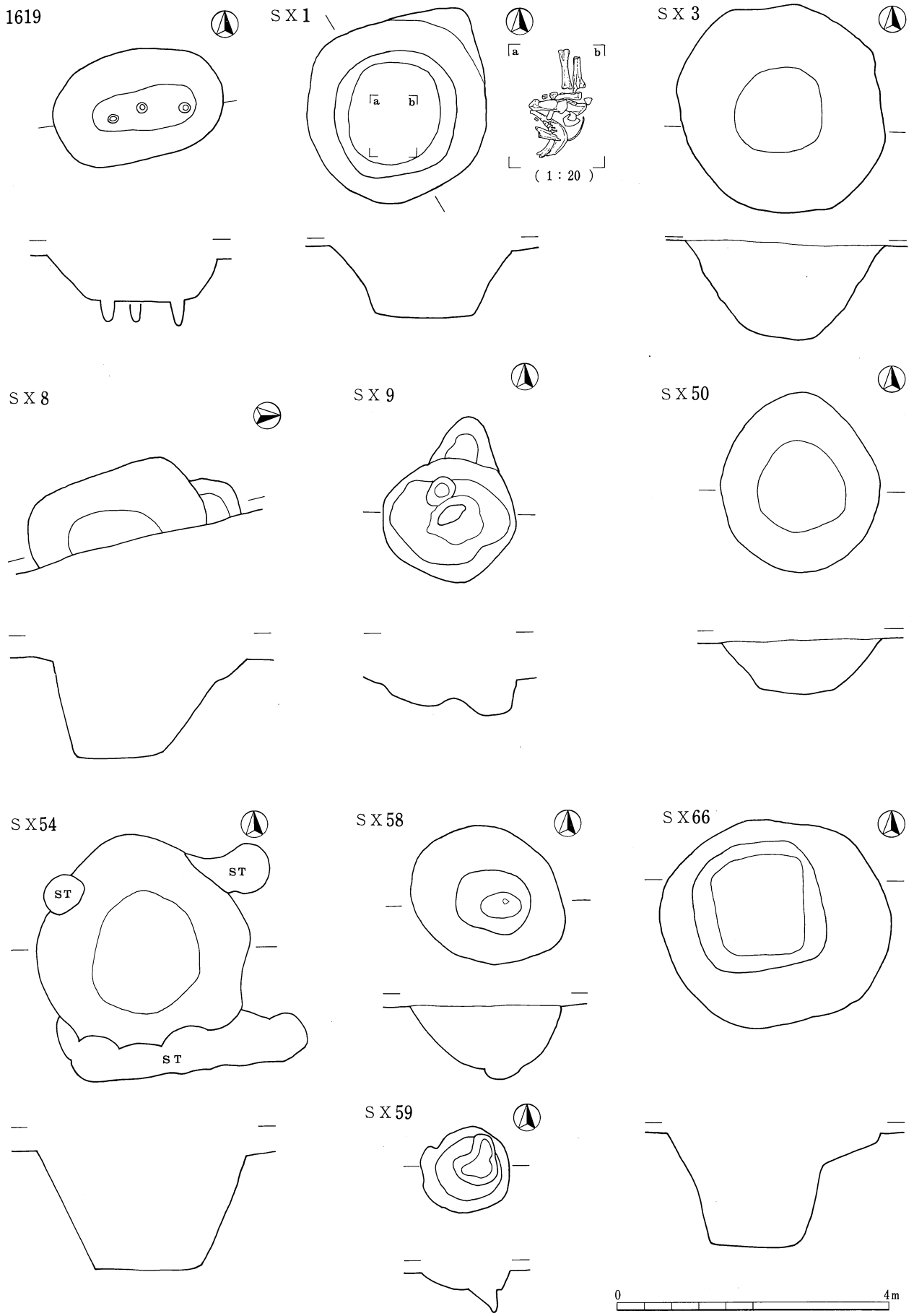
第310図　19・23・37・106・123・183号堀立柱建物跡



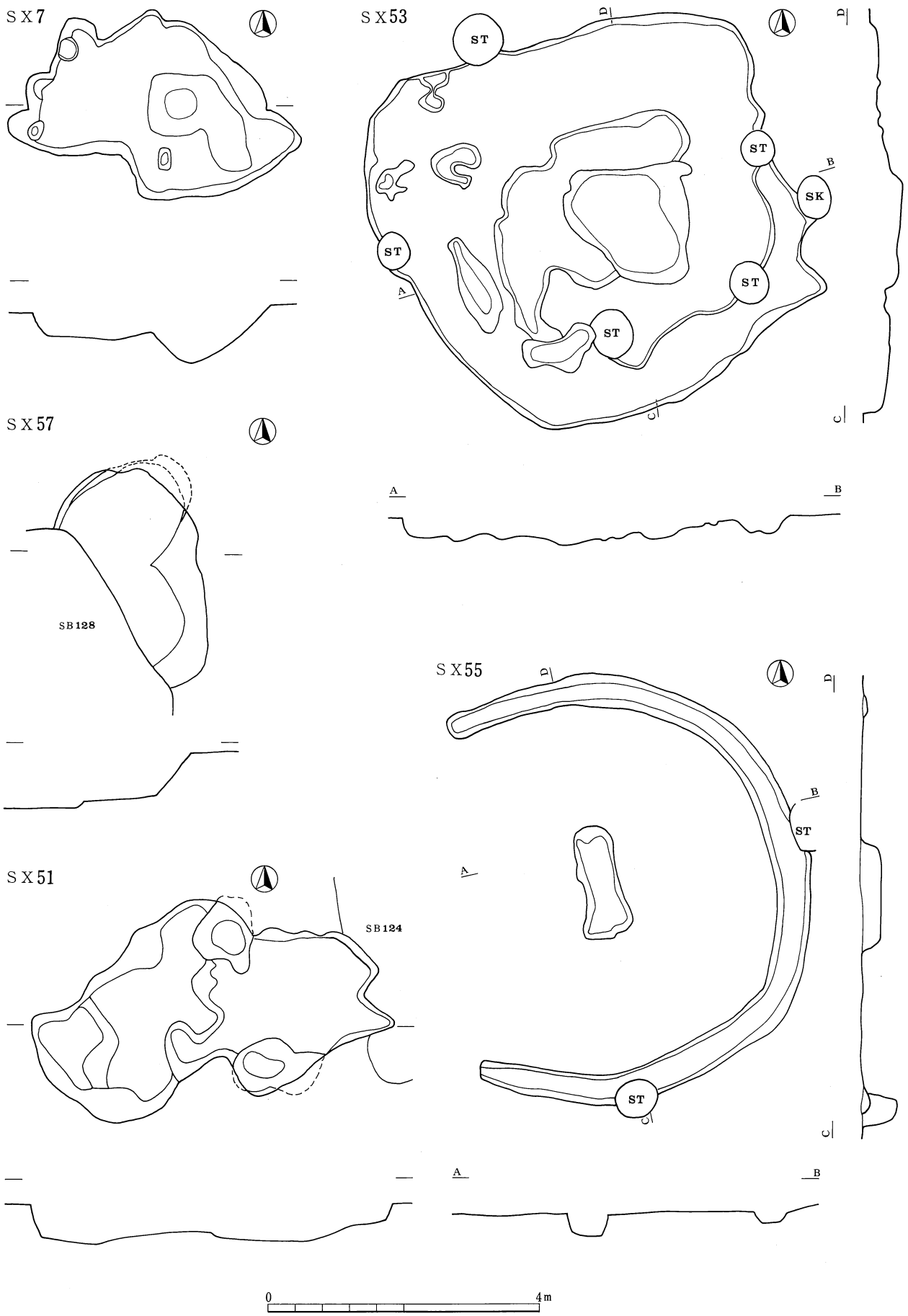
第311図　101・104・120・138・157・180号堀立柱建物跡


SD2
A
B
A 752.50m B
SD6
C
A
B
D
C 752.50m D
A 752.50m B
SD3
A
C
E
B
F
D
E F 752.00m
C D 752.00m
A B 752.00m
SD4
C
A
D
B
C 753.00m D
A 753.00m B
SD5
C
C 752.50m D
A 752.50m B
A
D
B
0 4m
SD7
E
C
D
G
F
A
H
B
752.50m E F
752.50m C D
752.50m G H
752.50m A B
0 8m

第312図　２～７号溝跡

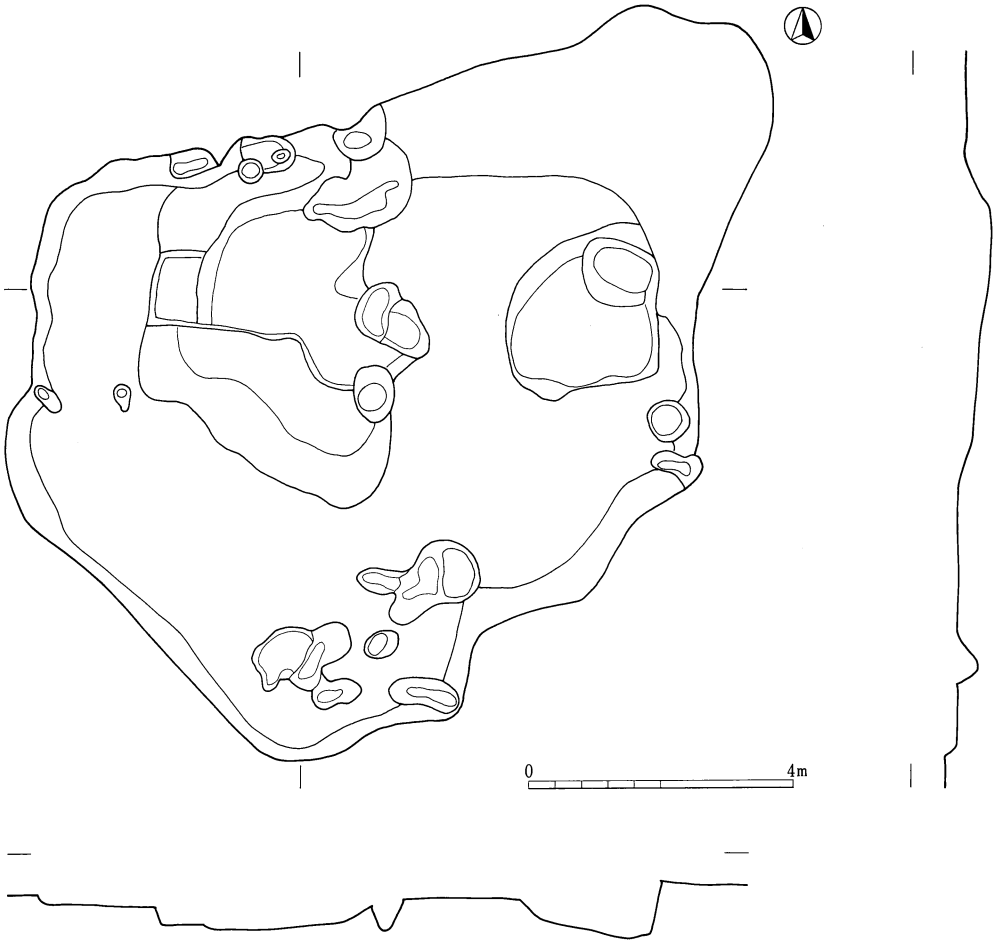


第313図　土坑・性格不明遺構（ＳＸ）

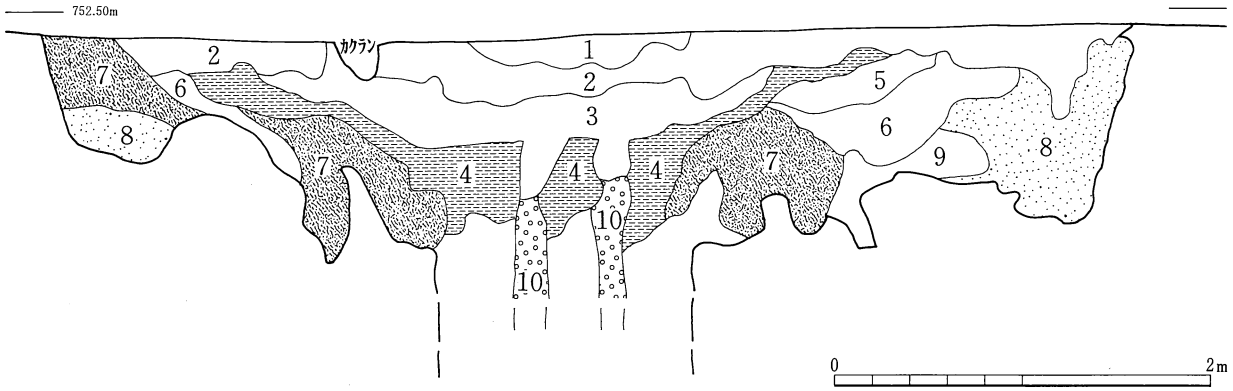


第314図　性格不明遺構（ＳＸ）

ＳＸ11



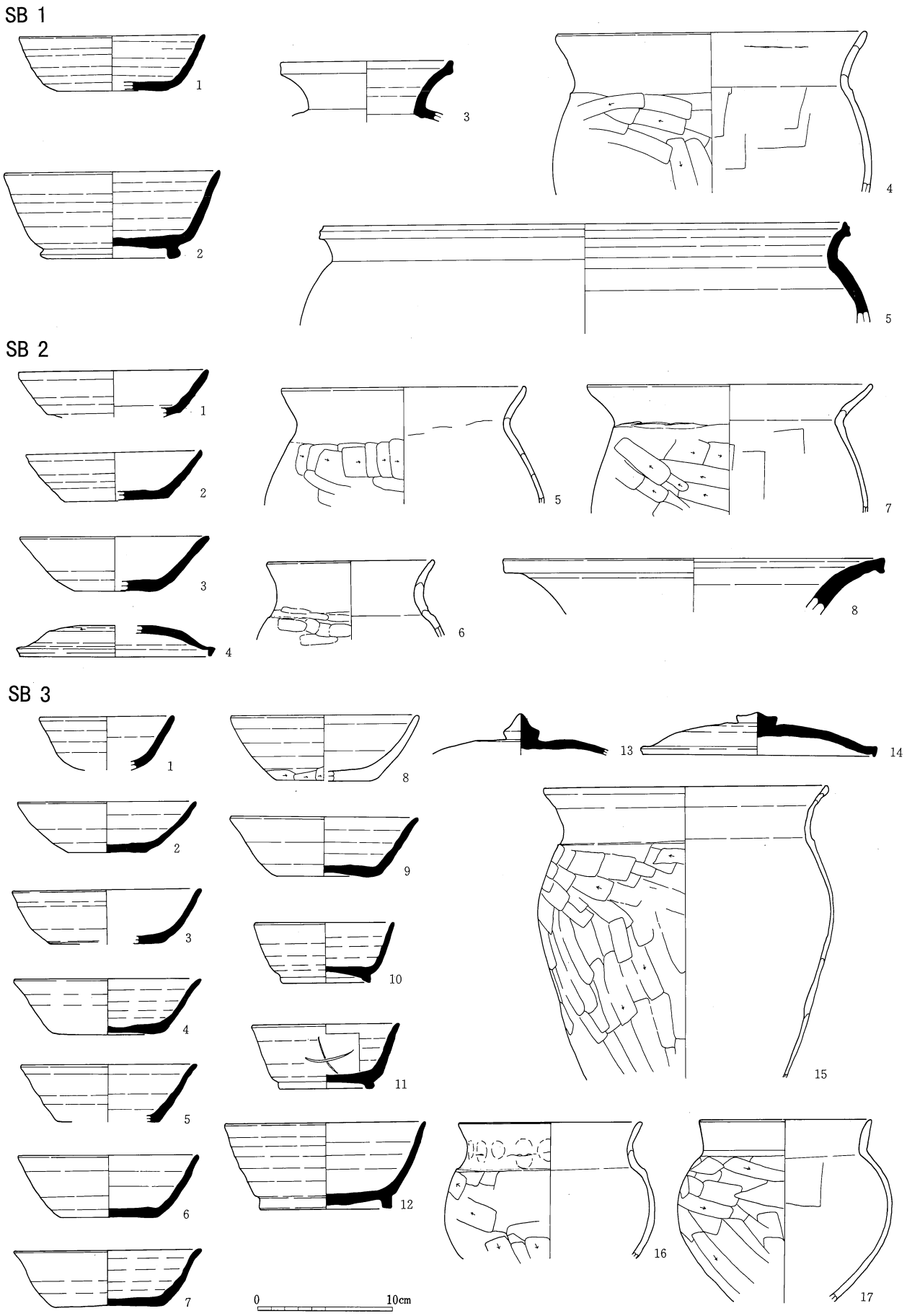
ＳＸ56（粘土採掘坑）



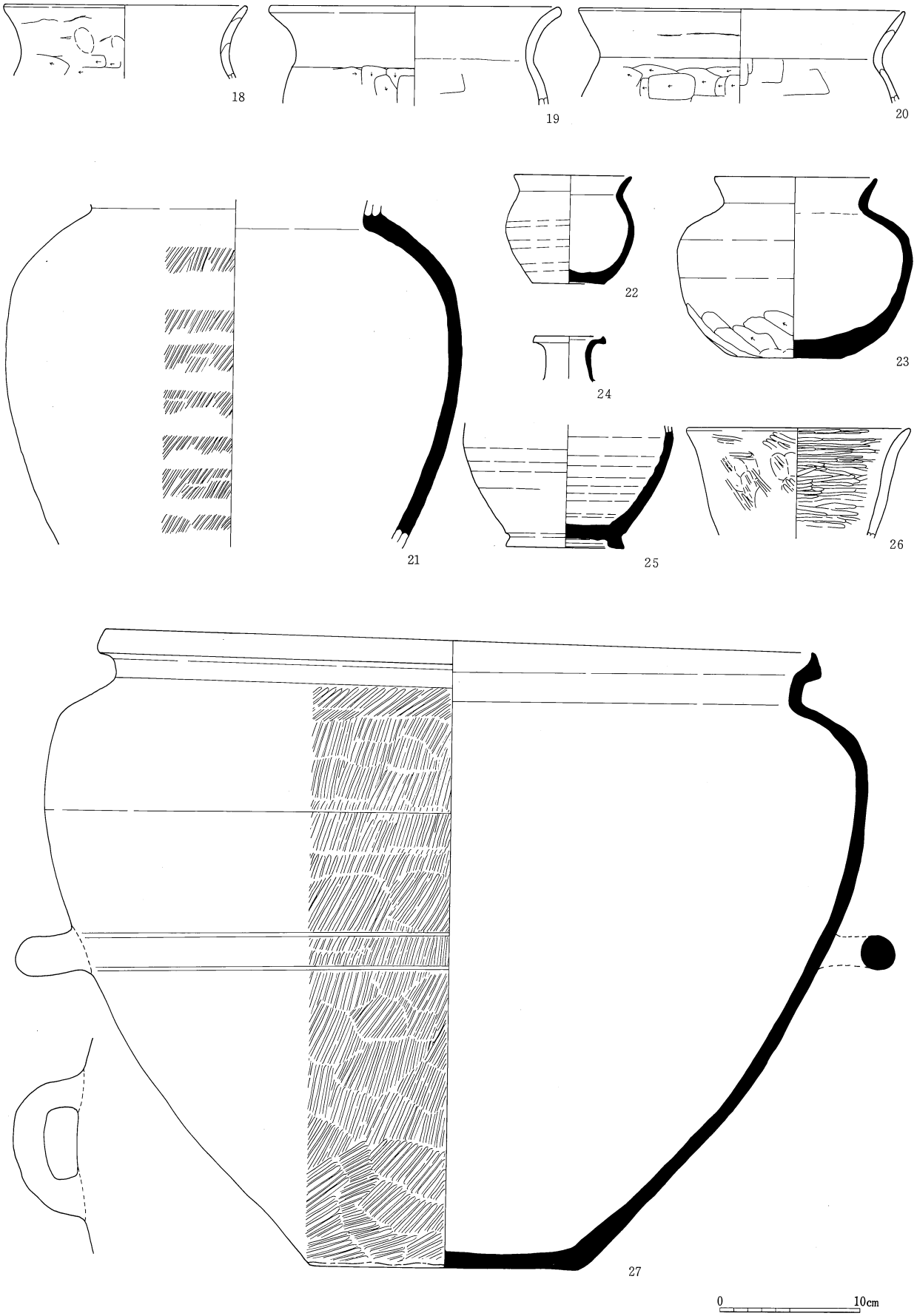
粘土採掘坑

1、褐色　：浅間第１火砕流の漸移層的な層
2、黄褐色　：砂質層
3、暗黄褐色：きめが細かく粘性が弱い。パミスを含む。
4、明黄色　：白色パミスを多く混入し、砂質で粘性が少ない。
5、灰白色　：きめが細かく、粘性・しまり共に強い。φ1mmのパミスを多量に含む。
6、明灰白色：きめが細かく、粘性が弱い。下部は赤化している。
7、灰白色　：きめが細かく、粘性が弱い。パミスを多く含む。カマドの構築粘土に似る。
8、赤褐色　：7層と色調は違うが構成は同じ。カマド構築粘土にきわめて近い。
9、明褐色　：砂質で粘性はない。微小のパミスを多く含む。
10、火砕流のエアーが抜けた痕跡と考えら得る。

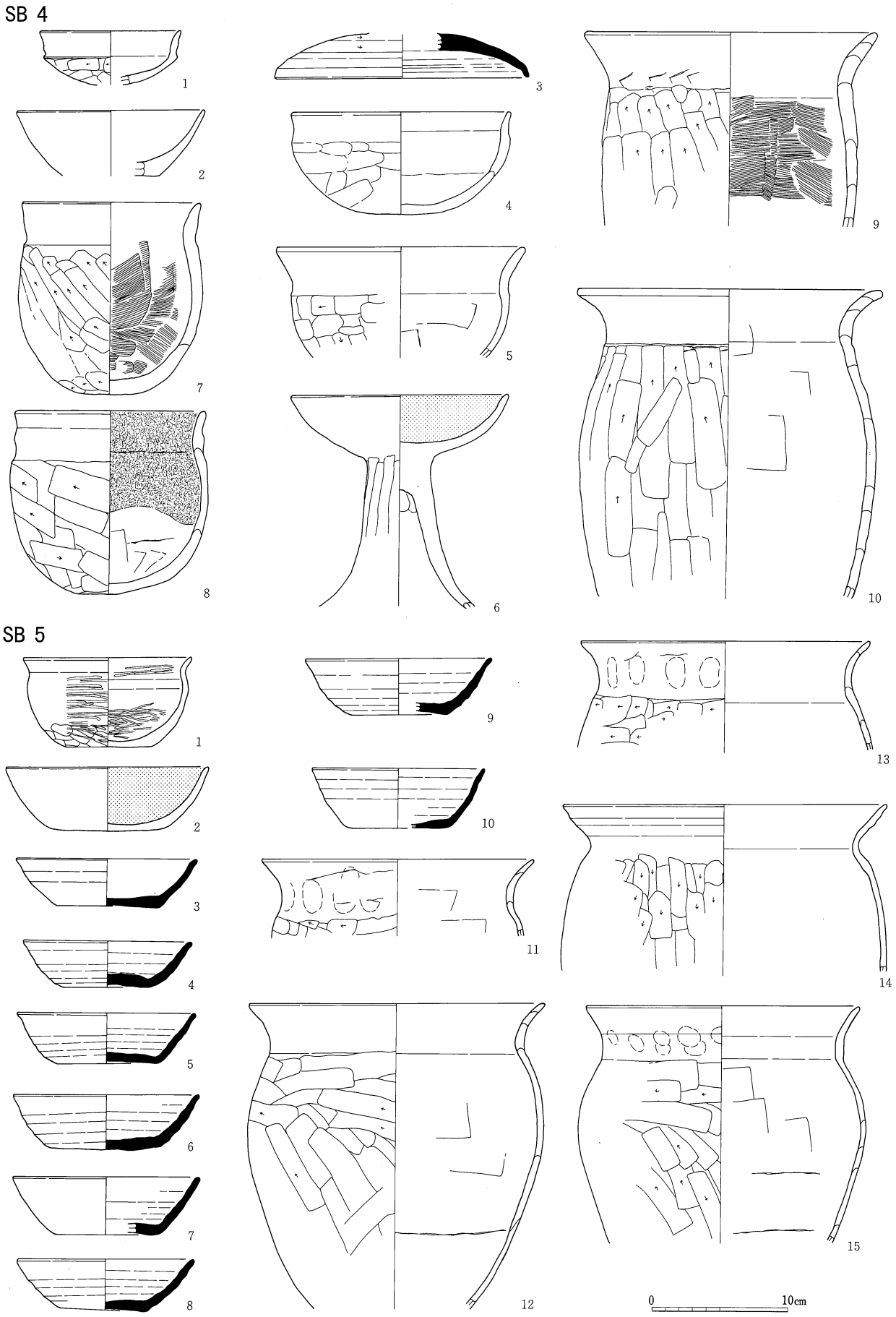
第315図　11・56号性格不明遺構（ＳＸ）



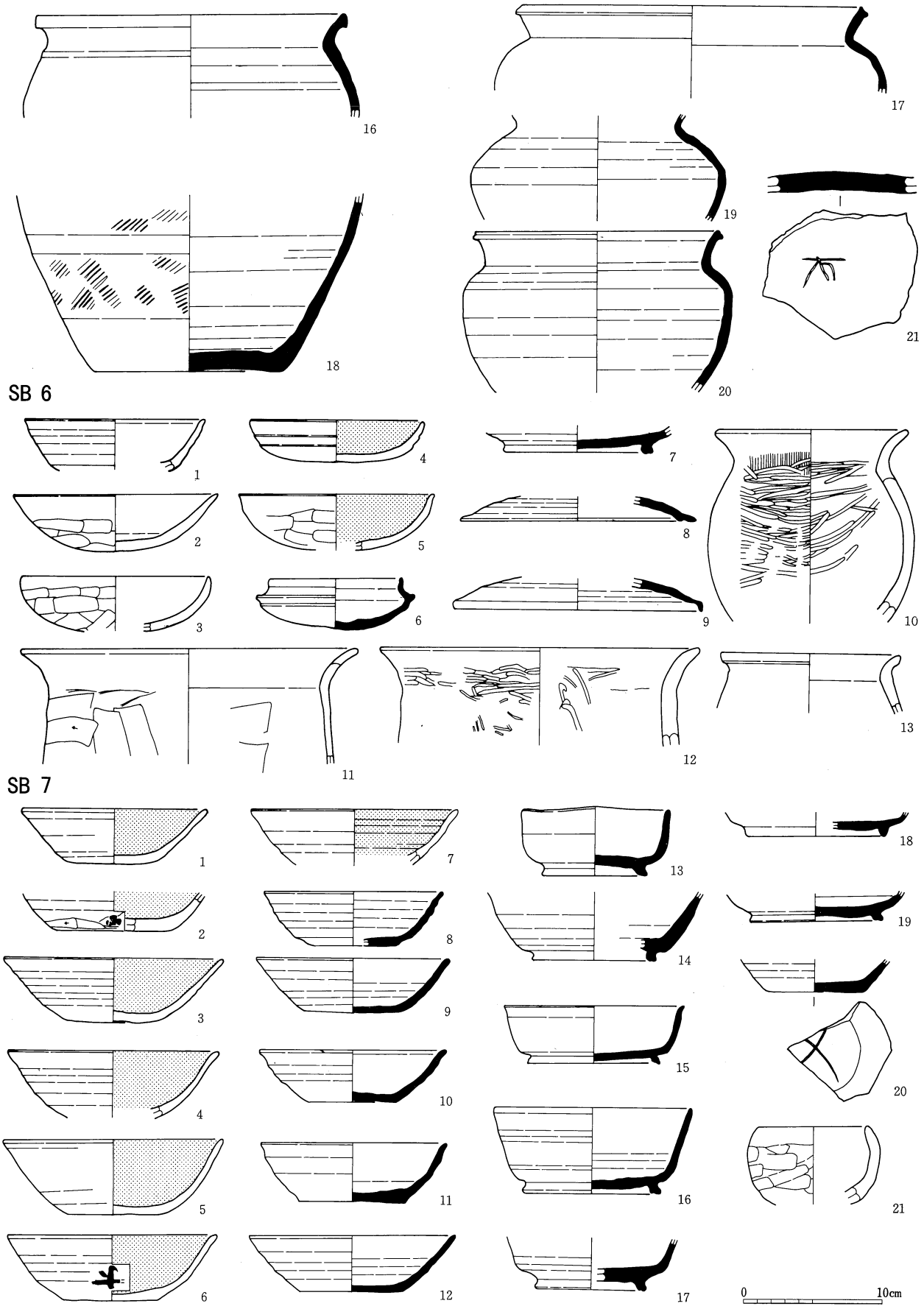
第316図　１・２・３号竪穴住居跡 出土遺物



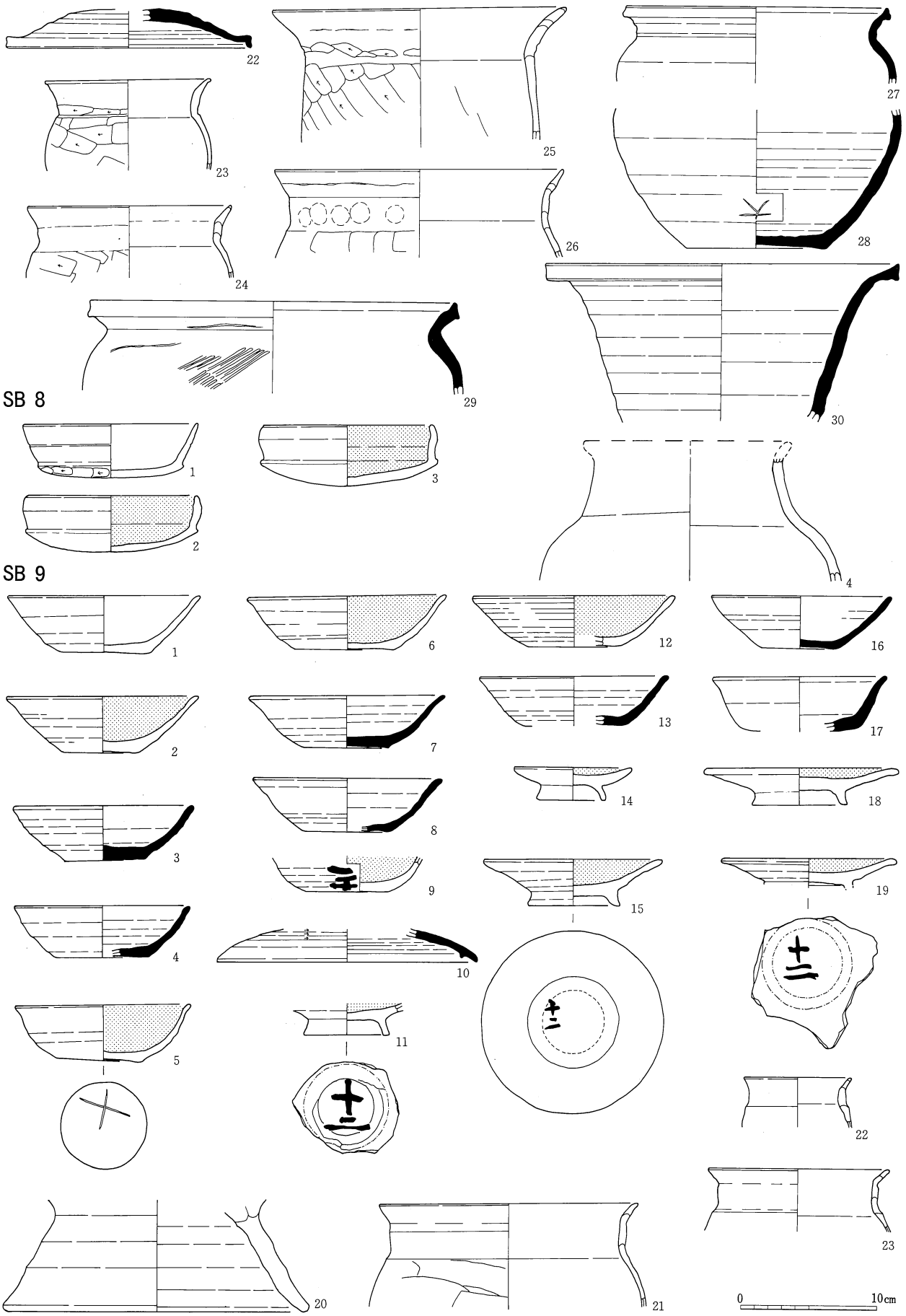
第317図　3号竪穴住居跡 出土遺物



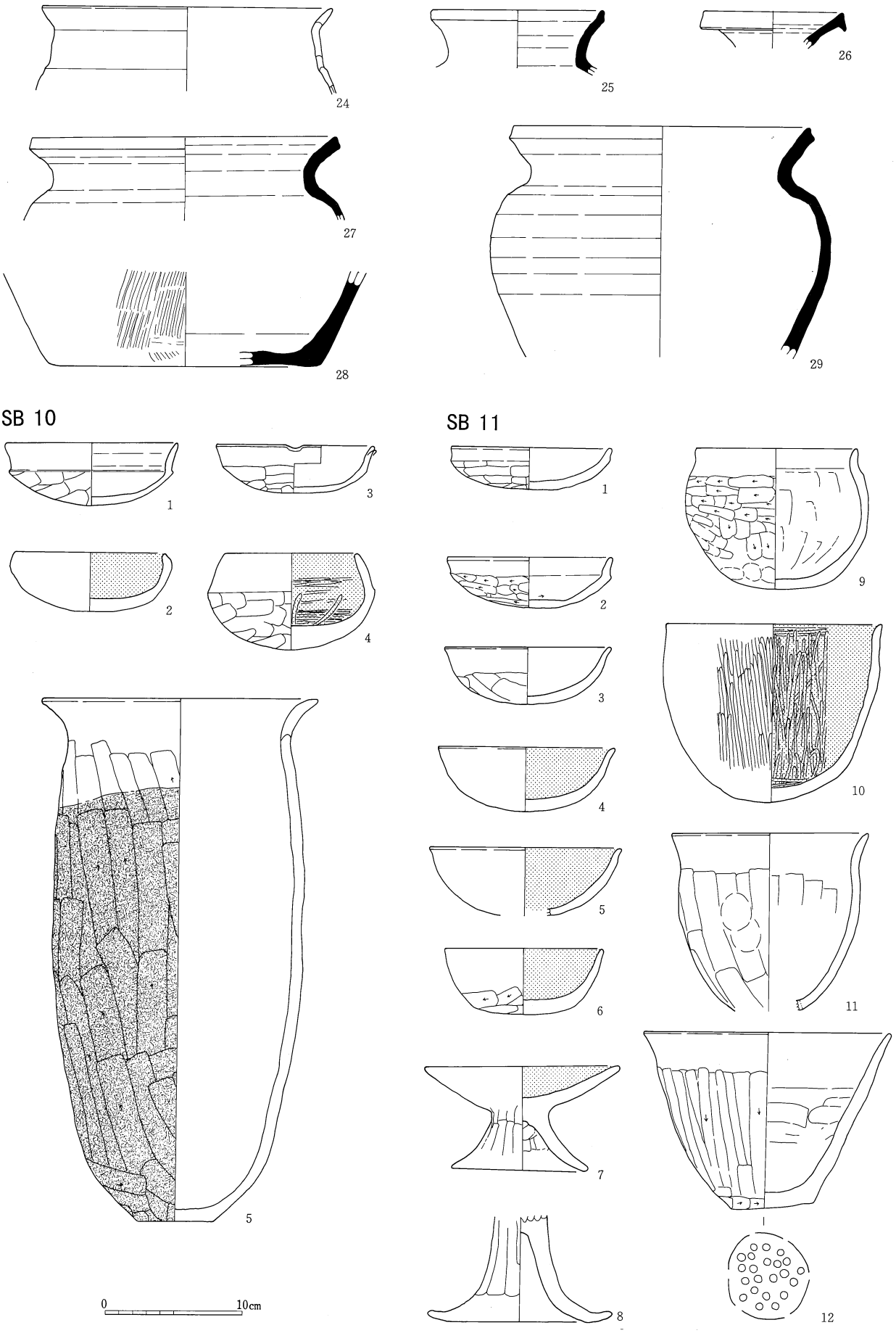
第318図　４・５号竪穴住居跡 出土遺物



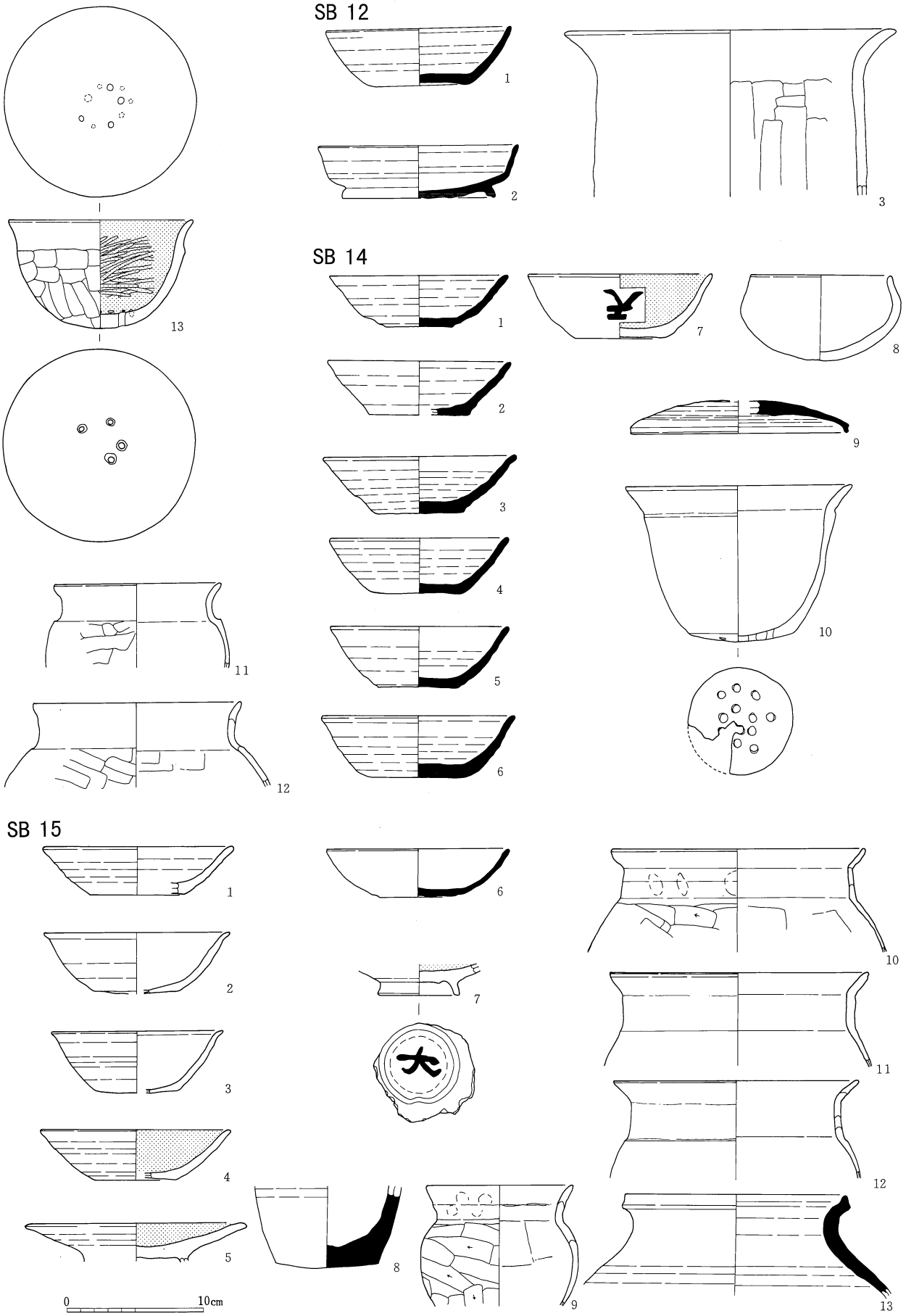
第319図　５・６・７号竪穴住居跡 出土遺物



第320図　７・８・９号竪穴住居跡 出土遺物

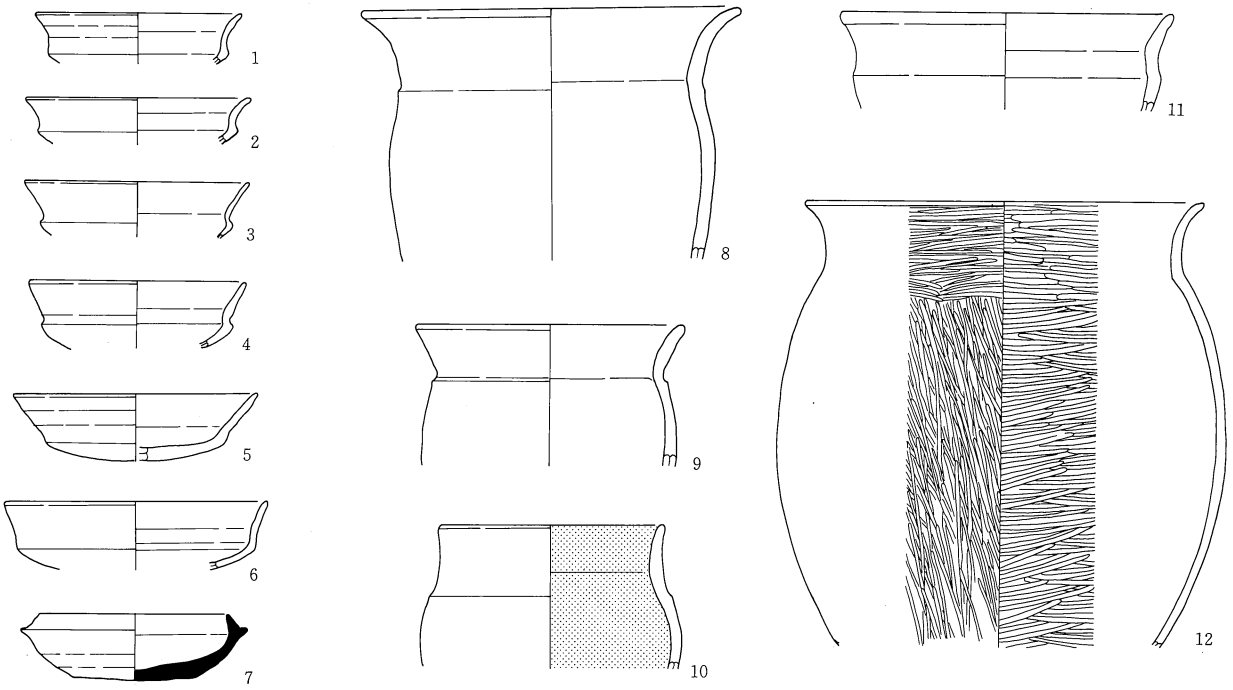


第321図　9・10・11号竪穴住居跡 出土遺物

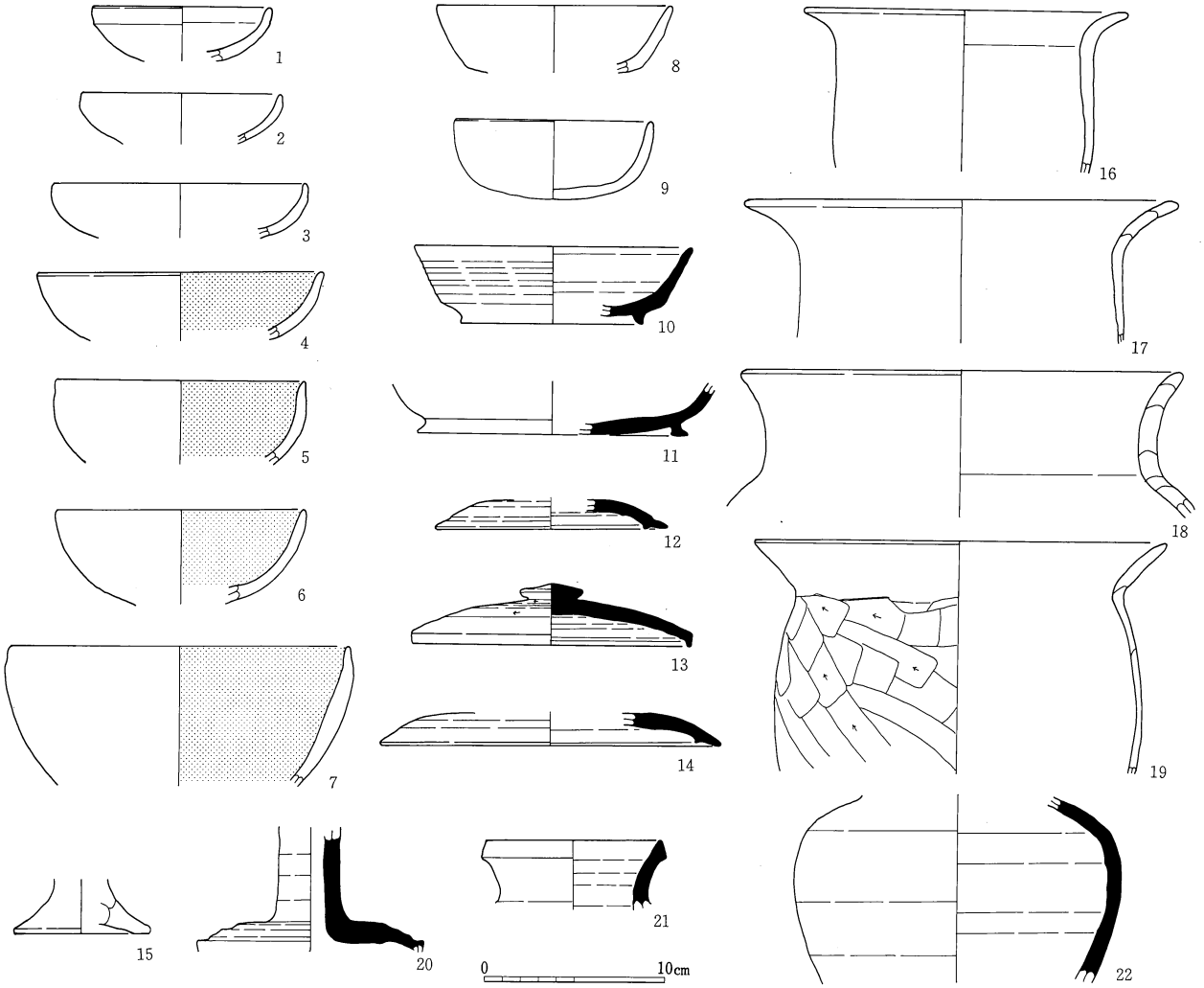


第322図　11・12・14・15号竪穴住居跡 出土遺物

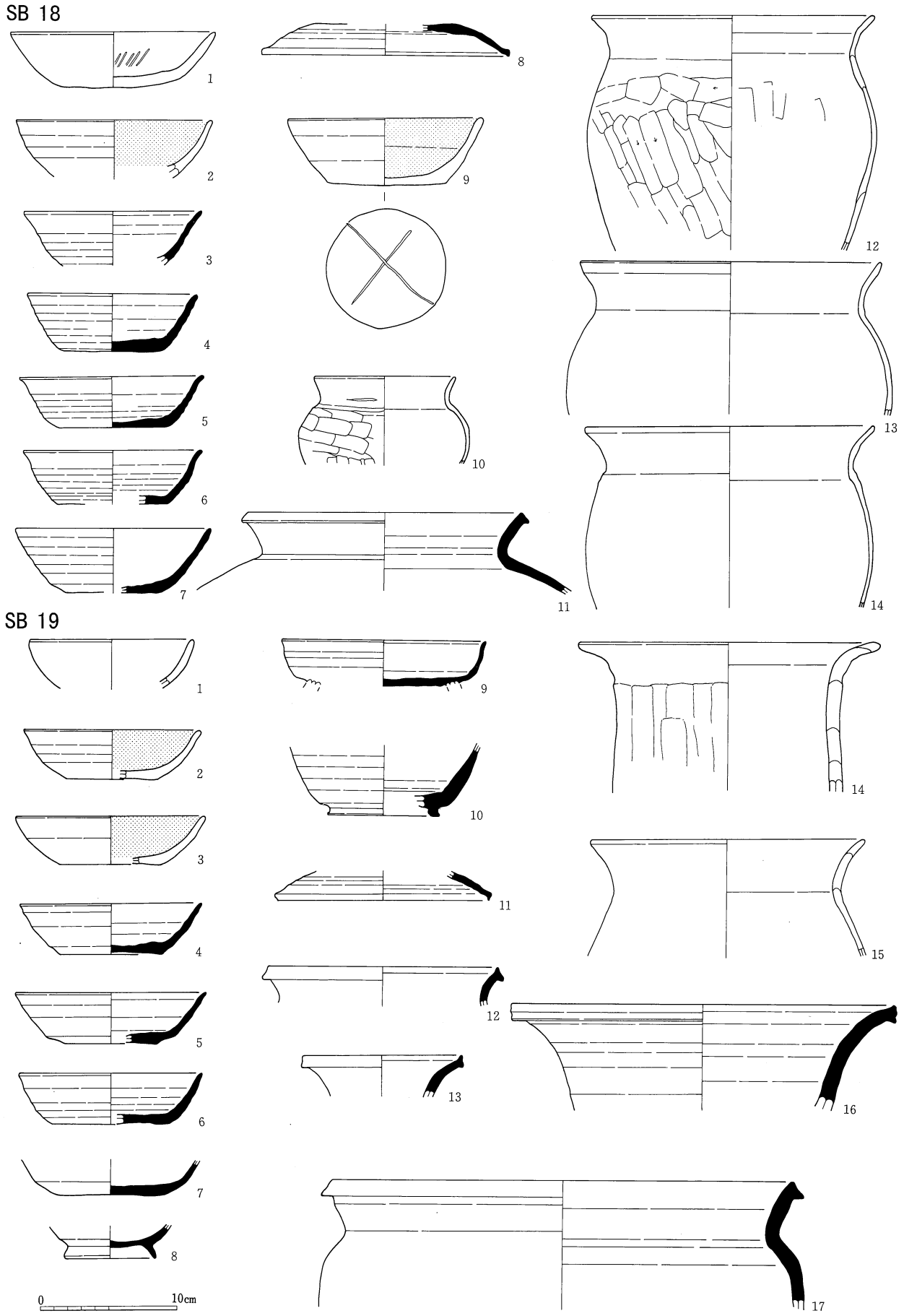
SB 16



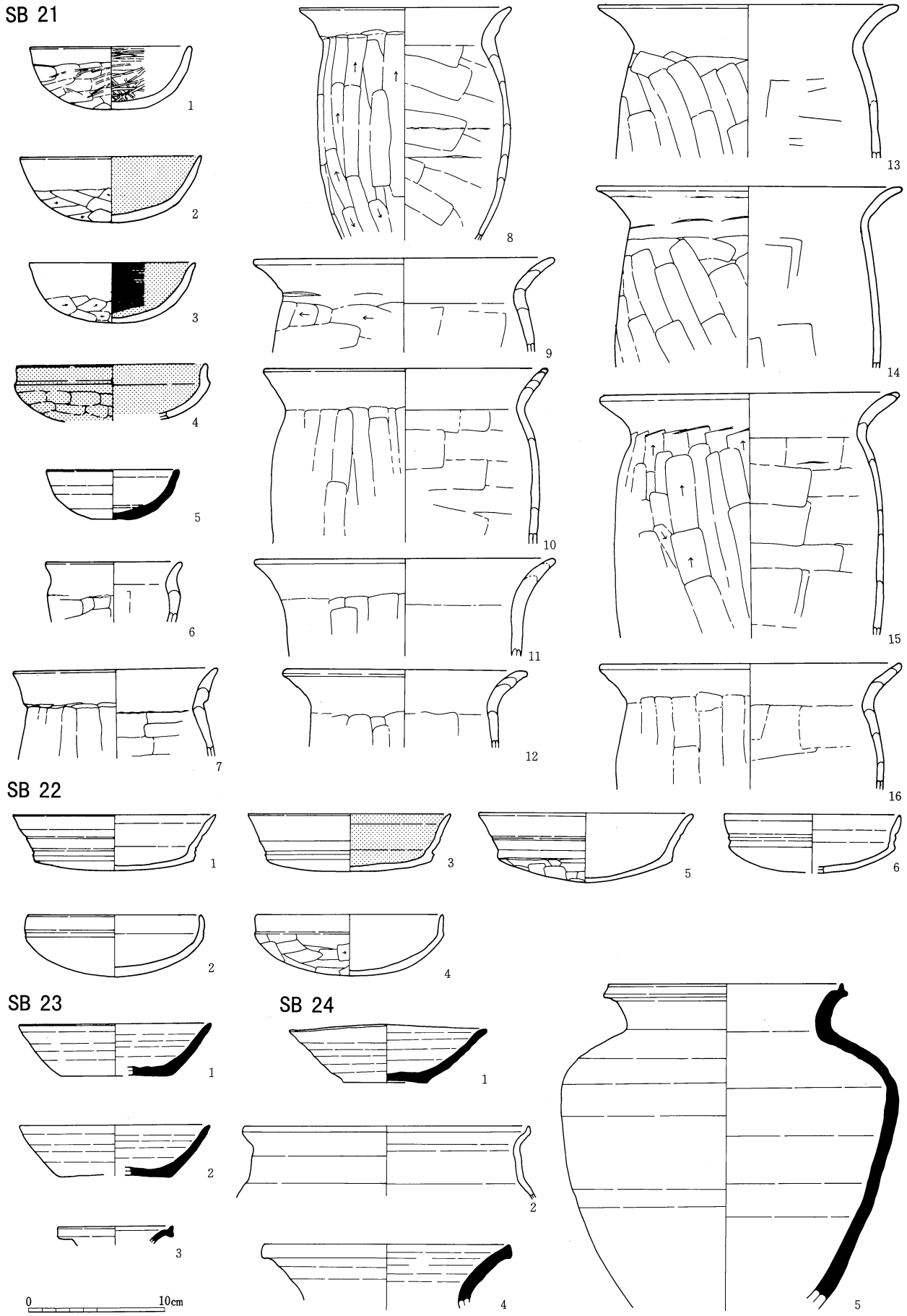
SB 17



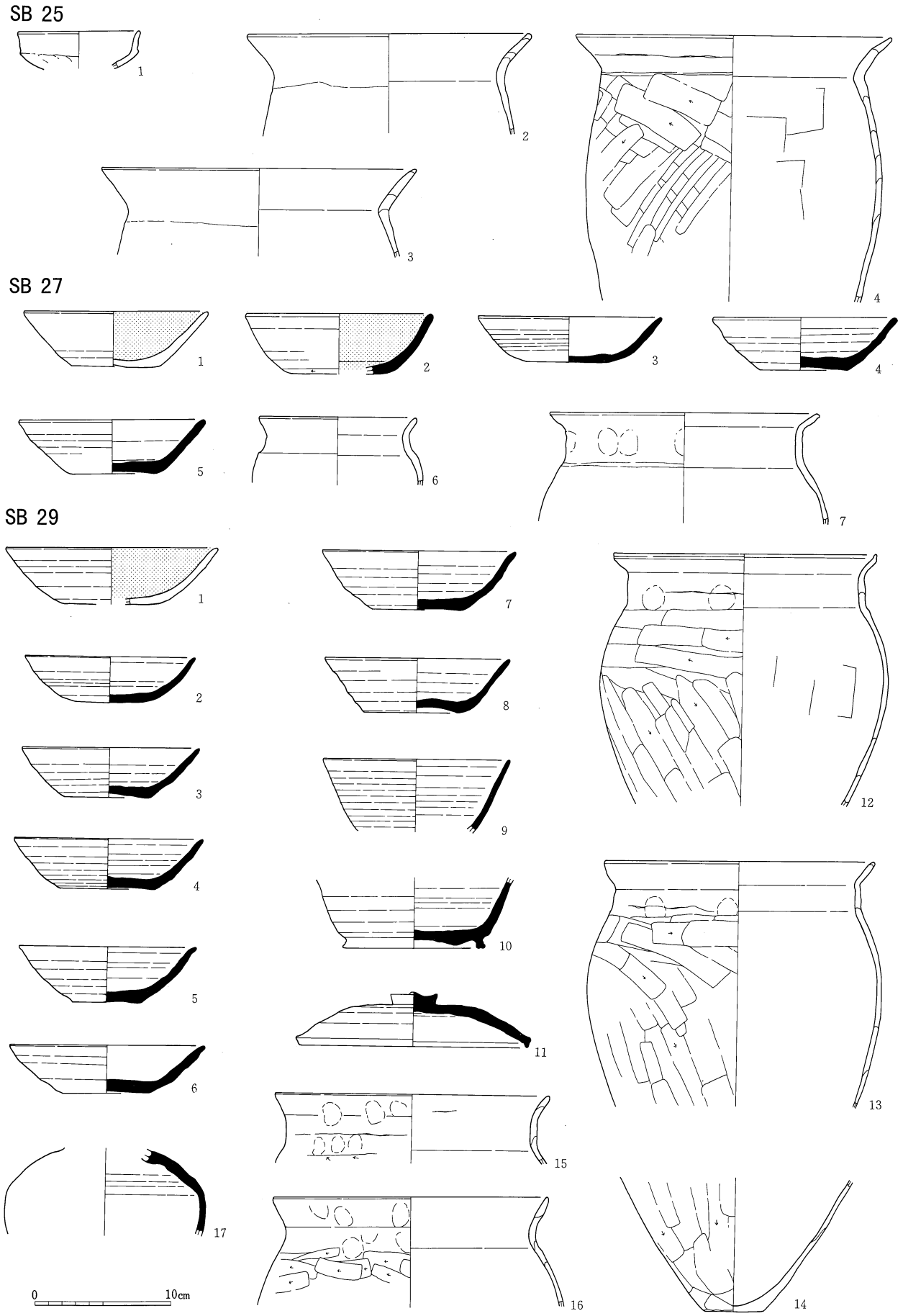
第323図　16・17号竪穴住居跡 出土遺物



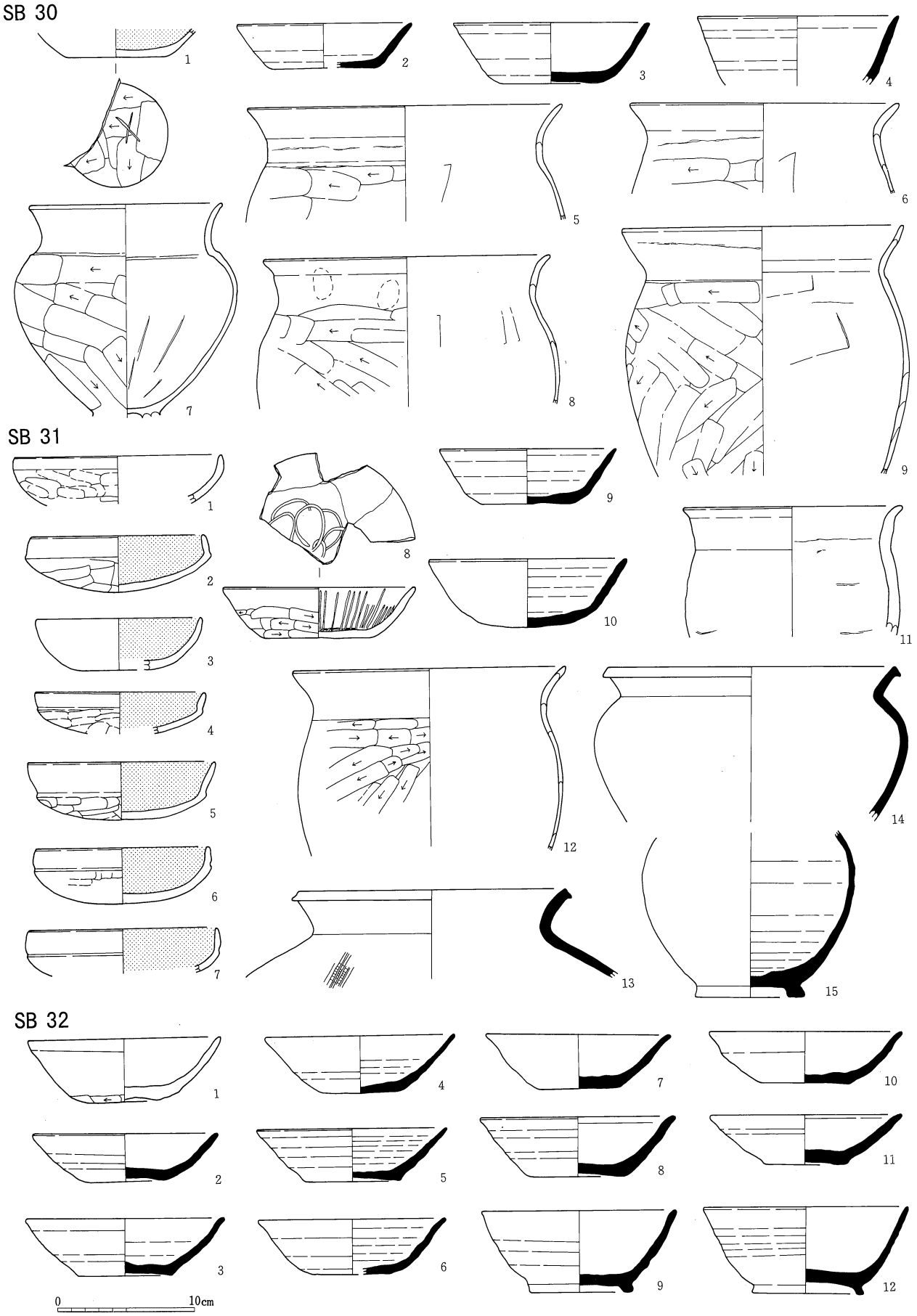
第324図　18・19号竪穴住居跡 出土遺物



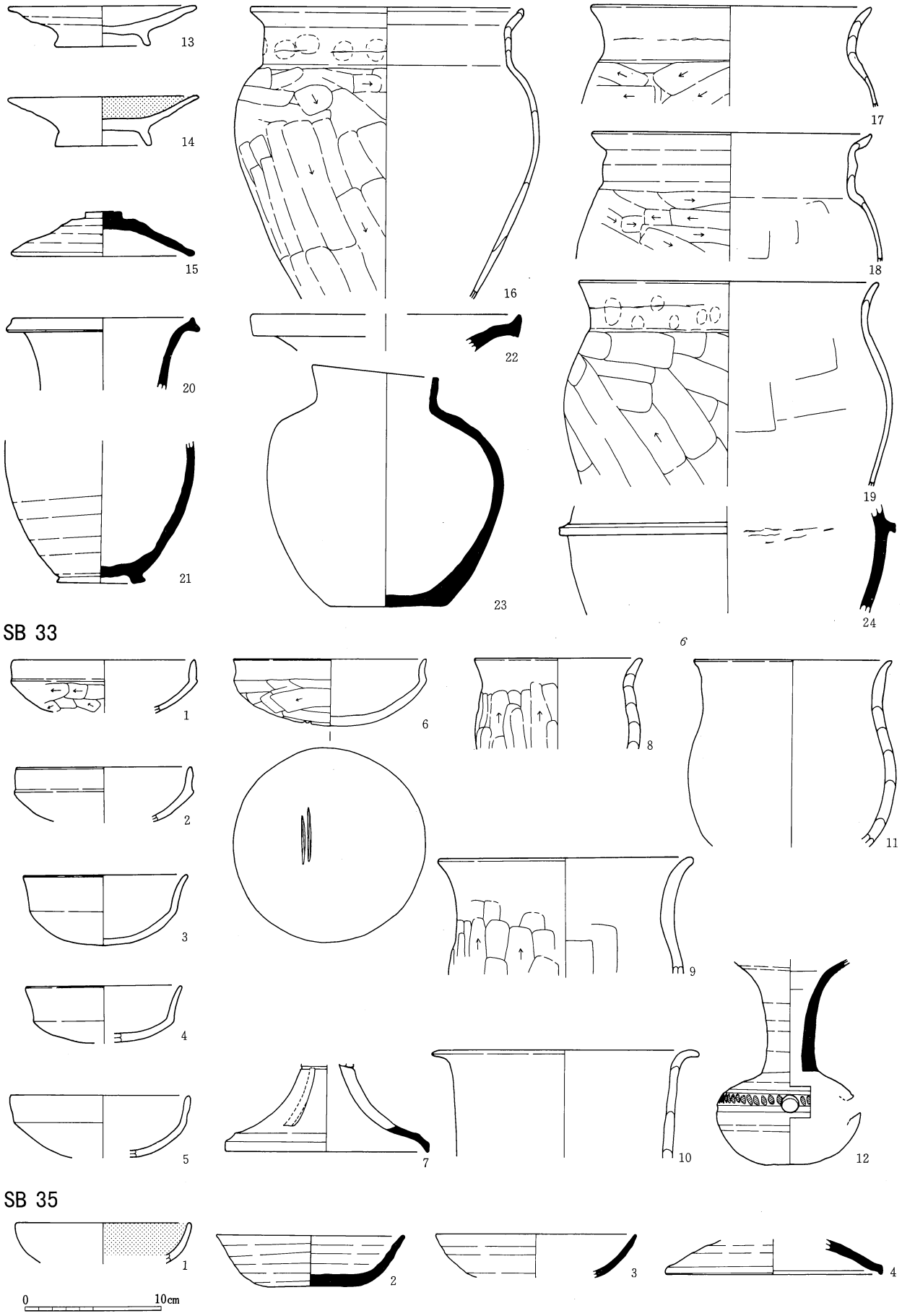
第325図　21～24号竪穴住居跡 出土遺物



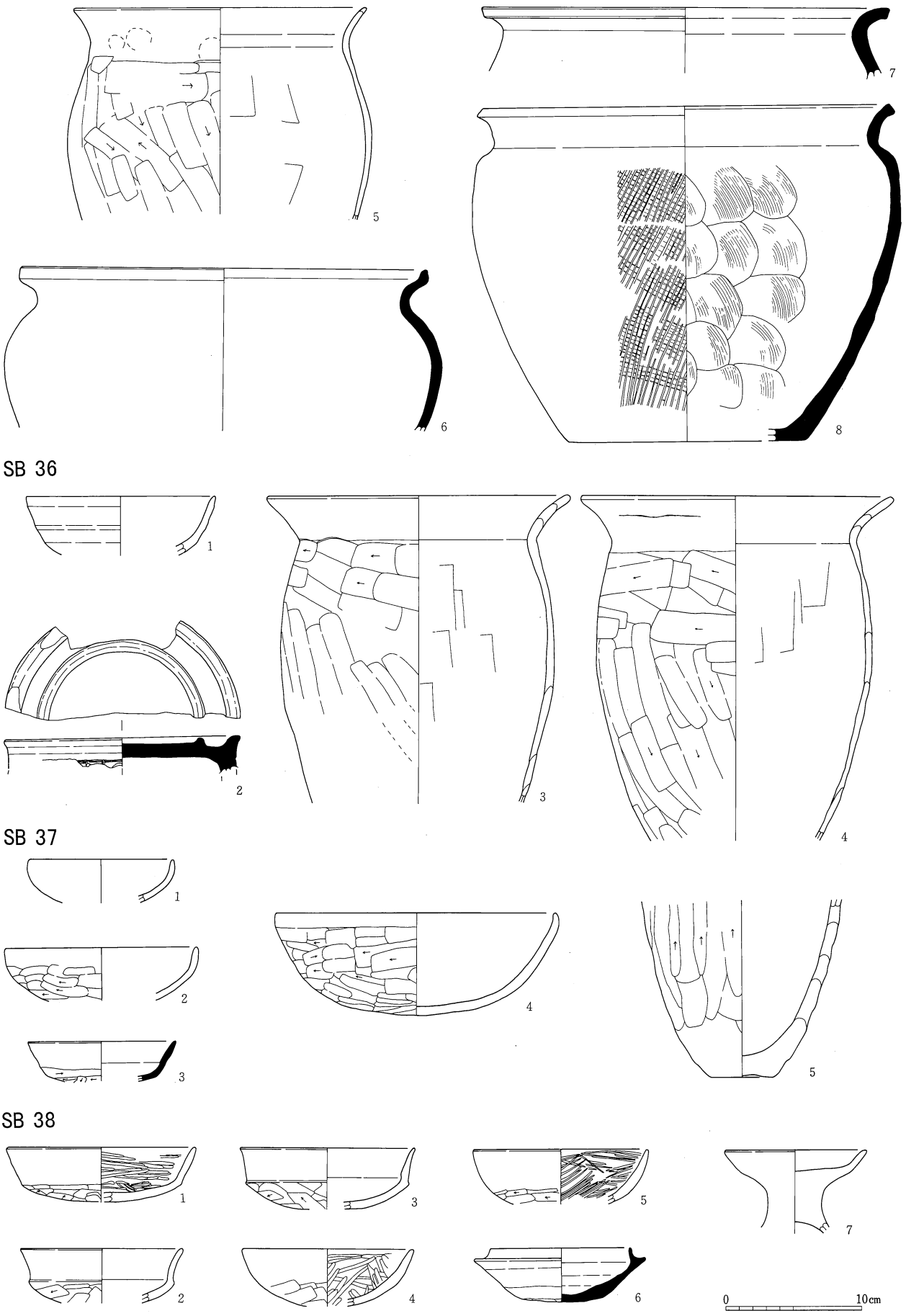
第326図　25・27・29号竪穴住居跡 出土遺物



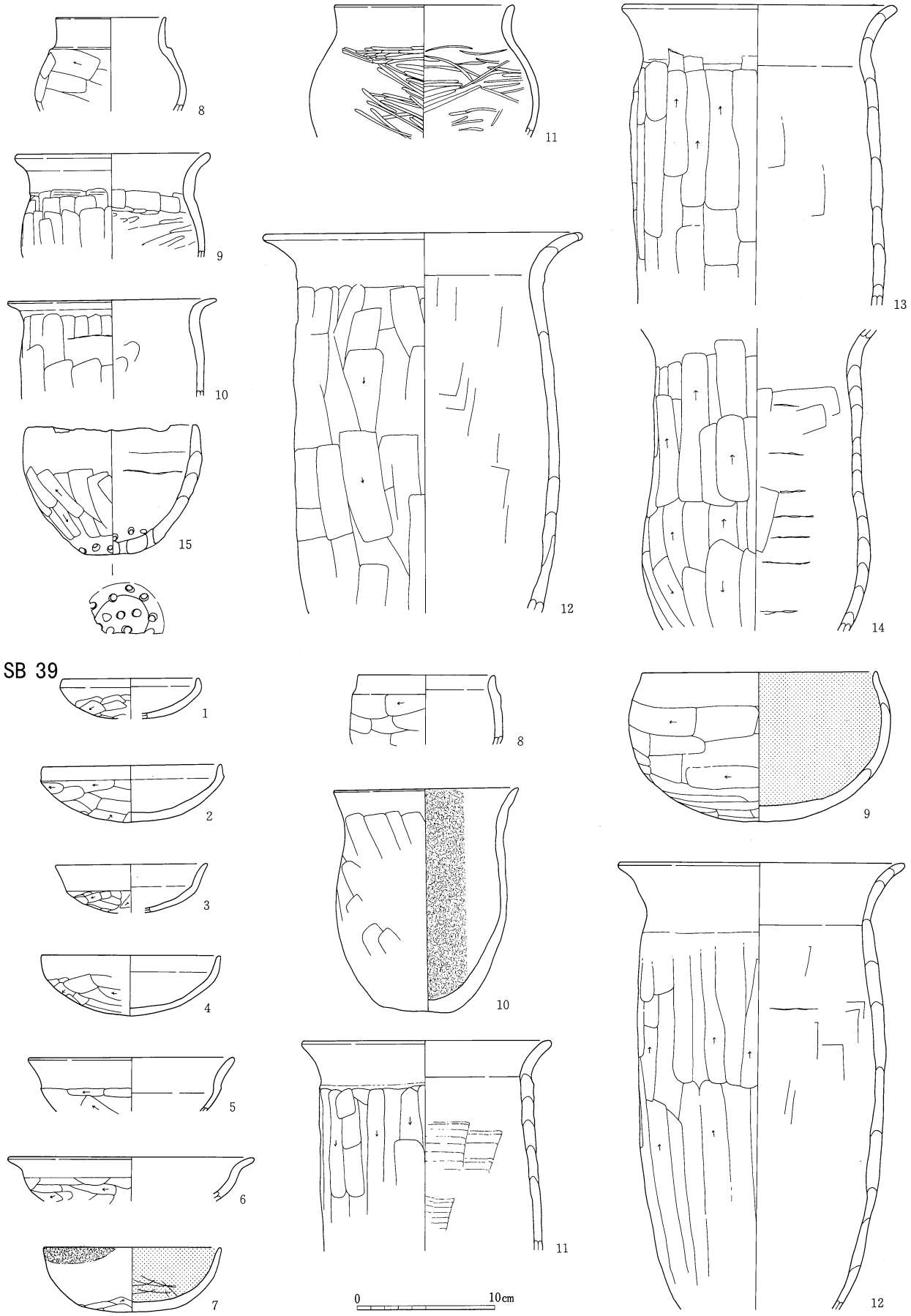
第327図　30・31・32号竪穴住居跡 出土遺物



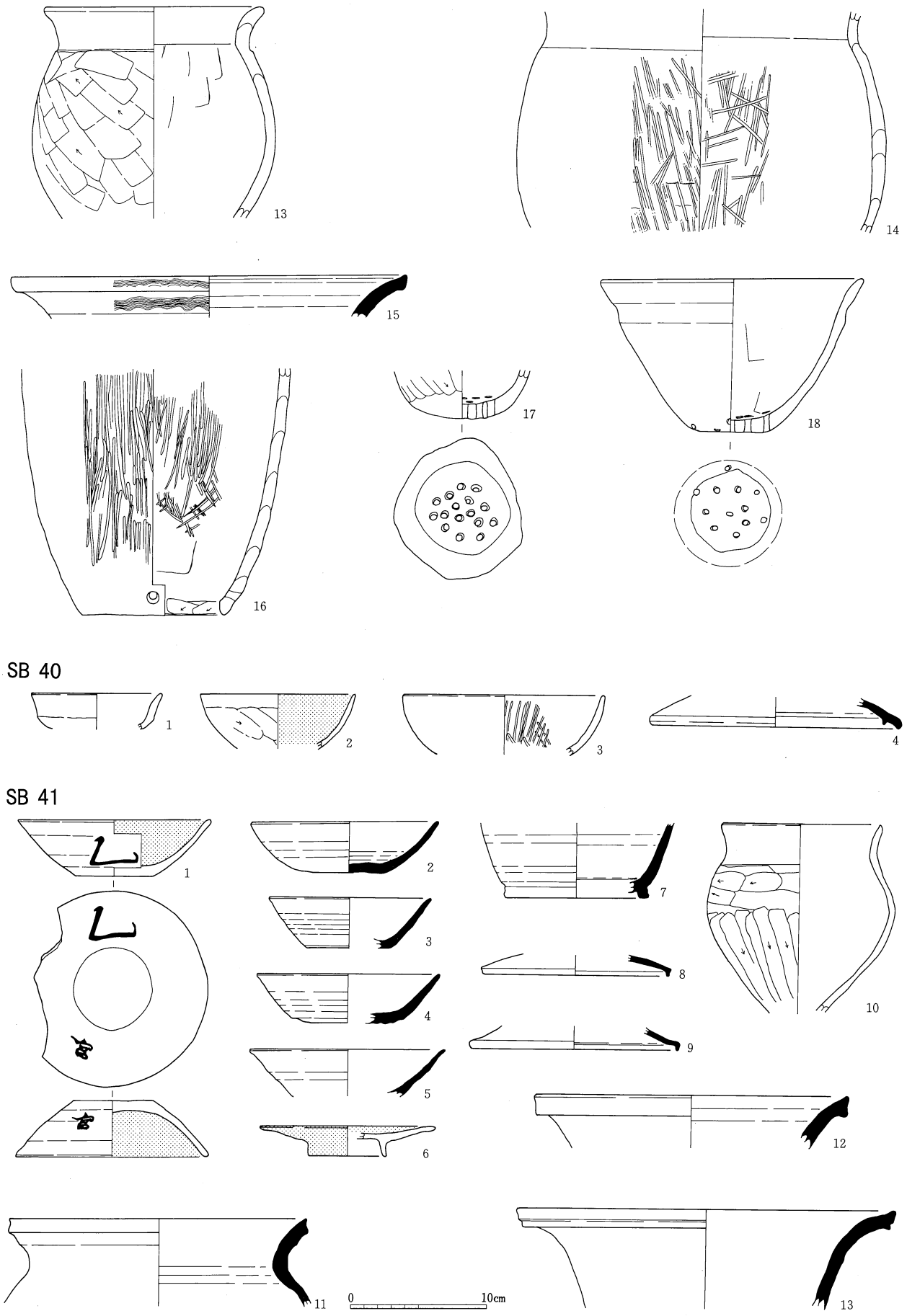
第328図　32・33・35号竪穴住居跡 出土遺物



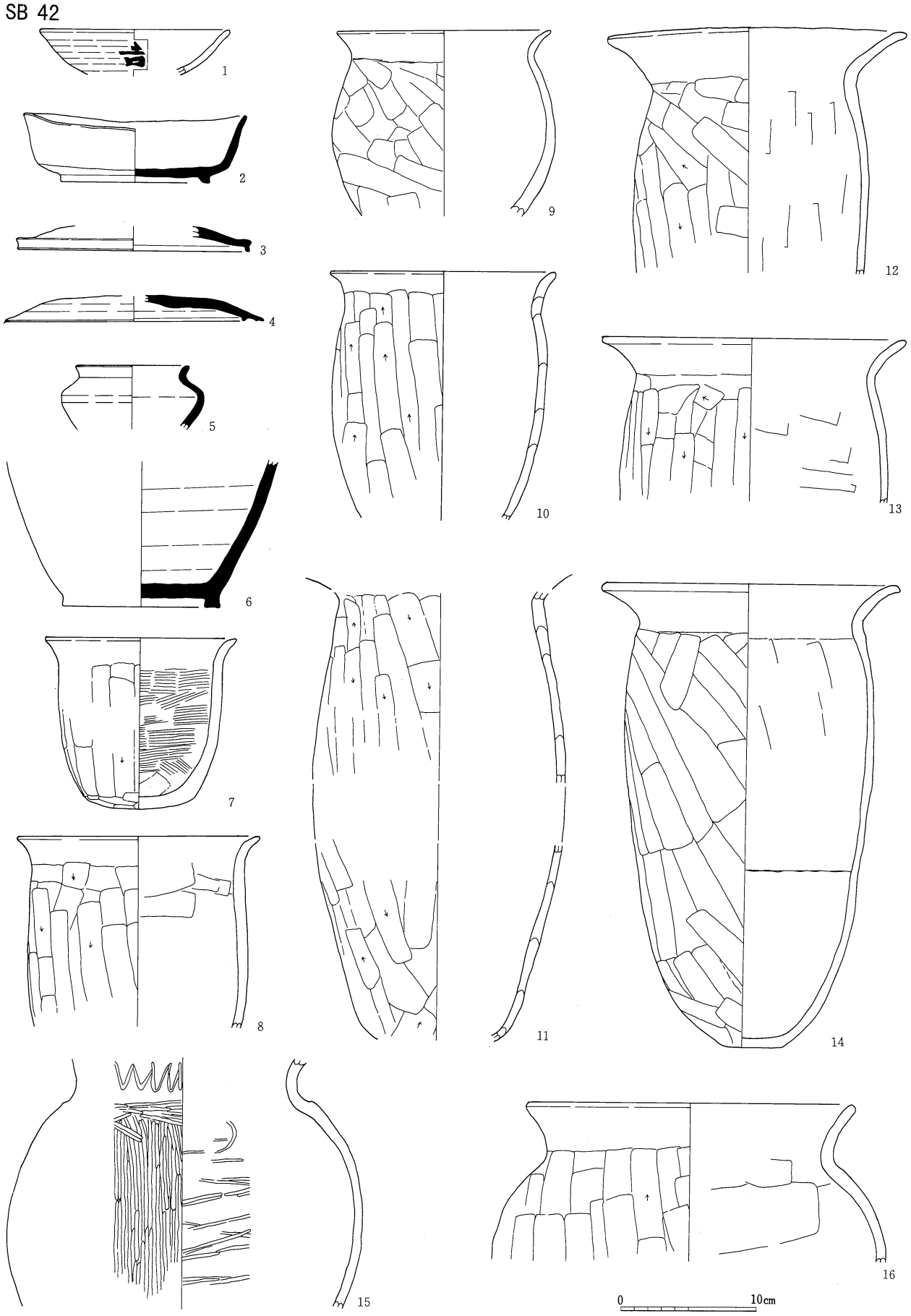
第 329 図　35～38号竪穴住居跡 出土遺物



第330図　38・39号竪穴住居跡 出土遺物

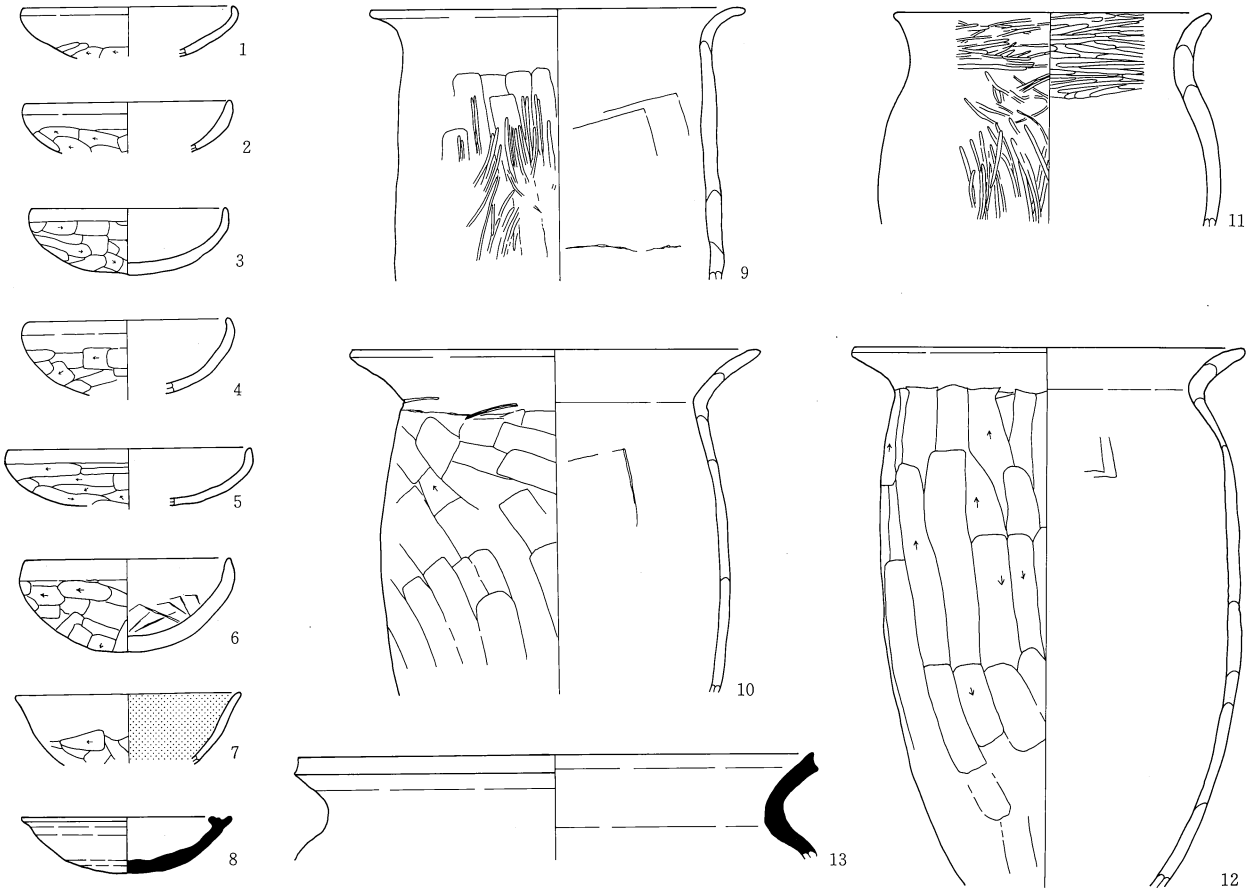


第331図　39・40・41号竪穴住居跡 出土遺物

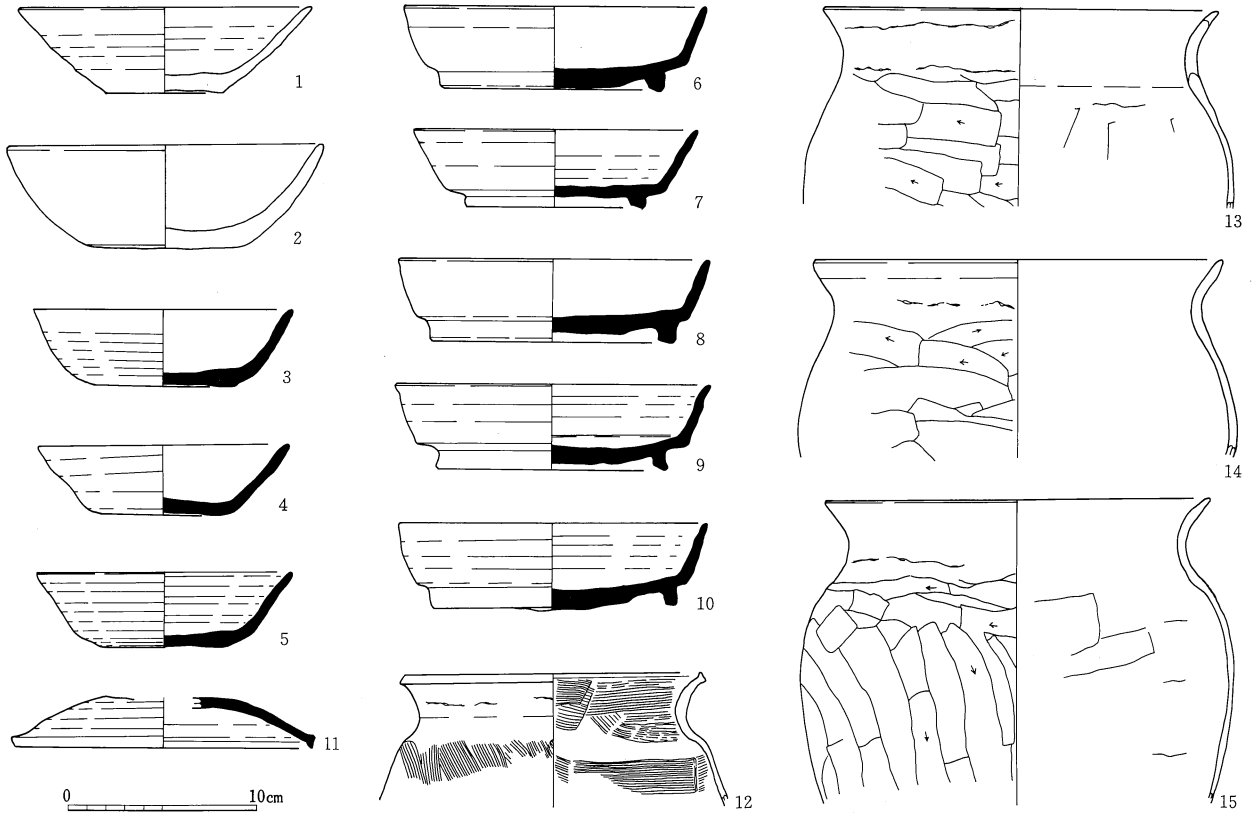


第 332 図　42号竪穴住居跡 出土遺物

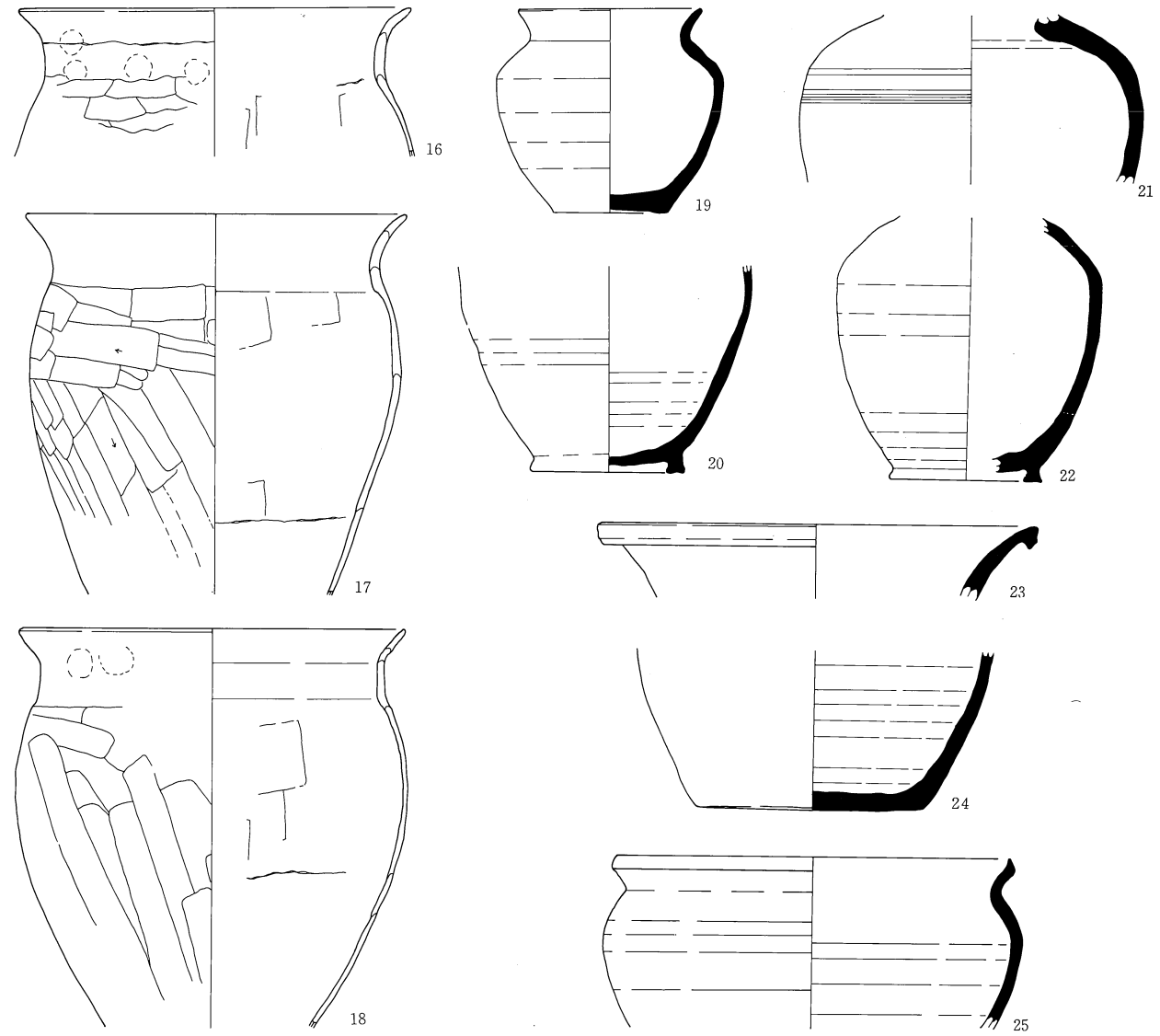
SB 43



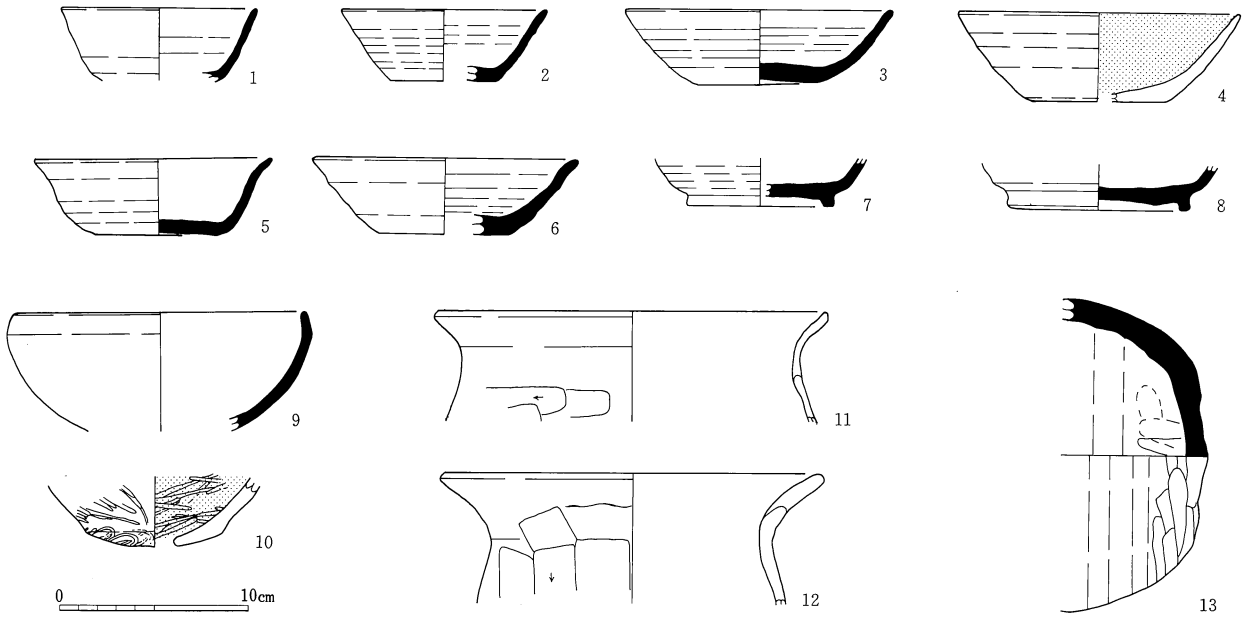
SB 44



第333図　43・44号竪穴住居跡 出土遺物

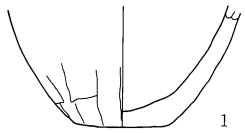


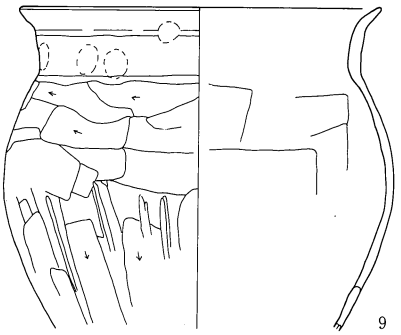
SB 45



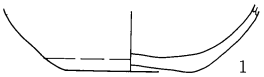
第 334 図　44・45号竪穴住居跡 出土遺物

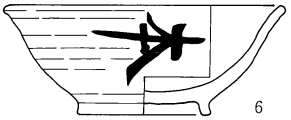
SB 46

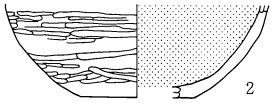


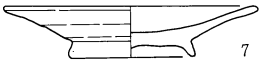


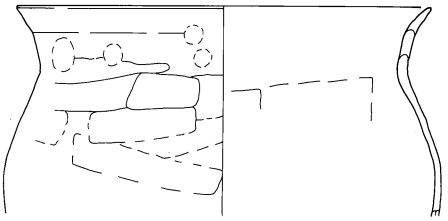
SB 47

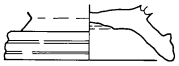


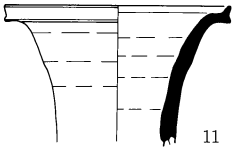




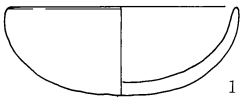


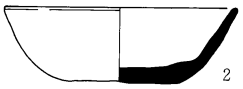


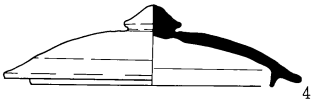


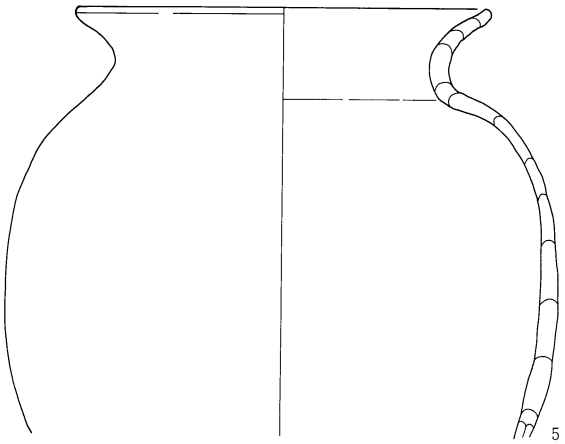


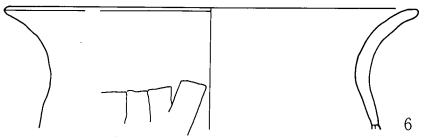
SB 48

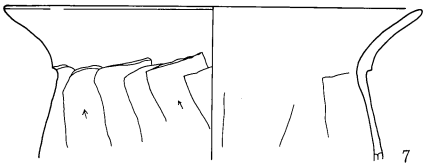


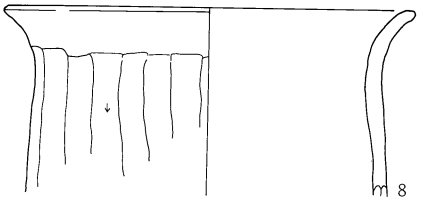






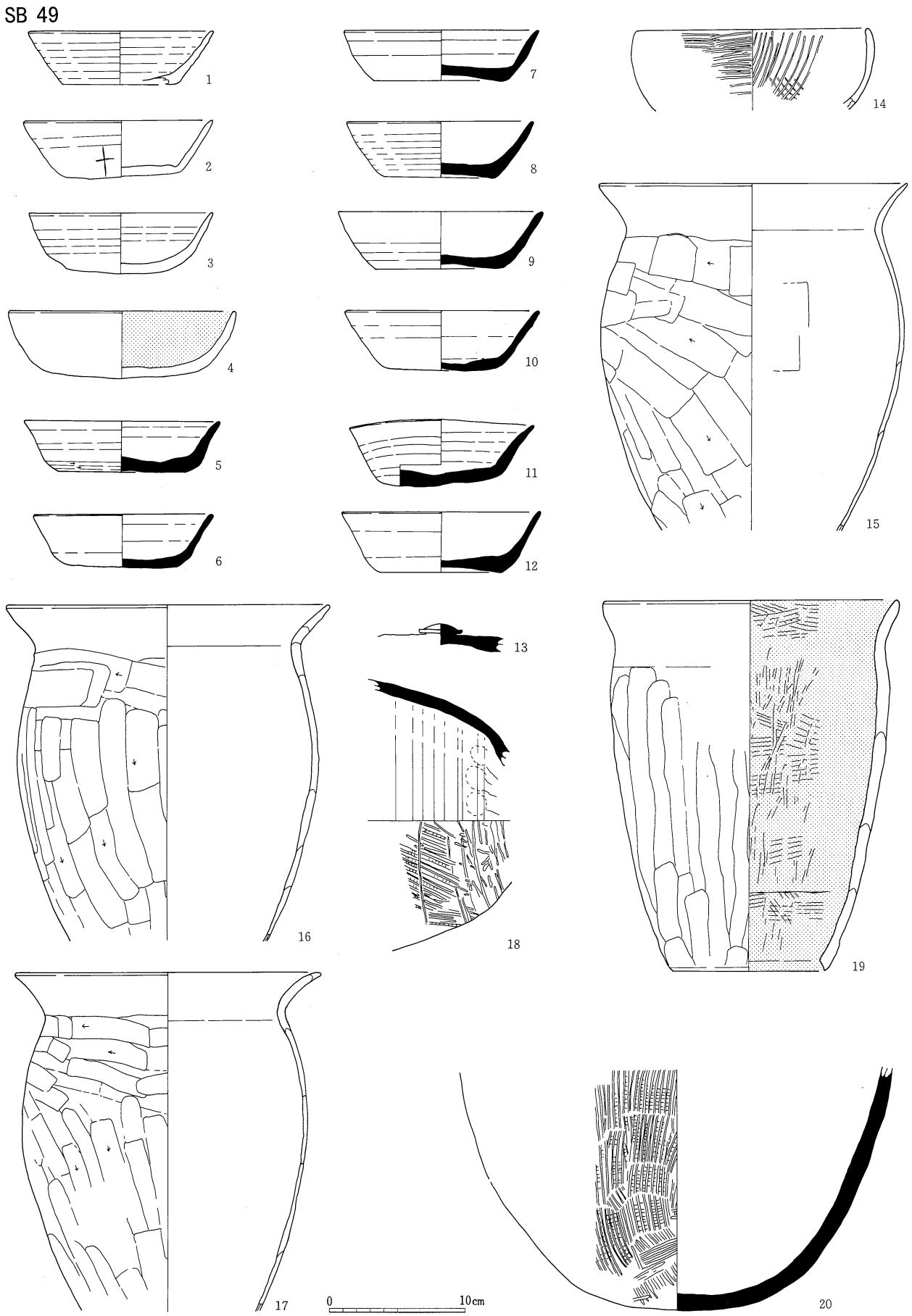






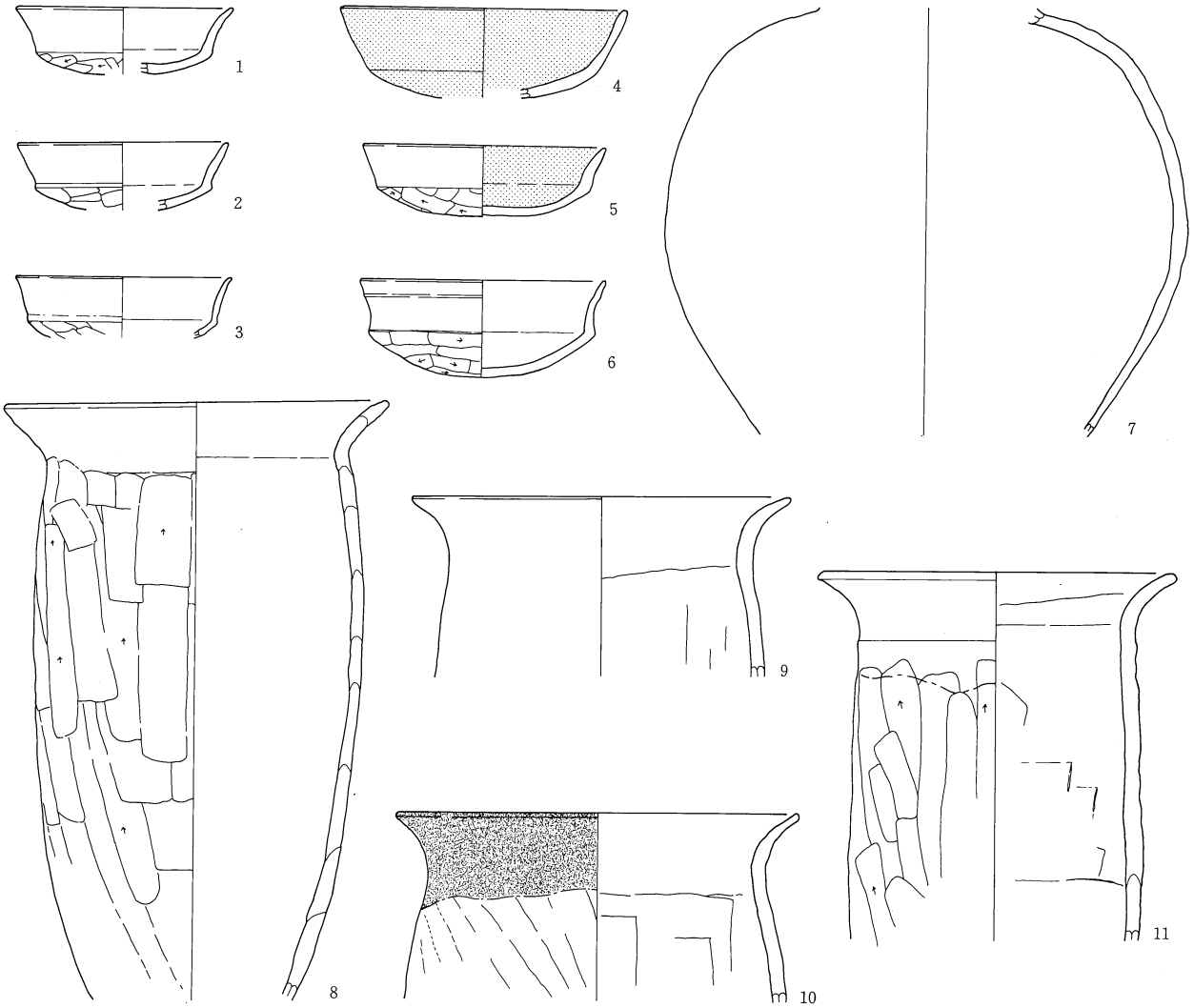
0　10cm

第 335 図　46・47・48号竪穴住居跡 出土遺物

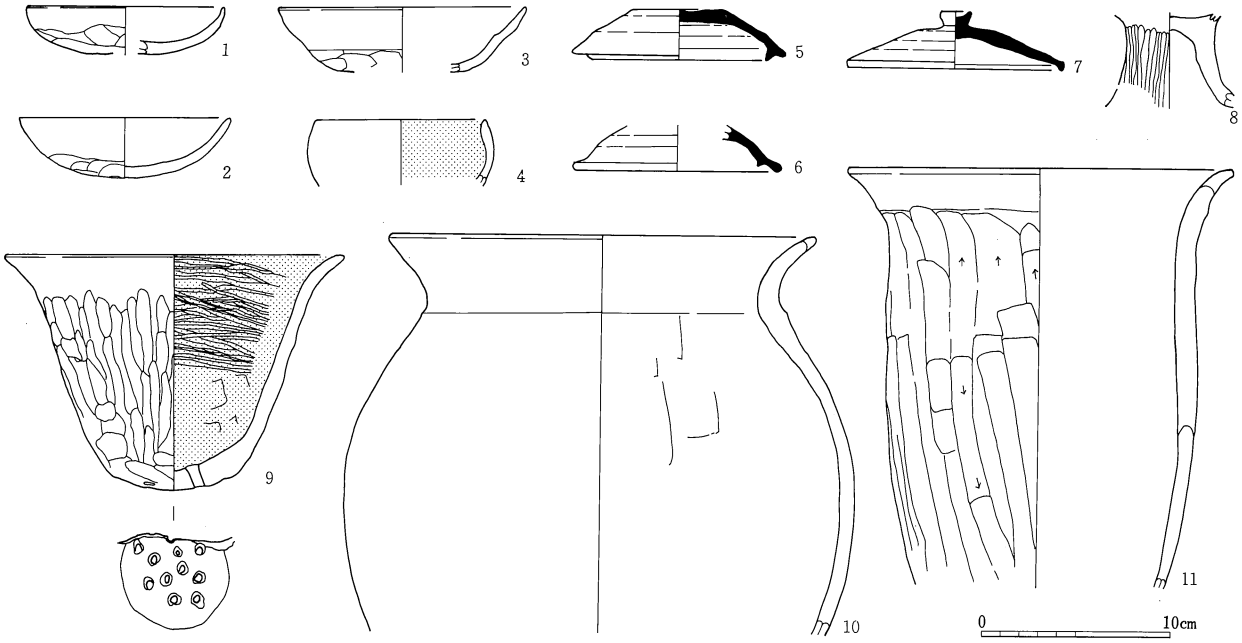


第 336 図　49号竪穴住居跡 出土遺物

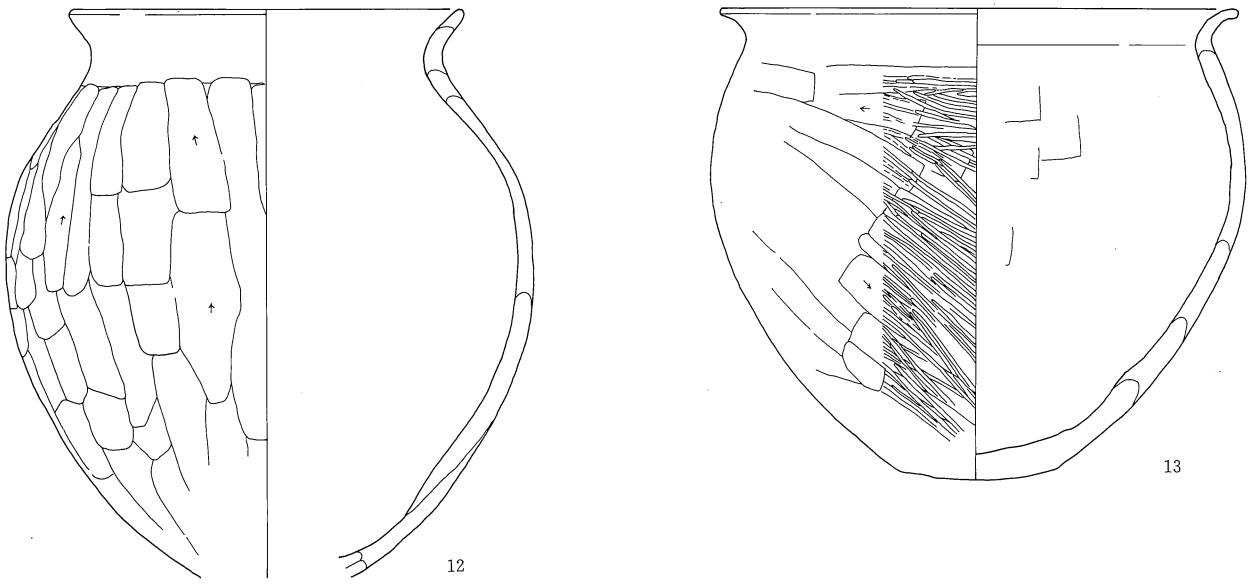
SB 52



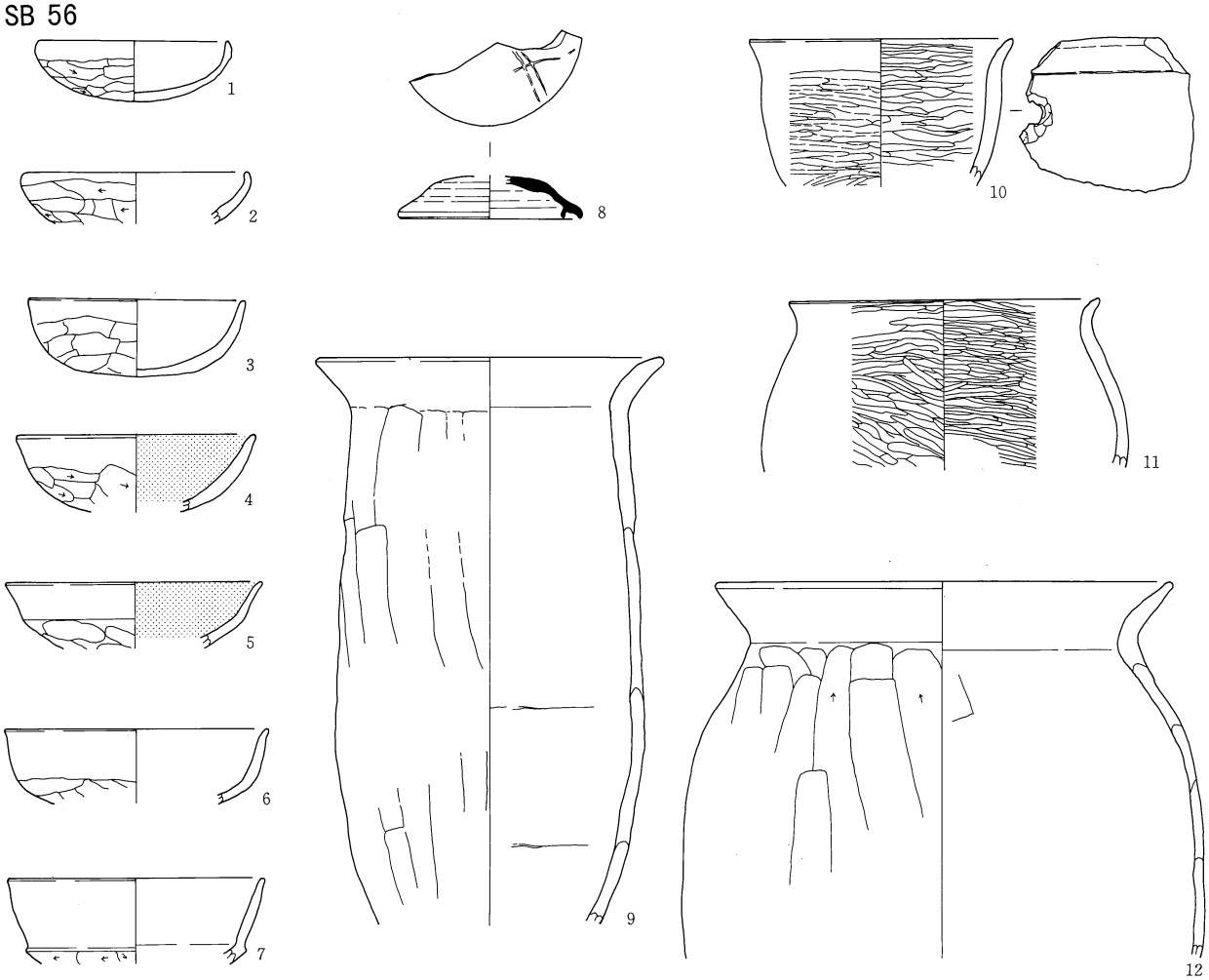
SB 53



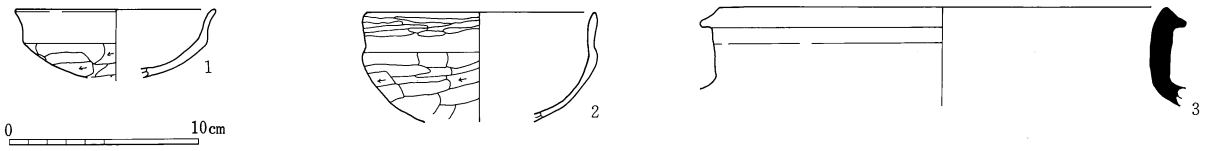
第 337 図　52・53号竪穴住居跡 出土遺物



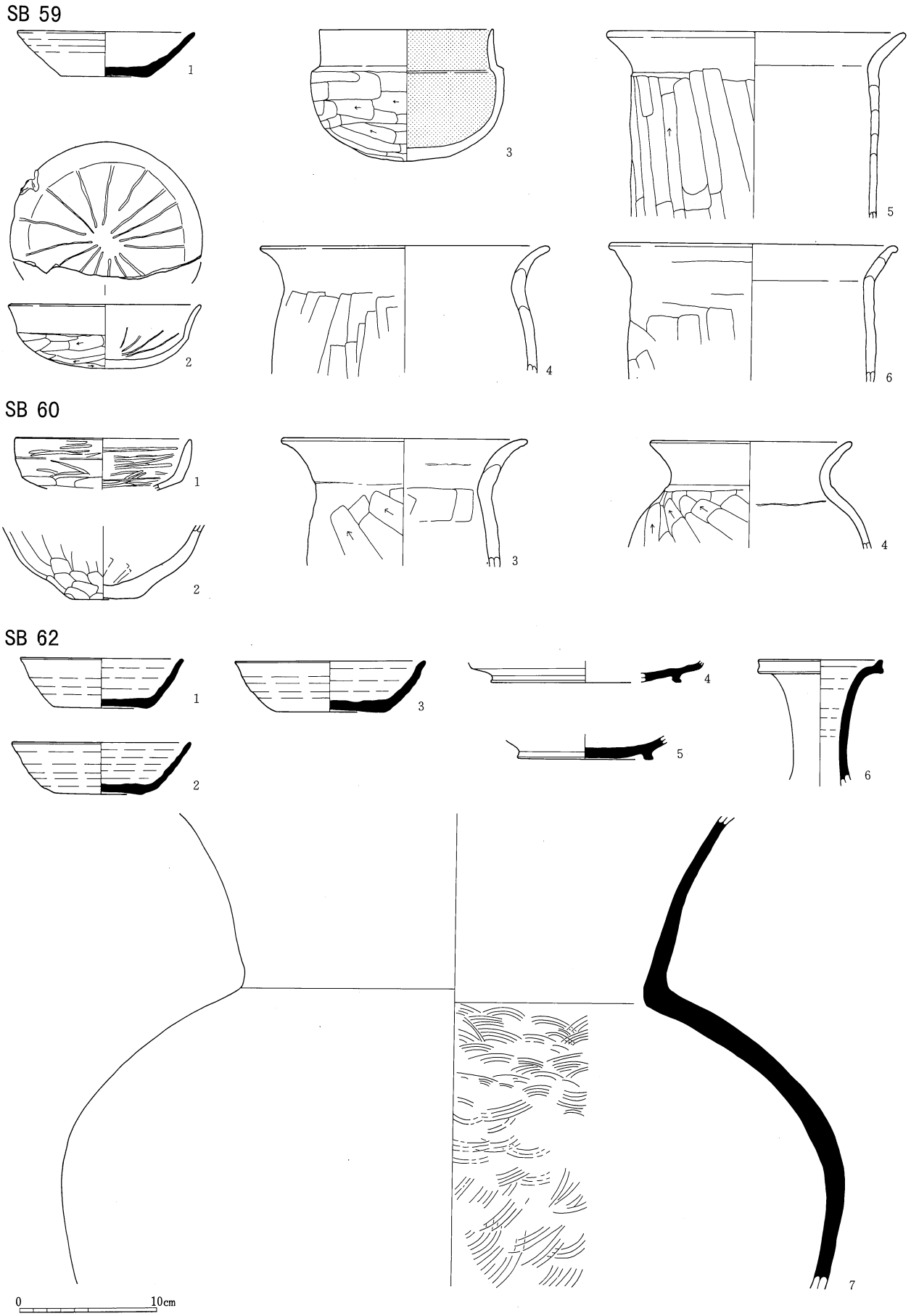
SB 56



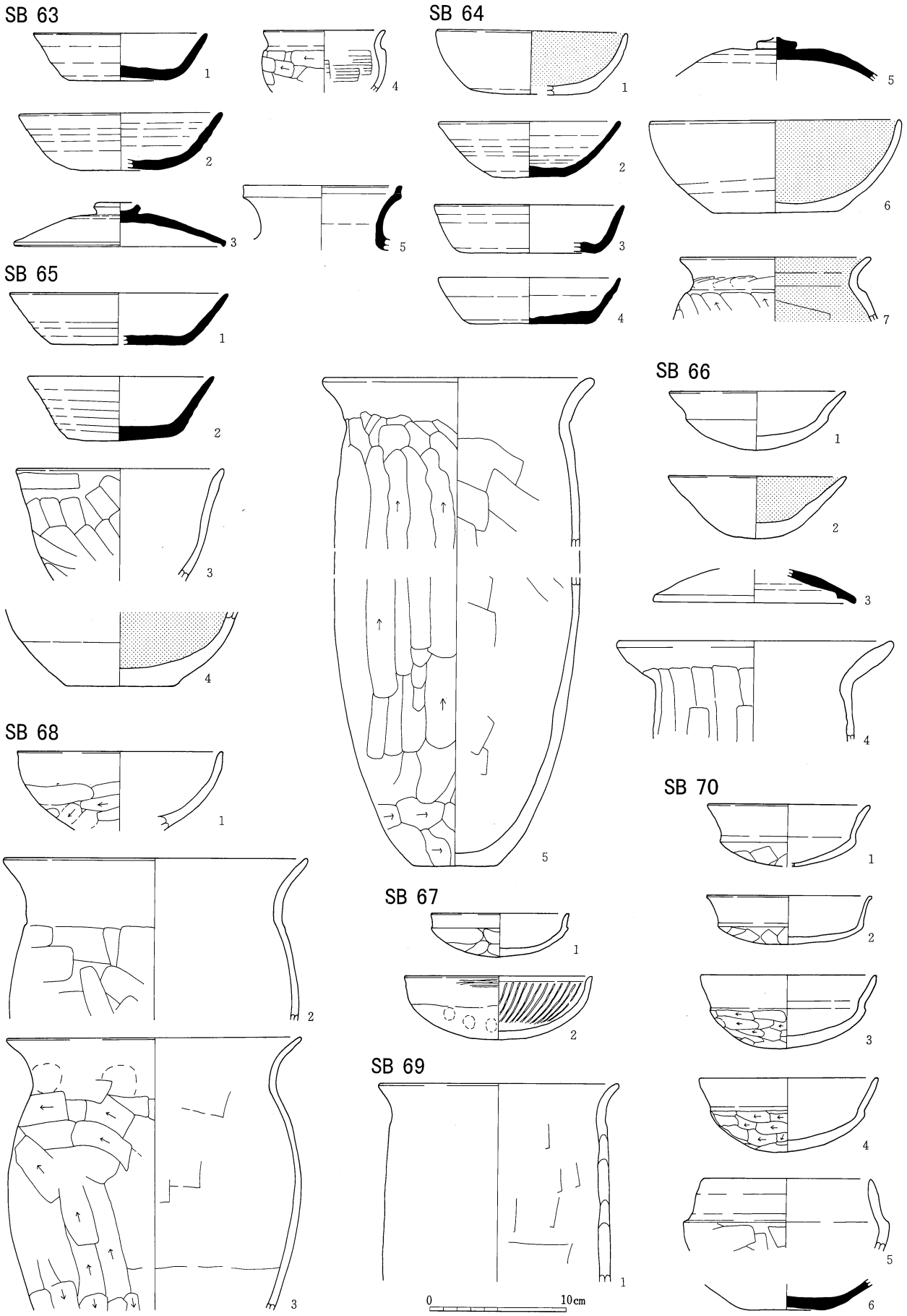
SB 58



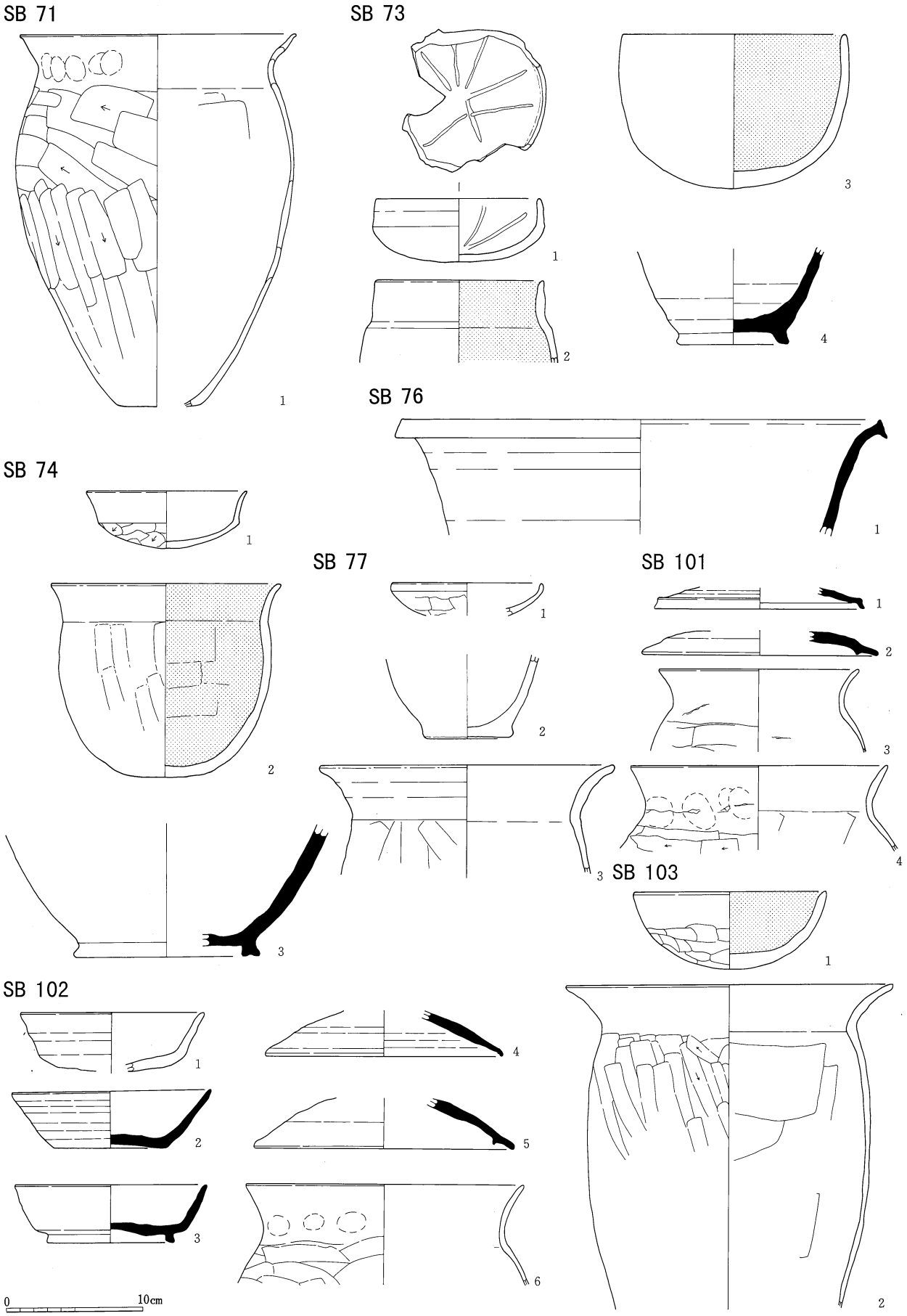
第338図　53・56・58号竪穴住居跡 出土遺物



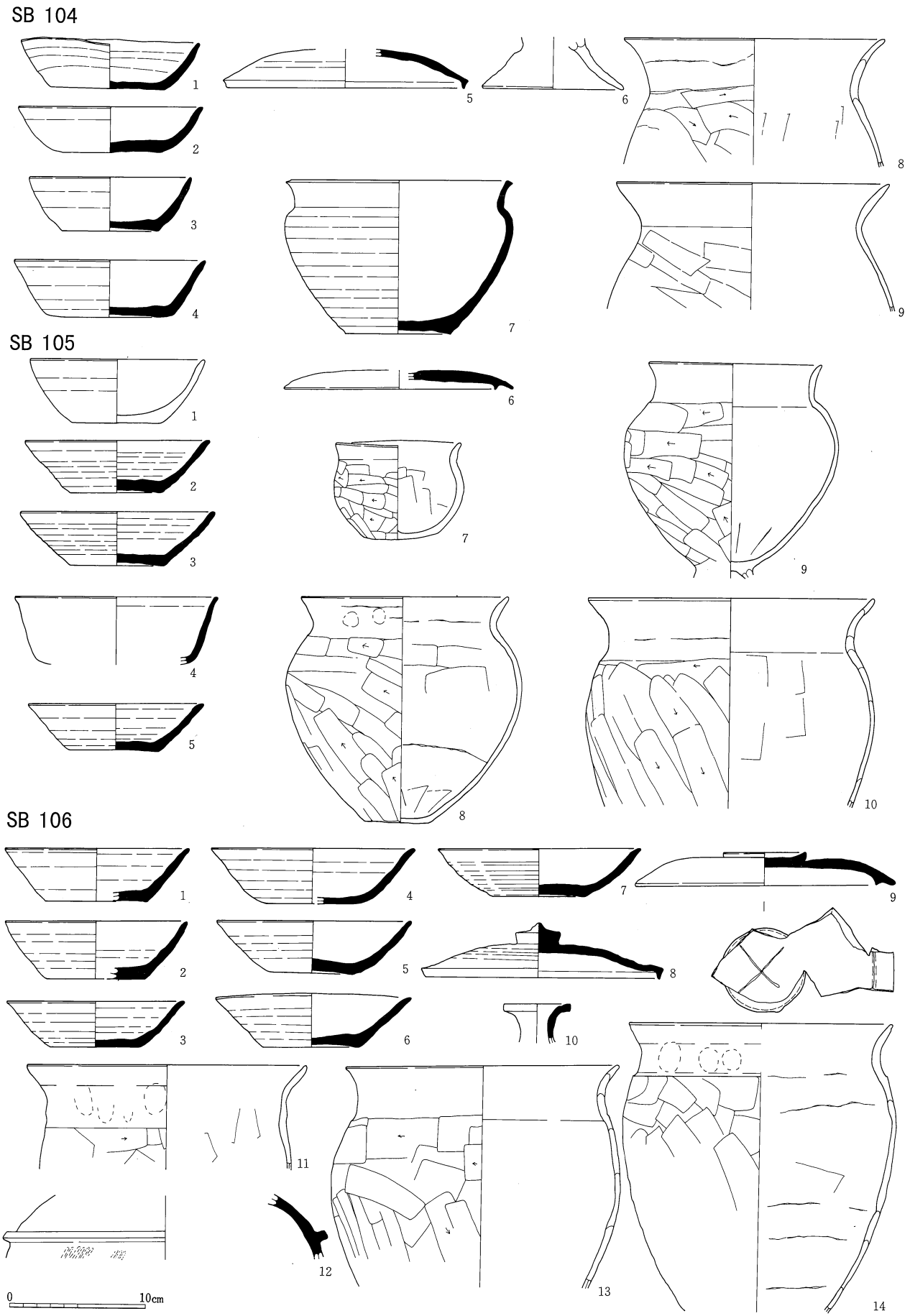
第339図　59・60・62号竪穴住居跡 出土遺物



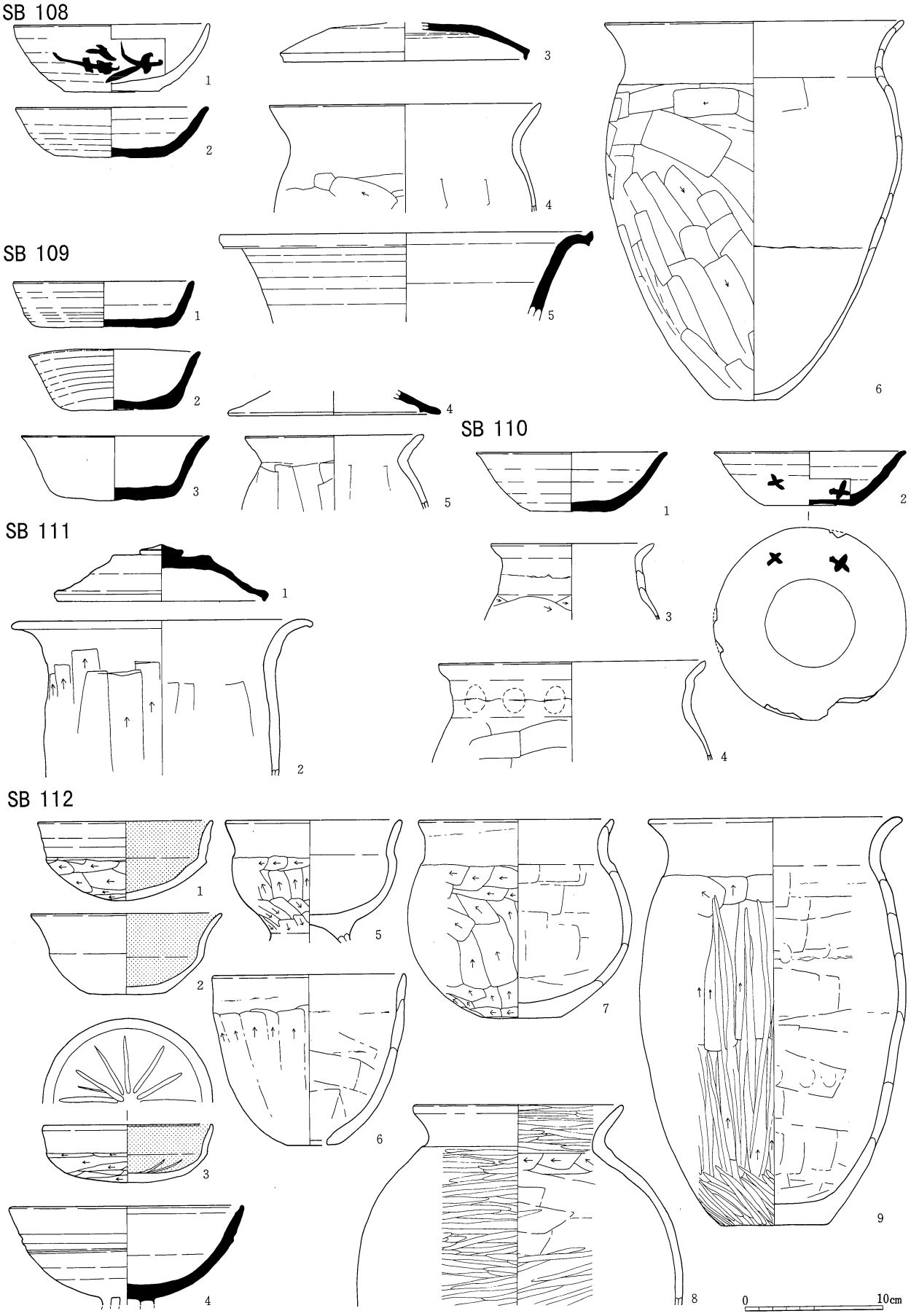
第340図　63～70号竪穴住居跡 出土遺物



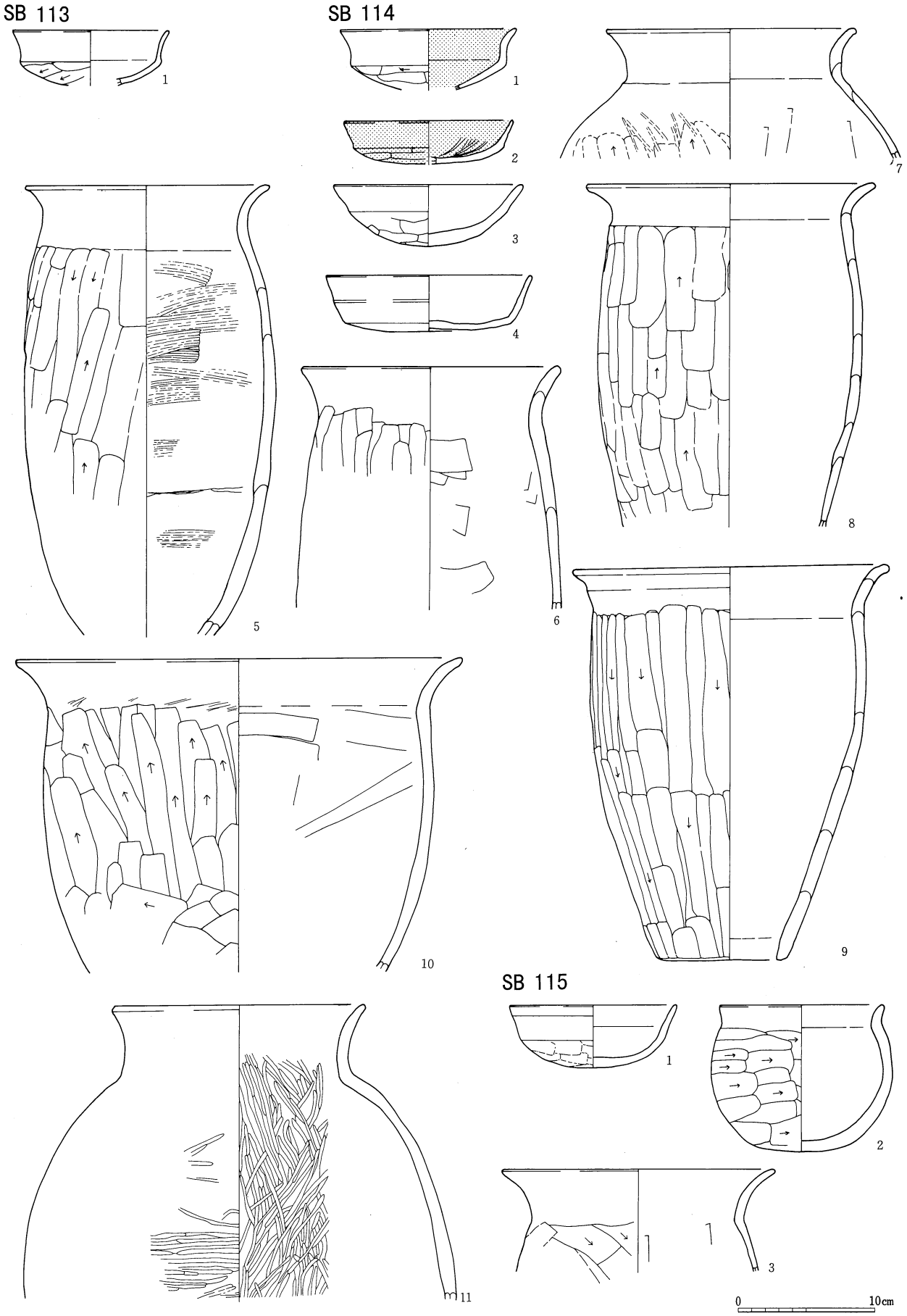
第341図　71・73・74・76・77・101～103号竪穴住居跡 出土遺物



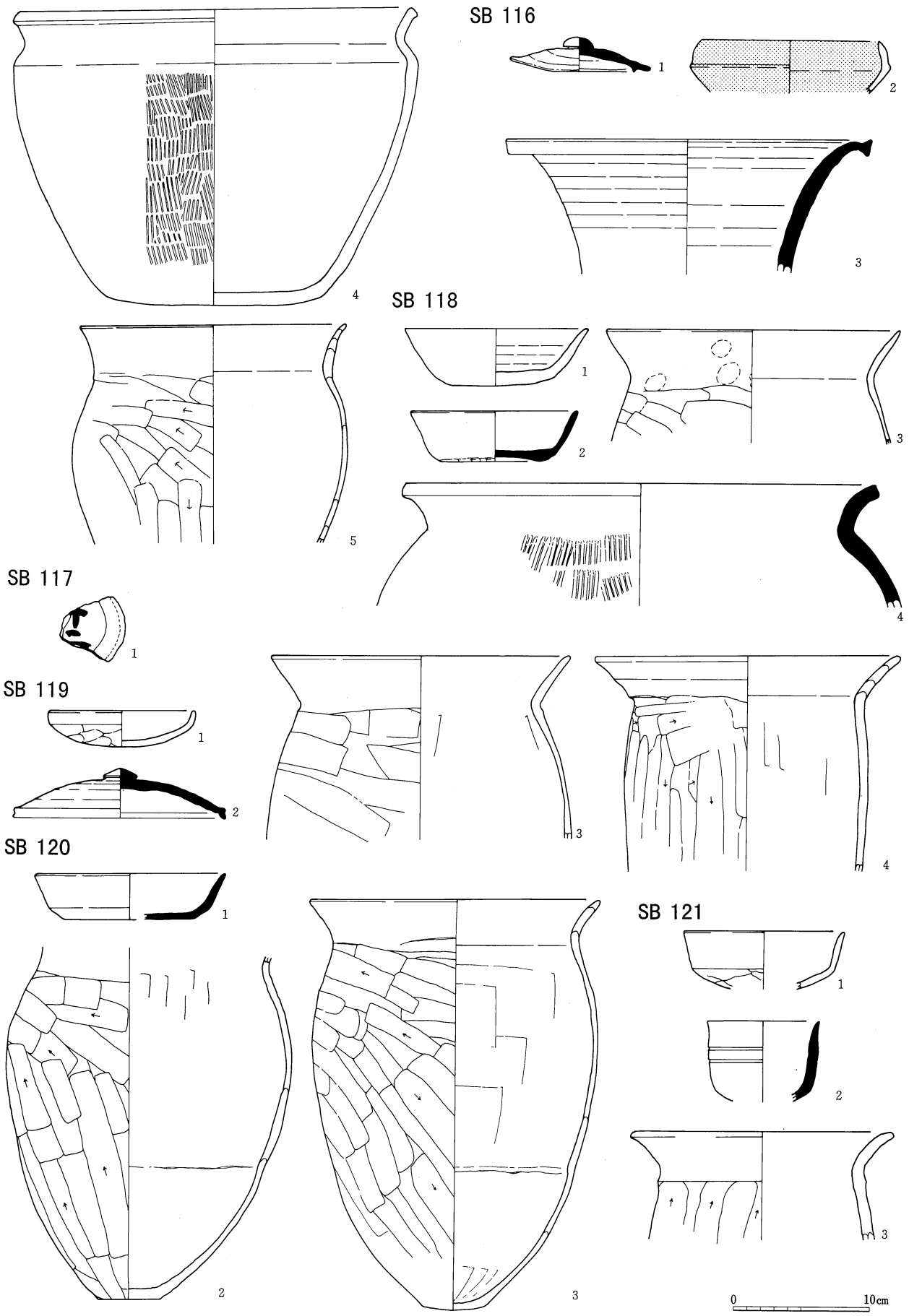
第 342 図　104・105・106号竪穴住居跡 出土遺物



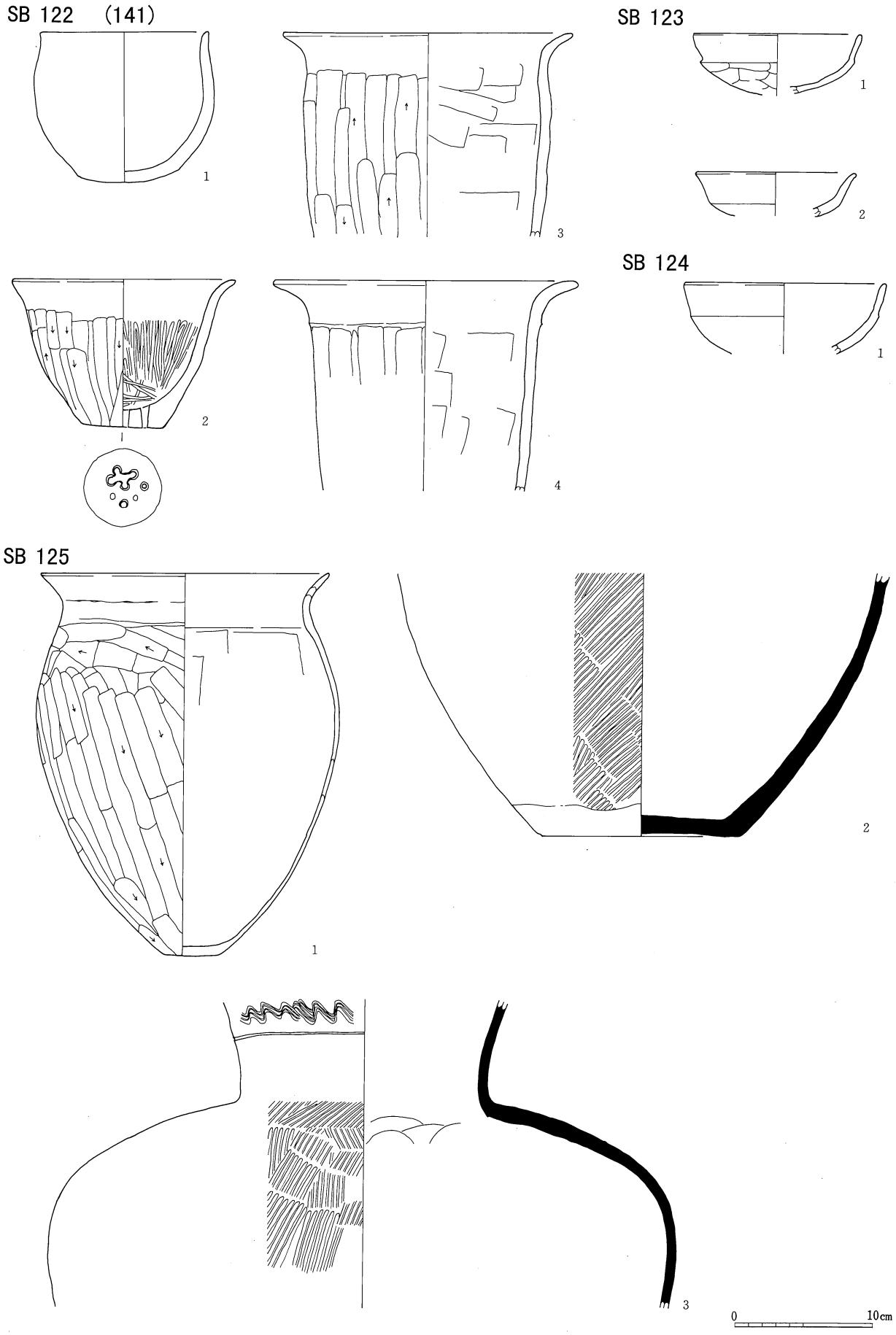
第343図　108～112号竪穴住居跡 出土遺物



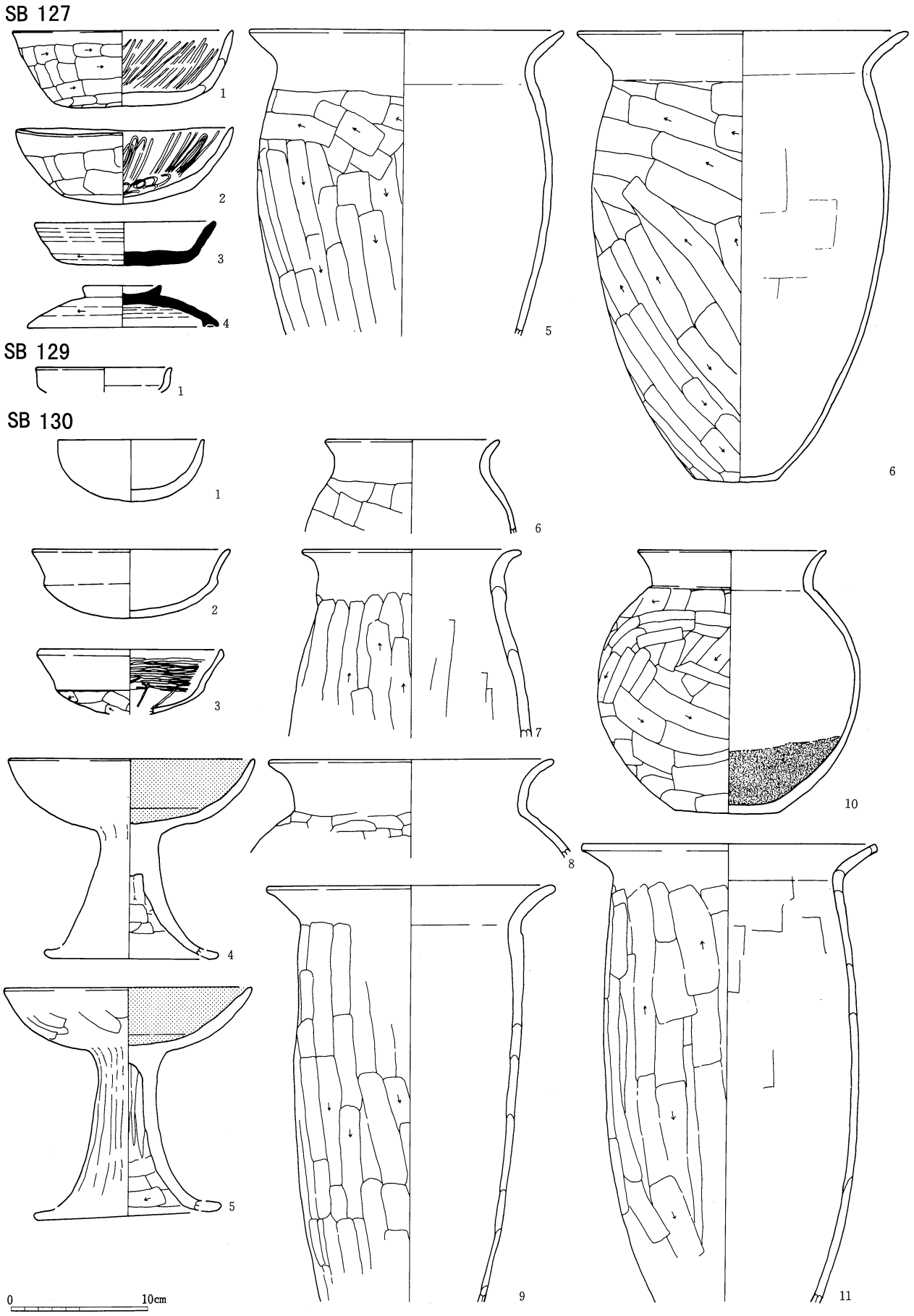
第344図　113・114・115号竪穴住居跡 出土遺物



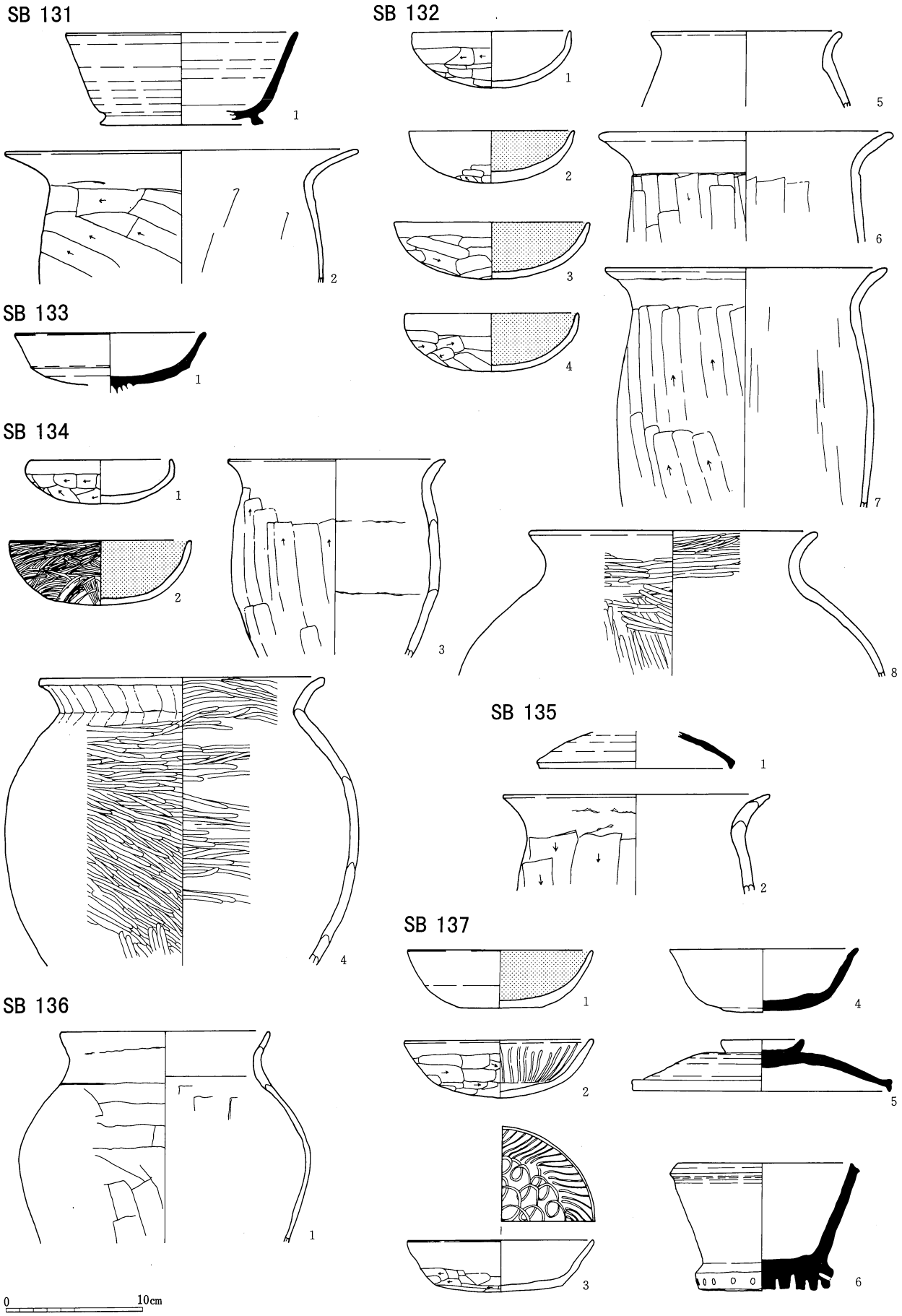
第345図　115～121号竪穴住居跡 出土遺物



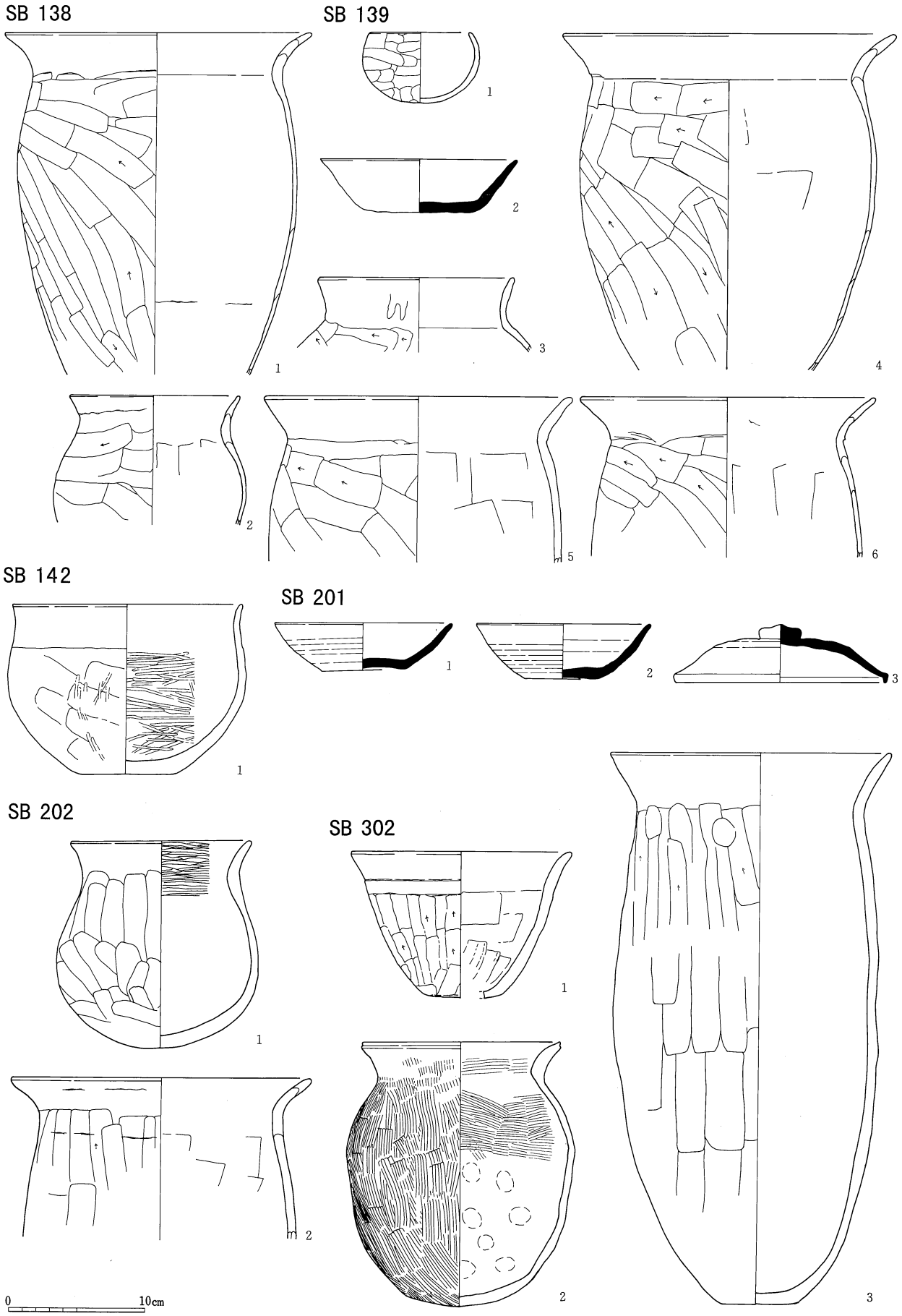
第346図　122(141)～125号竪穴住居跡 出土遺物



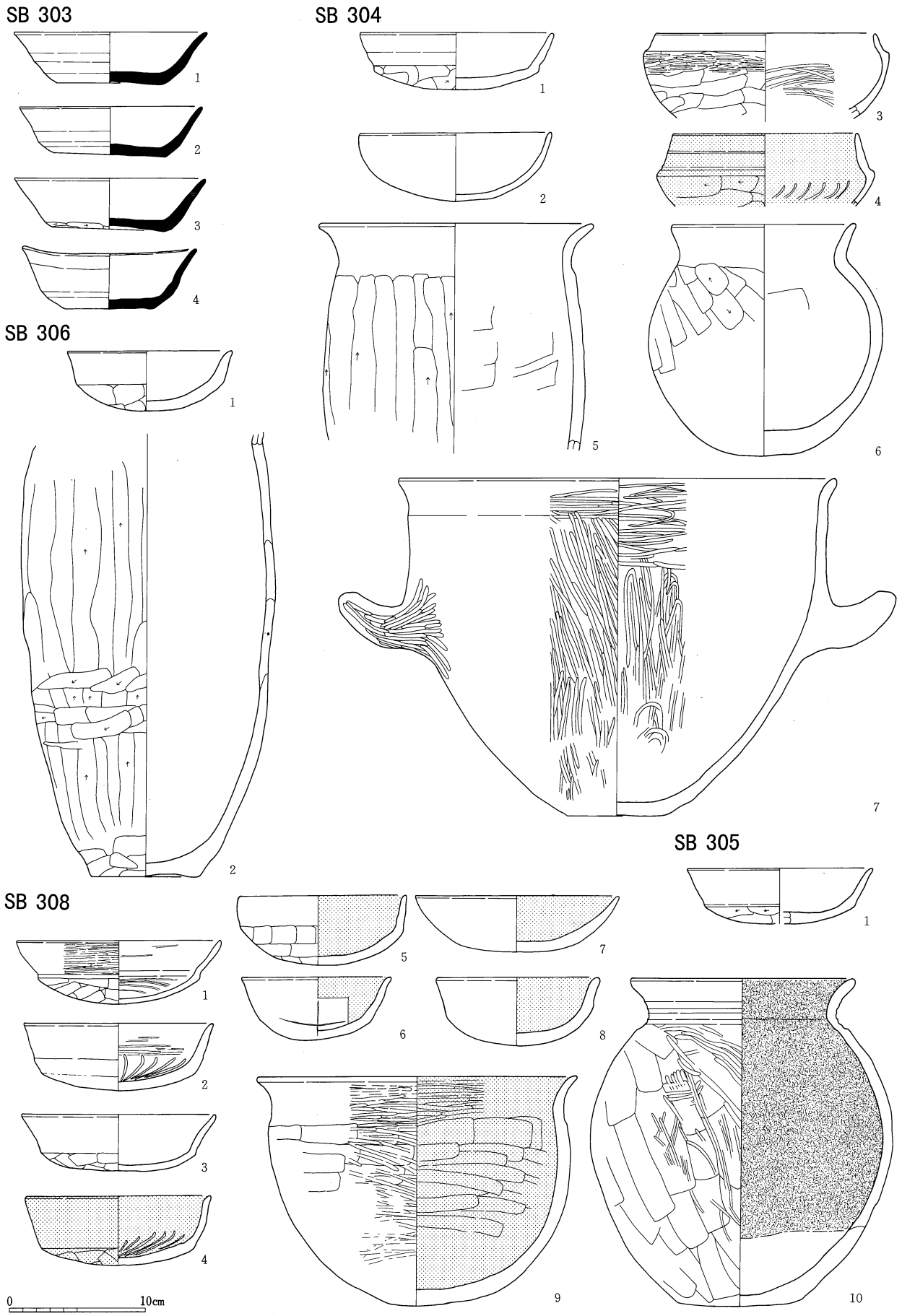
第347図　127・129・130号竪穴住居跡 出土遺物



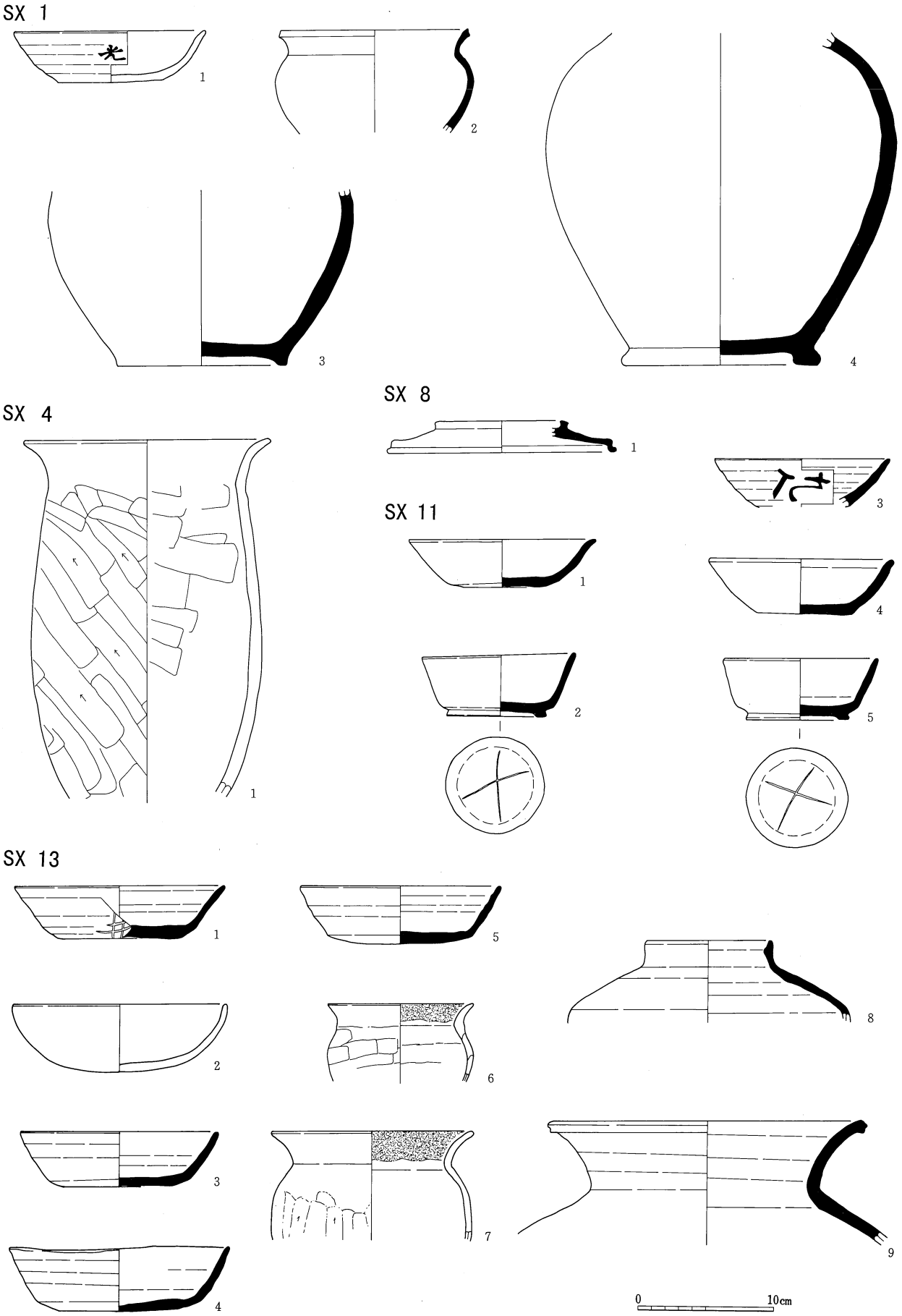
第348図　131～137号竪穴住居跡 出土遺物



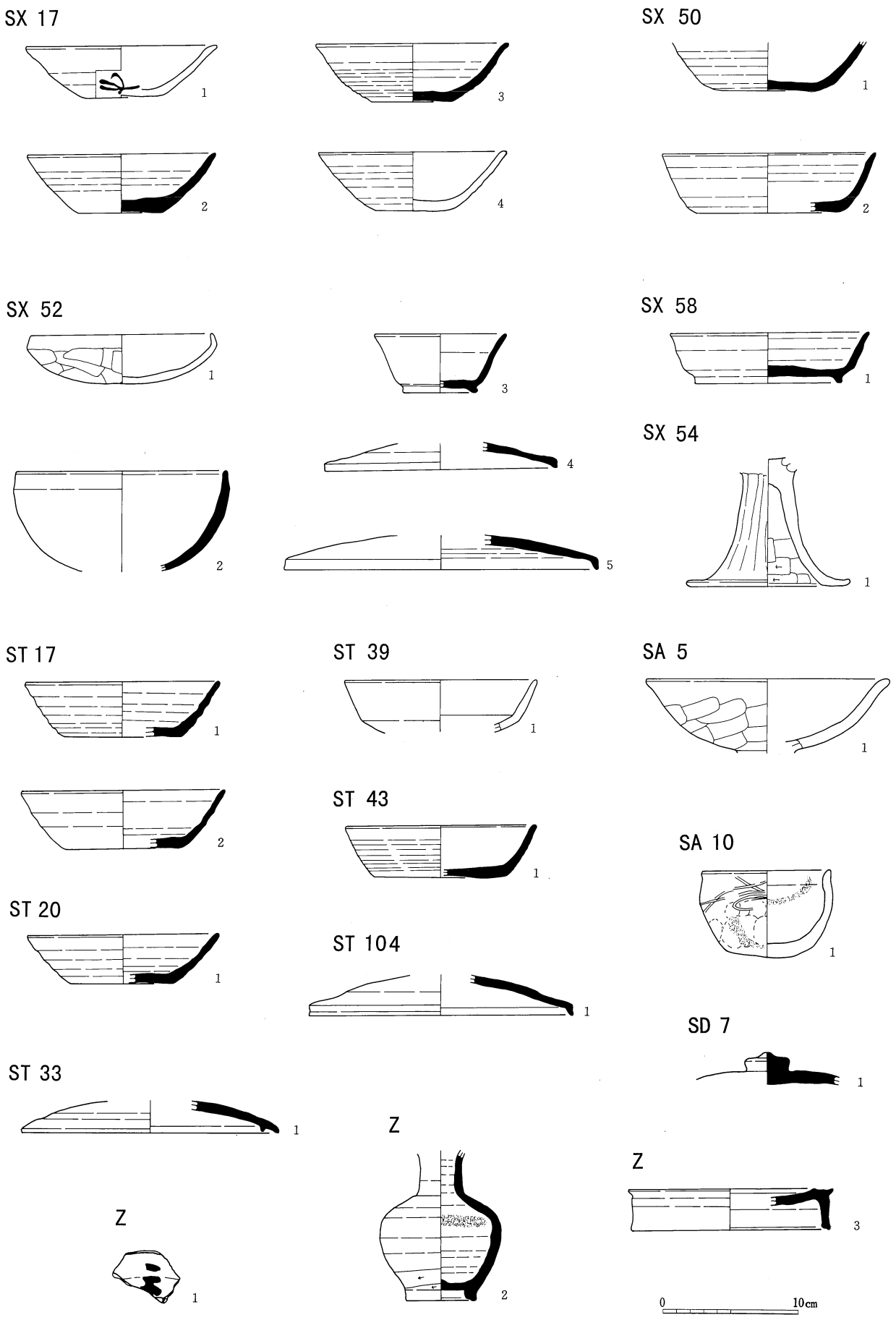
第349図　138・139・142・201・202・302号竪穴住居跡 出土遺物



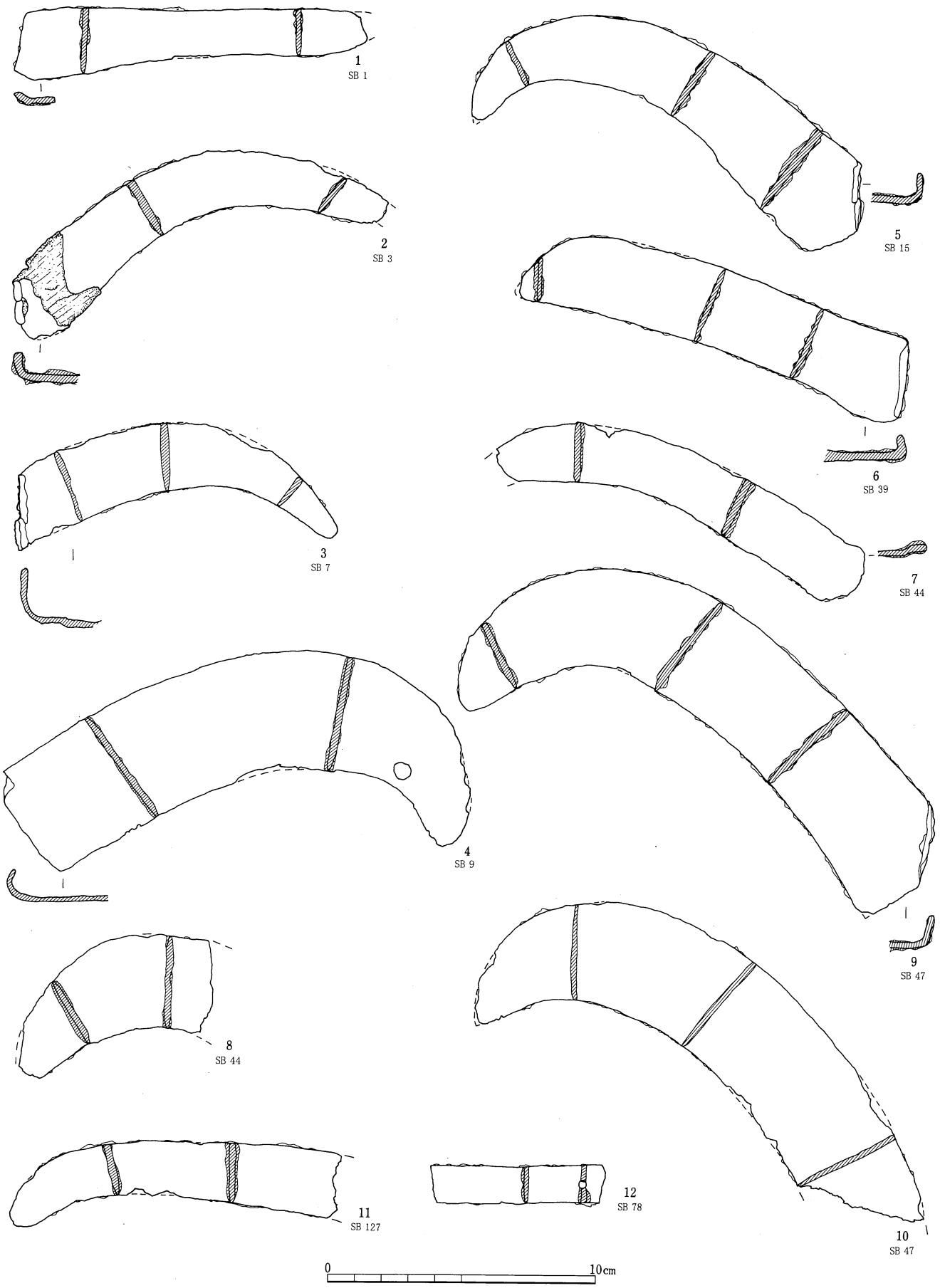
第350図　303～306・308号竪穴住居跡 出土遺物



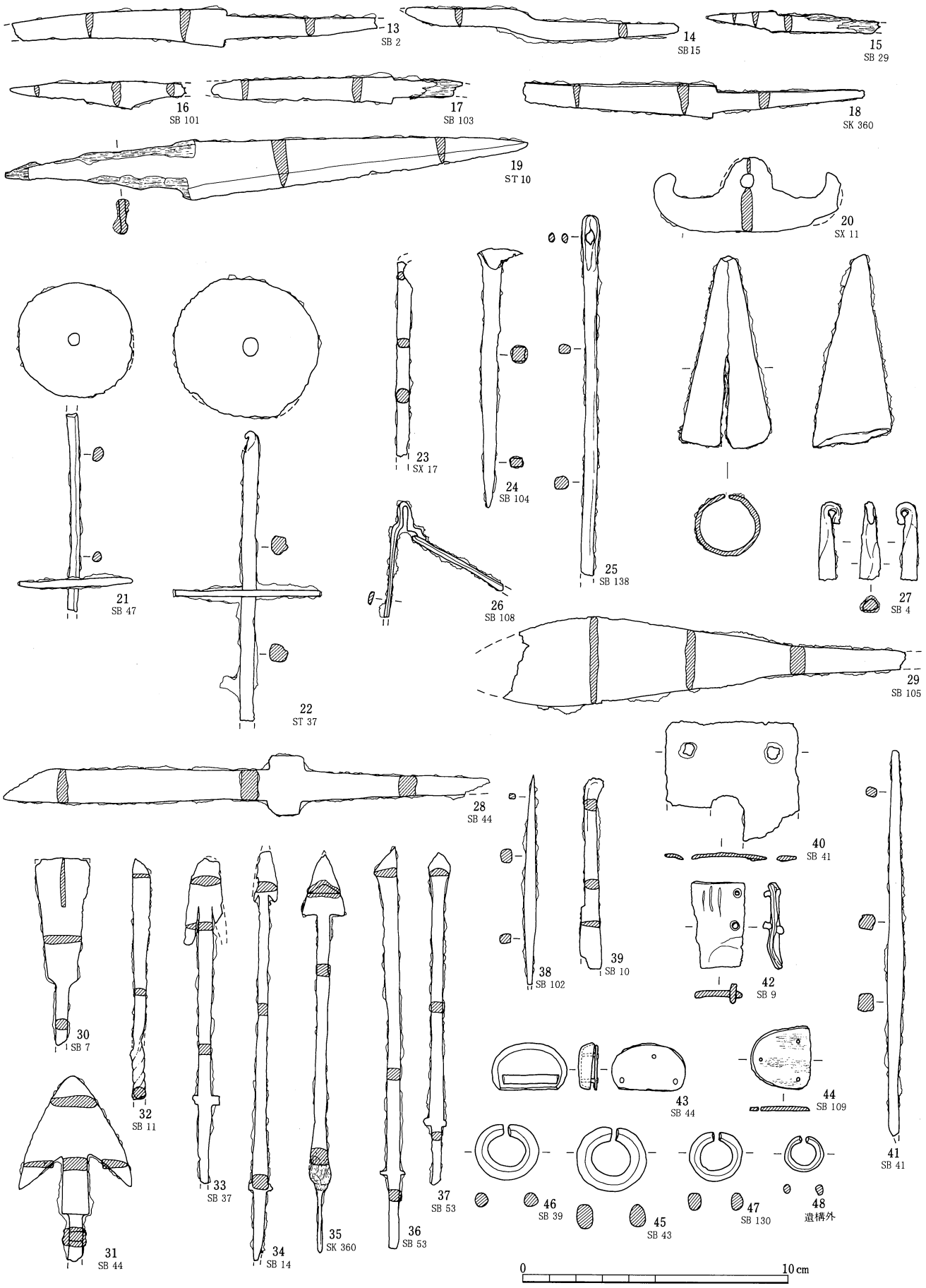
第351図　１～13号不明土坑 出土遺物



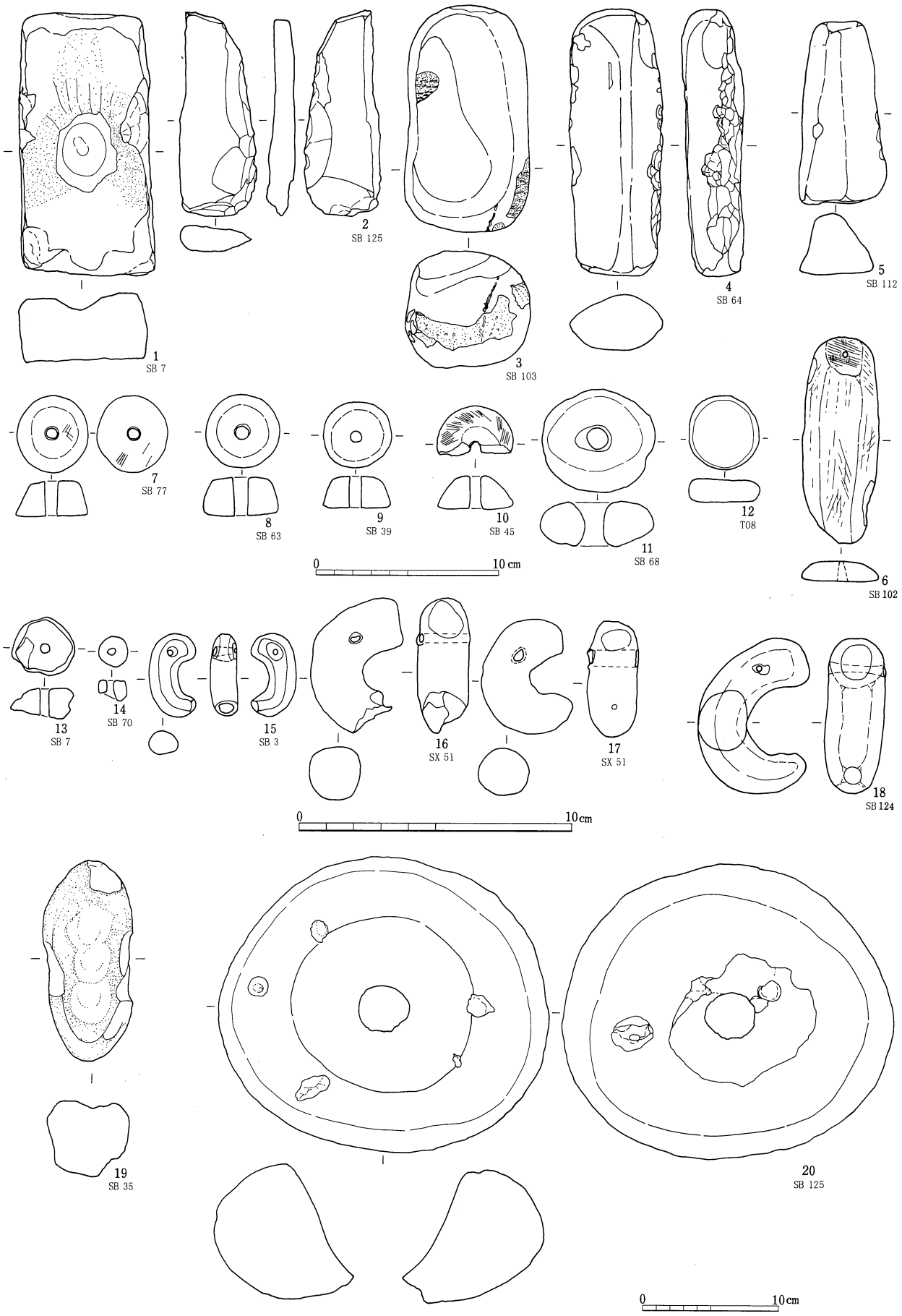
第352図　17～54号不明土坑　　17・20・33・39・43・104号掘建、他出土遺物



第 353 図　鉄・金属製品 (1)



第354図　鉄・金属製品 (2)


1
SB 7
2
SB 125
3
SB 103
4
SB 64
5
SB 112
6
SB 102
7
SB 77
8
SB 63
9
SB 39
10
SB 45
11
SB 68
12
T08
0
10 cm
13
SB 7
14
SB 70
15
SB 3
16
SX 51
17
SX 51
18
SB 124
0
10cm
19
SB 35
20
SB 125
0
10cm

第355図　石・土製品 (1)

第５章　自然科学分析の結果

第１節　中原遺跡・芝宮遺跡出土の動物遺体

樋泉　岳二　（早稲田大学）

はじめに

長野県小諸市中原遺跡群・佐久市芝宮遺跡群（ともに古墳時代後期～平安時代の集落跡）において，住居跡カマド内の堆積物を水洗篩別した結果，多数の動物遺体（貝・骨類）が検出された。ここではその分析結果について報告する。

１．分析資料

分析したのは，おもに住居跡カマド内部の堆積物を0.5㎜目フルイにて水洗篩別して得られた動物遺体である。採取された試料の数は，中原遺跡78点（遺構数48），芝宮遺跡44点（遺構数23），試料の年代は両遺跡とも古墳時代後期から平安時代にわたる（現段階では，芝宮遺跡の個々の試料の詳細な年代は検討中である）。試料の採取，水洗，遺体の選別は長野県埋蔵文化財センターの調査担当スタッフによって行われ，選別後の資料が筆者に届けられた。

２．分析方法

送付された資料を双眼実体顕微鏡下10倍程度で観察しながら部位の判別可能な標本を抽出し，現生標本との比較によって同定した。また，部位不明の破片でも，形態・組織的な特徴によって可能な限り貝殻・魚骨・鳥骨・獣骨等の判別を行った。集計については，同定できた標本数が少なかったこと，試料によって遺体の検出数のばらつきが大きかったことから，最小個体数（MNI）・同定標本数（NISP）の算定は行わず，組成の表現は遺体各種が検出された試料数をもって表示した。

３．結果（表１・２）

中原遺跡では採取試料78点のうち36点（46％）より，また芝宮遺跡では44点中26点（59％）より動物遺体が検出された。遺体は例外なく焼けており，大部分は細片化している。同定された分類群は，貝類・魚類（真骨類）・両生類（カエル類）・鳥類・哺乳類と多岐にわたるが，破損資料が多く，詳細に同定できた標本は少ない。

貝類にはタニシ類 Viviparidae と思しきものと，タニシ以外ではあるが種名の明らかでないものとがある。後者には少なくとも２種が含まれており，ここでは貝類Ａ，貝類Ｂとしたが，それぞれ複数種が混在している可能性もある。タニシ類としたものは，殻質薄く，殻軸中に臍孔から縦貫する間隙があり，殻表には微かな成長肋がある。いずれも小破片のため同定に不安が残るので，ここでは「タニシ？」としておく。貝類Ａは真珠光沢をもつ貝殻片で，ラメラが容易に剥離する。イシガイ類 Unionidae かとも思われるが，小破片のため判然としない。貝類Ｂは腹足類（巻貝）で，殻質厚く，海産種の可能性が高いが，殻軸のみのためやはり種の査定は難しい。その他の判別不能な貝殻片については「貝類，種不明」として一括したが，殻質や成長肋の性状などから見て，その多くはタニシ類と推測される。

魚類ではニシン科 Clupeidae とコイ科 Cyprinidae（フナ Carassius auratus？を含む）が同定され

た。ニシン科は中原遺跡から尾椎１点が検出された。種の査定は困難だが，おそらくマイワシ Sardinop smelanostictus ではないかと思われる。コイ科遺体の内，鋸歯をもつ鰭棘はコイ亜科（コイフナ類）に特有のものである。２点の産出標本は，やや扁平で外表面に微細条溝が見られない点からおそらくフナと考えられる。他にコイ科の角骨・方骨・舌顎・骨椎骨が得られているが，今のところ種の査定は困難である。

カエル類はサイズから見て複数種が含まれる。中原遺跡資料No.67と芝宮遺跡No.5は小型種，芝宮遺跡SD3出土資料は中型種である。鳥類・哺乳類の骨は破損が著しく，種名を判別できる標本は得られなかったが，中原遺跡No.19の歯はイノシシ Sus scrofa である可能性が強い。芝宮遺跡No.12の椎骨も，シカないしイノシシ程度の大きさである。

遺体の組成（表３・４，図１）は中原・芝宮両遺跡ともよく似た特徴を示した。動物遺体を含む試料の約半数から貝類と哺乳類が，約２割から魚類が，約１割からカエル類が検出されている。鳥類は中原遺跡でわずかに検出されているが，芝宮遺跡では見られなかった。

両遺跡とも，貝類ではタニシ類が最も多く，次いで貝類Ａ，貝類Ｂの順となる。魚類では，種名が明らかな遺体のほとんどがコイ科で占められており，他には中原遺跡でニシン科が１点得られているのみである。

４．考察

今回分析したのは，カマドの燃焼部内に堆積した灰層などからの検出資料である。カマド内部という堆積条件の特殊性を考慮すれば，これらの遺体が何らかの儀礼的な行為などの結果もたらされた可能性もないとはいえないが，基本的には食料残滓がカマド内に捨てられたものと見なしてよいであろう。

各種遺体の検出試料数がそれぞれの利用頻度をある程度反映していると仮定すれば，最も頻繁に食用とされたのは貝類および哺乳類，次いで魚類であったと推定される。とくに，貝類ではタニシ類，魚類ではフナといった水田や水路に棲息する魚貝類が盛んに利用されていた様子がうかがえる。哺乳類の内容については，今回の分析資料からは明らかにできなかった。

カエル類も普通に検出されたが，小型種が多く食用にされたものか疑問が残る。しかし，カマド内にカエルが勝手に入り込むことも不自然のように思われる。今後の課題としておきたい。鳥類は食用されることもあったが，利用頻度は低かったらしい。ヘビ類やネズミなどの小動物がまったく検出されなかったのも意外な結果であった。

中原遺跡で検出されたニシン科（イワシ類）は，交易物資として沿海地域からもたらされたと考えてよいだろう。貝類Ｂも同様の可能性がある。これらの証拠から，当時沿海部（おそらく日本海側）との間にローカルな物流網が存在し，これに乗って本遺跡群のような内陸域にまで海産物が持ち込まれていたことが知られる。しかし，こうした海の幸を口にする機会はそれほど多くはなかったらしい。

なお，中原遺跡の遺体構成を年代ごとに比較した結果，明らかな時代差は認められなかった（表２）。試料数が少ないので速断はできないが，本遺跡における動物資源の利用状況は古墳時代後期から平安時代に至るまであまり大きな変化はなかった可能性がある。

表1. 中原遺跡出土動物遺体の同定結果.

No. (DNH)	遺構	採取位置	層位	種類	部位	残存位置	左右	数 (+:あり)	備考
2	SB77	カマド	灰	ニシン科	尾椎	−	−	1	椎体横径=2.6. マイワシ？
2	SB77	カマド	灰	貝類B(腹足類)	−	殻軸	−	1	海産種か
2	SB77	カマド	灰	鳥類	中足骨	遠位端	L	1	キジ？
2	SB77	カマド	灰	不明	不明	破片	−	+	貝殻・獣骨？など
3	SB02	カマド	灰	不明	不明	破片	−	+	獣骨？主体
4	SB04	カマド	灰	コイ科	尾椎	−	−	1	
4	SB04	カマド	灰	タニシ？	−	殻軸	−	1	
4	SB04	カマド	灰	不明	不明	破片	−	+	貝殻・獣骨？など
8	SB17	カマド	灰	不明	不明	破片	−	+	貝殻主体, 獣骨？
10	SB21	カマド	灰白色土層	タニシ？	−	殻軸	−	1	
10	SB21	カマド	灰白色土層	不明	不明	破片	−	+	貝殻・獣骨？など
11	SB21	カマド	灰黄褐色	不明	不明	破片	−	+	貝殻・骨片
12	SB21	カマド	覆土炭化物	不明	不明	破片	−	3	骨片
13	SB22	カマド	灰	貝類A.	−	破片	−	+	
13	SB22	カマド	灰	不明	不明	破片	−	+	貝殻・骨片？
16	SB30	カマド	No.1	哺乳類	不明	破片	−	1	
18	SB31	カマド	火床上部, 灰	哺乳類	不明	破片	−	1	
19	SB33	カマド	灰	貝類B(腹足類)	−	殻軸	−	1	
19	SB33	カマド	灰	イノシシ？	臼歯	破片	−	1	
19	SB33	カマド	灰	不明	不明	破片	−	+	貝殻主体
20	SB33	カマド	火床直上	タニシ？	−	殻頂	−	1	
20	SB33	カマド	火床直上	哺乳類	不明	破片	−	1	
20	SB33	カマド	火床直上	不明	不明	破片	−	+	貝殻・獣骨？・鳥骨？
22	SB37	カマド	灰	不明	不明	破片	−	7	骨片
23	SB37	覆土	4層	不明	不明	破片	−	4	骨片
25	SB37	カマド	灰, 4層	哺乳類	不明	破片	−	2	
25	SB37	カマド	灰, 4層	不明	不明	破片	−	+	貝殻・獣骨？・鳥骨？
26	SB39	カマド	灰	不明	不明	破片	−	+	獣骨主体？
29	SB43	カマド	灰	タニシ？	−	殻軸	−	1	
29	SB43	カマド	灰	不明	不明	破片	−	+	貝殻・骨片
33	SB51	カマド	火床上灰	不明	不明	破片	−	+	獣骨？など
35	SB53	No.1		不明	不明	破片	−	1	獣骨？
36	SB56	カマド	火床上覆土3層	不明	不明	破片	−	1	獣骨？
40	SB62	カマド, 1区	灰	哺乳類	不明	破片	−	1	
42	SB73	カマド	灰	フナ？	鰭棘	破片	−	1	
42	SB73	カマド	灰	コイ科	腹椎	−	−	1	椎体横径=3.5
42	SB73	カマド	灰	コイ科	腹椎	−	−	1	計測不可
42	SB73	カマド	灰	コイ科？	角骨	−	R	1	
42	SB73	カマド	灰	鳥類	指骨	−	?	4	
42	SB73	カマド	灰	不明	不明	破片	−	+	魚骨主体？, 鳥獣骨？・カエル？
44	SB77	カマド	灰	不明	不明	破片	−	+	獣骨？・カエル？
45	SB77	カマド	灰	コイ科？	方骨	−	L	1	
45	SB77	カマド	灰	不明	不明	破片	−	+	貝殻・骨片
48	SB106	カマド左脇穴2区	−	不明	不明	破片	−	2	魚骨？
49	SB106	カマド, 2区	床上, 灰	不明	不明	破片	−	1	獣骨？
51	SB109	カマド	火床下, 灰	不明	不明	破片	−	+	貝殻主体, 魚骨？
52	SB112	カマド	No.2内の土	貝類A	−	破片	−	+	
52	SB112	カマド	No.2内の土	不明	不明	破片	−	+	貝殻
58	SB120	カマド	灰	タニシ？	−	殻頂	−	1	
58	SB120	カマド	灰	不明	不明	破片	−	+	貝殻主体
66	SB127	カマド	−	哺乳類	顎骨	破片	−	1	
66	SB127	カマド	−	不明	不明	破片	−	1	哺乳類臼歯？
67	SB127	カマド	灰	カエル	上腕骨	遠位端	L	1	
67	SB127	カマド	灰	不明	不明	破片	−	+	貝殻主体, 骨片
68	SB130	カマド	灰	タニシ？	−	殻軸・殻頂	−	各1	
68	SB130	カマド	灰	不明	不明	破片	−	+	貝殻主体, 骨片
69	SB137	カマド	火床上, 灰	貝類A	−	破片	−	2	
69	SB137	カマド	火床上, 灰	不明	不明	破片	−	1	獣骨？
75	SB304	カマド	灰	不明	不明	破片	−	+	カエル？・骨片
76	SB306	カマド	灰	貝類A	−	破片	−	1	
77	SB309	カマド	6層, 灰	不明	不明	破片	−	4	骨片

表2. 芝宮遺跡出土動物遺体の同定結果

No. (DSY)	遺構	採取位置	層位	種類	部位	残存位置	左右	数 (+:あり)	備考
1	SB06	カマド	－	不明	不明	破片	－	1	骨片
2	SB06	カマド	火床上，灰	不明	不明	破片	－	1	骨片
5	SB91	カマド	灰	タニシ？	－	殻軸	－	4	
5	SB91	カマド	灰	フナ？	鰭棘	破片	－	1	
5	SB91	カマド	灰	コイ科	舌顎骨	－	L	1	
5	SB91	カマド	灰	カエル	顎骨	破片		1	
5	SB91	カマド	灰	カエル	指骨	－	?	1	
5	SB91	カマド	灰	カエル	烏口骨	－	L	1	
5	SB91	カマド	灰	カエル	烏口骨	－	R	1	Lと同一個体
5	SB91	カマド	灰	哺乳類	不明	破片	－	1	
5	SB91	カマド	灰	不明	不明	破片	－	+	貝殻・魚骨？・獣骨？
6	SB140	カマド	－	不明	不明	破片	－	5	獣骨？
7	SB140	カマド	－	不明	不明	破片	－	3	貝殻・骨片
8	SB140	カマド	－	不明	不明	破片	－	+	貝殻・骨片
10	SB140	カマド	－	タニシ？	－	殻頂	－	1	
10	SB140	カマド	－	貝類A	－	破片	－	+	
10	SB140	カマド	－	不明	不明	破片	－	+	貝殻・魚骨？・カエル？・獣骨？
11	SB146	カマド	－	タニシ？	－	殻軸	－	1	
11	SB146	カマド	－	貝類A	－	破片	－	+	
11	SB146	カマド	－	不明	不明	破片	－	+	貝殻・獣骨？
12	SB146	カマド	灰	大型哺乳類	椎骨	破片	－	2	
13	SB158	カマド	灰	不明	不明	破片	－	+	貝殻・獣骨？
14	SB158	カマド	－	タニシ？	－	殻頂・殻軸	－	各1	
14	SB158	カマド	－	貝類B(腹足類)	－	殻軸	－	1	海産種か
14	SB158	カマド	－	不明	不明	破片	－	+	貝殻主体，骨片
15	SB158	カマド	灰(ｻﾝﾌﾟﾙA)	不明	不明	破片	－	+	貝殻・骨片？
17	SB171	カマド	灰	タニシ？	－	殻軸	－	2	
17	SB171	カマド	灰	不明	不明	破片	－	+	貝殻
18	SB172	カマド	灰	魚類(真骨類)	椎骨	破片	－	1	
18	SB172	カマド	灰	不明	不明	破片	－	+	貝殻・魚骨？
19	SB175	カマド	床面，灰	不明	不明	破片	－	+	貝殻・骨片？
20	SB175	カマド	－	不明	不明	破片	－	8	魚骨？・獣骨？
22	SB181	カマド	灰	不明	不明	破片	－	2	貝殻・獣骨？
27	SB185	カマド	灰	哺乳類	歯	破片	?	1	
27	SB185	カマド	灰	魚類(真骨類)？	椎骨？	破片	－	1	
27	SB185	カマド	灰	不明	不明	破片	－	+	骨片
31	SB201	カマド	－	タニシ？	－	殻軸	－	1	
31	SB201	カマド	－	不明	不明	破片	－	+	貝殻主体，獣骨？
32	SB201	カマド	灰	貝類A	－	破片	－	+	貝殻主体，獣骨？
32	SB201	カマド	灰	不明	不明	破片	－	+	貝殻主体，獣骨？
33	SB204	カマド	－	貝類A	－	破片	－	+	貝殻・骨片
33	SB204	カマド	－	不明	不明	破片	－	+	貝殻・骨片
34	SB204	カマド	灰	不明	不明	破片	－	1	骨片？
35	SB227	カマド	灰	タニシ？	－	殻軸	－	1	
35	SB227	カマド	灰	不明	不明	破片	－	+	貝殻
37	SB230	カマド	灰	不明	不明	破片	－	5	貝殻？・骨片？
40	SB243	カマド	灰	不明	不明	破片	－	7	骨片？
－	SD03	No.1	－	カエル	烏口骨	－	R	1	
－	SD03	No.1	－	カエル	橈尺骨	近位端	L	1	
－	SD03	No.1	－	不明	不明	破片	－	+	骨片

中原遺跡出土の動物遺体（年代順）．○は不確実な資料．

No.	遺構	年代	貝類				魚類			両生類	鳥類	哺乳類		不明
(DNH)		*	ﾀﾆｼ?	貝類A	貝類B	種不明	ﾆｼﾝ科	コイ科	種不明	カエル	種不明	ｲﾉｼｼ?	種不明	骨片
2	SB77	古墳			●	●	●				●		○	
4	SB04	古墳	●			●		●					○	
13	SB22	古墳		●		●								○
19	SB33	古墳			●	●						●		
20	SB33	古墳	●			●					○		●	
26	SB39	古墳											○	
33	SB51	古墳											○	
35	SB53	古墳											○	
42	SB73	古墳						●		○	●		○	
44	SB77	古墳								○			○	
45	SB77	古墳				●		●	○					●
52	SB112	古墳		●										
68	SB130	古墳	●											●
75	SB304	古墳								○				●
76	SB306	古墳		●										
36	SB56	7C後半											○	
10	SB21	7C末	●			●							○	
11	SB21	7C末				●								●
12	SB21	7C末												●
22	SB37	7C末												●
23	SB37	7C末												●
25	SB37	7C末				●					○		●	
29	SB43	7C末-8C初	●			●								●
29	SB43	7C末-8C初												
18	SB31	7C末-8C前半											●	
8	SB17	8C前半				●							○	
51	SB109	8C前半	○						○					
66	SB127	8C前半											●	
67	SB127	8C前半	○							●				●
69	SB137	8C前半		●									○	
58	SB120	8C第２	●			●								
16	SB30	9C第１											●	
40	SB62	9C前半											●	
48	SB106	9C前半							○					
49	SB106	9C前半											○	
77	SB309	?												●
検出試料数 **			6(2)	4	2	12	1	3	(3)	1(3)	2(2)	1	6(12)	10(1)

*「第１」：第１四半期，　** 検出試料数の（　）は不確実な資料

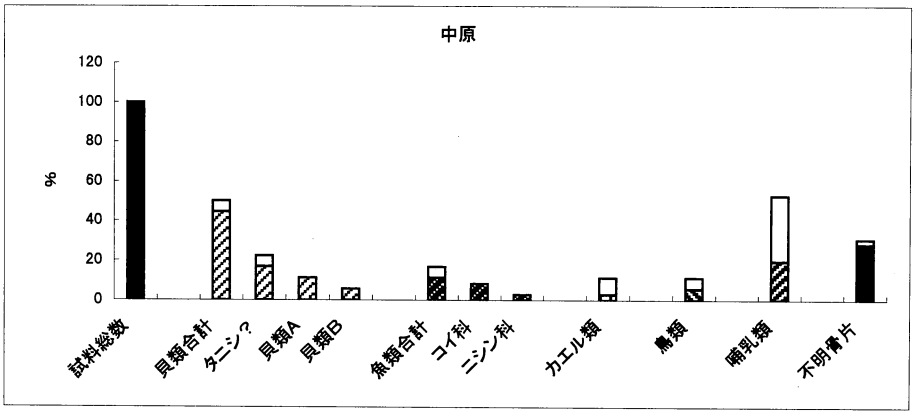
芝宮遺跡出土の動物遺体. ○は不確実な資料.

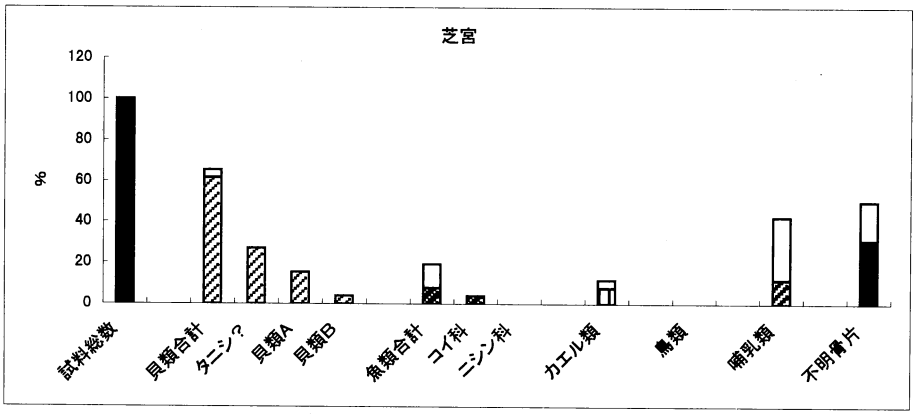
No.	遺構	貝類				魚類		両生類	哺乳類	不明
(DSY)		タニシ？	貝類A	貝類B	種不明	コイ科	種不明	カエル	種不明	骨片
1	SB06									●
2	SB06									●
5	SB91	●			●	●	○	●	●	
6	SB140								○	
7	SB140				●					●
8	SB140				●					●
10	SB140	●	●		●		○	○	○	
11	SB146	●	●		●				○	
12	SB146								●	
13	SB158				●				○	
14	SB158	●		●	●					●
15	SB158				●					○
17	SB171	●			●					
18	SB172				●		●			
19	SB175				●					○
20	SB175						○		○	
22	SB181				●				○	
27	SB185						○		●	●
31	SB201	●			●				○	
32	SB201		●		●				○	
33	SB204		●		●					●
34	SB204									○
35	SB227	●			●					
37	SB230				○					○
40	SB243									○
－	SD03							●		●
検出試料数		7	4	1	16(1)	1	1(4)	2(1)	3(8)	8(5)

＊検出試料数の(　)は不確実な資料

中原・芝宮遺跡群における動物遺体の出現頻度．上：中原遺跡，下：芝宮遺跡．

	試料総数	貝類合計	タニシ？	貝類A	貝類B	魚類合計	コイ科	ニシン科	カエル類	鳥類	哺乳類	不明骨片	貝類種不明	魚類種不明
中原	100	44.4	16.7	11.1	5.6	11.1	8.3	2.8	2.8	5.6	19.4	27.8	33.3	0.0
		5.6	5.6	0.0	0.0	5.6	0.0	0.0	8.3	5.6	33.3	2.8	0.0	8.3
芝宮	100	61.5	26.9	15.4	3.8	7.7	3.8	0.0	7.7	0.0	11.5	30.8	65.4	3.8
		3.8	0.0	0.0	0.0	11.5	0.0	0.0	3.8	0.0	30.8	19.2	0.0	15.4





貝・骨類が検出された試料総数を100とした場合の，各種遺体検出試料数の比率．白抜きは不確実な資料．

第２節　芝宮中原遺跡より出土した炭化種実炭化樹種

吉川 純子(古代の森研究舎)

１．概要と試料

芝宮遺跡群，中原遺跡群は佐久盆地の北部，浅間山の南斜面の台地上に位置する，７世紀初頭から９世紀末まで継続する集落の住居跡群である。芝宮遺跡で検出された遺構は竪穴住居245軒，掘立柱建物跡約90棟，中原遺跡は竪穴住居140軒，掘立柱建物跡約90棟で，東山道に関連した計画的な集落の可能性が指摘されている。

芝宮遺跡で採取された竈38点，竈周囲の床2点，溝中の炭化物層4点のうち，同定可能な炭化物を検出したのは，竈10点，溝中２点であった。中原遺跡では竈52点，竈周囲の床３点，土器内土３点，遺構内土２点，住居跡覆土18点のうち，同定可能な炭化物を検出したのは竈12点，竈周囲３点，土器内２点，遺構内１点，住居跡覆土８点であった。

２．同定結果

芝宮遺跡から出土した炭化種実の一覧を表１に示す。表は試料番号順ではなく，遺構の種類別に作表されている。芝宮遺跡からは木本のオニグルミ，モモ，草本のイネ，アワ，キビ，オオムギ，ムギ類，イネ科Ａ，イネ科Ｂ，スゲ属Ａ，スゲ属Ｂ，マメ科近似種，シロザ近似種，穀類塊，担子菌，不明Ａ，Ｂを出土した。ここでは、出土数，種類ともに竈中の灰層からが最も多く，No..24ではアワを，No.26ではイネとアワを多量に出土している。これらの他には穀類のキビ，オオムギ，その他オニグルミ，イネ科Ａ，スゲ属Ａ，スゲ属Ｂ，マメ科近似種、シロザ近似種，穀類塊，担子菌を出土した。出土数の多いNo.24，No.25，No.26及びNo.22は同じ住居(SB181)である。この住居以外の試料は，竈の覆土，火床下ともに少ない。また，SD3は水成堆積かどうか不明であるが大きな溝で，炭化物の集積層があり，モモ破片，イネ，ムギ類，雑草と思われるイネ科Ｂ，シロザ近似種，穀類塊を出土している。

中原遺跡から出土した炭化種実一覧は表２に示した。同じく遺構の種類別に作表されている。中原遺跡からは木本のオニグルミ，ヤマブドウ，モモ，草本のイネ，アワ，エノコログサ属，キビ，オオムギ，コムギ，ムギ類，イネ科Ａ，イネ科Ｃ，ホタルイ属，スゲ属Ｂ，マメ科近似種，穀類塊，不明Ｃを出土した。中原遺跡では芝宮遺跡と違い，竈中の灰層からはオニグルミとイネのみで，炭化種実をほとんど出土せず，竈の手前，穴の中，床直上からの出土が多かった。出土が多かった試料４点のうち，竈手前のNo.64，No.65，穴の中のNo.59は同じ住居(SB125)で，床直上のNo.49はSB106であった。No.64，No.65ではアワの出土が圧倒的に多く，わずかにイネを出土する。しかし，同じ住居の穴の中からはオオムギ，コムギ，ムギ類の軸を出土している。異なる住居であるSB106の床上試料では穀類のイネ，キビ，オオムギなどを同程度出土し，アワは少ない。また土器内からはオニグルミ，モモの破片と穀類塊を，住居覆土からはオニグルミ，ヤマブドウ，イネ，ムギ類，穀類塊をわずかに出土した。

３．炭化種実の出土傾向

まず，竈などからの炭化種実の出土が少数の住居に限られ，ほとんどの住居で出土をみないという特徴がある。このことに関しては，竈が住居の壁際にあり，焚き口や煙道，排気口などといった燃焼効率を良くする構造をもつことが多く，住居の中心付近の床上にある炉よりも燃え残りである炭化物が少ないのではないかということが推測される。また，その構造ゆえ，住居の使用中は燃焼を良くするために頻繁に竈の清掃，燃え残りの除去を行っていたのではないだろうか。こうして考えると，住居群の中で炭化種実が残っていた芝宮遺跡のSB181は住居の使用を突如中止したか，あるいは放棄した際に最後に調理した燃え

かすが残っていたとも考えられる。

SB125の穴中の灰からはオオムギ，コムギとともに１点ではあるがムギの穂軸が出土している。住居内で脱穀しないムギを床の穴に保管するということは，やや考えにくく，住居内の貯蔵穴における食品の長期保管は湿度，虫害などから見ても疑問視されている。脱穀後の麦藁に果実がついていたものが住居内の穴にあったところに加熱されたと見た方が無難であろう。現時点で著者には竈と穴の距離などの位置関係がはっきりしないが，おそらく湿気よけのため穴に麦藁をしき，中に当座に使用する食品あるいはそのほかの生活必需品などを入れていたのではないだろうか。いずれも穎を伴わない胚乳のみなので，あるいは調理をするためにその穴にムギ類を置いた可能性も考えられる。穴の中の灰層に他の土粒子などが混ざっていないとすれば，穴に火が入ったという可能性が高く，焼失家屋である可能性は高くなる。竈の手前の灰層と穴の中の灰層にかなりの土粒子やその他の物質が混入していたとすれば，流水その他による二次堆

表１．芝宮遺跡より出土した炭化種実一覧表

			竈中の灰層					
分類群名	学名	出土部位	5	22	24	25	26	37
オニグルミ	*Juglans ailanthifolia* Carr.	内果皮破片					6	
モモ	*Prunus persica* Batsch.	核破片						
イネ	*Orysa sativa* L.	胚乳焼け膨れ				2	2	
		胚乳破片				1	10	
		穎破片				1	2	
アワ	*Setaria italica* Beauv.	種子		1	50	7	25	
キビ	*Panicum miliaceum* L.	胚乳焼け膨れ		1		1	8	
オオムギ	*Hordeum vulgare* L.	胚乳完形					1	
ムギ類	*Hordeum* or *Triticum*	胚乳破片				1		
イネ科Ａ	Gramineae A	種子		1			3	
イネ科Ｂ	Gramineae B	節						
スゲ属Ａ	*Carex* A	果実				1		
スゲ属Ｂ	*Carex* B	果実					1	
マメ科近似種	cf. Leguminosae	種子破片						
シロザ近似種	*Chenopodium* cf. *album* L.	種子						2
穀類塊	Carbonized grain		1	4	13	9	10	
担子菌	Basidiomycota	菌核						
不明Ａ	Unknown A							
不明Ｂ	Unknown B							

			竈の覆土			火床下	溝中炭化物層	
分類群名	学 名	出土部位	4	6	10	3	SD3-1	SD-2
オニグルミ	*Juglans ailanthifolia* Carr.	内果皮破片						
モモ	*Prunus persica* Batsch.	核破片					1	
イネ	*Orysa sativa* L.	胚乳焼け膨れ						
		胚乳破片					4	
		穎破片						1
アワ	*Setaria italica* Beauv.	種子						
キビ	*Panicum miliaceum* L.	胚乳焼け膨れ						
オオムギ	*Hordeum vulgare* L.	胚乳完形						
ムギ類	*Hordeum* or *Triticum*	胚乳破片					2	
イネ科Ａ	Gramineae A	種子		1				
イネ科Ｂ	Gramineae B	節					2	4
スゲ属Ａ	*Carex* A	果実						
スゲ属Ｂ	*Carex* B	果実						
マメ科近似種	cf. Leguminosae	種子破片		1				
シロザ近似種	*Chenopodium* cf. *album* L.	種子					1	
穀類塊	Carbonized grain		12	1	1		1	
担子菌	Basidiomycota	菌核			1	1		
不明Ａ	Unknown A						1	
不明Ｂ	Unknown B							1

表2．中原遺跡より出土した炭化種実一覧表

分類群名	学名		竈中の灰層 24	竈中の灰層 25	竈中の灰層 58	火床上 18	火床上 36	竈の覆土 9	竈の覆土 15	竈の覆土 52	竈の覆土 53	竈の覆土 62	竈の覆土 66	竈の覆土 74
オニグルミ	*Juglans ailanthifolia* Carr.	内果皮破片				3		1						1
ヤマブドウ	*Vitis coignetiae* Pulliat	種子												
モモ	*Prunus persica* Batsch.	核破片												
イネ	*Orysa sativa* L.	胚乳完形												
		胚乳焼け膨れ			1	1			1					
		胚乳破片												
		未熟胚乳												
アワ	*Setaria italica* Beauv.	胚乳焼け膨れ												
エノコログサ属	*Setaria*	種子												
キビ	*Panicum miliaceum* L.	胚乳焼け膨れ												
オオムギ	*Hordeum vulgare* L.	胚乳完形												
コムギ	*Triticum aestivum* L.	胚乳完形												
ムギ類	*Hordeum* or *Triticum*	胚乳破片												
		軸												
イネ科A	Gramineae A	種子												
イネ科C	Gramineae C	種子												
ホタルイ属	*Scirpus*	果実												
スゲ属B	*Carex* B	果実												
マメ科近似種	cf. Leguminosae	種子								1		1		
穀類塊	Carbonized grain		1	1		3	1				1		1	
不明C	Unknown C													

分類群名	学名		竈手前 64	竈手前 65	竈付近 63	穴灰 59	床上灰 49	炭化物 17	土器内土 47	土器内土 56	住居の覆土 14	住居の覆土 27	住居の覆土 28	住居の覆土 46	住居の覆土 57	住居の覆土 73
オニグルミ	*Juglans ailanthifolia* Carr.	内果皮破片						1	1		1	2				
ヤマブドウ	*Vitis coignetiae* Pulliat	種子														4
モモ	*Prunus persica* Batsch.	核破片							1							
イネ	*Orysa sativa L.*	胚乳完形					3							1		
		胚乳焼け膨れ	4	10			26									
		胚乳破片					45							3		
		未熟胚乳	1				6									
アワ	*Setaria italica* Beauv.	胚乳焼け膨れ	83	177			1									
エノコログサ属	*Setaria*	種子					8									
キビ	*Panicum miliaceum* L.	胚乳焼け膨れ	4	2			57									
オオムギ	*Hordeum vulgare* L.	胚乳完形				10	22									
コムギ	*Triticum aestivum* L.	胚乳完形	5			11	8									
ムギ類	*Hordeum* or *Triticum*	胚乳破片					17									1
		軸				1										
イネ科A	Gramineae A	種子					6									
イネ科C	Gramineae C	種子				4										
ホタルイ属	*Scirpus*	果実					2									
スゲ属B	*Carex* B	果実					1									
マメ科近似種	cf. Leguminosae	種子														
穀類塊	Carbonized grain				1					3			1		1	
不明C	Unknown C						1									

積と見ることができる。このような推定を行うにはやはり、発掘時の堆積状況を細かく観察して記録しておく必要がある。

中原遺跡のSB106において，炭化種実を出土した場所が竈からではなく床面であることについては，SB125と同様の条件で焼失家屋の可能性，あるいは灰層に土粒子などがかなり混ざっているとすれば，流水や住居放棄後に壁面が壊れるなどといった何らかの外的原因で竈から床面に炭化物が移動したと考えてもよいかもしれない。

土器内からの炭化物の検出については，土器が堆積する際に土壌とともに紛れ込んだと考えられる。№47で検出されたオニグルミとモモの出土部位はいずれも食用としない部位である。

４．竈からみた古墳時代後期から平安時代における穀物摂取の状況

炭化した穀類というのは大変限られた情報で，古代の食糧事情を語るにはあまりにも少ないデータであるといわざるを得ない。なぜなら，住居を離脱する際には食料をほとんど残さないであろうし，急な火事や，流行病などで撤去もせずに火をかけると言うことでもなければ，生活状況がそのまま残されているという状態は保存されないからである。しかし，残されたわずかな情報には少しでも当時の食生活を類推する手がかりが無いだろうか。

芝宮・中原遺跡においては，イネのほかに，乾燥地で作りやすいオオムギ，アワ，キビなどが比較的高率で検出された。オオムギ，アワ，キビはイネと違って乾燥地で栽培することができ，アワは痩せた土地でも生育する。水利用，火山性土壌，気候などを考慮した場合，水を引くことをさほど必要としない作物が着目されるであろう。また，中部地方という土地で秋の訪れが早いとすれば，イネは春遅く蒔き，秋早く取り入れることのできる早稲を栽培し，裏作としてのコムギや痩せ地でも収量の上がるアワなどが重要となってくるとも考えられる。

土師文化期から須恵文化期の長野付近の穀類ほかの炭化物出土例は，長野県東筑摩郡宗賀村平出遺跡（米，モモ，マメ類），南安曇郡温村楡遺跡（米，籾），同郡穂高町矢原明神境内遺跡（ 米，小麦，大麦？，粟），長野市箱清水旧高等女学校敷地遺跡（米，大麦？），山梨県東山梨郡八幡村大工八反田江曽原遺跡（米，大麦，小麦，マメ類，モモ），同郡日下部町七日子遺跡（米，モモ），同郡同町日下部中学校校庭第９号遺跡（モモ）などがある。このうち，長野県南安曇郡穂高町矢原明神境内遺跡からは飯となった米粒塊中に少数の大麦，小麦，粟が混ざっているので，米の中にこれらを混ぜて飯を炊いていたであろうと直良信夫氏は推測している(直良1956)。だが，アワやキビ，オオムギ，コムギなどの雑穀が実際にこの地域でイネの不足分を充足させるために栽培されていたのか否かは，炭化したにぎりめしでも出土しない限りは憶測の域を出ない。

寺沢薫氏は，弥生時代に西日本ではイネの選択が早い段階に行われ，イネへの依存がより大きくなったのに対して，東日本では弥生時代を通じて古墳時代以降も畑作の穀類の比重がイネと変わらず高かった事は，単に地域的な問題には留まらず，火山灰台地や山地遺跡といった立地環境の関係であろうと論じている(寺沢1986)。本遺跡では、立地条件が当てはまり、実際に雑穀類の比重が高いというデータが得られたのは興味深い。本州中部地域全般でこのような食体系が存在したかどうかは，今後各時代各地域で炉や竈あるいは住居跡の覆土等から炭化物を検出し，データを蓄積することによってより鮮明に見えて来るであろう。

５．芝宮中原遺跡で出土した炭化種実の形態記載

オニグルミ（Juglans ailanthifolia Carr.）：芝宮では，竈中の灰，溝の炭化物集積層から，中原遺跡では竈の火床上，覆土，土器内土，住居の覆土から検出されている。完形であれば縦長の楕円形で，表面はややでこぼこし，細い筋が走っている。割ると内果皮壁は構造が無く緻密である。内果皮は非常に堅く，

乾燥にも比較的強く，火にあっても炭化物として残りやすい種類である。従って，どの時代からも出土例が多い。

ヤマブドウ（Vitis coignetiae Pulliat）：芝宮では出土せず，中原では住居の覆土から検出されている。ブドウ属にはさまざまな種類があるが，日本の自生種の中で今でも好んで食用とされている。種子は先端が突出し，末端がややくぼんだ心形で，腹面には2個の穴，背面にはすじがある。比較的堅く炭化すると残りやすい。

モモ（Prunus persica Batsch.）：芝宮では溝の炭化物集積層から，中原では土器内土から検出されている。検出された核は小さい破片であるが，オニグルミ同様緻密で堅い壁構造で，核の表面には深い溝と穴がある。

イネ（Oryza sativa L.）：芝宮では竈の灰層，溝の炭化物集積層から，中原では竈の灰層，火床上，覆土，手前，床上灰層，住居の覆土から検出されている。

アワ（Setaria italica Beauv.）：芝宮では竈の灰層から，中原では竈手前，床上灰層から検出されている。胚乳は1.8～1.4㎜で炭化すると特に丸くなり，基部に小さく胚の部分がへこむ。乾燥高温を好み，栽培が短期間で痩せ地でも育つため，火山の山麓で洪積層の台地などではよく栽培されていたと思われる。

エノコログサ属（Setaria）：中原の床上灰層から検出されている。アワの原種とされているが，田畑に多い雑草で穀類とともに住居内に持ち込まれることが多いと思われる。出土した種子は炭化して膨れても0.7㎜とアワより細長く小さい。

キビ（Panicum miliaceum L.）：芝宮では竈の灰層から，中原では竈手前と床上灰層から検出されている。胚乳はアワに似ていて2.2㎜とアワより一回り大きく，やや縦に長い傾向がある。胚は楕円形でアワよりかなり大きい。

オオムギ（Hordeum vulgare L.）：芝宮では竈の灰層から，中原では穴の灰と床上の灰層から検出されている。胚乳は細長い楕円形で，基部には縦に長い胚があり，背面には一本の筋がある。穎は検出されなかったため、脱穀後の胚乳だけを持ち込んだ可能性が高い。オオムギはやや乾燥した土地を好み，夏に高温多雨の日本では冬作の穀類である。

コムギ（Triticum aestivum L.）：中原の竈手前と，穴の灰，床上灰層から検出されている。胚乳はやや長い楕円形で厚さがあり，全体に丸い感じである。基部には楕円形の胚，背面には一本の筋がある。オオムギ同様穎は検出されなかった。コムギはやや保水力のある土地を好み，従って水田の裏作として栽培されることが多い。

ムギ類（Hordeum or Triticum）：破片または焼け膨れが激しく，オオムギかコムギかの区別が付かない個体をムギ類とした。軸は果実をつける部分である。

イネ科A（Gramineae A）：種子の長さは1.5㎜，細く長く，胚も細く長い。

イネ科B（Gramineae B）：イネ科の低い草本の茎の節部分と思われる。栽培種か自生種かは不明である。

イネ科C（Gramineae C）：種子の長さは2.8㎜で細長く，胚も細長い。

ホタルイ属（Scirpus）：中原の床上灰層から検出されている。果実の長さは1.6㎜，黒色で光沢があり，扁平，円形で先端が尖った果実である。炭化しているかどうかが見分けにくいが，ここで検出されたものは熱でめくれ上がっているため，炭化しているとわかる。水田などの水がある場所に生育するカヤツリグサ科の雑草である。

スゲ属A（Carex A）：果実の長さは2.4㎜，2面で俵型をしている。

スゲ属Ｂ（Carex B）：果実の長さは1.6㎜，やや焼け膨れており、２面と思われるが、宝珠型になっている。

マメ科近似種（cf.Leguminisae)Z：芝原では竈の覆土から，中原でも竈の覆土から検出されている。種子は6㎜で楕円形であるが，厚みがないため，雑草と思われる。

シロザ近似種（Chenopodium cf.album L.）：芝原では竈の灰層と溝の炭化物集積層から検出されている。種子は円形，扁平で光沢はなく，黒色で堅いため，炭化しているかどうかの見分けが難しい。ここで検出したものはやや焼けただれているようである。畑などやや乾燥した荒れ地に生育する雑草である。

穀類塊：穀類や種子などの焼けただれて原形をとどめていないものである。

担子菌：木材や土壌に生育する菌類の総称で，ここで出ている菌核は小さい球体であるため，樹皮などに張り付いているものの，胞子を生産する器官と思われる。

不明Ａ：5～10㎜前後の丸くてやや大きい果実の皮破片と思われる。

不明Ｂ：1.4㎜で楕円形である。

不明Ｃ：1.8㎜で楕円球に突起がついている。

引用文献

直良信夫　1956「日本古代農業発達史」さえら書房　p.309

寺沢　薫　1986「弥生時代の食料－畑作物」「季刊考古学第14号－特集弥生人は何を食べた　か」p.23-27

第３節　芝宮遺跡群の炭化種実・植物珪酸体の分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

芝宮遺跡（長野県佐久市所在）は、今から約13,000年前に浅間山から噴出した第一軽石流（荒牧，1986）によって形成された地形面上に立地する。この地形面は、小河川によって開析をうけて段丘化し、「田切り地形」と呼ばれる景観を作っている。本遺跡では、古墳時代の住居跡等が検出されている。このなかで、調査区Ｉ区内のSB－12住居跡で覆土中から鉄製クワが出土した。このクワの下位より種実が集中して認められ、ワラ状のものも伴なっていた。

今回、この種実の種類とワラ状繊維の素材を自然科学的調査により明らかにすることが、財団法人長野県埋蔵文化財センター佐久調査事務所から要望された。これを受けて、同センターと当社で協議行った。その結果、種実の種類を種実同定、ワラ状繊維の素材を灰像分析により調査することとした。ただし、室内で試料を観察したところ、ワラ状の繊維や炭化した種実は明瞭に認められなかった。そこで、ワラ状の繊維を包含していた土壌を対象として、植物珪酸体分析を実施し、混在していたワラ状繊維に関する情報を得ることにした。また、種実については、土壌を水洗選別することによって炭化種実を見つけだし、同定を行うことにした。

１．試料

試料は、住居跡SB-12より採取された土壌１点である。試料は、黒褐色の細粒砂であり、細礫・軽石・炭化物が認められるが、灰や炭化種実は明瞭に認められなかった。

２．分析方法

１）種実同定

土壌試料をオーブンにて風乾させた後、飽和食塩水中に投入してかき回し、浮いてきた炭化物を回収する。また、低部に残った泥については0.5mmの篩に通し残渣を回収する。これらをあわせて水洗し、その後風乾させる。これを双眼実体顕微鏡下で観察し、種実遺体を同定計数する。

２）植物珪酸体分析

試料中の植物珪酸体は、過酸化水素水（H_2O_2）塩酸（HCl）処理、超音波処理（70w，250KHz，１分間）、比定法、重液分離法（ポリタングステン酸ナトリウム，比重2.5）の順に物理化学処理を行って分離濃集する。これを適度に希釈し、カバーグラス上に滴下して乾燥させる。プリュウラックスで封入してプレパラートを作製し、400倍の光学顕微鏡

表１　植物珪酸体分析結果

種類（Taxa）　試料番号	SB—12 覆土
組織片	
キビ族短細胞列	4
イネ科葉部単細胞珪酸体	
キビ族キビ属	6
キビ族エノコログサ属	37
キビ族（その他）	41
タケ亜科	2
ヨシ属	4
ウシクサ族ススキ属	63
イチゴツナギ亜科	10
不明キビ型	78
不明ヒメシバ型	63
不明ダンチク型	46
イネ科葉身機動細胞珪酸体	
キビ族	2
ウシクサ族	10
不明	5
合　計	
組織片	4
イネ科葉部短細胞珪酸体	350
イネ科葉身機動細胞珪酸体	17
検　出　個　数	821

下で全面を走査する。その間に、出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部短細胞に由来した植物珪酸体（以下、短細胞珪酸体と呼ぶ）および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ）を、近藤・佐瀬（1986）の分類に基づいて同定・計数する。今回は、特に植物珪酸体を含む組織片の産状に注目した。検出した種類（Taxa）と検出個数は、一覧表に示す。

３．結果および考察

分析によって洗い出された残渣中には同定可能な種実遺体は検出されなかった。残渣中には、浅間山起源のものと思われる軽石や微細な炭化物からならなるが、種類を特定できる炭化物は含まれていなかった。

一方、植物珪酸体を含む組織片は、キビ族短細胞列がわずかに認められる。この他に、植物珪酸体を含まない、珪化した繊維で構成される組織片も認められる。この組織片は、キビ族短細胞列周辺の組織と良く似ている。

また、単体の植物珪酸体も認められ、その中では短細胞珪酸体が多い。検出される種類は、キビ族、タケ亜科、ヨシ属、ウシクサ族（ススキ属など）、イチゴツナギ亜科、不明である。その中では、キビ族、ススキ属、不明キビ型、不明ヒゲシバ型、不明ダンチク型の検出個数が多い。

ワラ状繊維を直接調査できなかったが、ワラ状の繊維を包含していた土壌中からキビ族短細胞列などの組織片が認められた。これらの組織片は、ワラ状繊維に由来した物と思われる。これより、このワラ状の繊維はキビ族に由来する可能性がある。なお、キビ族にはキビ、ヒエ、アワなどの畑作物が含まれるが、検出された植物珪酸体から栽培種か否かの判別はつかなかった。そのため、このワラ状繊維が栽培されたものを使ったのか、周囲に生育していた野生種を使ったのかは不明である。今後同様な事例を検出した場合は、現地でワラ状繊維のみを採取した上で、灰像分析を行うことが必要である。

＜引用文献＞

荒枚重雄（1986）浅間火山.「日本の地質３　関東地方」，Ｐ.218－220.，共立出版.
近藤錬三・佐瀬隆（1986）植物珪酸体分析，その特性と応用．第四紀研究，25，Ｐ.31－64.

第４節　芝宮遺跡におけるリン酸・カルシウム分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

芝宮遺跡では、埋葬施設の可能性が指摘されている平安時代の土坑が検出されている。本報告では、土坑覆土の土壌分析を行い、遺体埋納の可能性を検証する。

ところで、日本のように気候が温暖多雨で、土壌の排水性が良好かつ酸性が強い場所では、土壌中の有機物は分解されやすく、分解した水溶性成分は土壌中を下方へ流亡してしまう。つまり、土坑に遺体や人骨などが埋納されていたとしても、このような環境条件下では長期間その形状を保つことは稀と考えられる。とくに、火山灰を起源とする台地上の土壌ではこのような環境が多く、本遺跡土壌もこの可能性が高い。そこで、今回は人を含む動物の骨に多量に含まれ、しかも土壌中で流亡しにくいとされるリン酸分析（竹迫，1981）を選択する。さらに、より多角的に検証するために、リン酸とともに骨の主成分であるカルシウムについても分析を行う。

なお、土壌中を流亡しにくいリン酸も年月の経過に伴い、当時の含有量をそのまま保持することはできない。したがって、含量対比のための対照試料が必要とされる。今回は対照試料として、地山から土壌を採取した。

１．試料

試料は、土坑（SK-1080）の覆土であり、東西断面から試料を採取した。西側の第１列からは、１－１層、１-1a層、１-2a層、１-3a層、１-3b層の５点、同じく東の第２列の上部から２－１層、２－２層、２－2a層、２－３層の４点を採取した。対照試料は、土坑東側の地山上層から１点、土坑底部の地山から１点を採取した。以上、分析試料の総計は11点である。なお、各層より採取した試料には、№１～11の通し番

表１　芝宮遺跡のリン・カルシウム分析結果

試料名		リン酸含量 P_2O_5mg／g	カルシウム含量 Ca_0mg／g	土色・土性
土坑SX―1080	１―１層	1.35	7.19	10YR3／2黒褐・SL～L
	１―1a層	1.76	5.63	10YR3／2黒褐・SL～L
	１―2a層	2.02	7.35	10YR2／2黒褐・L
	１―3a層	0.83	5.47	10YR4／4褐・SL～L
	２―１層	1.07	4.74	10YR3／3暗褐・SL～L
	２―２層	2.12	4.62	10YR2／2黒褐・SL～L
	２―2a層	2.56	7.02	10YR2／2黒褐・SL～L
	２―３層	1.51	4.59	10YR2.5／2黒褐・SL～L
対照試料				
地山（上層）		0.90	5.35	7.5～10yr4／6褐・SL～L
地山（土坑SX―1080底部）		0.71	4.13	10TR4.5／6褐～黄褐・SL

注：(1)土色：マンセル表色系に準じた新版標準土色帖（農林省農林水産技術会議監修、1967）による。
(2)土色：土壌調査ハンドブック（ペロドジスト懇談会編、1984）の野外土性の判定法による。

号が付されていたが、土層名で呼称する方が解りやすいため、層名を試料とした。

２．分析方法

リン、カルシウムの測定は、土壌標準分析・測定法委員会（1986)、土壌養分測定法委員会（1981)、京都大学農学部農芸化学教室（1957）などを参考として、以下の要領で行った。

試料を風乾後、軽く粉砕して2.0㎜の篩を通過させる（風乾細土試料)。風乾細土試料の水分を加熱減量法（105℃、５時間）により測定する。風乾細土試料2.00gをケルダールフラスコに秤とり、はじめに硝酸（HNO_3）5mlを加えて加熱分解する。放冷後、過塩素酸（$HClO_4$）10mlを加えて再び加熱分解を行う。分解終了後、蒸留水で、100mlに定容してろ過する。ろ液の一定量を試験管に採取し、リン酸発色液を加えて分光光度計によりリン酸（P_2O_5）濃度を測定する。別にろ液の一定量を試験管に採取し、干渉抑制剤を加えた後に原子吸光光度計によりカルシウム（Ca_0）濃度を測定する。これら測定値と加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりのリン含量（P_2O_5mg／g）とカルシウム含量（Ca_0mg／g）を求める。

３．分析結果

リンカルシウム分析の結果を表１に示す。

対照試料のリン酸含量は、地山上層0.90P_2O_5mg／g、土坑底部0.71P_2O_5mg／gであり、カルシウム含量は、地山上層5.35Ca_0mg／g、土坑底部4.13Ca_0mg／gを示した。

西側の第１列のリン酸含量は、１－１層1.35P_2O_5mg／g、１-1a層1.76P_2O_5mg／g、１-2a層2.02P_2O_5mg／g、１-3a層0.83P_2O_5mg／g、１-3b層1.13P_2O_5mg／gを示し、東側柱状面では、２－１層1.07P_2O_5mg／g、２－２層2.12P_2O_5mg／g、２-2a層2.56P_2O_5mg／g、２－３層1.51P_2O_5mg／gを示した。１-3a層以外は対照試料よりもわずかに高い値を示し、断面中央の１-1a層、１-2a層、２－２層および２-2a層で高い傾向であった。

西側の第１列のカルシウム含量は、１－１層7.19Ca_0mg／g、１-1a層5.63Ca_0mg／g、１-2a層7.35Ca_0mg／g、１-3a層5.47Ca_0mg／g、１-3b層3.66Ca_0mg／gを示し、東側の第２列では、２－１層4.74Ca_0mg／g、２－２層4.62Ca_0mg／g、２－２a層7.02Ca_0mg／g、２－３層4.59Ca_0mg／gであった。断面中央の１-2a層と２-2a層でわずかに高い傾向を示した。

４．考察

土壌中に本来含まれるリン酸量、いわゆる天然賦存量についての報告事例（Bowen,1983;Bolt,Bruggenwert,1980;川崎ほか,1991;天野ほか,1991）によれば、天然賦存量の上限は約3.0P_2O_5mg／g程度と推定される。また、人為的な影響を受けた既耕地では5.5P_2O_5mg／g（黒ボク土の平均値、川崎ほか,1991）という報告例がある。これまでの当社における分析調査では、6.0P_2O_5mg／g前後の値を越える場合には骨片が混在していることもあり、人骨によりリン酸富化であることが明らかに認められている。一方、カルシウム含量の天然賦存量は普通1～50Ca_0mg／g（藤貫,1979）とされるが、その範囲はリン酸よりも明らかに大きい。したがって、これを著しく越える数値が得られた場合に、カルシウムの富化を確実にできるがこのようなケースはごくまれである。

今回の分析結果では、リン酸、カルシウムの天然賦存量を著しく越える試料はなく、両成分を多く含む物質の痕跡は指摘できない。しかし、土坑中央の1a層、２層および2a層では、対照試料よりリン酸含量が高く、また、土坑表層の１層や土坑底部の３層より高い傾向にある。長年にわたる遺体成分が流失することで、土壌中のリン酸、カルシウム含量が低下することを考慮するならば、土坑中央に遺体、骨が埋葬された可能性が考えられる。

<引用文献>

天野洋司・太田　健・草場　敬・中井　信（1991）中部日本以北の土壌型別蓄積リンの形態別計量．農林水産省農林水産技術会議事務局編「土壌蓄積リンの再生循環利用技術の開発」，p.28：36.

Bowen,H.J.M.（1983）環境無機化学 －元素の循環と生化学－．浅見輝男・茅野充男訳，297p.，博友社［Bowen,H.J.M.（1979）Environmental Cemistry of Elements］.

Bolt,G.H.・Bruggenwert,M.G.M.（1980）土壌の化学．岩田進午・三輪睿太郎・井上隆弘・陽　捷　行訳，309p.，学会出版センター［Bolt,G.H. and Bruggenwert,M.G.M.（1976）SOIL CHEMISTRY］，p.235：236.

土壌標準分析・測定法委員会編（1986）「土壌標準分析測定法」．354p.，博友社.

土壌養分測定法委員会編（1981）「土壌養分分析法」．440p.，養賢堂.

藤貫　正（1979）カルシウム．地質調査所化学分析法，50，p.57：61，地質調査所.

川崎　弘・吉田　澪・井上恒久（1991）九州地域の土壌型別蓄積リンの形態別計量．農林水産省　農林水産技術会議事務局編「土壌蓄積リンの再生循環利用技術の開発」，p.23：27.

木下　忠（1981）埋甕－古代の出産習俗．考古学選書18，262p.，雄山閣.

京都大学農学部農芸化学教室編（1957）農芸化学実験書 第１巻．411p.，産業図書.

農林省農林水産技術会議事務局監修（1967）新版標準土色帖.

ペドロジスト懇談会編（1984）土壌調査ハンドブック．156p,，博友社.

第５節　中原遺跡群の植物珪酸体分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

中原遺跡（長野県佐久市所在）は、今から約13,000年前に浅間山から噴出した第一軽石流（荒牧，1986）によって形成された地形面上に立地する。同地形面上には、古墳時代の集落を中心とした芝宮遺跡も立地する。この地形面は、小河川によって開析をうけて段丘化し、いわゆる「田切り地形」と呼ばれる景観を呈す。

本遺跡では、古墳時代後期～平安時代とされる集落が検出された。この集落の生産域として田切り地形に挟まれた谷部が想定され、そこでの稲作が予想されている。

今回、この谷部での稲作の検証を目的とした自然科学的調査が、財国法人長野県埋蔵文化財センター佐久調査事務所から要望された。これを受けて、同センターと当社で協議した結果、谷部の土壌を対象とし

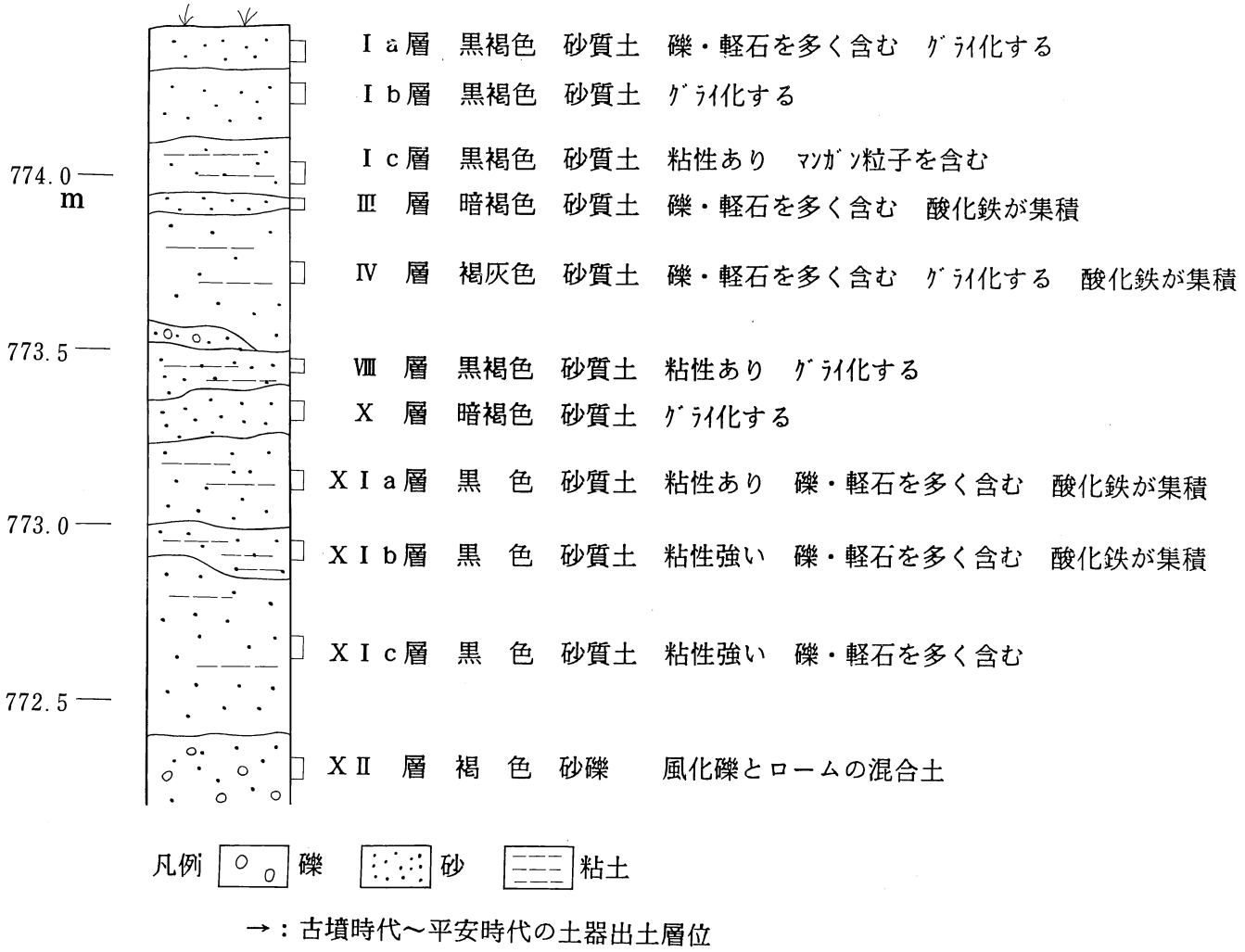


図１　調査地点の模式柱状図

発掘時の調査所見をもとに作成した。

て植物珪酸体分析を行いイネ属の産状を調査し、稲作の消長について検証することとした。

１．試料

試料を採取した地点では、田切り谷部の代表的な堆積層が観察される（図１）。本地点では、風化レキとロームの混合土の上位に砂質の土壌が堆積している。発掘調査時の所見から、これらの層はＸⅡ層～Ｉa層の11層に区分されている。このうち、Ｉａ層は表土である。W層は、層相から流水下での堆積が推定されている。Ⅷ層とＸ層の境界からは、古墳時代～平安時代の土器が出土している。また、ＸＩb層・ＸＩa層・Ⅳ層・Ⅲ層では全体に酸化鉄あるいは酸化鉄とマンガンが集積し、Ⅲ層・Ｉb層・Ｉa層ではグライ化が認められる。　試料は、ＸⅡ層～Ｉａ層の11層より各層１点ずつ、合計11点を採取した。分析調査に当たっては、これら11点を分析試料とした。

２．分析方法

試料中の植物珪酸体は、過酸化水素水（H_2O_2）塩酸（ＨＣ１）処理、超音波処理（70ｗ，250ＫＨz，１分間)、沈定法、重液分離法（ポリタングステン酸ナトリウム，比重2.5）の順に物理化学処理を行って分離濃集する。これを適度に希釈し、カバーグラス上に滴下して乾燥させる。プリュウラックスで封入してプレパラートを作製し、400倍の光学顕微鏡下で全面を走査する。その間に、出現するイネ科葉部（葉

表１　植物珪酸体分析結果

種　類（Taxa）　　層名	Ｉa	Ｉb	Ｉc	Ⅲ	Ⅳ	Ⅷ	Ｘ	ＸＩa	ＸＩb	ＸＩc	ＸⅡ
イネ科葉部短細胞珪酸体											
イネ族イネ属	10	7	4	7	5	6	16	2	—	—	—
キビ族ヒエ属	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
キビ族エノコログサ属	28	10	9	13	2	16	15	8	6	9	—
キビ族（その他）	56	92	25	34	18	71	60	38	33	46	1
タケ亜科クマザサ属	—	1	1	—	—	—	—	—	—	—	—
タケ亜科（その他）	6	6	2	3	3	3	4	2	—	1	—
ヨシ属	13	69	21	48	32	49	59	20	23	29	—
ウシクサ族コブナグサ属	2	—	2	2	3	1	—	—	—	—	—
ウシクサ族ススキ属	112	147	85	36	36	124	135	53	48	67	—
イチゴツナギ亜科	160	144	70	44	23	120	90	37	60	101	4
不明キビ型	189	191	78	88	81	176	179	99	95	133	4
不明ヒゲシバ型	80	108	49	40	48	172	98	56	35	41	1
不明ダンチク型	92	90	33	34	22	36	63	27	32	33	2
イネ科葉身機動細胞珪酸体											
イネ族イネ属	22	36	51	140	49	25	21	15	—	—	—
キビ族	11	2	16	6	2	4	2	1	6	5	—
タケ亜科クマザサ属	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—
タケ亜科（その他）	6	2	5	2	—	4	6	2	3	5	4
ヨシ属	3	1	3	9	3	8	3	—	4	4	—
ウシクサ族	47	24	28	37	20	24	28	39	42	55	—
シバ属	2	1	1	1	4	—	—	1	—	—	—
不明	28	34	21	35	30	47	47	47	50	47	—
合　計											
イネ科葉身機動細胞珪酸体	748	865	381	349	273	774	719	342	332	460	

身と葉鞘）の葉部短細胞に由来した植物珪酸体（以下、短細胞珪酸体と呼ぶ）および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ）を、近藤佐瀬（1986）の分類に基づいて同定計数する。今回は、特に植物珪酸体を含む組織片の産状に注目した。

結果は、検出された種類とその個数の一覧表で示す。また、検出された植物珪酸体の出現傾向から生育していたイネ科植物について検討するために、植物珪酸体組成図を作成した。各種類（Taxa）の出現率は、短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体の各珪酸体毎に、それぞれの総数を基数とする百分率で求めた。なお、検出個数が短細胞珪酸体で200個未満、機動細胞珪酸体で100個未満の試料は組成が歪曲する恐れがあるため、植物珪酸体組成を求めず、出現した種類を＋で示すにとどめた。

３．結果

計数結果および各地点の植物珪酸体組成の層位的変化を表１と図２に示す。イネ科集部起源の植物珪酸体は、ＸＩ層を除いて、良好に検出される。保存状態は、短細胞珪酸体で良いが、機動細胞珪酸体では悪く、表面に多数の小孔（溶食痕）が生じているものが認められる。

栽培植物とされるイネ族イネ属（以下、イネ属とする）は、ＸＩb層で出現し、上位の層で連続して短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体が検出される。概して、機動細胞珪酸体の検出個数が多い。

ＸＩa層～Ⅲ層では、短細胞珪酸体が0.6～2.2％、機動細胞珪酸体が14.3～60.6％で、出現率が増加する傾向が認められる。Ｉｃ層～Ｉａ層では、短細胞珪酸体が0.8～1.3％とはぼ同様である。しかし、機動細胞珪酸体は18.8～41.8％であり、上位に向かって減少する傾向が認められる。

このほかに、タケ亜科（クマザサ属など）、ヨシ属、ウシクサ族（コブナグサ属ススキ属など）、イチゴツナギ亜科などが認められる。このうち、各層ではススキ属、イチゴツナギ亜科の短細胞珪酸体が多産する。また、ヨシ属が連続して認められ、タケ亜科があまり認められない。

各試料では、植物珪酸体の他に珪藻化石も認められる。

４．考察

本地点では、風化レキとロームの混合土であるＸⅡ層の上位にＸＩｃ層～Ｉａ層の砂質の土壌が堆積しており、Ⅷ層とＸ層の境界からは、古墳時代～平安時代の土器が出土している。また、ＸＩｂ層・ＸＩａ層・Ⅳ層・Ⅲ層では全体に酸化鉄あるいは酸化鉄とマンガンが集積し、Ⅷ層・Ｉｂ層・Ｉａ層ではグライ化が認められる。現在では、酸化鉄やマンガンの集積は乾田型の水田などの地表水が繰り返し地下に浸透する場所の土層断面に認められる。また、グライ化した土壌は、地下水位が一時的に停滞した層位に認められる。これらの点と現地所見から推定する限り、現在の表土であるＩａ層まで地下水位があったこと、Ⅷ層・Ｉｂ層では地下水位が一時的に停滞したこと、ＸＩｂ層・ＸＩａ層・Ⅳ層・Ⅲ層の各層が堆積した後で地下水位が低下して地表水が繰り返し地下に浸透したことが考えられる。Ⅵ層は、層相から流水下での堆積が推定されているが、酸化鉄が集積していることから、堆積後に水が引いて地表水が繰り返し地下に浸透したと孝えられる。

以後の考察では、上記の点を留意して進める。なお、堆積環境については、今後土壌学的に土層を観察して土層の形成過程や土壌化の様子を調査したり、珪藻分析により水質や流水の有無を確認する必要がある。

本地点では、イネ属の短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体がともにＸＩａ層より出現し、上位の層で連続して認められた。また、本地点ではＸＩａ層～Ⅲ層で短細胞珪酸体が0.6～2.2％、機動細胞珪酸体が14.3～60.6％、Ｉｃ層～Ｉａ層で短細胞珪酸体が0.8～1.3％、機動細胞珪酸体が18.8～41.8％の出現率を示した。現在の水田耕土におけるイネ属の出現率としては近藤（1988）の調査例があり、イナワラ堆肥連用（８年

間、500kg／10ａ／年）の水田土壌表層ではイネ属機動細胞珪酸体の出現率は16％を示すとされている。この点を考慮すれば、本地点ではＸＩｂ層が堆積した頃から、稲作が行われたと考えられる。この層は、古墳時代末期～平安時代の土器が出土したＸ層とⅧ層の境界より下位にあることから、それ以前から谷部では稲作が行われていたと考えられる。堆積環境に関する情報を考慮すれば、地下水位が低下した後に、現代の乾田型水田に近い状態で稲作が行われたことが考えられる。また、Ⅳ層は流水下で堆積した後で水が引き、稲作が行われた可能性がある。ただし、Ｉｃ層～Ｉａ層ではイネ属機動細胞珪酸体の出現率が低下している。この要因として、稲作の様態などが関連すると思われるが、現段階では特定することはできない。今後、本地点周辺の谷部内で畦畔など水田に関わる遺構の検出が期待される。これらの考古学的情報の収集や、珪藻分析などを含めた分析調査を実施することにより、今回の見解を改めて検討する必要がある。

なお、この谷部ではＸＩｃ層の頃以降にヨシ属やススキ属、キビ族、タケ亜科、イチゴツナギ亜科が生育していたと思われる。これらの種類の中では、ススキ属やイチゴツナギ亜科の生育する割合が高かったのかもしれない。また、各層からはヨシ属が連続して認められる。ヨシ属は、現在では湿潤な場所に生育することが多い。したがって、谷部は湿潤な環境にあったと患われる。これは、谷部内で地下水位が地表に近かったことや流水があったことと調和的な結果である。また、ＸⅡ層では植物珪酸体の産状が不良であり、キビ族やイチゴツナギ亜科がわずかに認められたにすぎない。したがって、この産状は当時のイネ科植物相を明確に反映しているとは考えにくく、イネ科植物相を推定することは困難である。あるいは、一時的な土壌の流入があったのかも知れない。

＜引用文献＞

近藤錬三（1983）植物珪酸体（プラントオパール）分析の農学および理学への応用．十勝農学談話会誌，24，ｐ.66－83.

近藤錬三・佐瀬　隆（1986）植物珪酸体分析，その特性と応用．第四紀研究，25，ｐ.31－64.

近藤錬三（1988）十二遺跡の植物珪酸体分析．鋳師屋遺跡群十二遺跡―長野県北佐久郡御代田町十二遺跡発掘調査報告書，ｐ.377－383，御代田町教育委員会.

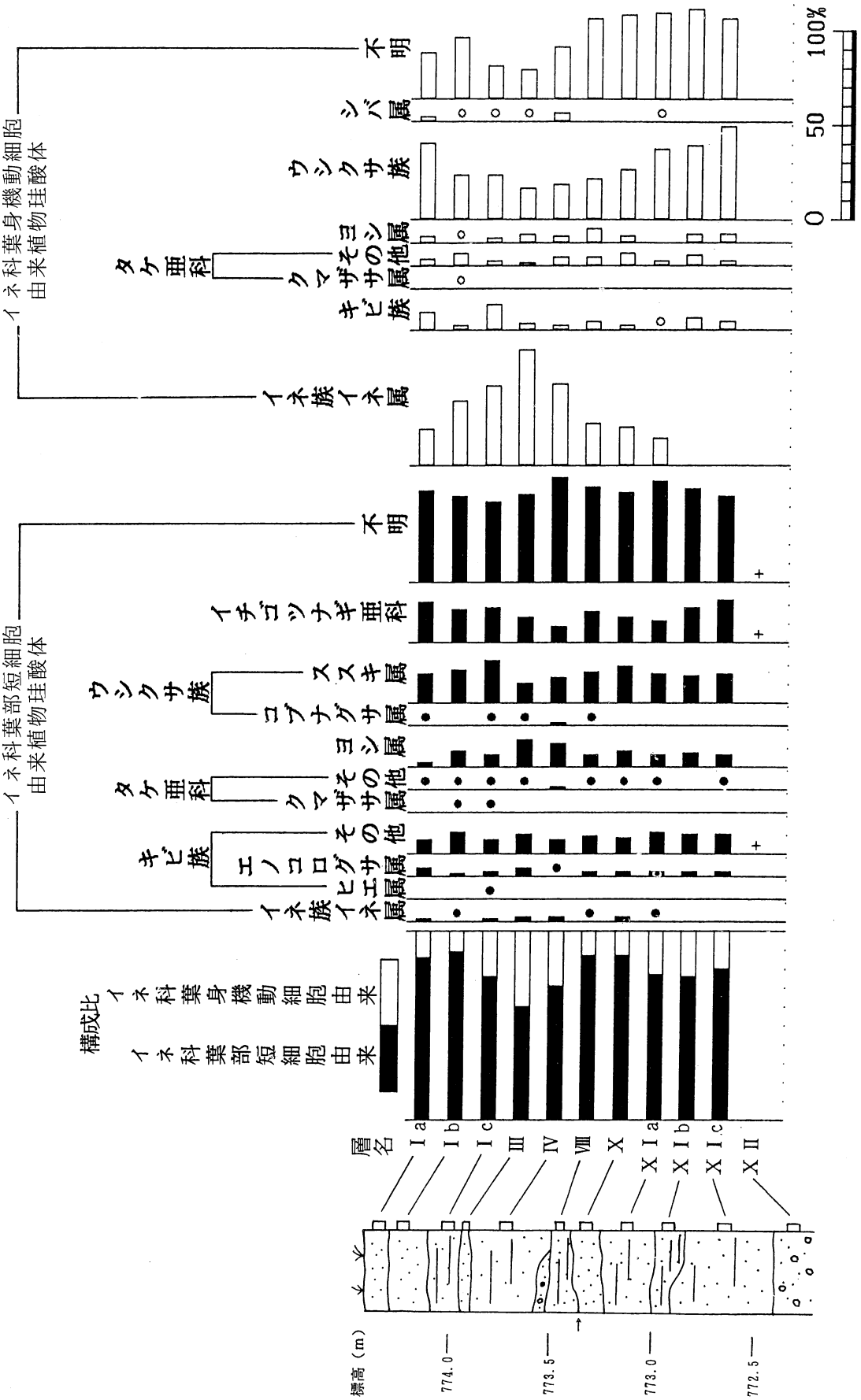


図２　調査地点の植物珪酸体組成
出現率は、イネ科葉部短細胞珪酸体とイネ科葉身機動細胞珪酸体の総数をそれぞれ基数として百分率で算出した。なお、●○は１％未満、＋はイネ科葉部短細胞珪酸体の総数が200個未満の試料で出現した種類をあらわす。

第６節　中原遺跡におけるカマド構築材の鉱物分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

中原遺跡は、千曲川に右岸から流れ込む濁川の上流域に立地する。今回の発掘調査により、古墳時代から平安時代の住居跡が多数検出された。また、時代は不明であるが粘土採掘坑も検出されている。

今回の自然科学分析調査は、住居跡のカマド構築材の土が粘土採掘坑の粘土に由来するかを検証するために重鉱物分析を行う。

(1)　試料

試料は、カマド構築材から採取された試料３点と粘土採掘坑（SX-53）から採取された試料２点である。カマド構築材のうちSB-112の１層から採取された試料を「サンプル№１」、SB-69から採取された試料を「サンプル№２」、SB-44の床下粘土から採取された試料を「サンプル№３」とする。また、採掘坑粘土のうち９層から採取された試料を「サンプル№４」、８層から採取された試料を「サンプル№５」とする（以下、試料名は№をもって示す）。分析時の観察では、№１および№２はにぶい黄橙色シルト混り砂、№３はにぶい橙色砂混りシルト、№４はにぶい橙色礫混りシルト、サンプル№５は灰白色シルトである。なお、№５はその岩質や色調などの特徴により火山ガラスからなるブロック状堆積物の可能性がある。

(2)　分析方法

試料約40gに水を加え超音波洗浄装置により分散、250メッシュの分析篩を用いて水洗し、粒径1／16mm以下の粒子を除去する。乾燥の後、篩別し、得られた粒径1／4mm-1／8mmの砂分をポリタングステート（比重約2.96に調整）により重液分離、重鉱物を偏光顕微鏡下にて250粒に達するまで同定する。同定の際、不透明な粒については、斜め上方からの落射光下で黒色金属光沢を呈するもののみを「不透明鉱物」とする。「不透明鉱物」以外の不透明粒および変質等で同定の不可能な粒子は「その他」とする。

(3)　結果

結果を表２・図１に示す。

№５は分析の過程で得られた重鉱物は非常に少なく、軽鉱物が非常に多かった。得られた軽鉱物を観察したところ、ほとんどがスポンジ状によく発泡した塊状の軽石型火山ガラスであった。したがって、№５はテフラ由来の火山ガラスからなるブロック状堆積物と考えられる。重鉱物組成では「その他」を除くとほとんどが斜方輝石であることや本遺跡の立地などから、このテフラは浅間火山を給源とする可能性が高い。浅間火山は後期更新世から完新世にかけて活発に活動し、多くのテフラが噴出している。しかし、これらのテフラは噴出年代が異なっても給源が同じために、斑晶鉱物やテフラ由来の火山ガラスなどの種類や性質などが類似しているものが多い。したがって、周辺地域のテフラの産状を把握した上で現地の対比を行う必要がある。

№１～４は比較的類似する鉱物組成を示す。斜方輝石をもっとも多く含み、少量の単斜輝石や不透明鉱物を伴う。なお、№３では、不透明鉱物が比較的多い。また、各試料に含まれる軽鉱物を観察したところ、№１～３には多量の軽石型火山ガラスが認められた。一方、№４には変質粒が多く火山ガラスは非常に少なかった。

(4)　考察

本遺跡の北には浅間火山があり、本遺跡周辺は浅間火山の第１軽石流堆積物に覆われている（荒牧,1993)。第１軽石流の時期を含めた浅間火山の軽石流期は、早川（1991）の図によるとおよそ16800年前から13600年前と考えられている。その堆積物は軽度に固結した軽石質火山灰・火山礫・火山岩塊などで、岩石は普通輝石しそ輝石デイサイトである（荒牧,1993)。主要な重鉱物は斜方輝石・単斜輝石・磁鉄鉱である（河内・荒牧,1979)。

今回の分析結果から、No.１～４の重鉱物組成は周辺地質と調和的で、No.４の採掘坑粘土とNo.１～３のカマド構築材の重鉱物組成は類似する。一方、軽鉱物組成ではNo.４の採掘坑粘土の試料に含まれる火山ガラスは非常に少ない。したがって、No.４の粘土がそのままカマド構築材として使われたとは考えにくい。しかし、他の火山ガラスを含む土や砂と混ぜられてカマド構築材として使われた可能性は否定できない。

No.５についても、No.１～３より鉱物粒の風化が進んでいるために、そのままカマド構築材として使われたとは考えにくい。しかし、他の土に混ぜられてカマド構築材として使われた可能性は否定できない。

表２　　中原遺跡の重鉱物分析緒果

試料番号	カンラン石	斜方輝石	単斜輝石	角閃石	不透明鉱物	その他	今計
1	1	150	26	17	17	54	250
2	0	142	27	19	19	62	250
3	0	119	24	56	56	51	250
4	0	146	14	24	24	66	250
5	0	111	4	3	3	132	250

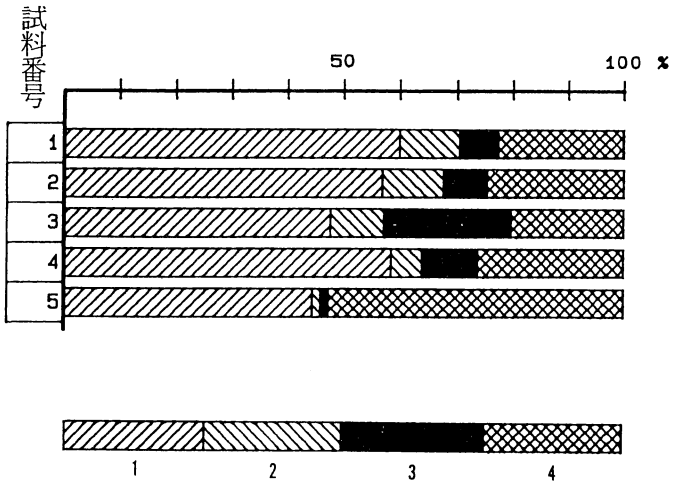


図１　中原遺跡の重鉱物組成
1:斜方輝石．2:単斜輝石．3:不透明鉱物．4:その他．

第７節　中原遺跡におけるの炭化木器の樹種同定

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

中原遺跡は、千曲川に右岸から流れ込む濁川の上流域に立地する。今回の発掘調査により、古墳時代から平安時代の住居跡が多数検出された。また、時代は不明であるが粘土採掘坑も検出されている。

今回の自然科学分析調査は、出土した炭化木器の用材を知るために樹種同定を行う。

(1)　試料

試料は、SB-44から出土した炭化木器３点（試料番号25，26，28）と用途不明の炭化材１点（試料番号31）である。各木器は、複数片に分かれており、接合できないものもある。そのため、全ての破片について、木材組織の観察を行う。

(2)　方法

試料の木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の割断面を作製、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡（無蒸着・反射電子検出型）を用いて木材組織の特徴を観察し、種類を同定する。

(3)　結果

樹種同定結果を表３に示す。全ての試料から複数の種類が認められた。確認された種類は、針葉樹１種類（ヒノキ属）、広葉樹５種類（オニグルミ・コナラ属コナラ亜属クヌギ節・ケヤキ・モクレン属・バラ科ナシ亜科）である。各種類の主な解剖学的特徴などを以下に記す。

・ヒノキ属（Chamaecyparis sp.）　　ヒノキ科

早材部から晩材部への移行は緩やか～やや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部に限って認められる。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞壁は滑らか、分野壁孔はヒノキ型で１～４個。放射組織は単列、１～15細胞高。

・オニグルミ（Juglans mandshurica Maxim. subsp. sieboldiana（Maxim.）Kitamura）

クルミ科クルミ属

散孔材で年輪界付近でやや急に管径を減少させる。管孔は単独および２～４個が複合する。道管は単穿孔を有し、壁孔は密に交互状に配列するる。放射組織は同性～異性型、１～４細胞幅、１～40細胞高。

・コナラ属コナラ亜属クヌギ節（Quercus subgen. Lepidobalanus sect. Cerris sp.）ブナ科

環孔材で孔圏部は１～３列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら放射状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、１～20細胞高のものと複合放射組織とがある。

・ケヤキ（Zelkova serrata（Thunb.）Makino）　　ニレ科ケヤキ属

環孔材で孔圏部は１～２列、孔圏外で急激に管径を減じたのち漸減、塊状に複合し接線斜方向の紋様をなす。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性Ⅲ型、１～10細胞幅、１～30細胞高であるが、時に60細胞高を越える。しばしば結晶を含む。

・モクレン属（Magnolia sp.）　　モクレン科

散孔材で、道管は単独および２～４個が放射方向に複合する。道管は単穿孔を有し、壁孔は階段状～対

列状に配列する。放射組織は異性型、１～２細胞幅、１～40細胞高。

・バラ科ナシ亜科（Rosaceae sibfam. Maloideae）

散孔材で、道管は単独および２～５個が複合し、晩材部に向かって道管径およびその分布密度を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性Ⅲ型～同性、１～２細胞幅、１～20細胞高。

(4)　考察

木器と考えられる試料中には、試料番号25に３種類、試料番号26および28に２種類の木材が確認された。試料番号25と26では出土した破片の一部が接合され、楕円形の皿状の器であることが確認でき、いずれもケヤキに同定された。一方、試料番号28については、試料の接合関係が不明瞭で形態に関する詳細は不明である。しかし、明瞭な加工痕が見られる炭化材は全てモクレン属であった。オニグルミとヒノキ属については、各試料中に炭化した木製品などが他にも含まれていることを示唆するが、各破片の形状からはどのような製品であったかは推定できない。また、試料番号25にはモクレン属の破片も含まれているが、その形状は試料番号28に類似し、木取りも同じである。試料が一括採取されたことを考慮すれば、同一木器に由来している可能性はある。

皿状の器は、２点とも皿底部の平らな面が柾目で、楕円形の長軸方向が木材の軸方向となる木取りである。一方、モクレン属の器は、接合関係が不明瞭で、形態に関する詳細は不明である。ケヤキやモクレン属が木製容器に使用されている例は、これまでにも数多く知られ（島地・伊東，1988；伊東，1990）、両種とも現在も同様の用途に使用される。このことから、現在見られるような用材選択が、平安時代にはすでに行われていたことが推定される。

埼玉県寿能泥炭層遺跡では、縄文時代中期～晩期、古墳時代、奈良平安時代の木製容器が出土し、その樹種同定が行われている（鈴木ほか，1984）。その結果、時代により使用樹種に違いが認められ、今回の調査で確認されたケヤキは奈良平安時代になって確認されるようになる。この背景として、使用する道具類が石か鉄か、また製作法が刳り物か挽き物か等の違いがあったと指摘されている（山田ほか，1990）。

表３　樹種同定結果

遺構名	時代	番号	用途など	樹種名
SB-44	平安時代	25	皿状の器	ケヤキ
			器？	モクレン属
			不明	オニグルミ
		26	皿状の器	ケヤキ
			不明	オニグルミ
		28	器	モクレン属
			不明	ヒノキ属
		31	不明	コナラ属コ
				バラ科ナシ

本地域においても同様の可能性があるが、木製容器の樹種に関する調査例が少なく、現時点ではその用材選択について詳細な検討を行うことは困難である。

試料番号31では、クヌギ節とナシ亜科が確認された。このうち、破片数が多いのはナシ亜科であり、最も大きな破片では丸棒状の加工が施されているように見える。一方、クヌギ節は小さな破片に１点認められたのみであった。いずれの樹種も用途などについては不明であるため、用材選択について詳細な検討を

行うことは困難である。しかし、クヌギ節については、同時期の住居構築材によく使用されていたことがこれまでの調査例（パリノ・サーヴェイ株式会社，1989,1991）から明らかとなっている。検出された遺構が焼失住居で、試料が一括採取されたことを考慮すれば、クヌギ節は住居構築材に由来している可能性もある。

＜引用文献＞

荒牧重雄（1993）浅間火山地質図．地質調査所.

早川由紀夫（1991）浅間山の噴火堆積物．日本地質学会関東支部　地質見学会ガイドブック，日本地質学会関東支部.

河内晋平・荒牧重雄（1979）小諸地域の地質　地域地質研究　報告　５万分の１図幅　東京(8)第13号. p.39.，地質調査所.

伊東隆夫（1990）日本の遺跡から出土した木材の樹種とその用途Ⅱ．木材研究・資料，26，p.91-189.

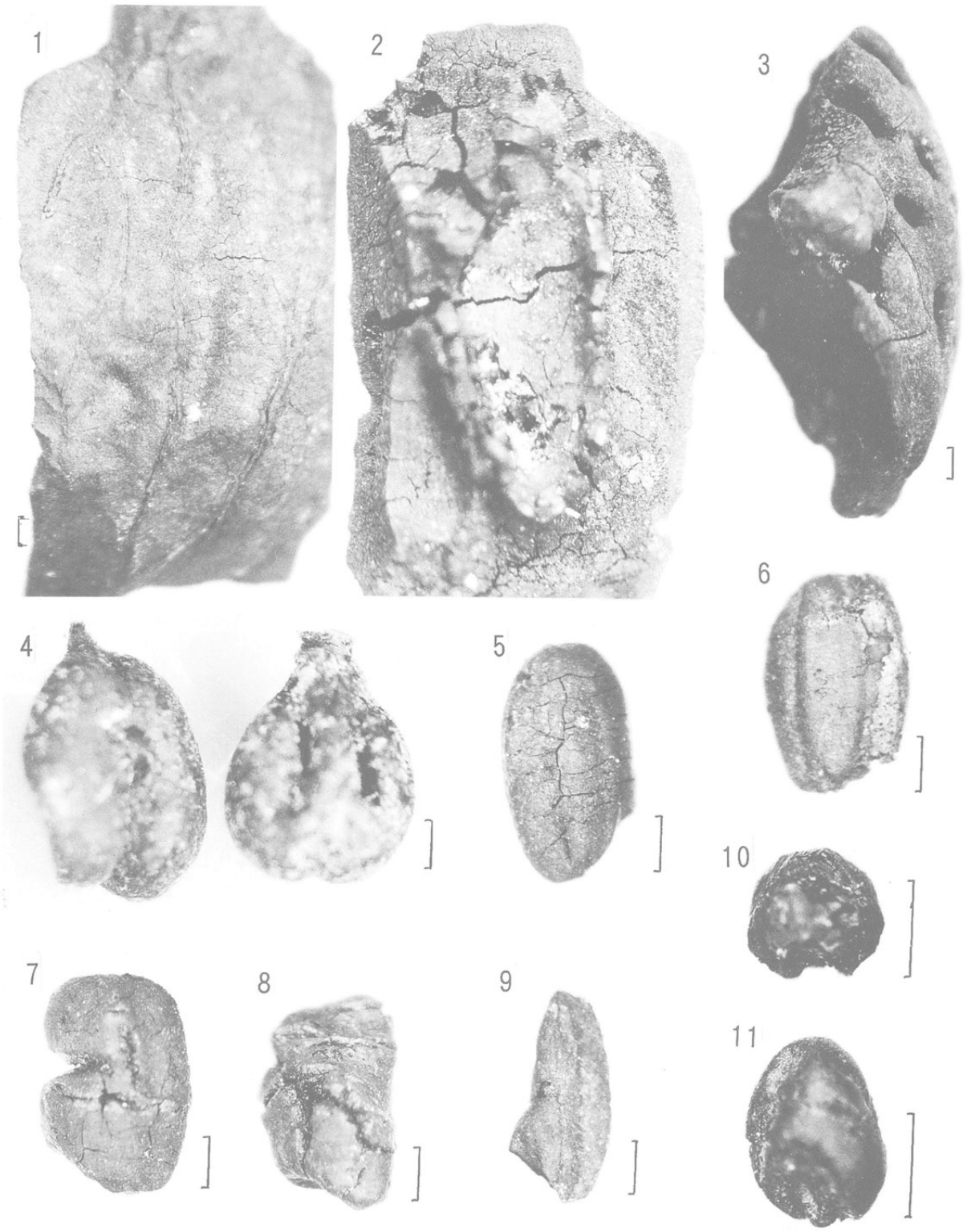
パリノ・サーヴェイ株式会社（1989）根岸遺跡出土炭化材の樹種同定.「鋳師屋遺跡群　根岸遺跡発掘調査報告書」，p.291-293，御代田町教育委員会.

パリノ・サーヴェイ株式会社（1991）関口Ａ・Ｂ遺跡出土材の樹種同定．小諸市埋蔵文化財発掘　調査報告書第15集「関口Ａ・関口Ｂ・下柏原　－長野県小諸市関口Ａ・関口Ｂ・下柏原遺跡発　掘調査報告書－」，p.245-254，小諸市教育委員会.

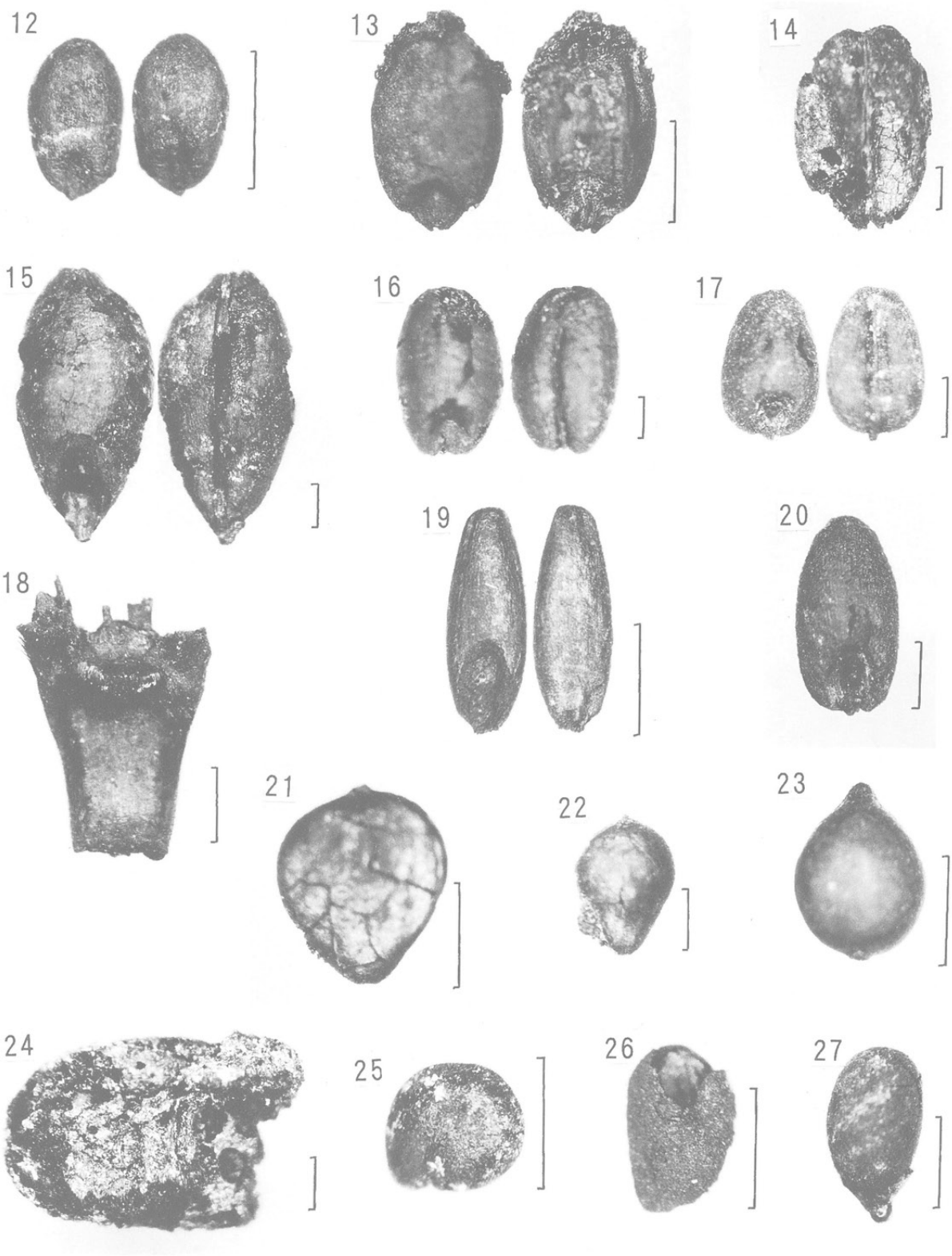
島地　謙・伊東隆夫編（1988）日本の遺跡出土木製品総覧．296p.，雄山閣.

鈴木三男・能城修一・植田弥生（1984）加工木の樹種.「寿能泥炭層遺跡発掘調査報告書　－人工遺物・総括編－」，p.699-724，埼玉県教育委員会.

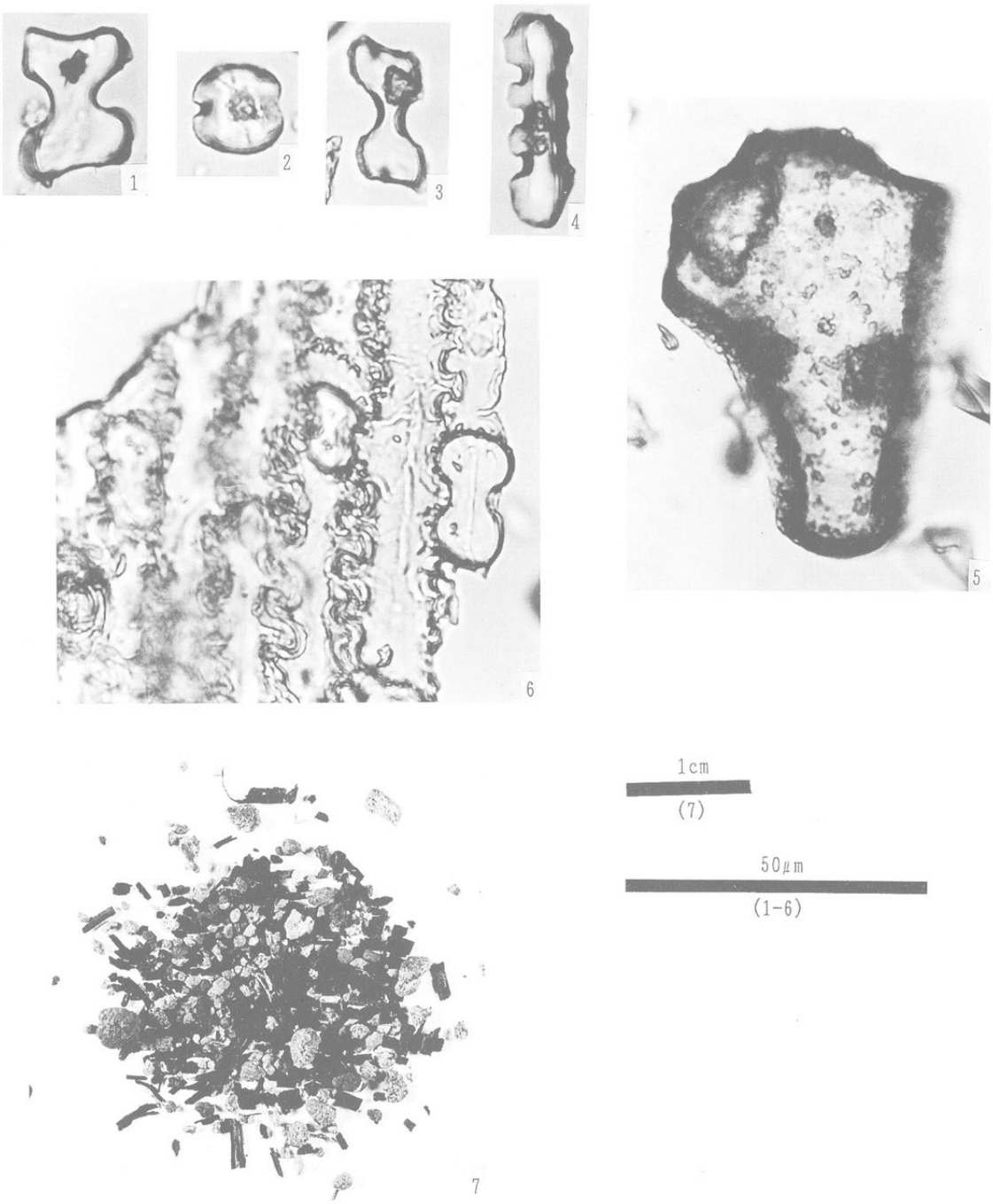
山田昌久・鈴木三男・能城修一（1990）考古学における木製遺物の樹種選択研究の現状　－木製品と樹種森林資源の選択使用樹種と工具（製作法）－．日本民具学会編「木と民具」，p.121-135，雄山閣



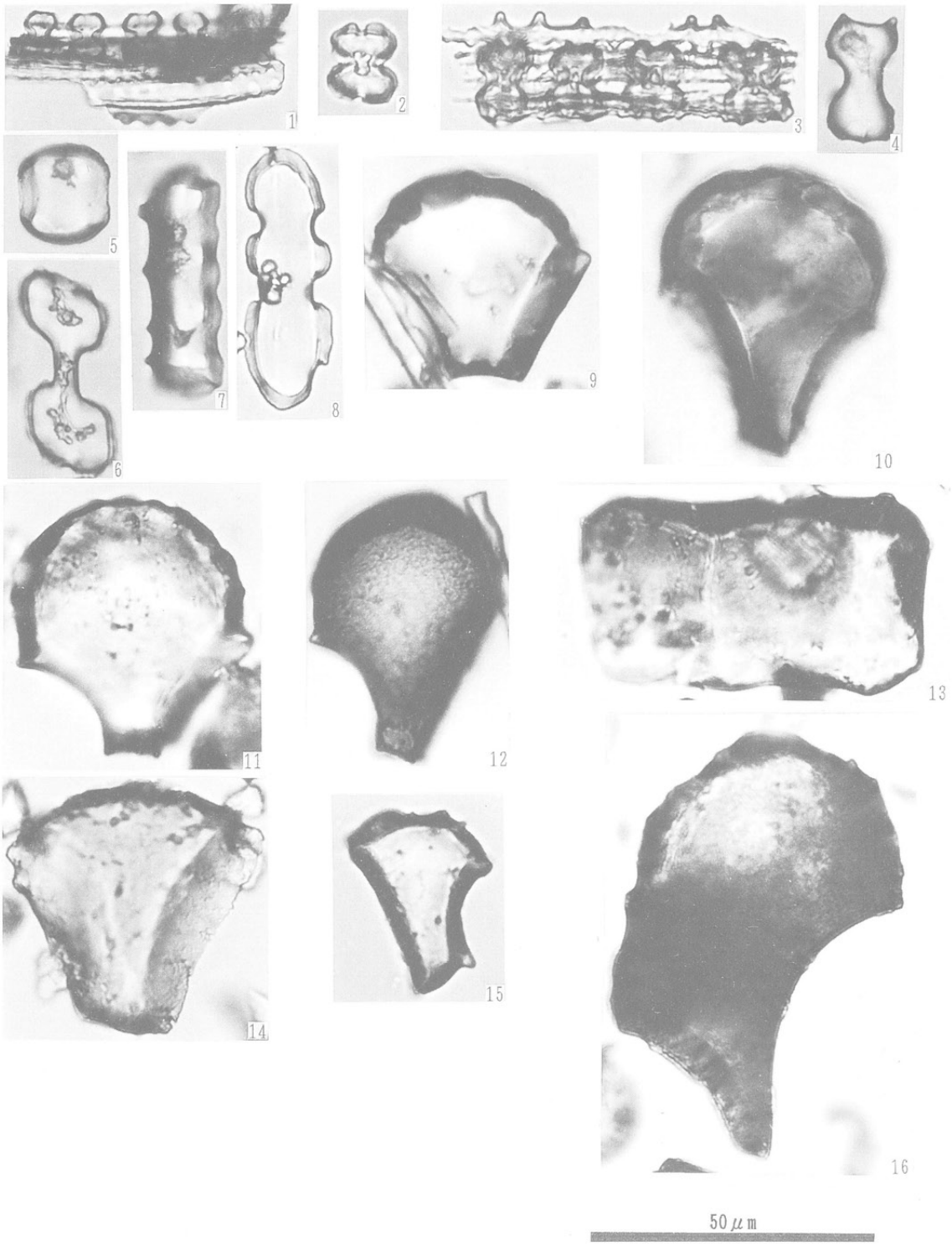
図版１．芝宮・中原遺跡出土炭化種実１
1,2.オニグルミ,内果皮破片(DSY-26) 3.モモ,核破片(DSY SD3-1) 4.ヤマブドウ,種子(DNH-73) 5,6.イネ,胚乳完形(DNH-49) 7,8.イネ,胚乳焼け膨れ(DNH-49) 9.イネ,しいな(未熟胚乳)(DNH-49) 10,11.アワ,胚乳(DSY-24)



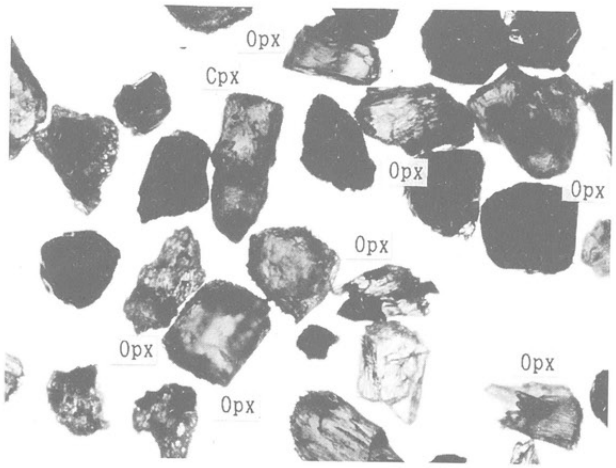
図版２．芝宮・中原遺跡出土炭化種実２
12.エノコログサ属,種子(DNH-49) 13.キビ,胚乳(DSY-22) 14.オオムギ,胚乳焼け膨れ(DNH-49) 15.オオムギ,胚乳完形(DNH-49) 16.コムギ,胚乳完形(DNH-49) 17.コムギ,未熟胚乳(DNH-49) 18.ムギ類,軸(DNH-59) 19.イネ科Ａ,種子(DNH-49) 20.イネ科Ｃ,種子(DNH-59) 21.ホタルイ属,果実(DNH-49) 22.スゲ属Ａ,果実(DSY-25) 23.スゲ属Ｂ,果実(DNH-49) 24.マメ科近似種,種子(DNH-62) 25.シロザ近似種,種子(DSY-37) 26.不明Ｂ(DSY SD-2) 27.不明Ｃ(DNH-49)



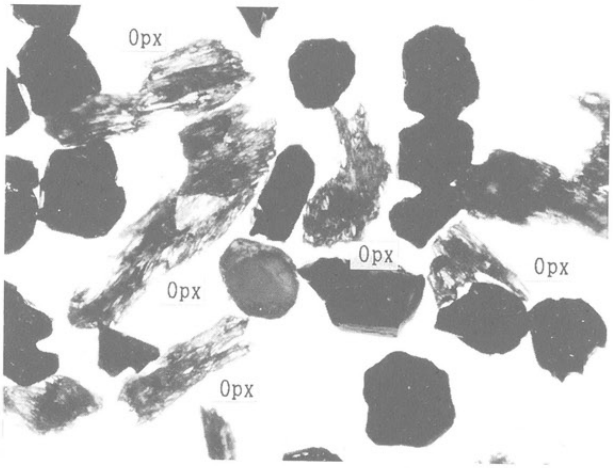
1. エノコログサ属短細胞珪酸体
2. ヨシ属短細胞珪酸体
3. ススキ属短細胞珪酸体
4. イチゴツナギ亜科短細胞珪酸体
5. ウシクサ族機動細胞珪酸体
6. キビ族短細胞珪酸体列
7. 種実分析残査の状況



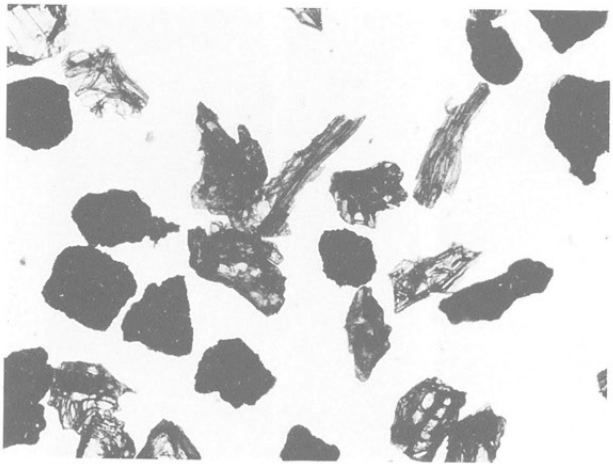
1. イネ属：短細胞列（Ⅰa層）
2. イネ属：短細胞珪酸体（Ⅰc層）
3. イネ属：短細胞列（Ⅷ層）
4. エノコログサ属：短細胞珪酸体（Ⅰa層）
5. ヨシ属：短細胞珪酸体（Ⅰa層）
6. ススキ属：短細胞珪酸体（Ⅰa層）
7. イチゴツナギ亜科：短細胞珪酸体（Ⅰa層）
8. イチゴツナギ亜科：短細胞珪酸体（XIb層）
9. イネ属：機動細胞珪酸体（Ⅰa層）
10. イネ属：機動細胞珪酸体（Ⅰc層）
11. イネ属：機動細胞珪酸体（Ⅲ層）
12. イネ属：機動細胞珪酸体（Ⅷ層）
13. キビ族：機動細胞珪酸体（XIa層）
14. タケ亜科：機動細胞珪酸体（XIa層）
15. ウシクサ族：機動細胞珪酸体（Ⅹ層）
16. ヨシ属：機動細胞珪酸体（Ⅰc層）



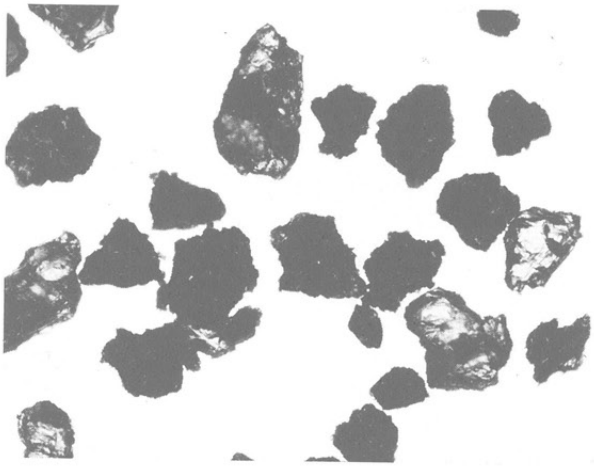
1. 重鉱物（サンプルNo. 1）



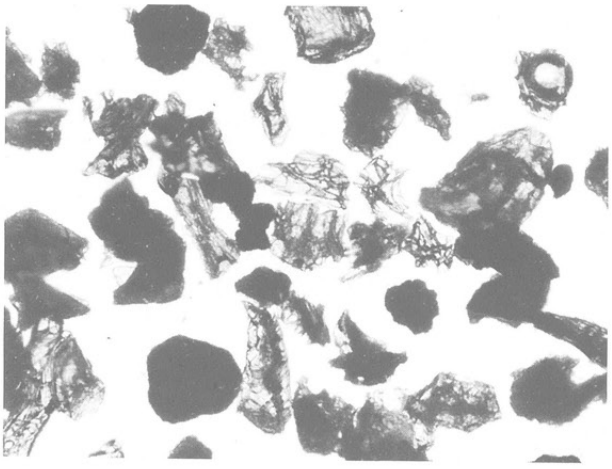
2. 重鉱物（サンプルNo. 5）



3. 火山ガラス（サンプルNo. 1）



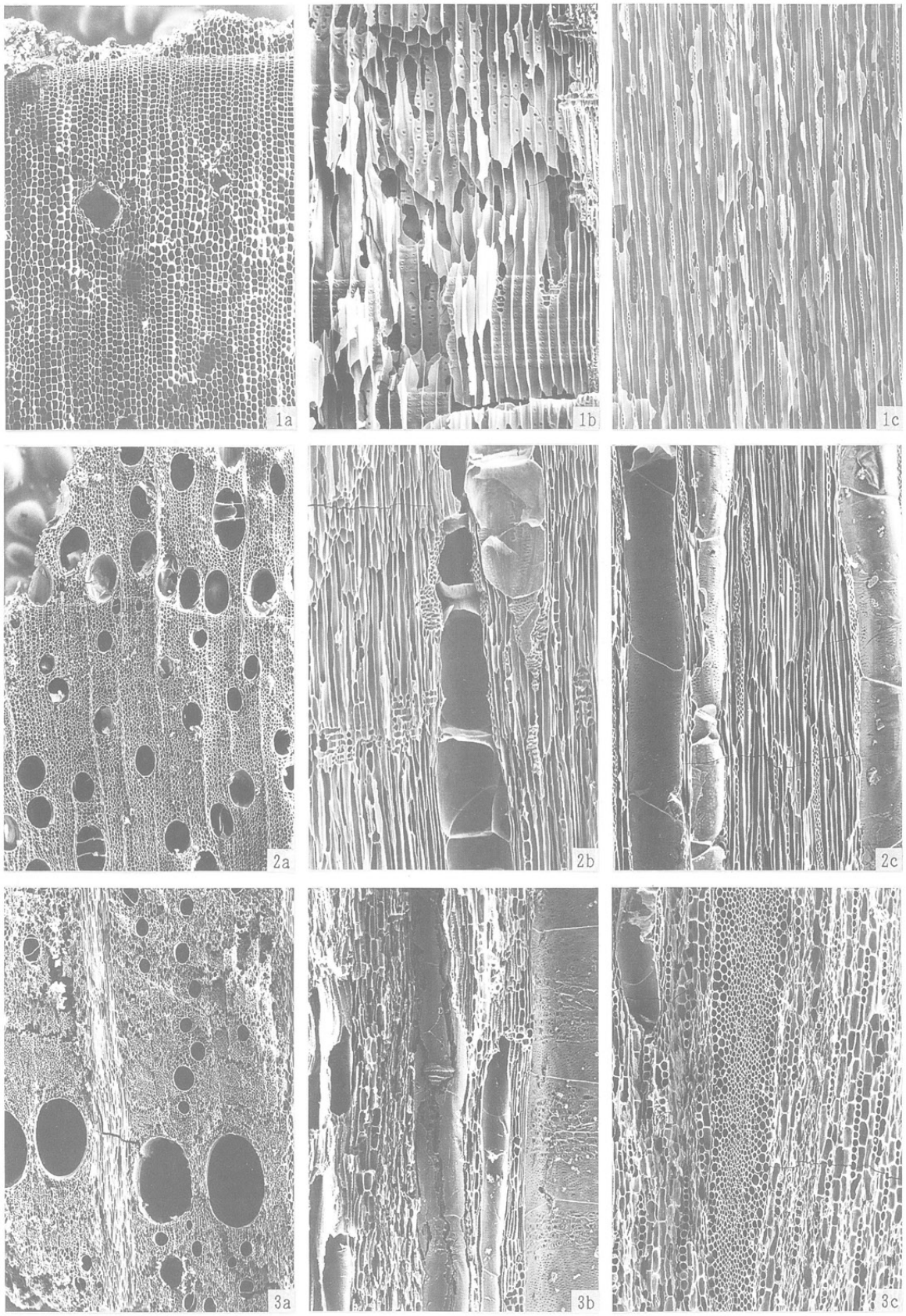
4. 軽鉱物（サンプルNo. 4）



5. 火山ガラス（サンプルNo. 5）

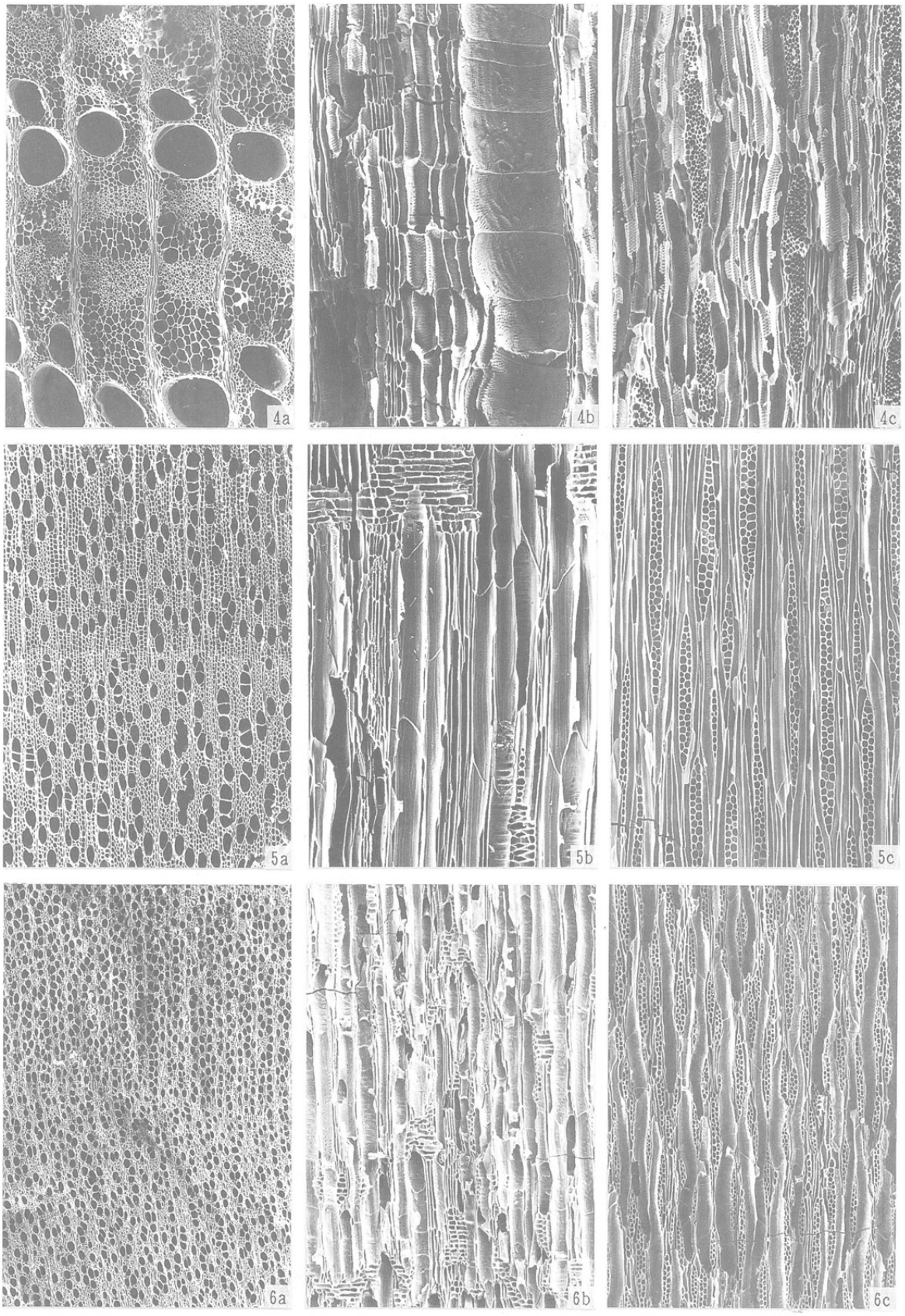
Opx：斜方輝石. Cpx：単斜輝石.

0. 5mm



1. ヒノキ属（試料番号28）
2. オニグルミ（試料番号26）
3. コナラ属コナラ亜属クヌギ節（試料番号31）
　a：木口，b：柾目，c：板目

200μm：a
200μm：b, c



4. ケヤキ（試料番号26）
5. モクレン属（試料番号28）
6. バラ科ナシ亜科（試料番号31）
　a：木口，b：柾目，c：板目

200μm：a
200μm：b, c

第６章　考察

第１節　煮沸具の外来系土器について

―古墳時代後期と平安時代の動向－

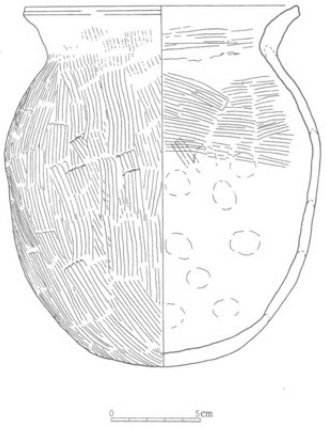
１ はじめに

遺物を観察する中で、佐久市・小諸市に所在する遺跡群では刷毛目調整を施した在地の土器・周知の搬入土器以外に未周知の外来系土器が看取されたため、それらの土器に関して報告したい。

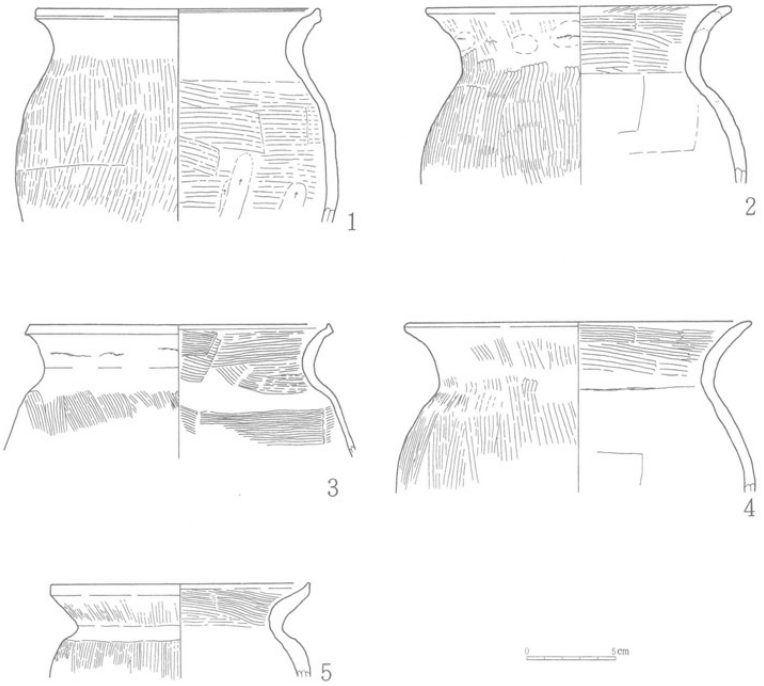
２　芝宮遺跡群・中原遺跡群出土の外来系土器

（１図、写真１）を出土した中原遺跡群302号住居跡は調査区の北端に位置し、遺構の規模は南北5.05m・東西5.10mを測る方形を呈し、今回の調査遺構の中ではやや小ぶりな住居跡である。７世紀後半の甑と共に出土している。（１図）の土師器甕は小型で器高は19.2cm・口縁部径14.6cm・胴部の最大径は16.8cmを測るものである。底部は丸底・内面と外面には刷毛目調整が施され内面下半はヘラナデが施され、口縁端部を摘み上げている。

この特徴を有する土師器甕は近畿地方に多く見られ、関西方面にその起源を求められてきた。このタイプの土器は中原遺跡群、芝宮遺跡群の両遺跡からも数十点出土しているが、全て破片で口縁部から底部まで復元し得たのはこの遺物だけであった。このタイプの土器は破片になってしまうと口縁部・胴部の張り、器面の調整といったこの土器の特徴がわからなくなり、畿内周辺



第１図



第２図　芝宮・中原出土の甕

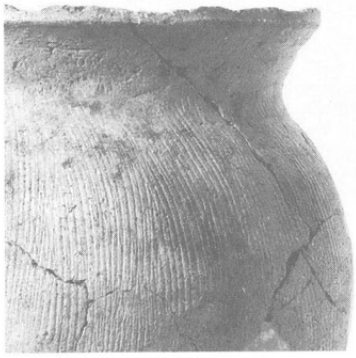
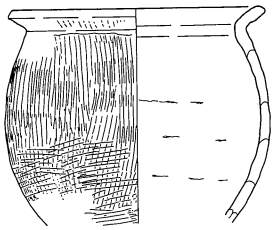


写真１



第 3 図

でも他の土師器の甕の特徴とかなり共通するため、甕の地域を特定できなくなる。そのため今までは、近畿・関西といった広域な地域を想定するしかなかった。

昨年、資料の増加や「古代の土器研究会」や関西各地の土師器甕を観察するにあたり、三重県南伊勢地方の７世紀後半から８世紀初頭のいわゆる北野型に相当するものと考えられる（上村氏の分類によると甕Ａ１類)。

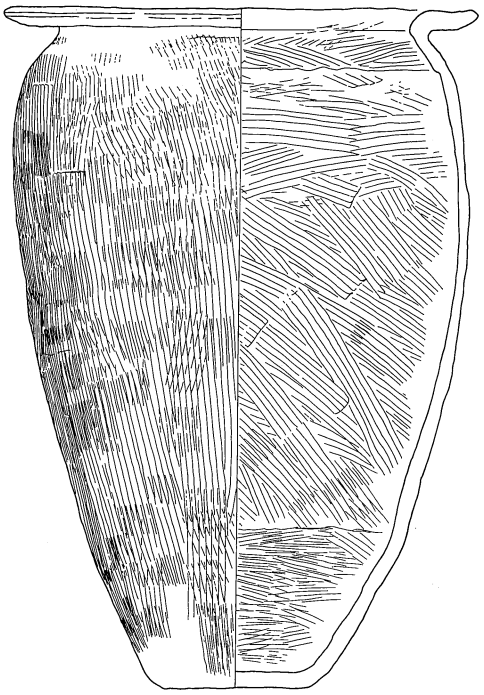
上記の土器をきっかけとして土器の洗浄後の観察を試みた結果、数個体の刷毛目調整の小型甕が出土し、その内５個体が図化できた。（２図１）は芝宮遺跡群の70号住居跡（６世紀後半）から出土し、口径15.2cm・残存高11.3cmを測り、胎土・焼成は在地のものとは異なる砂質なものでにぶい黄橙色（Hue10YR6／4）を呈し、形状は口縁部のつまみあげが確認出る。また特徴として外面は縦方向の刷毛目、内面は横方向の刷毛目の後胴部下半は縦方向のヘラケズリが認められる。胴部外面の最大径付近には一条の沈線が巡っている。

（２図４）は中原遺跡群の44号住居跡（９世紀初頭）のカマドの東側から出土し、（２図５）は芝宮遺跡群の30号住居跡（９世紀代）から出土している。両者とも(1)に類似しするもので、口縁部につまみあげが施されている。（４・５）は口縁直下がやや張り出し肩部を形成している。また、(5)はやや小ぶりな個体である。

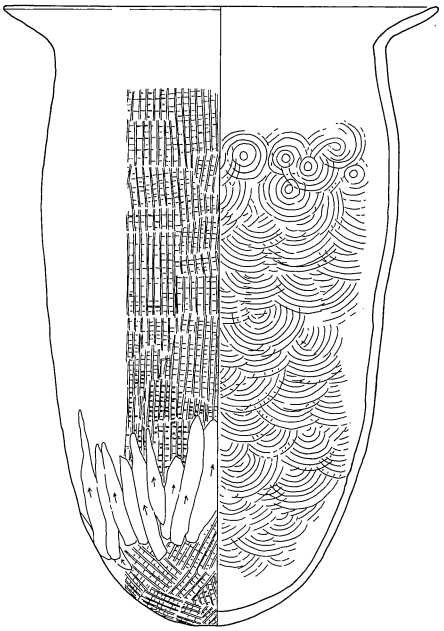
（２図２・３）は芝宮遺跡群の206号住居跡（７世紀後半）のカマド周辺から出土している。（２図１・４・５）に共通の口縁部つまみあげは認められず、外反しながら大きく開いている。また、胎土は前者に比べ緻密で、色調は橙色（Hue5YR6／6）を呈している。

以上の土器の他に平安期の遺構からやはり刷毛を多用する小型甕が出土している。（３図１）は芝宮遺跡群の９世紀第３四半期と考えられる89号住居跡から出土している。口径は13.8cm・残存高10.6cmを測り、外面には主に縦方向の刷毛目（同部下半では横方向）が施され、胎土はやや砂質な灰黄褐色土（Hue10YR6／2）を呈している。胴部の最大径は中位にある肩の張らないほぼ球形といえる形状をしている。栗毛坂遺跡群Ｂ地区の18号住居跡でも類似する土器が出土している。

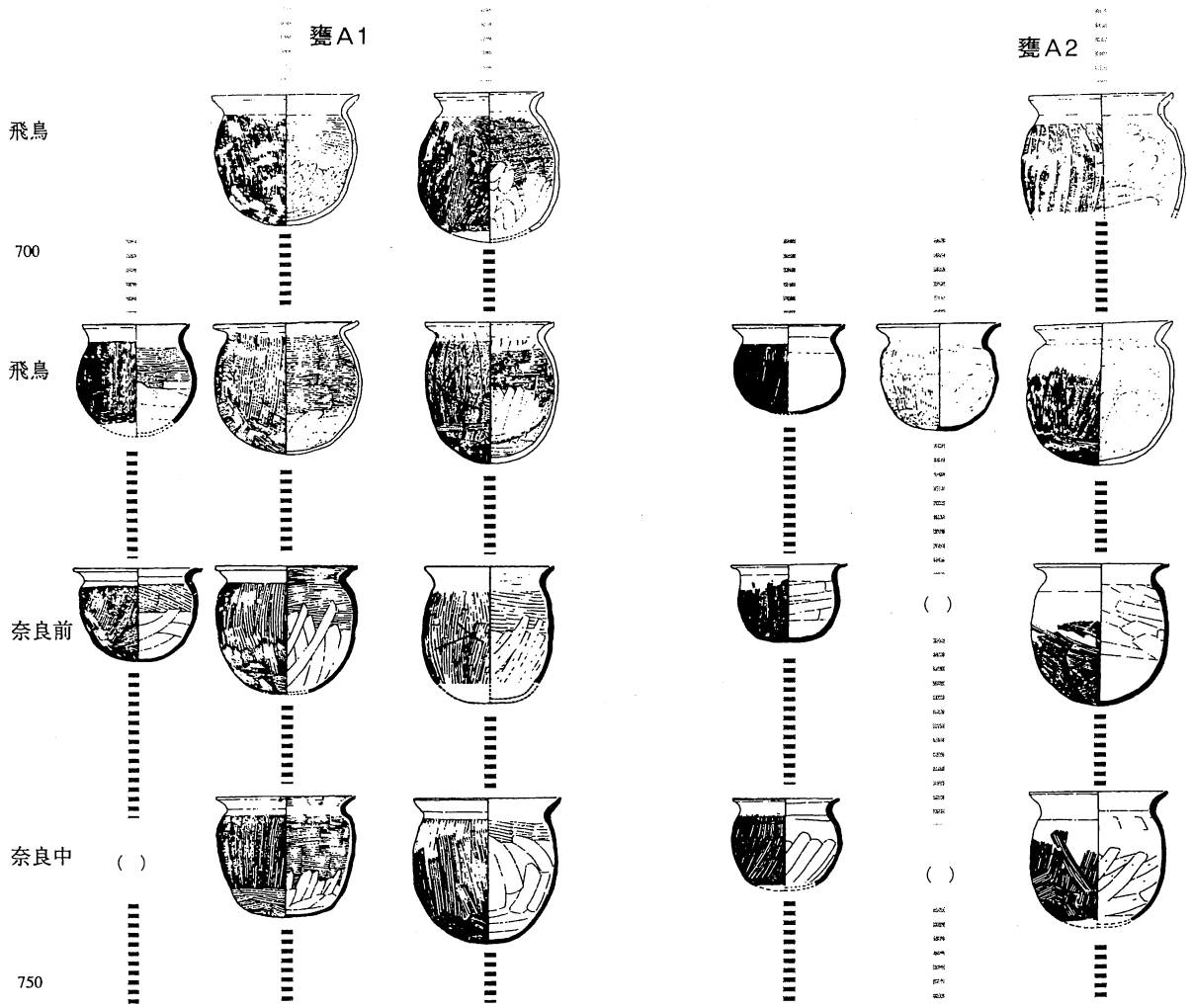
詳細な生産地は不明であるが愛知県の大毛沖遺跡に類例が認められる他、岐阜県可児地方で出土例が増えているようであり、おそらく濃尾地方に主体を有する土器と考えられる。



第 4 図



第 5 図



第 6 図　斎宮跡甕A変遷図（上村1996より）

また、芝宮遺跡群の９世紀初頭と考えられる219号住居跡からは長胴な刷毛甕（４図）がカマドの周囲から出土している。口径24.5cm・器高36.6cm・底径7.5cmを測り、口縁部は水平に開き、肩部と胴部下半には成形時の接合痕が認められる。図面上では濃尾甕に類似するが、実見すると胎土や調整でかなり異なる土器のようである。濃尾甕の器肉はさらに薄く、胎土の点では更に砂質のようである。この土器の類例はあまり認められず、美濃地方の南信寄りに類似する土器の出土が増加しているようであるが、実見していないため確証はない。

外来か在地か不明であるが、例外的な土器として芝宮遺跡群の8世紀前半と見られる184号住居跡からは、須恵器製作技法を用いた丸底の土師器甕（５図）が出土している。口径23.7cm・器高32.9cmを測り、胴部外面には叩き目が残り下半部ではヘラケズリが認められる。内面にはあて具痕の青海波文が認められる。

3　南伊勢地方北野系土器と東海系土器について

「この地域が須恵器・灰釉陶器の卓越した生産国であり、…土師器煮沸具についてはほとんど目が向けられることはなかった。…最近の資料の蓄積により、古代の土師器については暗黒であったこの地域についても、ようやく他の地域と比較できるようになってきた。（注４）」といわれるように東海地方での煮沸具である土師器の甕に関する研究は、胎動し始めたばかりといわざるを得ない。そういった中で出土遺

物の産地を推定するのはかなり困難なこととおもえるので、今回はあえて特定を行わない。

上村氏は当該地域の古代土師器煮沸具の分類（６図）を行つている。その分類の中で、煮沸具を甕・鍋・甑に分け、甕に関してはＡ～Ｈの７つに分類し、今回関係するＡ類に関してはＡ１～Ａ６類に細分を行っている。

甕Ａ１類：口縁端部をつまみあげ、体部外面を刷毛目で調整し、内面は上半を刷毛目で調整し、下半をヘラケズリで調整するという特徴的なものである。

甕Ａ２類：内面に刷毛目調整がみられず、ヘラケズリあるいはナデによって調整されたものである。また、口縁部のつまみあげも顕著ではないものの力が多い傾向にある。

甕Ａ３類・甕Ａ４類に関しては外面ヘラケズリ調整で、甕Ａ１類・甕Ａ２類にそれぞれ対応させている。

以上を甕Ａの基本構成とし、これらの土器群の他、甕Ａ３類・甕Ａ４類については時期的に８世紀後半ということであり、佐久地方で出土する例のほとんどが古墳時代後期（７世紀代）であることから、時期的にずれるため今回は取り上げない。また長野県下各地での要素や出土量にばらつきがあり、広く東海地方の様相を考えるまでにはいたっていないので、今回は上村氏の編年観を参考するに留めたい。

Ａ１類とＡ２類については、おおよそ飛鳥時代から奈良時代後期まで（７世紀後半から８世紀後半）一定量見られるとのことである。特にＡ１類の甕が三重県下各地で出土し、斎宮や伊勢神宮に限ることなくかなり広い範囲の流通、さらにはそれが東海地方（濃尾平野）にまでおよんでいることを示唆している。

また斎宮周辺域の特に北野遺跡などの土師器焼成坑の多さには目を見張るものがあるが、それら多数の焼成坑から「当地（有爾郷）は古代より伊勢神宮に献納する土器を焼成していた地として知られ、蓑村には神宮土器調整所があり、土器作りが今も行われていることから、当地周辺が古代の土師器の一大生産地であったことは明らかである。（注５）」とかつての生産地の可能性が指摘されている。

４　佐久盆地出土の外来系土器

刷毛目調整の小型甕は佐久地力の古代の遺跡群ではかなりの頻度で出土しているが、いまだ全貌は不明である。

佐久盆地内に存在する遺跡の調査で、古墳時代後期（７世紀代）の住居跡からしばしば刷毛目を多用する土器群が出土することが知られてた。

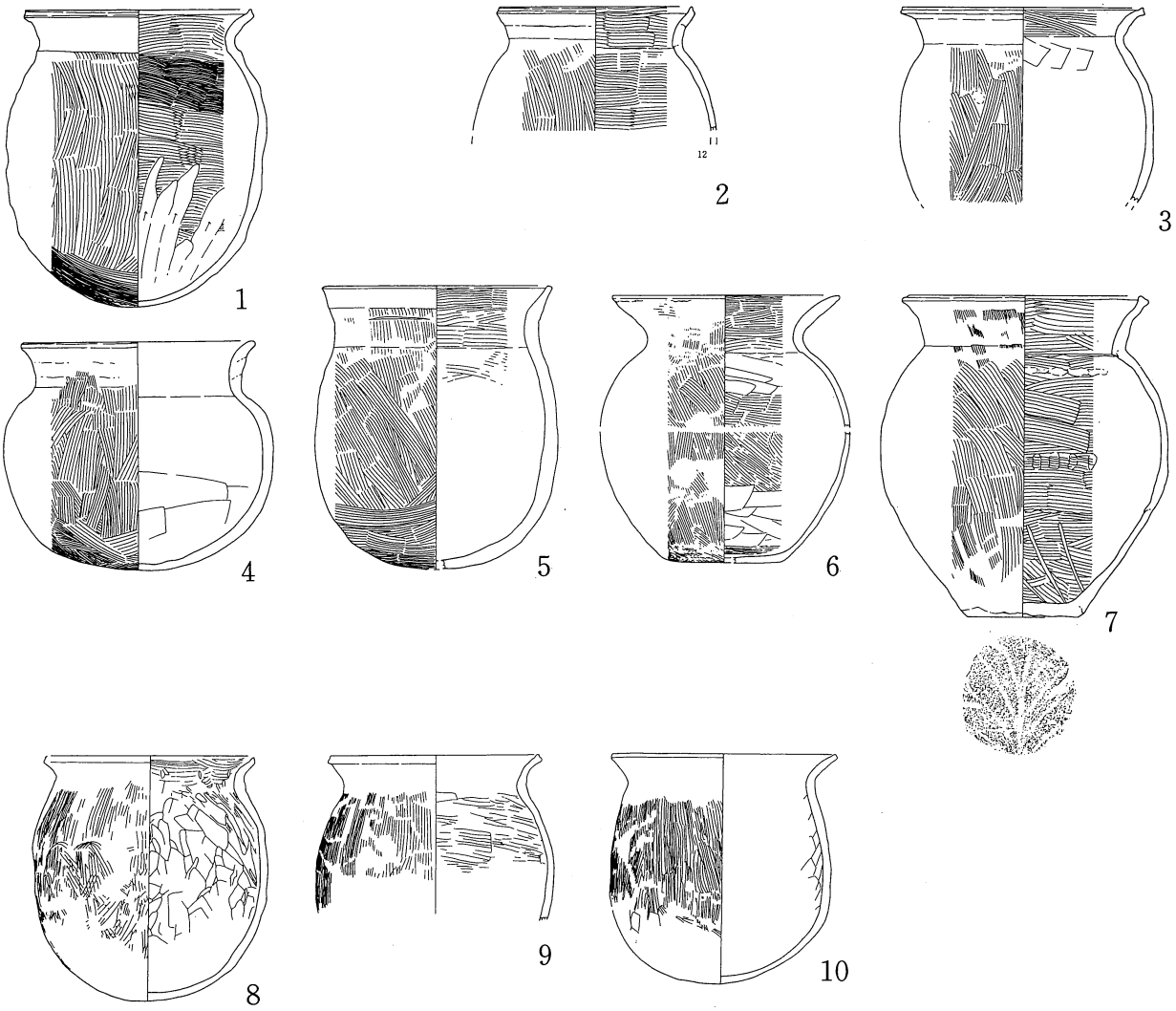
佐久地力で出土する土器の中には在地のものではない土師器群がある。武蔵型甕・北陸のロクロ甕・有段口縁坏等がそれで、これらの内ほとんどのものは、客体的というよりはある時期には主体を占めるものもあり、外来というよりは他地域の影響の下に（生産されたのか、搬入されたのかは別にして）本地域で日常的に使われたと考えられる集団である。これに対し、畿内系暗文坏・甲斐型坏・丸底の刷毛目小型甕等はあくまでも客体的な存在の域を出ず、出土例も僅かである。今回はそれらの中の刷毛目調整された小型の丸底甕を取り上げたい。

従来、遺跡から出土した土器に対して「在地のものではない」「客体的な」と判断された場合、「外来系」、あるいは「搬入品」と呼ばれてきた。

佐久市前田遺跡の報告（注２）では「搬入品」「他地域からの搬入あるいは模倣品」と定義している。花岡氏（注３）は纏向の定義を引用し「搬入品」と呼んだ。

また、今回紹介する土器とは性質を異にするが、畿内系暗文と呼ばれるグループがあることは従来より知られているが、その暗文を有する土器群の把握について西山氏（注１）は「畿内系暗文土器」という用語を使用している。

このような出土例の少ない土器を持って何を語るのかは次回として、今回はあくまでもイレギュラーな土器の紹介に留めたい。



第 7 図　佐久地方の非在地産土器

「前田遺跡」

佐久市前田遺跡では、異系統土師器の刷毛目調整された小型甕をD類とし、さらに5つに細分している（7図1～7）。その中で丸底のものをD1～3類とし関西地方という位置づけを行っている。D1類（7図1～3）は東海地方の可能性が高いと思われる。特に（7図1）は上村編年の甕Aの範疇で考えたい。（7図2）については底部が欠けるが口縁部摘み上げは観察できる。（7図3）は口縁部の形態・刷毛調整の施し方が他に比べてやや異質である。D2類（7図4）は外面に刷毛の多用が認められるが内面の調整や全体のプロポーションが異質である。D3類（7図5）の形態は胴部最大径をD1類より下位に持ち膨らみも少ない。また、D4・5類（7図6・7）は平底のもので、D5類に東海地方「駿東型」を当てはめている。いずれの土器も形態・手法・胎土が異なり、他地域からの搬入あるいは模倣と捉えている。

それらの出土した遺構の年代はいずれも前田編年のI期（古墳時代後期）である。

「竹花遺跡」

小諸市竹花遺跡では、小型の甕の中に刷毛目調整され口縁端部をつまみ上げた形状丸底のものをC類（7図8～10）として畿内系に位置づけている。（7図8・9）は東海地方産であろうか内外面に刷毛目が

看取されるが、(8)では口縁部の摘み上げがわかるが内面の刷毛調整が口縁部に留まっていることから、上村編年のＡ２類に該当するものであろうか。(10)は胴部最大径をやや下半に有し、内面に刷毛目が見られないことから近畿の河内・和泉地方に比定されようか。

３点の出土した遺構の時期は、竹花編年のⅥ期とⅦ期（７世紀代）である。

5　まとめ

以上佐久地方を中心として煮沸具の刷毛目調整の施された小型甕を見てきたが、二つの動きが感じられる。一つは古墳時代後期の律令導入期に南伊勢地方の北野甕、もしくはその類似甕がもたらされていること。二つ目は９世紀代の平安期に濃尾地方に起源があると認められる小型甕が流入していることである。花岡氏の指摘（注３）のように住居跡から出土する「外来系土器には、供膳具と煮沸具の二者が認められる…」そして供膳具の黒彩土器・有段口縁杯や丸底の刷毛目甕・把手付鉢の出土の仕方に片寄りが見られる点に注意を置いている。また、「それは集落の持つ性格を表わすものといえる。いずれにせよ畿内系暗文坏を含め、総体的に考えていかなければならないと考えている。」絶対量が少なく、さまざまな分野からの支援の無い中で憶測の域を出ないところが多いが、極力具体的な検証を試みその実態に迫りたい。今回紹介した芝宮遺跡群・中原遺跡群の例もそうだが、カマド周辺で出土し土器の器面には使用による煮焦げの痕跡が認められた。これは中原の例だけでなく、前田遺跡でも観察される。（７図）中の（１～５・７）はカマド内、あるいはカマド周辺の床面上から出土しているのが報告されている。さらに（１・４・６・７）では煤の付着が観察されている。煮沸具の甕であるので本来の姿であるのだが、はるばる運ばれて来たとするなら、それを日常雑器として使っていることに若干の疑問が残る。

注１）西山氏は暗文土器からその社会的な背景を探ろうとし「土器の器形・調整や、暗文の施し方・技術、そして胎土分析等の問題から確実にどの種の暗文土器であるかを把握し、認識することが大切であろうと考える。この把握と認識をもとに、それぞれの暗文土器が作られ、使用される背景や社会状況というものを考えることが出来よう。それはたとえば、暗文土器を作る特別な人々、あるいは集団（工人・工人集団）が存在し、ある特定の地で作られたものなのか。あるいは、各地域において、作りえられる状況であったのか、そしてその作られた土器は政治的、経済的、あるいは精神面、生活面等のいずれが背景となってそれぞれの寺院・官衙・集落・墳墓に持ち込まれたものなのか。と言う事などである。」と暗文土器から当時の社会背景に迫ろうと試みている。私が今回取り上げた東海・近畿地方の煮沸具は、暗文土器とは性格を異にするものであり、同レベルでは語れないものであるが、西山氏の注意する観点は多いに参考にしたい。

注２）佐久市教育委員会　1989『前田遺跡（第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ）』

注３）花岡氏は「外来系土器の定義は、関川尚功氏に従い、『よその地域で製作されて搬入された土器とそれらをモデルとして在地で製作された土器、すなわち搬入品と模倣品』とする。」と関川氏の纒向での定義を援用し、小諸市教育委員会　1994『東下原・大下原・竹花・舟窪・大塚原』の報告では他地域の土器として「畿内系甕」の用語を使用している。

注４）城ヶ答和広　1996「東海地力の古代煮沸具の様相と諸問題」『鍋と甕のデザイン（第４回東海考古学フォーラム）』

注５）以前から文献史学の側から指摘をされていた。

参考文献

小笠原好彦　1980 「近畿地方の七・八世紀の土師器とその流通」『考古学研究』27-2
西　弘海　1971 「土器様式の成立とその背景」『考古学論考』
西山克己　1984・1985 「東国出土の暗文を有する土器」『史館』17・18
花岡　弘　1991 「6中部高地」『古墳時代の研究　第6巻　土師器と須恵器』雄山閣
上村安生　1996 「伊勢・伊賀における古代土師器煮沸具の様相」『鍋と甕のデザイン（第4回東海考古学フォーラム）』
城ケ答和広　1996 「東海地方の古代煮沸具の様相と諸問題」『鍋と甕のデザイン（第4回東海考古学フォーラム）』
三重県埋蔵文化財センター　1991 「平成2年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財調査報告」第2分冊94-2
（財）愛知県埋蔵文化財センター　1996 「大毛沖遺跡」『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書66』
佐久市教育委員会　1989 「前田遺跡（第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ）」
小諸市教育委員会　1994 「東下原・大下原・竹花・舟窪・大塚原」
（財）長野県埋蔵文化財センター　1991 「栗毛坂遺跡群・他」『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書2』
（財）長野県埋蔵文化財センター　1992～94 「芝宮遺跡群」『長野県埋蔵文化財センター年報9・10・11』
（財）長野県埋蔵文化財センター　1992～93 「中原遺跡群」『長野県埋蔵文化財センター年報9・10』
松本市教育委員会　1987 「松本市高畑遺跡」

付表　芝宮竪穴住居跡一覧(1)

SB番号	主軸長	副軸長	面積(㎡)	深さ	主軸方向	位置
1	460	445	204,700	48	N-25-W	ⅠJ-9
2	欠番					
3	580	590	342,200	56	N-25-W	ⅠJ-5
4	321	366	117,486	63	N-30-W	ⅡA-17
5	475	440	209,000	60	N-28-W	ⅡF-6
6	550	560	308,000	53	N-28-W	ⅡA-17
7	450	440	198,000	76	N-11-W	ⅠO-24
8	206	440	90,640	39	N-23-W	ⅡA-21
9	505	—	—	63	N-12-W	ⅠJ-23
10	欠番					
11	—	315	—	46	N-0	ⅡF-2
12	518	510	264,180	64	N-27-W	ⅡF-11
13	350	410	143,500	59	N-15-W	ⅡF-16
14	404	375	151,500	52	N-30-W	ⅡA-13
15	460	480	220,800	89	N-18-W	ⅡF-2
16	500	545	272,500	60	N-23-W	ⅡP-1
17	360	250	90,000	36	N-24-W	ⅡK-9
18	346	346	119,716	41	N-7-W	ⅠO-9
19	480	490	235,200	55	N-23-W	ⅠO-25
20	524	540	282,960	92	N-36-W	ⅡA-18
21	678	—	—	61	(N-16-W)	ⅠO-9
22	635	—	—	44	(N-23-W)	ⅠO-14
23	450	465	209,250	39	N-0	ⅠO-20
24	500	520	260,000	79	N-30-W	ⅡF-3
25	560	—	—	53	N-28-W	ⅡF-3
26	570	—	—	52	N-25-W	ⅡA-13
27	710	720	511,200	60	N-18-W	ⅡF-6
28	300	400	120,000	45	N-20-W	ⅡF-1
29	440	490	215,600	63	N-30-W	ⅠJ-15
30	640	670	428,800	73	N-30-W	ⅡF-13
31	420	450	189,000	58	N-27-W	ⅡF-13
32	330	330	108,900	42	N-22-W	ⅡK-18
33	330	400	132,000	47	N-27-W	ⅠJ-15
34	450	440	198,000	60	N-18-W	ⅡK-20
35	450	—	—	32	N-20-W	ⅡK-15
36	600	610	366,000	71	N-13-W	ⅡF-18
37	680	700	476,000	72	N-20-W	ⅡF-19
38	330	300	99,000	20	N-30-W	ⅡK-13
39	325	—	—	43	(N-15-W)	ⅡK-20
40	540	470	253,800	64	N-10-W	ⅡF-6
41	500	450	225,000	70	N-29-W	ⅡF-7
42	580	635	368,300	51	N-23-W	ⅡK-9
43	690	—	—	50	N-15-W	ⅠO-15
44	560	520	291,200	64	N-25-W	ⅡF-7
45	550	—	—	53	(N-23-W)	ⅡK-12
46	900	—	—	15	(N-46-W)	ⅡF-13
47	—	—	—	10	—	ⅡF-G
48	—	490	—	51	N-25-W	ⅡF-7
49	580	570	330,600	63	N-20-W	ⅡF-2
50	580	500	290,000	39	N-21-W	ⅡK-14
51	584	658	384,272	56	N-10-W	ⅡK-14
52	284	—	—	31	N-14-W	ⅡK-13
53	528	528	—	65	N-17-W	ⅠJ-20
54	454	468	212,472	83	N-10-W	ⅡK-1
55	480	—	—	55	N-17-W	ⅠJ-19
56	358	492	176,136	52	N-22-W	ⅠJ-10
57	384	402	154,368	39	N-13-W	ⅠJ-15
58	—	420	—	43	N-12-W	ⅠJ-14
59	642	—	—	42	N-17-W	ⅠJ-23
60	384	430	165,120	59	N-23-W	ⅡK-18
61	—	278	—	60	N-24-W	ⅡF-13
62	762	580	441,960	27	(N-27-W)	ⅡF-13
63	368	370	136,160	39	N-28-W	ⅡO-19
64	472	—	—	60	—	ⅡK-10
65	—	—	—	43	—	ⅠO-3
66	欠番					
67	328	—	—	39	—	ⅡK-5
68	276	—	—	61	—	ⅡF-14
69	欠番					
70	564	552	311,328	62	N-10-W	ⅢB-22
71	468	448	209,664	45	N-10-W	ⅢB-23
72	484	598	289,432	33	—	ⅢG-3
73	330	316	104,280	34	N-77-E	ⅢG-1
74	284	366	103,944	17	N-10-W	ⅢG-2
75	516	528	272,448	68	N-22-W	ⅢB-22
76	298	342	101,916	37	N-8-W	ⅢG-1
77	550	516	283,800	73	N-5-W	ⅢF-5
78	292	542	158,264	27	N-65-E	ⅢG-6
79	376	394	148,144	29	N-20-W	ⅢG-11
80	386	396	152,856	40	N-13-W	ⅢG-12
81	630	604	380,520	56	N-9-W	ⅢF-20
82	562	578	324,836	87	N-9-W	ⅢG-7
83	554	548	303,592	52	N-16-W	ⅢG-6
84	490	—	—	75	N-32-W	ⅢG-7
85	406	—	—	56	—	ⅢG-13
86	380	360	136,800	54	N-18-W	ⅢG-23
87	410	410	168,100	38	N-70-W	ⅢG-18
88	400	440	176,000	34	N-15-W	ⅢG-17
89	684	582	398,088	59	N-18-W	ⅢG-22
90	490	450	220,500	56	N-10-W	ⅢG-22
91	520	500	260,000	64	N-13-W	ⅢG-22
92	—	280	—	36	—	ⅢG-18
93	606	—	—	43	—	ⅢG-19
94	406	426	172,956	75	N-12-W	ⅢG-24
95	478	518	247,604	63	N-29-W	ⅢL-7
96	520	500	260,000	54	N-15-W	ⅢG-18
97	380	434	164,920	47	N-16-W	ⅢG-23
98	548	574	314,552	49	N-21-W	ⅢL-3
99	492	496	244,032	50	N-24-W	ⅢL-2
100	—	520	—	47	(N-19-W)	ⅢL-2
101	422	426	179,772	63	N-71-E	ⅢG-21
102	564	504	284,256	76	N-37-W	ⅢL-8
103	562	562	315,844	80	N-16-W	ⅢL-8
104	378	434	164,052	49	N-43-W	ⅢL-3
105	496	—	—	47	—	ⅢL-9
106	504	—	—	58	—	ⅢL-4
107	340	370	125,800	34	—	ⅢL-7
108	482	526	253,532	65	N-0	ⅢL-12
109	502	486	243,972	57	N-37-W	ⅢL-7
110	386	392	151,312	64	N-39-W	ⅢL-13
111	450	448	201,600	53	N-28-W	ⅢL-14
112	358	400	143,200	56	N-28-W	ⅢL-13
113	660	640	422,400	71	N-67-E	ⅢL-19
114	360	440	158,400	27	N-65-E	ⅢL-17
115	620	558	345,960	62	N-25-W	ⅢL-11
116	490	480	235,200	82	N-25-W	ⅢL-18
117	338	286	96,668	45	N-35-W	ⅢL-17
118	440	410	180,400	44	N-18-W	ⅢL-19
119	430	486	208,980	62	N-9-W	ⅢL-24
120	—	292	—	22	N-10-W	ⅢQ-4
121	354	386	136,644	40	N-19-W	ⅢQ-4
122	—	—	—	98	—	ⅢL-25
123	484	—	—	67	—	ⅢL-23
124	308	—	—	21	N-6-W	ⅢL-20
125	290	392	113,680	18	(N-10-W)	ⅢP-4
126	330	282	93,060	17	N-57-E	ⅢP-5
127	586	518	303,548	48	(N-41-W)	ⅢK-24
128	466	464	216,224	39	(N-32-W)	ⅢP-4
129	640	612	391,680	40	N-9-W	ⅢP-4
130	300	—	—	28	N-8-W	ⅢG-17
131	502	—	—	32	N-22-W	ⅢP-3
132	—	—	—	62	N-28-W	ⅢK-23
133	380	418	158,840	42	N-25-W	ⅢK-20
134	330	382	126,060	30	N-25-W	ⅢF-24
135	478	510	243,780	58	N-10-W	ⅢF-19
136	418	438	183,084	38	N-63-E	ⅢK-4
137	360	578	208,080	67	N-48-W	ⅢK-4
138	380	362	137,560	39	N-65-E	ⅢK-7
139	430	—	—	34	N-70-E	ⅢK-7
140	532	574	305,368	73	N-25-W	ⅢK-8
141	440	420	184,800	48	N-19-W	ⅢK-9
142	476	—	—	15	N-24-W	ⅢK-12
143	—	—	—	—	—	ⅢK-12
144	448	458	205,184	41	N-43-W	ⅢK-14
145	400	348	139,200	31	N-83-E	ⅢK-13
146	510	514	262,140	85	N-25-W	ⅢK-18
147	466	414	192,924	37	N-20-W	ⅢK-18
148	532	504	268,128	12	N-64-E	ⅢK-19
149	454	468	212,472	74	N-27-W	ⅢK-5
150	310	400	124,000	20	N-65-E	ⅢL-11
151	334	406	135,604	34	N-68-E	ⅢL-11
152	340	—	—	59	(N-16-W)	ⅢG-23

芝宮竪穴住居跡一覧(2)

SB番号	主軸長	副軸長	面積(㎡)	深さ	主軸方向	位置
153	488	408	199,104	62	N-75-E	ⅢF-20
154	386	358	138,188	20	N-30-W	ⅢL-11
155	—	—	—	38	—	ⅢP-3
156	—	—	—	42	—	ⅢL-15
157	—	—	—	7	—	ⅢG-18
158	—	—	—	34	N-17-W	ⅢG-18
159	欠番					
160	—	—	—	67	—	ⅠO-13
161	—	—	—	50	—	ⅢG-24
162	500	—	—	48	—	ⅢG-19
163	欠番					
164	欠番					
165	欠番					
166	欠番					
167	欠番					
168	欠番					
169	欠番					
170	498	518	257,964	79	N-13-W	ⅡK-23
171	330	456	150,480	55	N-21-W	ⅡP-4
172	566	580	328,280	74	N-18-W	ⅡP-8
173	310	578	179,180	70	N-30-W	ⅡP-12
174	370	370	136,900	57	N-8-W	ⅡP-12
175	686	654	448,644	48	N-19-W	ⅡP-21
176	682	572	390,104	60	N-36-W	ⅡP-21
177	380	378	143,640	35	N-11-W	ⅡP-6
178	502	528	265,056	52	N-19-W	ⅡP-11
179	474	494	234,156	42	N-15-W	ⅡP-6
180	478	—	—	49	N-36-W	ⅡK-22
181	620	—	—	79	N-20-W	ⅡP-5
182	282	248	69,936	48	N-79-E	ⅡK-19
183	欠番					
184	628	—	—	61	N-10-W	ⅠT-14
185	452	480	216,960	48	N-20-W	ⅠT-15
186	704	—	—	60	(N-9-W)	ⅠT-14
187	238	238	56,644	21	(N-10-W)	ⅠT-9
188	292	348	101,616	13	(N-21-W)	ⅠO-24
189	468	490	229,320	51	(N-26-W)	ⅠO-24
190	414	454	187,956	51	N-14-W	ⅡP-6
191	350	321	112,350	12	N-20-W	ⅡP-1
192	—	—	—	51	N-0	ⅠT-19
193	668	730	487,640	49	N-21-W	ⅠT-4
194	654	654	427,716	61	N-11-W	ⅠO-23
195	(488)	446	217,648	44	N-60-E	ⅠT-5
196	318	332	105,576	35	N-12-W	ⅡP-1
197	500	(300)	150,000	35	N-66-E	ⅡP-1
198	584	618	360,912	49	N-6-W	ⅡP-6
199	欠番					
200	—	422	#VALUE!	21	(N-16-W)	ⅠJ-4
201	464	506	234,784	37	N-29-W	ⅡA-16
202	—	—	—	38	N-25-W	ⅡA-16
203	542	588	318,696	49	N-22-W	ⅠE-25
204	426	528	224,928	57	N-38-W	ⅡA-21
205	326	360	117,360	29	(N-12-W)	ⅠE-25
206	420	484	203,280	58	N-22-W	ⅠJ-9
207	—	330	—	31	(N-17-W)	ⅠJ-9
208	268	298	79,864	19	(N-17-W)	ⅠJ-9
209	—	514	—	34	N-22-W	ⅠJ-5
210	470	442	207,740	71	N-22-W	ⅠJ-5
211	—	—	—	48	N-20-W	ⅡF-1
212	490	480	235,200	23	N-86-E	ⅠT-24
213	660	672	443,520	68	N-24-W	ⅠT-20
214	516	536	276,576	49	N-25-W	ⅠT-25
215	486	558	271,188	55	N-26-W	ⅠT-24
216	608	594	361,152	47	N-6-W	ⅠY-5
217	454	512	232,448	40	N-29-W	ⅠY-5
218	526	588	309,288	56	N-40-W	ⅡU-1
219	622	638	396,836	51	N-42-W	ⅡU-1
220	456	—	—	48	N-13-W	ⅠY-10
221	512	536	274,432	30	N-18-W	ⅠY-10
222	568	—	—	28	(N-18-W)	ⅠY-4
223	340	340	115,600	46	N-28-W	ⅠY-5
224	—	(378)	—	38	N-30-W	ⅠY-5
225	282	400	112,800	33	N-24-W	ⅡK-24
226	560	—	—	56	N-29-W	ⅠY-10
227	496	472	234,112	67	N-34-W	ⅡP-6
228	—	584	—	58	N-10-W	ⅡP-1
229	—	580	—	31	(N-26-W)	ⅡT-10
230	410	476	195,160	40	N-14-W	ⅡT-15
231	460	440	202,400	88	N-41W	ⅢA-11
232	560	590	330,400	66	N-14-W	ⅡU-21
233	580	—	—	67	N-24-W	ⅡU-21
234	490	495	242,550	52	N-5-E	ⅢF-14
235	285	230	65,550	32	(N-20-W)	ⅢF-15
236	460	—	—	43	N-47-W	ⅡU-16
237	—	—	—	43	—	ⅡU-16
238	455	420	191,100	57	N-75-E	ⅠT-20
239	365	—	—	45	(N-20-W)	ⅢF-14
240	410	460	188,600	45	N-15-W	ⅢF-4
241	490	505	247,450	68	N-0	ⅢF-4
242	490	—	—	34	N-50-E	ⅠY-5
243	—	—	—	51	N-22-W	ⅠY-4
244	330	—	—	14	N-75-E	ⅠY-10
245	欠番					
246	290	320	92,800	29	N-27-W	ⅢB-21
247	480	460	220,800	53	N-12-W	ⅢA-25
248	520	390	202,800	49	N-23-W	ⅠY-20
249	—	440	—	64	N-30-W	ⅡU-6
250	—	580	—	52	N-55-W	ⅢF-15

※主軸・副軸長、深さの単位はcm。
※不確定な要素のあるものは（　）を用いた。
※面積＝主軸長×副軸長。
※主軸方向の数値は角度を示す。
※位置のｸﾞﾘｯﾄﾞ名は遺構の北西側のｸﾞﾘｯﾄﾞ名のみ示してある。

中原竪穴住居跡一覧

SB番号	主軸長	副軸長	面積(㎡)	深さ	主軸方向	位置
1	380	410	155,800	67	N-24-W	VO-3
2	530	500	265,000	60	N-21-W	VO-8
3	550	620	341,000	40	N-28-W	VY-5
4	—	790	—	74	N-27-W	VY-8
5	500	550	275,000	63	N-20-W	VO-21
6	590	—	—	41	N-16-W	VY-12
7	710	640	454,400	71	N-27-W	VT-24
8	330	340	112,200	51	N-20-W	VO-19
9	620	620	384,400	53	N-16-W	VO-17
10	480	480	230,400	57	N-16-W	VO-23
11	540	490	264,600	78	N-24-W	VY-2
12	480	490	235,200	54	N-20-W	VIK-21
13	340	410	139,400	75	N-18-W	VIK-21
14	440	470	206,800	65	N-15-W	VIP-1
15	560	540	302,400	42	N-6-W	VT-13
16	560	560	313,600	53	N-16-W	VT-12
17	660	600	396,000	59	N-26-W	VT-18
18	380	390	148,200	44	N-15-W	VO-22
19	550	530	291,500	54	N-16-W	VIP-16
20	欠番		—			
21	510	560	285,600	72	N-17-W	VT-7
22	340	340	115,600	56	N-48-W	VT-15
23	290	400	116,000	49	N-17-W	VIP-6
24	370	380	140,600	39	N-11-W	VT-10
25	—	590	—	25	N-28-W	VY-13
26	370	370	136,900	35	N-80-W	VIK-21
27	380	380	144,400	38	N-20-W	VT-5
28	—	320	—	32	N-22-W	VIP-6
29	450	420	189,000	42	N-20-W	VO-18
30	430	450	193,500	51	N-5-W	VIK-6
31	420	400	168,000	89	N-21-W	VO-22
32	660	500	330,000	45	N-7-W	VO-15
33	530	560	296,800	61	N-8-W	VT-7
34	欠番		—			
35	420	440	184,800	45	N-32-W	VY-4
36	560	540	302,400	46	N-23-W	VIP-16
37	590	610	359,900	68	N-15-W	VO-25
38	520	590	306,800	57	N-16-W	VO-24
39	570	620	353,400	60	N-23-W	VT-24
40	790	700	553,000	63	N-12-W	VO-12
41	440	500	220,000	50	N-15-W	VO-4
42	570	560	319,200	59	N-9-W	VIP-1
43	570	530	302,100	51	N-18-W	VT-23
44	580	—	—	52	N-14-W	VIK-7
45	570	550	313,500	46	N-5-W	VIK-16
46	330	380	125,400	68	N-23-W	VT-9
47	450	440	198,000	59	N-24-W	VO-19
48	550	590	324,500	66	N-22-W	VT-4
49	490	500	245,000	58	N-22-W	VO-17
50	400	—	—	58	N-30-W	VO-21
51	480	—	—	66	N-40-W	VT-10
52	640	640	409,600	49	N-26-W	VIP-6
53	—	580	—	68	N-29-W	VT-25
54	欠番		—			
55	470	—	—	69	—	VIP-2
56	600	640	384,000	76	N-27-W	VY-4
57	—	545	—	70	N-26-W	VY-9
58	—	—	—	47	—	VIP-21
59	—	—	—	66	N-14-W	VIP-17
60	390	—	—	71	N-22-W	VO-16
61	340	—	—	59	N-22-W	VO-9
62	510	520	265,200	46	N-19-W	VO-5
63	565	540	305,100	58	N-22-W	VO-10
64	540	—	—	49	N-10-W	VO-15
65	440	490	215,600	74	N-23-W	VO-17
66	—	640	—	55	N-35-W	VO-15
67	560	560	313,600	80	N-17-W	VIK-11
68	600	530	318,000	64	N-11-W	VIK-11
69	280	380	106,400	55	N-12-W	VIK-6
70	320	360	115,200	66	N-12-W	VT-15
71	370	—	—	89	N-23-W	VO-11
72	330	310	102,300	36	N-11-W	VIP-16
73	490	430	210,700	72	N-20-W	VY-3
74	300	320	96,000	42	N-25-W	VT-20

SB番号	主軸長	副軸長	面積(㎡)	深さ	主軸方向	位置
75	欠番		—			
76	380	300	114,000	37	N-14-W	VIP-16
77	490	540	264,600	62	N-20-W	VIP-11
78	400	430	172,000	72	N-25-W	VJ-25
79	260	260	67,600	42	N-19-W	VT-10
80	欠番					
81	欠番					
82	欠番					
83	欠番					
84	400	—	—	53	—	VIK-12
101	470	480	225,600	55	N-12-W	VI-15
102	460	430	197,800	72	N-18-W	VJ-6
103	440	500	220,000	66	N-10-W	VI-5
104	470	440	206,800	55	N-17-W	VJ-12
105	550	580	319,000	73	N-27-W	VJ-18
106	560	500	280,000	65	N-14-W	VJ-17
107	330	330	108,900	50	N-12-W	VJ-13
108	435	380	165,300	44	N-9-W	VJ-7
109	560	540	302,400	55	N-16-W	VJ-15
110	310	320	99,200	43	N-80-W	VE-25
111	540	600	324,000	67	N-18-W	VE-6
112	250	280	70,000	66	N-10-W	VE-12
113	240	250	60,000	46	N-10-W	VE-13
114	720	740	532,800	64	N-22-W	VE-25
115	420	480	201,600	58	N-14-W	VE-14
116	400	450	180,000	42	N-15-W	VE-19
117	500	540	270,000	34	N-64-W	VJ-5
118	550	540	297,000	57	N-30-W	VJ-12
119	480	470	225,600	44	N-20-W	VJ-11
120	580	610	353,800	53	N-9-W	VIF-6
121	690	—	—	46	N-13-W	VIA-11
122	240	320	76,800	72	N-19-W	VIA-1
123	480	580	278,400	31	N-12-W	VE-20
124	340	560	190,400	53	N-9-W	VE-15
125	520	—	—	65	N-6-W	VIF-1
126	欠番		—			
127	810	720	583,200	64	N-20-W	VJ-14
128	440	480	211,200	80	N-24-W	VJ-21
129	—	—	—	54	N-0	VIA-6
130	—	690	—	63	N-15-W	VJ-13
131	550	560	308,000	81	N-15-W	VJ-16
132	460	480	220,800	70	N-18-W	VJ-19
133	530	530	280,900	49	N-18-W	VE-14
134	450	480	216,000	66	N-20-W	VJ-22
135	640	660	422,400	74	N-16-W	VJ-18
136	340	—	—	46	—	VJ-18
137	420	47	19,740	67	N-24-W	VJ-21
138	370	—	—	47	N-25-W	VJ-18
139	—	—	—	54	N-20-W	VJ-17
140	—	—	—	40	—	VIA-16
141	320	390	124,800	58	N-21-W	VIA-1
142	380	440	167,200	47	N-17-W	VI-5
143	340	360	122,400	17	N-17-W	VIA-21
144	360	—	—	58	—	VIA-22
145	—	—	—	16	N-16-W	VE-24
			—			
201	500	380	190,000	50	N-20-W	IIIY-22
202	300	340	102,000	52	N-80-W	VD-5
301	—	460	—	48	N-29-W	IVA-2
302	500	500	250,000	38	N-30-W	IIIE-9
303	320	280	89,600	37	N-70-W	IY-25
304	680	670	455,600	72	N-5-W	IIIO-24
305	260	270	70,200	15	N-16-W	IIIO-22
306	620	660	409,200	73	N-0	IIIT-1
307	310	330	102,300	44	N-0	IIIO-22
308	—	—	—	19	N-78	IIIO-10
309	380	480	182,400	16	N-90	IIIO-5
310	—	—	—	54	—	IVF-21

※主軸・副軸長、深さの単位はcm。
※不確定な要素のあるものは（）を用いた。
※面積＝主軸長×副軸長。
※主軸方向の数値は角度を示す。
※位置のｸﾞﾘｯﾄﾞ名は遺構の北西側のｸﾞﾘｯﾄﾞ名のみ示してある。

芝宮遺跡群　掘立柱建物跡一覧					
遺構番号	タイプ	グリッド			
1	J	ⅡK-7	ⅡK-8		
2	欠番				
3	L	ⅡF-17	ⅡF-21	ⅡF-22	
4	K	ⅡK-13	ⅡK-18		
5	欠番				
6	M	ⅡK-4	ⅡK-5		
7	K	ⅡF-2	ⅡF-3		
8	K	ⅡF-21	ⅡK-1	ⅡK-2	
9	A	ⅠO-4	ⅠO-9		
10		ⅠO-8	ⅠO-9		
11	K	ⅠO-4	ⅠO-9		
12	M	ⅡK-12	ⅡK-13	ⅡK-17	ⅡK-18
13	E	ⅡK-7	ⅡK-12		
14	L	ⅡF-17	ⅡF-22		
15	K	ⅡK-6	ⅡK-7		
16	E	ⅡK-12	ⅡK-13	ⅡK-17	ⅡK-18
17	E	ⅡK-12	ⅡK-13	ⅡK-17	
18	O	ⅠO-14	ⅠO-15	ⅠO-19	ⅠO-20
19		ⅠO-10			
20		ⅠO-9	ⅠO-10		
21	欠番				
22	B	ⅠJ-24	ⅠO-4		
23					
24	N	ⅡK-8	ⅡK-9	ⅡK-13	ⅡK-14
25		ⅢB-22	ⅢB-23		
26		ⅢB-17	ⅢB-18		
27		ⅢB-18			
28		ⅢB-23			
29	K	ⅢB-21	ⅢB-22	ⅢG-1	ⅢG-2
30	C	ⅢL-24	ⅢL-25	ⅢG-4	ⅢG-5
31	K	ⅢG-17	ⅢG-21	ⅢG-22	
32		ⅢL-24			
33	H	ⅢL-18	ⅢL-19	ⅢL-23	ⅢL-24
34		ⅢL-19			
35		ⅢL-25			
36	E	ⅢF-19	ⅢF-20		
37	E	ⅢK-3	ⅢK-4		
38	P	ⅢK-18	ⅢK-19	ⅢK-23	ⅢK-24
39		ⅢK-23	ⅢP-3		
40		ⅢK-23	ⅢP-3		
41	C	ⅢG-1	ⅢG-2	ⅢG-7	
42		ⅢF-24	ⅢK-4		
43	E	ⅢF-25	ⅢK-5	ⅢL-1	
44	欠番				
45	欠番				
46		ⅢF-15	ⅢG-11		
47	E	ⅡJ-5	ⅡJ-11	ⅡF-6	
48	E	ⅡU-21	ⅢA-1		
49	D'	ⅡP-9	ⅡP-10		
50	C	ⅡP-4	ⅡP-5		
51	C	ⅢA-12	ⅢA-16	ⅢA-17	
52	G	ⅡK-24	ⅡK-25	ⅡP-5	
53	C	ⅡK-25			
54	E	ⅢF-15	ⅢF-20	ⅢG-11	ⅢG-16
55	G	ⅡP-3	ⅡP-4		
56	A	ⅡU-17	ⅡU-18		
57	A	ⅡU-18			
58	K	ⅡU-12	ⅡU-17	ⅡU-18	
59	C	ⅡU-22	ⅡU-23		
60	C	ⅢA-25			
61	A	ⅢA-20	ⅢA-25		
62		ⅠT-9	ⅠT-14		
63	G	ⅠT-9			
64		ⅡP-7	ⅡP-12		
65		ⅠT-19	ⅠT-20	ⅠT-25	
66	A	ⅠT-9			
67		ⅢF-5			
68	A	ⅢF-4	ⅢF-9		
69	C	ⅢA-25			
70		ⅡP-2	ⅡP-7		
71	欠番				
72	B	ⅡP-17	ⅡP-22		
73	F	ⅡP-17	ⅡP-18	ⅡP-22	ⅡP-23
74	A	ⅡP-23			
75	E	ⅡK-19			
76		ⅡP-22	ⅡU-2		
77		ⅡP-8	ⅡP-9		
78		ⅡP-16	ⅡP-17		
79		ⅢL-9			
80		ⅢL-9	ⅢL-14		
81	A	ⅢK-3	ⅢK-7	ⅢK-8	
82		ⅢK-8			
83		ⅢL-6			
84		ⅢL-11	ⅢL-16		
85	H	ⅢL-11	ⅢL-12		
86		ⅢL-6	ⅢL-11	ⅢL-12	
87		ⅢL-6	ⅢL-11		
88	A	ⅡU-18			

遺構番号	タイプ	グリッド			
89	C	ⅡU-17	ⅡU-18		
90	L	ⅡU-11	ⅡU-12	ⅡU-16	
91	K	ⅡU-11	ⅡU-12	ⅡU-16	
92	A	ⅠY-2	ⅡU-16		
93	A	ⅠT-9			
94	欠番				
95	欠番				
96	欠番				
97	D	ⅡF-22	ⅡK-2		
98	欠番				
99	欠番				
100	欠番				
101	P	ⅠJ-15	ⅠJ-20	ⅡF-11	ⅡF-16
102		ⅡA-12	ⅡA-13		
103	C	ⅡA-18			
104	C	ⅡA-17	ⅡA-18		
105		ⅡA-18			
106		ⅡA-16	ⅡA-17		
107		ⅡA-21	ⅡA-22		
108	I	ⅡA-22	ⅡA-23		
109	C	ⅡF-2	ⅡF-3		
110	A	ⅡF-2	ⅡF-3		
111	C	ⅡF-1	ⅡF-6		
112	C	ⅡF-1	ⅡF-2	ⅡF-6	ⅡF-7
113		ⅡF-4	ⅡF-8	ⅡF-9	
114	D	ⅡF-8	ⅡF-9		
115	N	ⅡF-8	ⅡF-9	ⅡF-13	ⅡF-14
116	L	ⅡF-12	ⅡF-17	ⅡF-18	
117	C	ⅠJ-25	ⅡF-21		
118		ⅠJ-20	ⅠJ-25		
119	D'	ⅡK-1	ⅡK-2	ⅡK-6	
120	N	ⅡK-1	ⅡK-2		
121	C	ⅡK-2	ⅡK-9		
122	K	ⅡK-2	ⅡK-3	ⅡK-7	ⅡK-8
123	B	ⅡK-2	ⅡK-3	ⅡK-7	ⅡK-8
124	A	ⅡK-2	ⅡK-7		
125	M	ⅡK-7	ⅡK-8		
126	B	ⅡF-24	ⅡK-4		
127	A	ⅡK-4			
128	C	ⅡK-4	ⅡK-5		
129	欠番				
130	C	ⅡK-24	ⅡP-4		
131	A	ⅡK-24	ⅡK-25		
132	C	ⅡK-24	ⅡK-25		
133	A	ⅠO-5	ⅠO-9	ⅠO-10	
134		ⅠO-9	ⅠO-10	ⅠO-14	ⅠO-15
135		ⅠO-9	ⅠO-14	ⅠO-15	
136	G	ⅠO-19	ⅠO-20	ⅠO-24	ⅠO-25
137	L	ⅠO-19	ⅠO-20	ⅠO-24	ⅠO-25
138		ⅠT-24	ⅠT-25		
139		ⅠY-5			
140		ⅠY-5	ⅠY-10		
141		ⅠY-14	ⅠY-15		
142		ⅡU-16	ⅡU-21		
143	A	ⅡU-17	ⅡU-18		
144	E	ⅢA-1	ⅢA-2		
145	E	ⅢA-6			
146	C	ⅢA-20			
147	A	ⅢF-23	ⅢF-24		
148	A	ⅢF-24	ⅢK-4		
149	C	ⅢG-11	ⅢG-12	ⅢG-17	
150		ⅢG-8	ⅢG-13		
151		ⅢL-11			
152		ⅡK-2	ⅡK-3		

中原遺跡群　掘立柱建物跡一覧

遺構番号	タイプ	グリッド			
1		VY-7	VY-12	VY-13	
2		VY-7	VY-12		
3		VY-7	VY-12		
4		VY-8	VY-13		
5		VY-12	VY-13	VY-17	
6	A	VO-23	VO-24		
7	A	VO-23	VO-24		
8		VT-2	VT-7		
9		VT-18	VT-23		
10		VT-14	VT-15	VT-19	VT-20
11		VT-8	VT-9	VT-13	VT-14
12	欠番				
13	欠番				
14	A	VT-14			
15	A	VT-14			
16	E	VIP-1	VIP-2		
17		VIP-21			
18		VIP-21	VIP-22		
19	K	VT-19	VT-24		
20	欠番				
21	欠番				
22	欠番				
23	K	VO-3	VO-4	VO-8	VO-9
24	欠番				
25	A	VIK-17			
26	I	VT-19	VT-24		
27	K	VO-20	VIK-16		
28		VO-8			
29	A	VO-7	VO-8		
30	K	VO-7	VO-12		
31	A	VO-7			
32	欠番				
33	欠番				
34	欠番				
35	欠番				
36	K	VO-11	VO-12	VO-16	VO-17
37	K	VIK-1	VIK-6		
38	I	VT-19	VT-20		
39	R	VT-19	VT-20	VT-24	VT-25
40	E	VO-14	VO-15	VO-19	VO-20
41	C	VO-4	VJ-24		
42	A	VO-16	VO-17		
43	E	VT-23	VY-3	VT-22	
44	欠番				
45	欠番	VT-18			
46	E	VT-23	VY-3		
47	J	VIP-11	VT-15	VT-20	
48	C	VT-23	VY-3		
49	欠番				
50	K	VT-14	VT-15	VT-19	
51	I	VO-6	VO-7	VO-11	VO-12
52	B	VJ-23	VO-3		
53	R	VO-2	VO-3	VJ-23	
54	A	VO-4	VJ-24		
55	A	VO-3	VO-7	VO-8	
56	E	VO-12	VO-13		
57		VO-12	VO-13	VO-17	VO-18
58	D	VO-12	VO-17		
59	M	VO-12	VO-13		
60	K	VO-8	VO-12	VO-13	
61	J	VO-8	VO-13	VO-14	VO-18
62	C	VO-18	VO-19		
63	K	VIP-6	VIP-7		
64		VIP-1	VIP-2		
65	E	VT-14			
66	K	VT-14	VT-15	VT-19	VT-20
67	R	VT-3	VT-4	VT-8	VT-9
68	D	VT-3	VT-4	VT-8	VT-9
69	A	VO-6	VO-7	VO-12	
70	D	VO-18			
71	K	VT-17	VT-18	VT-22	VT-23
72	A	VT-13	VT-18		
73		VT-17	VT-18		
74	E	VT-18	VT-23		
75	A'	VT-18	VT-23		
76	D	VT-22	VT-23		
77	R	VT-22	VT-23	VY-2	VY-3
78	A	VT-2			
79	A	VO-7	VO-8		
80	K	VT-14	VT-15	VT-19	VT-20
81	A	VT-20	VIP-16		
82		VT-19	VT-20	VT-24	VT-25
83	B	VT-19	VT-20	VT-24	VT-25
84		VIP-11			
85		VIP-11	VIP-16	VT-15	VT-20
86	A	VT-22	VT-23		
87		VIP-1	VIP-2	VIP-6	
88	E	VT-13	VT-14		
89	A	VIK-6			
90	A'	VIK-1	VIK-6		
91		VIK-6	VIK-7		
92	T	VO-23	VO-24		
93	欠番				
94	欠番				
95	欠番				
96	欠番				
97	欠番				
98	欠番				
99	欠番				
100	欠番				
101	M	VE-12	VE-13	VE-18	
102	S	VIF-1	VIF-6		
103	M	VE-25	VIF-1	VIA-21	VJ-5
104	R	VJ-17	VJ-21	VJ-22	
105	S	VJ-16	VJ-17	VJ-21	
106	K	VIA-21	VIA-22		
107					
108	E	VIE-22	VIE-23	VJ-3	
109	A	VJ-16	VJ-21		
110	E	VE-9	VE-14		
111					
112		VE-8	VE-12	VE-13	
113	A	VE-23			
114		VJ-9	VJ-10	VJ-14	VJ-15
115	D	VE-18	VE-19	VE-23	VE-24
116	A	VJ-11	VJ-16	VJ-19	
117	A	VE-21	VJ-1		
118	C	VJ-2			
119	C	VJ-2	VJ-3		
120	K	VJ-21	VO-1		
121	G	VI-25	VJ-21	VO-1	
122	C	VE-10	VE-15		
123	K	VJ-16	VJ-21	VI-20	
124		VIA-6	VIA-11	VE-10	VE-15
125	C	VI-15	VJ-15		
126					
127	K	VJ-6	VJ-11		
128	E	VJ-4			
129					
130					
131	C	VIA-21	VIF-1		
132	E	VI-15	VJ-11		
133	C	VJ-8	VJ-9		
134	E	VJ-3	VJ-8		
135	H	VE-15	VE-20		
136		VE-15	VE-20		
137	B	VE-24	VE-25		
138	D'	VJ-8	VJ-9	VJ-13	
139	A	VE-9	VE-10		
140		VIF-11	VIF-12	VIF-16	VIF-17
141		VIF-6	VIF-7	VIF-11	VIF-12
142					
143					
144					
145					
146	K	VIA-21	VE-25	VIF-1	VJ-5
147	C	VE-23	VJ-3		
148	C	VE-8	VE-9		
149	欠番				
150	D	VE-8	VE-9	VE-13	VE-14
151	B	VE-8	VE-9	VE-13	VE-14
152	B	VIA-6	VE-10	VE-15	
153	A	VE-19	VE-24		
154		VIA-21	VE-25	VIF-1	VJ-5
155		VIA-21			
156	欠番				
157	S	VIA-21	VIA-22		
158	欠番				
159	A	VIA-21	VIA-22		
160	欠番				
161	B	VIA-21	VIA-22	VIF-1	VIF-2
162	C	VJ-3			
163	D'	VJ-8			
164	G	VJ-8	VJ-9	VJ-13	
165	C	VJ-4			
166	D	VJ-4	VJ-9	VJ-10	
167	C	VJ-9	VJ-10	VJ-14	VJ-15
168	B	VJ-9	VJ-10		
169	A'	VIF-11	VJ-10	VJ-15	
170	A'	VIF-6	VIF-7	VIF-11	VIF-12
171	H	VIF-21	VJ-20	VJ-25	
172	A	VJ-25			
173	S	VIF-21	VJ-25		
174	R	VIF-21	VIF-22		
175	D	VJ-2	VJ-7		
176	A'	VJ-6			
177	R	VI-15	VJ-11		
178	S	VJ-6	VJ-7	VJ-11	VJ-12
179		VJ-7	VJ-12		
180	B	VJ-7	VJ-12		
181	A	VJ-11	VJ-12		
182	F	VJ-16	VJ-17		
183	K	VI-20	VI-25	VJ-16	VJ-21
184		VJ-16	VJ-17	VJ-21	
185	J	VJ-21	VI-25		
186	E	VI-20	VI-25	VJ-16	VJ-21
187	A	VI-20	VJ-16	VJ-21	
188	A'	VJ-20	VJ-16		

遺構番号	タイプ	グリッド			
189	A'	ＶＩ-10	ＶＩ-15		
190	T	ＶＩ-10	ＶＩ-15		
191	A	ＶＩ-10	ＶＩ-15		
192	T	ＶＩ-15	ＶＩ-20	ＶＪ-16	
193	欠番				
194	欠番				
195	欠番				
196	欠番				
197	欠番				
198	欠番				
199	欠番				
200	欠番				
201	欠番				
202	欠番				
203	欠番				
204	欠番				
205	欠番				
206	欠番				
207	欠番				
208	欠番				
209	欠番				
210	欠番				
211	欠番				
212	欠番				
213	欠番				
214	欠番				
215	欠番				
216	欠番				
217	欠番				
218	欠番				
219	欠番				
220	欠番				
221	欠番				
222	欠番				
223	欠番				
224	欠番				
225	欠番				
226	欠番				
227	欠番				
228	欠番				
229	欠番				
230	欠番				
231	欠番				
232	欠番				
233	欠番				
234	欠番				
235	欠番				
236	欠番				
237	欠番				
238	欠番				
239	欠番				
240	欠番				
241	欠番				
242	欠番				
243	欠番				
244	欠番				
245	欠番				
246	欠番				
247	欠番				
248	欠番				
249	欠番				
250	欠番				
251	E	ⅢＯ-4	ⅢＯ-5		
252	A	ⅢＯ-4	ⅢＯ-5		
253	A	ⅢＯ-4			
254	A	ⅢＥ-4	ⅢＥ-5	ⅢＥ-10	
301	K	ＶＴ-22	ＶＴ-23		
302	T	ＶＴ-24	ＶＴ-25		

芝宮遺跡群　出土鉄・金属製品

図版番号	器　種	遺構	出土位置	特　　徴
1	鍬(鋤)先	SB12	床面直上	先端をわずかに欠くがほぼ完形。幅18.9cm袋部の溝は浅い。
2	鎌	SB27	床上20cmの埋土中	着柄角100°強。身幅は基部で最大となり、ゆるいカーブを描いて先端につながる。
3	鎌	SB179	床上20cmの埋土中	着柄角は直角よりやや開く。背はまっすぐのび、刃部のみゆるやかに曲がる。
4	鎌	SB50	上層	着柄角100°強。基部のみで形態不明。
5	鎌	SB156	SB-124の北	基部材折り返し、着柄角ともに不明。基部から徐々に身幅を減じ、丸い先端へつづく。欠損した部分は少ない。
6	鎌	SB223	ｶﾏﾄﾞ内	基部材折り返しが身幅の半分で終わり、下端は丸く破損ではない。着柄角100°前後。中原遺跡SB47出土の鎌(9)と同様の形態となるか。
7	鎌	SD3Fｳ	溝覆土	着柄角130。前後。身は基部からわずかに幅を狭めて大きく曲がる。
8	穂摘み具	SB3	覆土	両端を欠く。柄固定用の釘のための穿孔二つあり。
9	穂摘み具	SD3-ｷ	2層	柄らしい木質部わずかに残る。完形の「半月形鉄製品」。
10	紡錘車	SB27	覆土	紡輪φ4cm。軸は断面円形。上端の鉤は錆で原型をとどめない。
11	紡錘車	SD3-B	上層	紡輪φ4cmでSB27出土品と似る。軸は断面円形で両端を欠く。
12	紡輪	SD3-B	上層	φ5cm
13	紡軸	SD3	EとDの間ﾍﾞﾙﾄ	断面長方形。上掛の鉤から紡錘車の軸と判断した。
14	毛抜き形鉄製品	SB13	覆土	断面長方形。大半を欠くが支点の屈曲部から形態を判断した。
15	毛抜き形鉄製青ロ	SB30	覆土	断面長方形。屈曲部に明瞭に肩がつく。
16	苧引き具	SB8	覆土	半分ほどを欠く。　上方へのびる耳は短い。
17	鋏	SB134	床面直上	刃先と腕の一部を欠く。刃部残存長6.7cm。
18	曲鉋	SB151	床上10cm	刃部は茎部より幅広で鏝状。刃部長2cm強と小振りで、先端は反っている。
19	鑿	SD3-C	中層	刃部毎約1cmの平鑿で、先端のみ残存。本来は袋状の着柄部をもっていたか。
20	針	SB232	中層	針の目処の部分のみ。目処の成形法は不明。
21	針	SB195	覆土	断面は角の丸まった長方形。先端は若干反り気味に細くなっていく。
22	刀子	SB9	床面直上	背・刃双方の側に関をもつ。茎は身よりわずかに幅を減じる。
23	刀子	SB22	覆土	茎から背の側に持ち上がるようなかたちで身がつながる。完形。
24	刀子	SB22	柱穴	SB9出土のものの大振りなタイプか。
25	刀子	SB16	覆土	切っ先のみ。木の繊維が残るが方向がばらばらで投棄時に付着したものか。
26	刀子	SB30	覆土	土圧で曲がるが残存する刃部長約10cm。直線的に刃がのびる。
27	刀子	SD3-A	炭層	刃先と茎の両端を欠く。鹿角か象牙か、目釘で固定された柄が残る。目釘は鉄で、φ2mm、長さ1.3cm、柄を貫通している。
28	刀子	SB30	覆土	茎部の端が尖る。刃と茎の境目は破損しており関は不明。
29	刀子	SB35	掘り形	細長く、大振りな刃部。切っ先はゆるやかな曲線を描く。
30	刀子	SB42	埋土中	茎部。背側は関をもたず、刃も明確な張出しをもたず茎にかわる。
31	刀子	SB82	上層	30ほど刃と茎の幅の差はないが、同様の形態か。
32	刀子	SB147	床上10cm	刃の長さに対し、幅が広い。

芝宮遺跡群　出土鉄・金属製品

図版番号	器　種	遺構	出土位置	特　　徴
33	刀子	SB98	床面直上	背側にのみ張り出す関をもち、長い茎がつづく。
34	刀子	SB154	掘り形	両端を欠く。柄の部品か、鉄の輪がはまった状態で出土。
35	刀子	SB137	床上10cm	両端を欠く。完形であれば刃渡りは10cmをこえる大振りな刀子。
36	刀子	SB140	覆土	31の小振りになったもの。
37	刀子	SB193	床直	床面直上から出土。22、25と同様の形態。
38	刀子	SB198	カマド付近の覆土中	刃渡り3cmの小型品。28とならんで出土したなかで最小の刀子。
39	刀子	SD3B	上層　溝覆土	背・刃がそれぞれ直線的にのび、三角形の身を形成する。
40	刀子	SD3B	上層	刃の幅に変化がなくまっすぐ身がのびる。柄か木質部残る。
41	刀子	SD3E-エ	溝覆土	40と同様の形態の身。刃・背両側に関をもって茎がつく。
42	刀子	SD3C-4	溝覆土	22、25、37に似る。切先近くが細いのは研ぎ方によるか。
43	刀子	I-09検出	検出面	刃部。組長い身が、ゆるやかに曲がる。
44	鎧金具	SB13	覆土	逆U字形の鎧金具。側面に二箇所の穿孔がみとめられる。
45	兵庫鎖	SB25	住居南西の角	鉄の環を折り曲げた兵庫鎖。鐙(みずお)の一部。
46	辻金具	遺構外	覆土	四脚のうち三つを破損。脚部の鋲は銀で飾る。
47	鉄鏃	SB27	住居内ピット	刃部が切り出しナイフ状の長頭鏃。頸部から刃部にかけてゆるやかに開く。
48	鉄鏃	SB176	覆土	刃部が切り出しナイフ状の長頭鏃。
49	鉄鏃	SB176	覆土	丸鎬で左右に刃がつく長頭鏃。芝宮遺跡ではこのタイプの出土は多い。
50	鉄鏃	SD3B	覆土	47、48に似るが刃の幅、鏃身長ともに大きい。
51	鉄鏃	SD3B	上層(下)　溝覆土	先端は切り出し状だが、幅の狭い鏃。
52	鉄鏃	SD3C	上層　溝覆土中	柳葉形鏃身の両側に逆刺をもつ長頸鏃。
53	鉄鏃	SD3D	下層	49と似た形の長頸鏃。破損が著しく関の有無などは不明。
54	鉄鏃	SD3Eア	2層	50の刃の幅がやや狭いタイプ。
55	鉄鏃	SD3Fウ	覆土	49、53と似る。頸部は徐々に太さを増し、左右に棘状の関が張り出す。
56	鉄鏃	SD3キ	1層　溝覆土　上層	雁股鏃。刃部も一緒に出土したが接合できなかった。
57	鉄鏃	不明	不明	羽子板形の鏃身をもつ万頭鏃。
58	鉄鏃	SB29	床上10cm	長い脚をもつ無茎の三角鏃。穿孔あり。
59	鉄鏃	SD3C-4	2層	無脚・無茎の三角鏃。中央に穿孔あり。左右の逆刺をわずかに欠く。
60	鉄鏃	SD3Y-3	2層　溝上層の黒色土中からの出土	逆刺に段がつく三角鏃。茎がわずかに残る。薄い平造りの鏃身。
61	鉄鏃	SD3G/H	覆土	太い頸部と大きな柳葉形の鏃身をもつ。逆刺は小さい。
62	鉄鏃	SD3/8	覆土	逆刺をもたない有茎の三角鏃。
63	鉄鏃	Ⅱ-V-11	包含層中	63と似る。本来は同様に長い茎をもっていたか。
64	鉄鏃	SD3B	上層上	長い茎をもつ三角鏃。頸部は断面長方形で両側に関をもって茎につづく。
65	鉄鏃	I-K10検出	検出面	小さな逆脚Iと太い頸部の有茎長三角形鏃身。これ1点のみ。
66	鉄鏃	T5	検出面	組長くのびる刃をもつ鉄鏃。頸部が捩じれ、茎に螺旋状に繊維の付着あり。
67	釘	SB151	北壁際	長さ10cm強の角釘。

芝宮遺跡群　出土鉄・金属製品

図版番号	器　種	遺構	出土位置	特　　徴
68	釘	SB76	覆土	長さ15cm前後。
69	棒状不明品	SB39	覆土	断面長方形の鍛造品。木の柄が残る。細身の鑿あるいは錐か。
70	棒状不明品	SD3	検出面	一端は二股に分かれ、もう一端は小さな鋲のようなものがつく。
71	棒状不明品	SD3A	覆土	鉸具の一部か。
72	棒状不明品	SB30	覆土	轡の一部か。棒の一方の端を丸めてある。
73	棒状不明品	SB30	ｶﾏﾄﾞ付近	断面長方形の棒状。両端で太さを変えながらそれぞれねじれている。
74	棒状不明品	Ⅱb粘採N0.1	粘土採掘坑埋土	図の上端は断面四角形。下端では断面は丸で、鑿で切ったように鋭い。
75	棒状不明品	SB29	覆土	両端を欠く。幅広の部分に刃はつくようにはみえない。
76	板状不明品	SD3D	中層上	薄い鉄板を叩いて膨らみをもたせ、中央に穿孔したもの。
77	板状不明品	SB109	覆土	両端は欠ける。図右端はふくらみ、そこに鋲（釘）が打たれる。
78	板状不明品	SB212	床面直上	床面直上から出土。鋳鉄のようだ。
79	板状不明品	SB22	ｶﾏﾄﾞ内	鋳物の鉄片。鍋の一部か。
80	板状不明品	SD3A	1層	75と似るがやや大振りな穿孔のある鉄片。
81	板状不明品	SD3F-オ	1層　溝の上層	
82	不明品	SB30Ⅳ区	覆土	一つの基部から方向を異にする三本の鑿状の身がつく。木工具の一種か。
83	棒状不明品	Ⅱ-T-5	検出面	断面角形で先端が尖る。打ち込み錐か、鑿か。この他に三点出土した。
84	板状不明品	SD3	検出面	刀子の茎のようでもあるが折れた形跡はない。「きさげ」の一種か。
85	板状不明品	SB116	1層	明らかに穿孔された跡のある鉄板。
86	不明品	SB35	覆土	薄い鉄板を折り曲げたもの。穿孔される。革製品などに固定されていたか。
87	不明品	SB35	覆土	薄い鉄板を折り曲げて鋲で止めたもの。鋲の鍍金はみられない。
88	鎖	SB35	検出面より20cm上の埋土中	傷みが激しく表面の鍍金などはわからない。
89	足金具	IF7ﾄﾚﾝﾁ	覆土	本体の環のなかほどに割れがある。図化しなかったが接合の痕跡か。
90	不明品	SB108	床上10cmの埋土中	床面直上で出土。二枚の鉄片に隙間をもたせて鋲で固定したもの。
91	不明品	SB29	覆土	板状の部分に刃がつく。刀子にしては茎が長い。
92	環状鉄製品	SB16	床面直上	環のつなぎ目はみえない。
93	環状鉄製品	SD3C	上層下	小口は整っておらず、鑿で断ち切ったかのようだ。接合の痕跡は明瞭。
94	鉸具	SD3B	覆土	鉸具の縁金具か。
95	鉸具	SD3C	中層（上）　北寄り	鉸具の縁金具か。
96	鉈尾	SB26	覆土	鉄板に二箇所の穿孔。
97	鉈尾	SD3D/Eﾍﾞﾙﾄ	埋土	半円形の鉄板から耳を出し、裏側へ折り曲げて帯をはさみこむ。
98	鉸具	SB122	覆土	鉸具の縁金具。刺金の回転軸を受ける孔も残る。銅製。
99	鉸具	SB30	覆土	鉸具の刺金。銅製。軸のための孔が貫通する。
100	巡方	SD3C	大溝埋土	裏蓋を欠く。銅製。
101	巡方	SD3D	溝埋土の上層	長方形の透かし孔をもつ銅板。支柱を受ける小孔が貫通する。
102	巡方	SB21	覆土	大きな透かし孔をもつ板状銅製品。支柱の痕跡は3つあり、2つは残存。

芝宮遺跡群　出土鉄・金属製品				
図版番号	器　種	遺構	出土位置	特　　徴
103	帯金具	SD3D	上層	丸鞆の裏蓋か、鉈尾か。穿孔は２つ確認できた。
104	帯金具	SD3D	上層	表面に鍍金が残る板状銅製品。小孔は貫通する。鉈尾か。
105	海獣葡萄鏡	SD3D	中層　溝覆土	直径6.2cm。表面の腐食がすすみ、文様はきわめて不明瞭である。鈕は獣が伏せたように見える。外区は不明瞭ながら蔓草らしいものが見え、内区には4つ海獣らしいものが配される。
106	金環	SB29	覆土	環の内側に鍍金がわずかに残る。
107	金環	SB220	覆土	
108	金環	SD3D/Eﾍﾞﾙﾄ	覆土	表面の鍍金がほとんど残る。
109	金環	SB82	覆土	小振りで、鍍金もよく残る。
110	金環	SD3Gｱ	2層　溝覆土中	芝宮遺跡出土の金環のうちで最小。鍍金はほとんど剥落している。
111	不明銅製品	SD3D	上層　溝の覆土	銅板の折り曲げと接着の跡が明瞭。刀子の柄の装飾に使われたものか。
112	不明銅製品	SB83	覆土	小孔を一つ穿った銅板が湾曲している。
113	不明銅製品	SB193	床面直上	細長い銅板を曲げたもの。刀剣の鞘の責金具か。
114	簪	SB81	覆土	毛彫りによる月・星・すすき(？)の意匠あり。近世・近代の撹乱によるものか。
115	銅銭	SD3	覆土	和同開寳
116	銅銭	SD3D/B	覆土	神功開寳

中原遺跡群　鉄・金属製品

図版番号	器　種	遺構	番号	出土位置	特　　徴
1	鎌	SB	1	2層　住居のｶﾏﾄﾞ手前　床から10cmほど浮いたかたちで出土	着柄角ほぼ直角。背はまっすぐのび、刃はたいへんやわらかに内弯したあと先端で丸くなる。
2	鎌	SB	3	住居北東の壁際　床面からわずかに浮いた位置から出土	着柄角120°前後。身全体が湾曲する。身幅は基部から先端にかけて徐々にせばまる。刃が厚いわけではないが身幅が狭いためしっかりした印象をうける。
3	鎌	SB	7	取り上げNo. 1　床より5cm前後浮いた壁際から出土	着柄角直角よりやや開く。身全体が弯曲する。身の半ばで急激に幅を減じ、丸い先端へとつづく。
4	鎌	SB	9	床面	着柄角120。前後。幅広の身が先端近くで曲がり、嘴伏に下がる。折り返しは小さく、基部下端はほぼ直角となる。芝宮遺跡SB223(6)、後述のSB47出土の鎌と似る。
5	鎌	SB	15	床面直上	着柄角かなりの鈍角。基部から斜め上方に立ち上がる身は先端が下向きに曲がる。4よりは身幅の変化がある。
6	鎌	SB	39	床面から20cmほど上方	着柄色直角よりやや開く。背ばほぼまっすぐのび、刃は基部の付近でゆるやかに曲がる。背から刃にかけて厚さの変化は少ない。
7	鎌	SB	44	覆土	着柄角120°前後。先端を欠く。一定の身幅で全体が曲がっていく。
8	鎌	SB	44	覆土中	先端のみ。後述9または10と似た形か。
9	鎌	SB	47	取り上げNo. 1　床面直上から出土	着柄角は130°前後とかなりの鈍角となる。身幅は広く、基部から先端にかけでほぼ一定である。刃は大きく曲がるが、方向が変わってからの刃の長さは4や10より長い。
10	鎌	SB	47	1層(上)　取り上げNo.2	基部を欠き、着柄角、折り返しの方向は不明。同時に出土した9も幅広の身が大きく曲がるが、10はより先端に近いところでカーブしている。
11	鎌	SB	127	覆土	基部を欠き、着柄角、折り返しの方向は不明。先端は丸い。7と似た形態にも見えるが、刃の描く曲線が方向を変える点はより先端に近い。
12	穂摘み具	SB	78	覆土	図示した下側に刃がつく。穿孔は一つ確認できた。
13	刀子	SB	2	覆土	背、刃の双方に関をもつ。刃関に近いところでゆるやかに曲がる。
14	刀子	SB	15	覆土	身と茎は屈曲しながら同じ幅でつながる。芝宮遺跡SB22出土の23に似る。
15	刀子	SB	29	1層	身は鋭角三角形を呈する。茎は身より長い。
16	刀子	SB	101	1層　覆土の上層	背から茎にかけては関をもたず一直線につながる。
17	刀子	SB	103	覆土	13の刀子に似るがやや細身。
18	刀子	SK	360	SK覆土	13と同様に背、刃の双方に段差のある関をもつ。刃は直線的にのびる。
19	刀子	ST	10pit5	壁付近からやや浮いたかたちで出土	柄の木質部が残るため関の有無は不明。背と刃は一直線に先端につづき、身の輪郭は鋭角三角形となる。厚くしっかりした造りで、片鎬。大きな身の刀子だが目釘はない。
20	火打金	SX	11	覆土	左右両端が上方へ大きく反る。
21	紡錘車	SB	47	ｶﾏﾄﾞ	紡輪φ4. 3cm。軸は損傷が著しく本来の断面形不明。
22	紡錘車	ST	37	P6・7　布掘りの掘り方覆土	紡輪φ5. 4cm。軸の上端の鉤は残る。軸から枝分かれした部分は錆か。
23	紡軸	SX	17	覆土	断面長方形あるいはやや角張った丸。鉤が残り、紡軸とした。
24	釘	SB	104	覆土	断面正方形。釘頭は平たく叩き延ばし、曲げられる。全長9. 7cm。
25	針	SB	108	覆土	鍛造した棒の一端をひらたく延ばし、穿孔したのち丸めて目処をつくる。
26	毛抜き形鉄製品	SB	108	覆土	先端をともに欠く。断面長方形。
27	鉄鐸	SB	4	覆土中	本体と舌が残る。ともに鉄板をまるめ、本体は円錐形に、舌は棒状にそれぞれ成形している。

中原遺跡群　鉄・金属製品					
図版番号	器　種	遺構	番号	出土位置	特　　徴
28	不明工具	SB	44	1層	太い茎から大きな関をはさんで板状の身。類例はないが溝を彫る鑿の一種か。
29	不明刃物	SB	105	覆土	両端を欠く。中世の鋸と輪郭は似るが、鋸の刃がなく、また小さい。両側縁に刃がついていたようにみえる。汎用品の刃物であったか。
30	鉄鏃	SB	7	覆土	羽子板状の形態をとる万頭鏃。
31	鉄鏃	SB	44	1層	大きな逆刺をもつ三角鏃。長い茎がつくか。
32	鉄鏃	SB	11	覆土	切り出し状の刃先をもつ。頸部がねじれている。
33	鉄鏃	SB	37	覆土	長頸の腸抉柳葉鏃。左右に張り出す棘状関をもつ。
34	鉄鏃	SB	14	覆土	長大な頸部をもつ三角鏃。小さな逆刺がある。棘状関をもつ。
35	鉄鏃	SK	360	覆土　土坑の埋土	長頸の三角鎌。抜身の断面も三角形。
36	鉄鏃	SB	53	覆土	刃部が切り出しナイフ状の長頸鏃。
37	鉄鏃	SB	53	覆土	長頸の圭頭鏃。芝宮遺跡群で多く出土している丸鎬の鎌もこのタイプか。
38	錐	SB	102	覆土	断面四角形。両端が尖る。身に捩じりはない。
39	棒状不明品	SB	10	中層　埋土中からの出土	断面が丸い棒が、途中から板状に変わる。平らな部分の断面は鋭角三角形で刃物のようでもあ
40	板状不明品	SB	41	埋土中	長方形の板の四隅に穿孔。釘で板に打ちつけたものか。中心にも大きな切り欠きがある。
41	棒状不明品	SB	41	取り上げN0.3　ｶﾏﾄﾞ手前　床面直上から	断面四角形。大形の舞錐が欠損したものか。
42	板状不明品	SB	9	覆土1　埋土中	一部が湾曲した銅の小片。鋲が二本貫通する。
43	丸鞆	SB	44	覆土	完形品。竈埋土から出土。
44	蛇尾	SB	109	掘り形埋土	三箇所に小孔が貫通する銅板。
45	銀環	SB	43	覆土	表面の銀は三割ほど残る。
46	金環	SB	39	覆土	竈埋土から出土。表面の鍍金ばほとんど剥落。
47	金環	SB	130	覆土	鋳金が殆ど残る。
48	金環	SB	不明	覆土	鋳金は七割ほど残る。小さい金環である。
49	銅銭	SB	29	床面	萬年通寶
50	銅銭	SB	7	床面	和同開寶

芝宮遺跡群　石・土製品台帳

挿図No	名称	遺構種	遺構No	層位	取上No	取上日	材質	重量(g)	長さ	幅	高さ	備考
1	砥石	SB	41	覆土			凝灰岩	462.9	16.7	3.3	3.7	長軸方向に使われる
2	砥石	SB	79	覆土			砂岩	200.0	9.1	6.0	4.3	
3	砥石	SB	170	覆土			凝灰岩	157.3	10.8	4.6	1.5	
4	砥石	SB	249	覆土	No,4		凝灰岩	536.5	15.4	6.0	5.9	
5	砥石	SB	232	覆土				87.3	9.7	2.8	2.1	穿孔有り
6	砥石	SB	147	覆土			凝灰岩	97.1	10.1	3.2	6.0	5面とも使用されている
7	砥石	SB	131	覆土		921202	凝灰岩	343.7	11.2	4.9	3.4	
8	砥石	SB	189	覆土				556.4	13.7	6.9	3.6	
9	砥石	SB	185	覆土				224.5	9.1	4.1	3.3	
10	砥石	SB	219	覆土			粘板岩	81.5	6.5	3.3	2.5	細かい研磨に使用したものか?
11	砥石	SB	46	覆土	No,1		凝灰岩	96.0	6.5	4.5	2.2	よく使われている
12	砥石	SB	138	覆土			凝灰岩	340.0	10.3	5.4	4.1	
13	砥石	SB	185	覆土			砂岩	600.0	12.8	7.5	3.3	粗砥石
14	砥石	SB	230	覆土	No,2			1113.7	11.5	6.5	8.0	
15	砥石	SB	137	覆土	No,1		安山岩	656.6	15.4	8.6	4.0	
16	不明	SB	37	Ⅳ区		920805		65.5	8.5	9.0	3.6	
17	不明	SB	227	覆土			軽石	10.1	3.2	4.4	1.6	
18	砥石	SB	49	覆土			花崗岩	1042.3	16.7	7.9	43.5	表・両長軸面に擦過痕有り
19	打製石斧	SB	113	覆土				300.0	10.3	5.8	3.3	
20	敲石	SB	30	覆土				306.8	15.9	4.1	2.4	
21	敲石	SB	194	覆土			花崗岩	661.1	16.3	7.5	4.5	表裏に擦痕・両端に敲打痕
22	敲石	SB	184	覆土				374.1	10.1	5.4	4.3	
23	敲石	SB	188	覆土				187.9	8.6	4.3	3.7	先端に敲打痕有り
24	不明	SB	193	覆土			安山岩	1000.0	10.8	9.2	9.6	
25	敲石	SB	232	覆土				703.3	14.4	7.3	4.2	
26	敲石	SB	79	覆土				855.9	17.9	5.8	5.2	
27	敲石	SB	124	覆土				617.9	10.3	8.9	4.9	
28	こも編み石	SB	11	覆土			花崗岩	156.6	8.5	4.6	3.2	
29	こも編み石	SB	77	覆土				140.1	8.3	4.5	3.0	
30	こも編み石	SB	214	覆土	No,9			451.7	12.5	7.0	3.6	
31	こも編み石	SB	6	覆土				240.6	11.3	5.0	2.8	
32	こも編み石	SB	219	覆土				200.0	8.8	6.2	2.6	
33	こも編み石	SB	185	覆土				186.1	9.6	4.2	2.7	
37	紡錘車	SB	34	覆土		920729	土製	62.3	4.6	4.9	2.5	
38	紡錘車	SB	95	覆土			土製	73.1	ー	6.3	4.5	
34	土錘	SB	30	覆土		920722	土製	10.3	4.2	1.8	1.7	
35	石錘？	SB	11	覆土			軽石	57.0	9.4	5.9	3.0	
36	石錘	SB	198	覆土			軽石	53.6	6.5	5.1	3.8	
41	紡錘車	SB	21	覆土		920605	滑石	68.6	4.6	5.0	1.9	

芝宮遺跡群　石・土製品台帳

挿図No	名称	遺構種	遺構No	層位	取上No	取上日	材質	重量(g)	長さ	幅	高さ	備考
42	紡錘車	SB	101	覆土		92	滑石	87.3	4.8	4.7	2.7	
43	紡錘車	SB	136	Ⅲ区		921203	滑石	32.1	4.0	4.0	1.5	
44	紡錘車	SB	40	Ⅳ区		9208	滑石	28.2	3.9	3.8	1.2	
45	紡錘車	SB	70	Ⅳ区	床下10cm？	921013	滑石	48.5	4.3	4.2	1.9	
46	紡錘車	SB	70	覆土		921104	滑石	55.2	4.3	4.3	1.9	
47	有孔円盤	SB	5	覆土		920508	軽石	19.3	5.0	4.4	1.5	
48	円盤状軽石	SB	1	覆土		920417	軽石	31.9	5.2	4.5	2.4	
49	円盤状軽石	SB	2	覆土		920417	軽石	47.8	6.4	6.1	2.2	
50	円盤状軽石	SB	6	1区		920620	軽石	8.7	4.0	4.0	1.1	
51	円盤状軽石	SB	15	覆土			軽石	19.3	4.4	4.4	2.2	
52	円盤状軽石	SB	19	覆土		92	軽石	27.0	5.8	5.4	1.4	
53	円盤状軽石	SB	24	覆土		920603	軽石	16.7	4.6	3.8	1.6	
55	凹石	SB	24	覆土		920529	軽石	82.6	5.5	5.7	3.5	
56	凹石	SB	29	床下		92		48.4	6.1	7.1	3.5	
—	板状不明品	SB	46	覆土	No,2		軽石	13.9	6.0	3.9	1.1	全面に使用痕
54	円盤状軽石	SB	170	覆土			軽石	15.2	4.6	4.6	1.3	全面に切断面がある
57	円盤状軽石	SB	185	覆土			軽石	19.2	5.1	4.4	1.3	よく擦っている
59	凹石	SB	221	覆土			軽石	58.1	6.5	5.0	3.0	表裏に磨った痕、側面は自然面
60	巡方	SB	89	覆土				5.7	2.2	3.4	0.5	
61	管玉	SB	220	覆土		930722		0.8	1.7	0.7	0.7	
62	臼玉	SB	12	覆土		920423	滑石	0.5	1.2	1.1	0.3	
63	臼玉	SB	29	上層		920720	滑石	1.1	1.5	1.5	0.3	
64	臼玉	SB	33	Ⅳ上層		920723	滑石	1.4	1.1	1.5	0.5	
65	臼玉	SB	36	Ⅱ区		920810	滑石	4.5	2.1	2.1	0.8	紡錘車か？
66	臼玉A	SB	40	Ⅳ区		9208	滑石	7.6	1.9	1.9	0.9	2個体有り(AとB)
67	臼玉B	SB	40	Ⅳ区		9208	滑石		1.9	1.8	0.7	
68	臼玉	SB	133	ｶﾏﾄﾞ左		921113	滑石	1.5	1.2	1.1	0.7	
69	臼玉	SB	179	覆土		930602	滑石	1.7	1.2	1.3	0.6	
70	臼玉	SB	43	ｶﾏﾄﾞ		920916	滑石	1.5	1.6	1.5	0.5	
71	臼玉	SB	202	Ⅳ区		930520	滑石	0.6	1.2	0.6	0.6	
72	臼玉A	SB	84	ｶﾏﾄﾞ右		921117	滑石	2.9	1.1	1.1	0.6	
73	臼玉B	SB	84	ｶﾏﾄﾞ右			滑石	1.0	1.1	1.1	0.6	
74	臼玉C	SB	84	ｶﾏﾄﾞ右			滑石	0.8	1.0	1.1	0.6	
75	臼玉	SB	213	覆土		93	滑石	2.6	1.5	1.8	0.6	
76	臼玉	SB	173	覆土		930519	滑石	1.4	1.2	1.1	0.5	
77	勾玉	SB	25	覆土		920626		7.5	3.3	1.8	0.9	
78	勾玉	SB	173	覆土		930519	土製	2.5	2.5	1.1	1.0	
79	火打ち石	SB	30	覆土		920724	石英?	4.6	1.5	3.1	0.9	
80	火打ち石	SB	27	覆土		920717	石英?	7.0	2.6	1.9	1.2	

芝宮遺跡群　石・土製品台帳

挿図No	名称	遺構種	遺構No	層位	取上No	取上日	材質	重量(g)	長さ	幅	高さ	備考
81	丸小玉	SB	27	覆土		9207		0.9	1.0	1.0	0.8	
82	丸小玉	SB	232	Ⅱb		930602		0.8	1.1	9.1	0.7	
83	臼玉	SB	232	Ⅱ区上層		930602	滑石	2.8	1.5	1.6	1.2	
84	丸小玉	SB	51	Ⅳ区		920908		0.7	0.8	1.1	0.9	
85	石製模造品	SB	24	床面		920702		2.5	3.2	2.2	0.3	
86	石製模造品	SB	40	Ⅰ区	床上10cm	920811		1.2	2.9	1.8	0.2	
87	石鏃	SB	24	覆土		920526	黒曜石	0.3	1.4	1.3	0.2	
88	凹石	SB	16	覆土				471.4	9.7	9.8	3.3	
89	凹石	SB	27	Ⅳ区			軽石	154.7	9.1	8.7	3.3	大きな半球状の凹をもった軽石
90	凹石	SB	31	覆土				701.3	13.9	10.0	3.9	
91	凹石	SB	100	覆土			軽石	500.0	12.0	11.0	8.0	
92	凹石	SB	213	ｶﾏﾄﾞ	No,1		軽石	1288.4	13.8	14.6	6.3	
93	凹石	SB	53	覆土				690.1	15.9	13.5	6.8(9.5)	
94	凹石	SB	14	覆土	No,1			1979.4	17.5	16.3	9.3	
95	石臼	SB	80	覆土	No,2		安山岩	4500.0	22.7	13.7	10.7	石臼、すり鉢のように使用されたか?残存半分
96	石臼	SB	232	覆土					26.0	26.2	18.5	
97	石臼	SB	83	覆土				950.0	23.3	22.6	3.7	
99	石臼	SB	193	覆土				1619.3	14.5	14.7	6.4	
100	不明軽石	SB	41	覆土	No,1			551.9	18.1	11.7	4.6	溝が何条も掘られ刃物でひっかいたような痕跡が観られる
101	台石	SB	40	覆土				1498.5	18.5	12.7	4.3	磨れた面がある
102	凹石	SB	84	覆土	No,3			1726.0	22.9	11.7	5.0	
103	凹石	SB	30	覆土				16000.0	26.0	39.2	16.2	ノミ痕鮮やかな舟型の凹石
104	ﾌｲｺﾞの羽口	SB	30	覆土					14.7	8.0	8.0	
105	ﾌｲｺﾞの羽口	SB	30	覆土					16.7	8.3	8.0	
—	砥石	SB	77	覆土				305.7	6.6	5.2	3.5	
—	砥石	SB	80	覆土			砂岩	200.0	5.2	7.3	3.4	
—	不明	SB	147	覆土				485.3	13.5	9.7	30.0	
—	砥石	SB	3	覆土		920417	軽石	49.8				加工痕有り
—	砥石	SB	6	1区		920420		22.9				
—		SB	12				軽石	103.4	7.7	6.9	4.1	
—	不明	SB	40	覆土				219.3	11.7	6.2	1.7	平坦ですべすべした面を持つ
—	不明	SB	40	覆土				367.4	12.3	9.5	2.3	
—	不明	SB	40	覆土				365.5	12.8	5.2	2.5	
—	不明	SB	40	覆土				336.7	14.5	5.0	2.2	
—	凹石	SB	85	覆土			安山岩	2612.5	20.7	8.4	10.1	大きな円錐形の凹で丁寧な全体の調整半分残存
—	凹石	SB	91	覆土				504.7	10.8	7.8	3.7	ひっかき傷が裏面に観られる
—	不明	SB	113	覆土				343.9	12.7	4.5	2.6	人間の手の痕有り？
—	不明	SB	135	覆土				1979.5	15.5	16.1	5.0	ひっかき傷が多く摩擦痕有り

芝宮遺跡群　石・土製品台帳

挿図No	名称	遺構種	遺構No	層位	取上No	取上日	材質	重量(g)	長さ	幅	高さ	備考
—	不明	SB	185	覆土				351.8	8.3	7.1	4.2	
—	円盤状軽石	SB	185	覆土			軽石	23.6	4.3	5.0	2.0	
—	不明	SB	185	覆土			軽石	94.3	7.5	7.0	4.4	大きな引っ掻き傷有り
—	砥石	SB	189	覆土				410.1	9.7	6.4	4.6	不整形のまま使用
—	不明	SB	190	覆土				232.0	8.6	9.0	4.8	
—	不明	SB	232	覆土				433.5	12.4	5.5	2.9	
—	不明	SB	242	覆土				324.3	10.3	7.0	2.3	石皿状の広く浅い凹
—	玉	SB	?			921014	滑石	4.4	1.5	1.7	1.0	

3号溝出土土・石製品

挿図No	名称	遺構種	遺構No	位置	層位	取上日	材質	重量(g)	長さ	幅	高さ	備考
1	砥石	SD	3	B区	上層	920610	砂岩	435.6	11.1	5.4	4.4	
2	砥石	SD	3	B区	覆土	92	砂岩	161.5	7.7	3.7	3.0	
3	砥石	SD	3	4-I	覆土			180.0	7.5	7.4	2.7	一部欠損
4	打製石斧	SD	3	G区	覆土			300.0	13.9	8.1	2.0	刃先から基部まで摩耗が見られる
5	不明	SD	3	B区	覆土			485.9	12.1	6.7	4.9	敲打による剥離をもつ礫
6	敲石	SD	3	C区	上層			155.4	8.6	4.2	3.0	煤の附着が見られる
7	こも編み石？	SD	3	C区	覆土			268.2	12.9	6.9	7.1	4ヵ所に打ち欠いた痕有り
8	こも編み石	SD	3	D区	覆土		花崗岩	265.6	101.0	5.0	3.2	煤の附着有り
9	石錘	SD	3	A区	覆土			402.0	11.9	7.3	3.2	両側面に抉りがある
10	紡錘車	SD	3	A区	上層(上)	92	滑石	40.6	4.1	3.9	1.6	擦痕有り
11	紡錘車	SD	3	B区	覆土	920601	滑石	47.4	3.9	4.0	47.5	
12	紡錘車	SD	3	D-1区	4層	930506	滑石	59.8	4.3	4.3	2.2	
13	紡錘車	SD	3	H-A区	2層	930414	滑石	17.2	2.4	1.7	2.4	半分欠落・側面に一条の沈線
14	紡錘車	SD	3		砂礫層	93	滑石	50.6	4.4	4.4	1.7	
15	紡錘車？	SD	3	D区	Ⅱ層		軽石	61.9	6.9	7.2	2.2	
16	紡錘車？	SD	3	C区	Ⅲ層		軽石	34.4	5.9	5.6	2.5	中心の小孔から放射状の沈線が施される
17	紡錘車？	SD	3		覆土		軽石	3.0	6.2	5.4	2.4	平面形は隅丸方形
18	紡錘車？	SD	3	9区	1層		軽石	42.7	5.7	6.0	2.3	平面形は隅丸方形
19	円盤状	SD	3	A区	覆土		軽石	3.1	6.5	6.7	1.1	全ての面が磨られている
20	不明	SD	3	A区	覆土	920610	軽石	31.3	6.1	5.8	1.4	穿孔有り
21	円盤状	SD	3	C区	覆土		軽石	32.4	4.8	5.1	2.1	
22	不明	SD	3	A区	7Ⅲ		軽石	23.0	5.0	5.6	1.6	円形
23	円盤状	SD	3	C区	覆土		軽石	11.5	4.2	4.5	1.4	
24	円盤状	SD	3	4-I	覆土		軽石	10.2	4.3	3.9	0.9	
25	円盤状	遺構外			覆土		軽石	83.3	8.5	7.9	2.7	
26	円盤状	SD	3	C区	覆土		軽石	94.5	7.6	7.6	2.6	片面に小さな凹石を有する
27	円盤状	SD	3	H-A区	S-3		軽石	43.2	6.0	5.7	1.7	側面も擦ってある
28	円盤状	SD	3	C区	覆土		軽石	33.2	5.1	5.2	2.2	

芝宮遺跡群　石・土製品台帳

挿図No	名称	遺構種	遺構No	位置	層位	取上日	材質	重量(g)	長さ	幅	高さ	備考
29	円盤状	SD	3	B区	Ⅱ層		軽石	4.5	9.4	6.4	10.7	穿孔無く、表裏良く擦っている
30	臼玉	SD	3	C区	上層(下)	920618	滑石	1.8	1.2	1.2	0.9	
31	臼玉	SD	3	D-8区	2層No,2	930608	滑石	1.4	1.3	1.3	0.5	
32	臼玉	SD	3	D-8区	2層No,4	390610	滑石	1.9	1.2	1.2	0.9	
33	臼玉	SD	3	D-サ区	No,2	930427	滑石	1.4	1.1	1.1	0.8	
34	臼玉	SD	3	D-8区	2層No,3	930608	滑石	1.2	1.2	1.1	0.7	
35	臼玉	SD	3	1区	検出面	92	滑石	2.1	1.5	1.5	0.6	
36	臼玉	SD	3	G-ウ区	2層S-1	930413	滑石	5.8	2.0	1.9	2.0	
37	臼玉	SD	3	1区	検出面	92	滑石	1.9	1.2	1.1	0.9	
38	臼玉	SD	3	1区	検出面	92	滑石	2.7	1.5	1.7	1.7	
39	臼玉	SD	3	1区	検出面	92	滑石	7.1	1.9	2.0	1.3	
40	臼玉	SD	3	1区	検出面	92	滑石	3.1	1.8	1.6	0.8	
41	臼玉	SD	3	1区	検出面	92	滑石	2.4	1.1	1.5	0.7	
42	臼玉	SD	3	1区	検出面	92	滑石	2.1	1.1	1.1	1.0	
43	なつめ玉	SD	3	C区	覆土	920622	硬玉	2.0	1.9	1.2	1.1	
44	なつめ玉	SD	3	1区	検出面	92		2.4	2.0	1.2	1.2	
45	丸小玉	SD	3	G-ア区	2層P-2	930416	土製品	0.5	0.8	0.8	0.7	
46	丸小玉	SD	3	E-キ区	2層	930421	硬玉	0.6	1.0	1.0	0.7	
47	丸玉	SD	3	D区	上層	920812	土製品	0.9	1.1	1.1	1.0	
48	勾玉	SD	3	1区	検出面	92	滑石	3.8	2.8	1.4	1.0	
49	勾玉	SD	3	9区	覆土		滑石	0.6	1.5	0.7	2.4	
50	凹石	SD	3	B区	覆土		軽石	114.6	9.1	5.4	3.6	小さな凹有り
51	凹石	SD	3	F-イ区	2b層		軽石	180.0	10.1	7.2	3.4	石皿？
52	凹石	SD	3	B区	覆土		軽石	68.0	6.2	5.5	7.4	擦痕有り
53	凹石	SD	3	C区	覆土		軽石	286.1	11.4	10.7	3.5	大きな凹を有する
54	凹石？	SD	3	E-イ区	覆土		軽石	66.8	81.5	6.4	3.2	石皿?
55	凹石	SD	3	B区	覆土		軽石	26.1	4.7	4.3	1.8	中心に小さな凹
56	凹石	SD	3	C区	覆土		軽石	157.0	8.5	7.3	5.0	小さな凹石を有する
57	凹石	SD	3	O-4トレンチ	覆土		軽石	760.3	18.3	12.0	7.7	
58	凹石	SD	3	B区	覆土		軽石	489.8	12.5	15.3	1.5	大きな凹を有する
59	凹石	SD	3	B区	覆土		軽石	293.3	12.2	10.6	3.4	
60	凹石	SD	3	C区	覆土		軽石	230.7	10.4	9.0	4.0	側面の一部に擦痕
61	凹石	SD	3	F-カ区	2層		軽石	151.2	10.1	9.4	1.8	両面に凹有り
62	凹石	SD	3	D区	上層		軽石	180.0	10.9	9.5	3.5	
63	丸石	SD	3	C区	覆土			548.1	8.4	7.2	6.3	被熱の痕跡がある
65	凹石？	SD	3	D-オ区	覆土		滑石	1407.0	17.9	15.4	4.3	石皿としたほうが良いか?
66	磨石	SD	3	A区	覆土			172.6	12.9	12.9	7.4	小さな凹有り
—	不明	SD	3	A区	覆土			320.6	9.6	8.6	2.4	斜線部分は磨かれたように滑らか
—	不明	SD	3	A区	覆土		軽石	11.2	4.2	2.7	2.0	全ての面が磨られている

芝宮遺跡群　石・土製品台帳

挿図No	名称	遺構種	遺構No	位置	層位	取上日	材質	重量(g)	長さ	幅	高さ	備考
—	不明	SD	3	B区	覆土		軽石	463.5	15.5	10.0	4.8	自然石？
—	ｶﾏﾄﾞ芯材	SD	3	B区	覆土			958.6	11.7	8.9	4.3	粘土の附着が見られる
—	凹石	SD	3	B区	覆土			986.1	16.4	7.0	9.0	石皿の破片
—	凹石	SD	3	B区	覆土			727.9	10.8	10.3	6.7	被熱の痕跡がある
—	環状？石	SD	3	B区	覆土		軽石	302.8	14.1	5.7	5.5	環状に加工された石
—	不明	SD	3	B区	覆土		軽石	34.7	6.3	3.1	2.8	表面が削られている
—	不明	SD	3	B区	覆土			164.6	9.4	6.4	10.7	自然石、使用痕もみられない
—	不明	SD	3	C区	覆土			897.0	20.0	3.4	4.6	人為的では無い
—	臼玉	SD	3	C-Ⅳ区	2層No,7	9306	滑石	0.9	0.9	1.3	0.9	一部欠損
—	不明	SD	3	E-ｷ区	覆土			413.5	11.0	6.6	3.8	両端欠損・打斧？
—	凹石	SD	3	F-ｴ区	覆土		軽石	575.4	13.8	12.5	5.3	
—	臼玉	SD	3	F-18	確認面	920721	滑石	1.1	1.2	1.1	0.5	
—	臼玉	不明			覆土	92	滑石	3.4	1.6	1.6	1.0	

芝宮遺跡群　土坑出土石製品

挿図No	名称	遺構種	遺構No	位置	層位	取上日	材質	重量(g)	長さ	幅	高さ	備考
67	紡錘車	SK	270		覆土	920724	軽石	88.3	7.0	7.4	2.5	
64	こも編み石	SK	918		覆土			424.8	8.8	7.4	5.1	
68	臼玉	SK	不明		覆土	920522	滑石	3.8	2.0	1.8	0.7	

芝宮遺跡群　掘立柱建物跡出土土製品

挿図No	名称	遺構種	遺構No	位置	層位	取上日	材質	重量(g)	長さ	幅	高さ	備考
69	土錘	ST	9	P-4	覆土	920921	土製品	9.1	3.6	1.7	1.5	
70	丸小玉	ST	18	東柱穴列	覆土		土製品	0.9	0.9	1.0	1.0	

中原遺跡群　石・土製品台帳

挿図No	名称	遺構種	遺構No	層位	取上No	取上日	材質	重量(g)	長さ	幅	高さ	備考
1	凹石	SB	7	覆土	No, 4		安山岩	756.2	14.2	7	3.4	
2	打製石斧	SB	125	ｶﾏﾄﾞ	No, 8		粘板岩	141	11	4.1	1.4	
3	敲石？	SB	103	覆土	No, 7		安山岩	926.5	12.4	6.75	6.35	
4	敲石	SB	64	覆土			粘板岩	359.9	14.6	5.1	3.5	
5	こも編み石	SB	112	ｶﾏﾄﾞ			安山岩	250	10	4.8	3.3	
6	砥石	SB	102	覆土			粘板岩	82.3				
7	紡錘車	SB	77	床面上		921215	滑石	8.1	4.2	4.8	1.9	
8	紡錘車	SB	63	覆土		921203	滑石	57.8	4	4	2.1	
9	紡錘車	SB	39	覆1	No, 4	921218	滑石	38.3	3.5	3.8	1.7	
10	紡錘車	SB	45	覆土			滑石	25.5	2.8	4.2	1.9	半分欠
11	不明	SB	68	覆1		921127	軽石	31.37	5.6	6.1	2.4	円盤状で中心にφ1cmの穿孔
12	円盤状	ｸﾞﾘｯﾄﾞ	T08	—		920907		728	4	3.9	1.1	
13	臼玉	SB	7	床下		921009	滑石	6.88	2.1	2.3	1.1	
14	臼玉	SB	70	覆		921203	滑石	1.31	1.1	1.1	0.7	
15	勾玉	SB	3	覆2		920824	瑪瑙	5.96	3	1.7	0.8	
16	勾玉	SX	51	覆土		930414	土製	20.53	4.9	3.4	1.9	
17	勾玉	SX	51	覆土		930414	土製	20.3	4.2	3.3	1.2	
18	勾玉	SB	124	ｶﾏﾄﾞ	No,1		土製	36.8				
19	不明	SB	35	覆土			安山岩	486.2	14.7	59.5	5.7	
20	ﾄﾞｰﾅｯﾂ状	SB	125	覆土	No, 1		熔岩	5200	21.6	24.25	9.8	穿孔有り
—	不明	SB	72	覆土		921215	不明	11.79	3.5	2.2	1.3	
—	砥石	SB	101	覆土			滑石	580.3	9.2	9	3.4	
—	石鏃	ｸﾞﾘｯﾄﾞ	T17			930407		0.32	1.5	1.25	0.25	凹基式・無茎

芝宮遺跡群出土炭化樹種								
No	材質	科名	遺構、グリッド	出土層位	取上No	取上げ日	重量	備考
1	木	ナラ	SB-02	覆土	—	920622	—	多量
2	木	モモ	SB-04	覆土	—	920410	—	
3	木	クヌギ	SB-04	覆土	—	920421	—	
4	木	ナラ	SB-04	覆土	—	920622	—	小枝
5	木	オオバヤナギ	SB-04	覆土	—	920622	—	
6	木	ススキ	SB-04	覆土	—	920622	—	
7	木	アカマツ	SB-13Ⅱ区	覆土	—	920506	—	
8	木	クリ	SB-15	覆土	—	920512	—	
9	木	ススキ	SB-16	覆土	—	920512	—	
10	木	アカマツ	SB-16Ⅱ区	覆土	—	920512	—	
11	木	不明	SB-16Ⅱ区	覆土	—	920512	—	
12	木	ススキ	SB-16	検出面	—	920708	—	小枝
13	木	クヌギ	SB-16	検出面	—	920708	—	
14	木	モモ	SB-19	覆土	—	9205	—	
15	木	エノキ	SB-19	覆土	—	920521	—	
16	木	イネ	SB-24	ｶﾏﾄﾞ粘土	—	920811	—	圧痕
17	木	クヌギ	SB-27	覆土	—	920716	—	
18	木	モモ	SB-27	床	—	920716	—	
19	木	モモ	SB-27	ｶﾏﾄﾞ	—	920824	—	
20	木	クヌギ	SB-27	ｶﾏﾄﾞ右袖下	—	920831	—	
21	木	クヌギ	SB-30	P-4	—	92	—	
22	木	ナラ	SB-30	柱穴	—	92	—	小木片
23	木	オニグルミ	SB-36Ⅳ区	覆土	—	920806	—	種？
24	木	ススキ	SB-37	トレンチ部	—	920812	—	
25	木	ナラ	SB-37	覆土	—	920820	—	
26	木	クヌギ	SB-39Ⅰ区	覆土	—	920821	—	
27	木	オオバヤナギ	SB-39Ⅰ区	覆土	—	920821	—	
28	木	ナラ	SB-45	覆土	—	920901	—	
29	木	ススキ	SB-51Ⅳ区	覆土	—	920908	—	
30	木	ススキ	SB-51	床	—	920909	—	
31	木	クヌギ	SB-60	ｶﾏﾄﾞ	—	92	—	
32	木	不明	SB-63	ｶﾏﾄﾞ	—	920914	—	
33	木	ススキ	SB-70Ⅰ区	覆土	—	921102	—	
34	木	ナラ	SB-71Ⅱ区	覆土	—	921013	—	
35	木	クリ	SB-71Ⅲ区	覆土	—	921013	—	
36	木	ナラ	SB-71	覆土	No,1-1	921102	—	多量
37	木	ナラ	SB-71	覆土	No,1-2	921102	—	
38	木	ナラ	SB-71	覆土	No,1-3	921102	—	
39	木	ナラ	SB-71	覆土	No,1-4	921102	—	
40	木	ナラ	SB-71	覆土	No,1-5	921102	—	
41	木	クリ	SB-71	覆土	No,2-2	921102	—	多量
42	木	クリ	SB-71	覆土	No,2-3	921102	—	
43	木	ススキ	SB-71	覆土	No,4	921102	—	
44	木	ケヤキ	SB-71	覆土	—	921102	—	
45	木	ススキ	SB-71	覆土	—	921102	—	
46	木	ナラ	SB-71	覆土	—	921102	—	
47	木	クリ	SB-71	覆土	—	930402	—	
48	木	クヌギ	SB-73Ⅲ区	覆土	—	921111	—	
49	木	クヌギ	SB-73Ⅲ区	覆土	—	921111	—	
50	木	ススキ	SB-81	床	—	921209	—	
51	木	イネ(ワラ、灰)	SB-81	床直	—	921215	—	
52	木	ススキ	SB-81	床直	—	921215	—	
53	木	アカマツ	SB-82	覆土	—	921112	—	
54	木	アカマツ	SB-84	ｶﾏﾄﾞ手前床	—	921116	—	
55	木	エノキ	SB-84	ｶﾏﾄﾞ南	—	921124	—	枝部、櫛とともに出土
56	木	ナラ	SB-87	覆土	—	92	—	
57	木	カシ	SB-107	覆土	—	921202	—	皮部、薪片
58	木	スギ？	SB-119	ｶﾏﾄﾞ内	—	921117	—	

芝宮遺跡群出土炭化樹種								
No	材質	科名	遺構、グリッド	出土層位	取上No	取上げ日	重量	備考
59	木	ナラ	SB-137	カマド	—	921222	—	
60	木	クヌギ	SB-145	覆土	—	92	—	
61	木	クヌギ	SB-151	覆土	—	921202	—	
62	木	モモ	SB-154	ベルト	—	921203	—	
63	木	クヌギ	SB-170	カマド内	—	930708	—	
64	木	ヨシ	SB-172	床	—	930719	—	
65	木	ワラ、 クリ	SB-172	覆土	—	930722	—	
66	木	クヌギ	SB-180Ⅱ区	中層	—	930716	—	
67	木	クルミ	SB-230	覆土	—	930802	—	
68	木	クヌギ	SB-231	カマド掘り形	—	930624	—	
69	木	クヌギ	SD-03-A	炭層	—	920610	—	
70	木	ナラ	SD-03-A	覆土	—	920610	—	
71	木	クヌギ	SD-03-A	覆土	—	920610	—	
72	木	ヨシ	SD-03-A	覆土	—	920610	—	
73	木	スギ	SD-03-A	覆土	—	920610	—	
74	木	アカマツ	SD-03-A	覆土	—	920611	—	
75	木	イネ(ワラ、モミ)	SD-03-A	覆土	—	920611	—	圧痕
76	木	イネ	SD-03-A	覆土	—	920612	—	
77	木	モモ	SD-03-A	最北トレンチ上層	—	920612	—	果仁
78	木	クヌギ	SD-03-A	覆土	—	920612	—	
79	木	クヌギ	SD-03-A	覆土	—	920615	—	
80	木	クヌギ	SD-03-A	覆土	—	920615	—	
81	木	ナラ	SD-03-A	覆土	—	920616	—	
82	木	アカマツ	SD-03-A	覆土	—	920616	—	
83	木	ケヤキ	SD-03-B	覆土	—	920615	—	少量
84	木	ヨシ	SD-03-B	上層	—	920617	—	微小
85	木	アカマツ	SD-03-B	覆土	—	920622	—	
86	木	スギ	SD-03-B-8	2層	—	930603	—	
87	木	クヌギ	SD-03-C	覆土	—	920615	—	
88	木	カシワ	SD-03-C	上層(下)	—	920619	—	
89	木	エノキ	SD-03-C	覆土	—	920625	—	歯(No,54)とともに出土
90	木	エノキ	SD-03-C	中層(上)	—	920625	—	
91	木	ナラ	SD-03-C	下層(上)	—	920626	—	
92	木	カシワ	SD-03-C	中層	—	920630	—	
93	木	スギ	SD-03-C	覆土	—	920702	—	
94	木	ナラ	SD-03-D	覆土	—	920811	—	
95	木	クヌギ	SD-03-D	東側	—	920811	—	
96	木	クヌギ	SD-03-D-カ	2層	—	930426	—	
97	木	クヌギ	SD-03-G-ウ	2層	—	930414	—	
98	木	クヌギ	SD-03-G-エ	2層	—	930413	—	
99	木	クヌギ	SD-03No,1	トレンチ	—	930421	—	
100	木	クヌギ	SD-03G～H間	ベルト	—	930706	—	
101	木	ケヤキ	SK-263	覆土	—	920713	—	
102	木	アカマツ	SK-889	覆土	—	921126	—	多量
103	木	カシ	Fグリッド遺構外		—	920805	—	小木片
104	木	シブカキ系	不明		—	93	—	

中原遺跡群出土炭化樹種								
No	材質	科名	遺構、グリッド	出土層位	取上げNo	取上げ日	重量	備考
1	木	アカマツ	SB-03	覆土	No,39	921008	—	
2	木	クリ	SB-03	覆土	No,40	921008	—	
3	木	クヌギ	SB-10	覆土	—	920916	—	太い
4	木	クヌギ、ヨシ	SB-34	カマド	—	930414	—	
5	木	ナラ	SB-38	カマド	—	93	—	
6	木	実	SB-39	カマド火床上	—	930701	—	
7	木	クヌギ、ヨシ	SB-43	カマド	—	930426	—	
8	木	クヌギ	SB-44	覆土	No,1	921210	—	建材
9	木	クリ	SB-44	覆土	No,2	921210	—	建材
10	木	クヌギ	SB-44	覆土	No,3	921210	—	建材
11	木	クヌギ	SB-44	覆土	No,4	921210	—	建材
12	木	クヌギ	SB-44	覆土	No,5	921210	—	建材
13	木	クヌギ	SB-44	覆土	No,6	921210	—	建材
14	木	クリ	SB-44	覆土	No,6	921210	—	建材
15	木	クリ	SB-44	覆土	No,7	921210	—	建材
16	木	クヌギ	SB-44	覆土	No,8－1	921210	—	建材
17	木	クヌギ	SB-44	覆土	No,8－2	921210	—	建材
18	木	クヌギ	SB-44	覆土	No,8－3	921210	—	建材
19	木	クヌギ	SB-44	覆土	No,9	921210	—	
20	木	クヌギ	SB-44	覆土	No,10	921210	—	
21	木	クヌギ	SB-44	覆土	No,11	921210	—	
22	木	クリ	SB-44	覆土	No,12	921210	—	建材
23	木	クヌギ	SB-44	覆土	—	921210	—	テンバコ1箱出土
24	木	クヌギ	SB-44	覆土	—	921210	—	
25	木	ケヤキ①	SB-44	覆土	—	921210	—	器
26	木	ケヤキ②	SB-44	覆土	—	921210	—	器
27	木	クリ	SB-44	覆土	—	921210	—	建材
28	木	ミズキ	SB-44	覆土	—	921210	—	
29	木	スギ、モミ	SB-44	覆土	—	921210	—	杉の器中の籾
30	木	不明	SB-44	覆土	—	930407	—	
31	木	クヌギ	SB-44	覆土	—	930407	—	
32	木	クヌギ、カヤ、クリ	SB-44	覆土	—	930408	—	
33	木	クリ	SB-44	覆土	—	930408	—	
34	木	不明	SB-44	覆土	—	930408	—	
35	木	クヌギ	SB-44	覆土	—	930408	—	
36	木	クヌギ	SB-44	覆土	—	930408	—	
37	木	不明	SB-44	覆土	—	930408	—	
38	木	ヨシ	SB-44	覆土	—	930408	—	
39	木	カヤ	SB-44	覆土	—	930408	—	
40	木	クリ、カヤ	SB-44	覆土	—	930408	—	
41	木	クヌギ、ナラ、不明	SB-44	覆土	—	930408	—	
42	木	不明	SB-44	覆土	—	930408	—	
43	木	クヌギ	SB-44	覆土	—	930408	—	
44	木	クヌギ	SB-44	覆土	—	930408	—	
45	木	クヌギ	SB-44	覆土	—	930408	—	
46	木	クヌギ	SB-44	覆土	—	930408	—	
47	木	クヌギ	SB-44	床上	—	930903	—	
48	木	クヌギ	SB-74	カマド	—	930415	—	
49	木	クヌギ	SB-77	カマド	—	930506	—	
50	木	スギ	SB-105	覆土	—	921207	—	
51	木	クヌギ、スギ	SB-105	覆土	—	921207	—	51-②クヌギ
52	木	クリ	SB-105	覆土	—	921207	—	
53	木	クヌギ、ヒノキ	SB-105北	覆土	—	930323	—	テンバコ1箱出土

中原遺跡群出土炭化樹種								
No	材質	科名	遺構、グリッド	出土層位	取上げNo	取上げ日	重量	備考
54	木	①ナラ②クヌギ	SB-105	覆土	—	930412	—	
55	木	クヌギ	SB-106	ｶﾏﾄﾞ	—	930408	—	
56	木	不明	SB-115	検出面	—	921112	—	
57	木	スギ	SB-115Ⅱ区	覆土	—	921119	—	
58	木	アカマツ	SB-125	ｶﾏﾄﾞ	—	930513	—	
59	木	ケヤキ(小枝)	SB-128	覆土2層	—	930512	—	
60	木	スギ	SB-128	覆土2層	—	930512	—	
61	木	不明	SB-128	覆土1層	—	930512	—	
62	木	ケヤキ	SX-05	覆土	—	92	—	
63	木	クヌギ	SX-13	覆土	—	930608	—	加工痕有
64	木	フジ	SX-13	覆土	—	930611	—	
65	木	クヌギ	SK-292	覆土	—	930426	—	
66	木	不明	SK-1343	覆土	—	930715	—	
67	木	クリ	SK-1509	覆土	—	930901	—	
68	木	不明	SB-44	覆土2層	—	921027	—	器一部

芝宮遺跡群出土動物骨

No	遺構種	遺構番号	位置	年月日	取上No	種名	部位	点数	備考
1	SB	4	—	920423	—	シカ	角	1	幼体の角（骨なしの1本角）
2	SB	5	—	920423	—	ウマ	距骨	4	
3	SB	5	—	920423	—	不明	？	7	一部焼変
4	SB	9	—	920713	—	ウマ	臼歯・上右M2？	1	
5	SB	9	—	920713	—	ウシ	臼歯	1	
6	SB	13	—	920506	—	イノシシ	臼歯	1	幼体
7	SB	13	—	920506	—	シカ	直骨部片	2	
8	SB	15	—	920512	—	シカ	角直部	1	半面欠損
9	SB	15	—	920512	—	シカ	頭骨（前頭骨）	1	
10	SB	15	—	920512	—	ウマ	上右小臼歯	1	
11	SB	15	—	920428	—	不明		1	焼変（加工人工物？）
12	SB	15	—	920701	—	カエル？	小片、部位不明	1	焼変
13	SB	24	—	920604	—	シカ	臼歯破片	4	
14	SB	24	—	920723	No, 1	シカ	右Ｈｕｍ	1	
15	SB	24	—	920723	No, 2	シカ	尺骨近端部（左）	1	
16	SB	24	カマド	920703	No, 3	不明	？	1	
17	SB	24	—	920703	No, 4	シカ	部位不明	1	片面欠損
18	SB	27	床面	920716	—	不明	？	4	焼変
19	SB	27	床下	920819	—	不明	？	1	
20	SB	27	床下	920824	—	シカ？	頚椎	1	
21	SB	42	検出面	920728	—	不明	？	1	
22	SB	30	床下	920924	—	不明	脛骨？	1	
23	SB	35	カマド	920819	—	ウマ?	歯	4	
24	SB	36	カマド	920925	—	シカ	尺骨（右？）	2	
25	SB	38	—	920810	—	シカ	距骨・足根骨・中足骨	1	
26	SB	38	—	920810	—	シカ？	部位不明	1	
27	SB	53	カマド灰層内	920925	—	不明	部位不明	1	焼変
28	SD	3-A区	—	920602	—	ウマ	下臼歯	1	
29	SD	3-A区	炭化物層	920610	—	シカ	部位不明直骨部片	1	
30	SD	3-A区	上層	920611	—	シカ	臼歯破片	4	幼体
31	SD	3-A区	上層	920611	—	シカ	角、第一段双部	1	
32	SD	3-A区	上層	920611	—	シカ	左中足骨	1	近位端部破片
33	SD	3-A区	上層	920611	—	シカ	左下顎骨	4	幼体

芝宮遺跡群出土動物骨

No	遺構種	遺構番号	位置	年月日	取上No	種名	部位	点数	備考
34	SD	3-A区	—	920611	—	不明	部位不明骨部片	1	半面欠損
35	SD	3-A区	上層	920611	—	ウシ？	臼歯	1	1/2欠損
36	SD	3-A区	上層	620612	—	シカ	角　双部	1	端部人為切断（ｶｯﾄﾏｰｸ）
37	SD	3-A区	上層	620612	—	シカ	角　第一段基部	1	切口に面取り有り（ｶｯﾄﾏｰｸ）
38	SD	3-A区	—	920612	—	シカ	角　基部	1	
39	SD	3-A区	上層	920612	—	シカ	足根部？	1	
40	SD	3-A区	上層	920612	—	シカ	臼歯片	3	
41	SD	3-A区	上層	920612	—	シカ？	部位不明長骨片	1	
42	SD	3-A区	上層	920612	—	シカ？	部位不明長骨片	1	焼変
43	SD	3-A区	上層	920612	—	シカ	角	1	加工品(墨壷?)
44	SD	3-A区	上層	920612	—	シカ	臼歯片	2	幼体
45	SD	3-A区	上層	920612	—	ウマ	右大腿骨	1	遠位、近位端部欠損
46	SD	3-A区	—	920615	—	不明	部位不明長骨部片	3	
47	SD	3-A区	—	920615	—	シカ	下臼歯	1	
48	SD	3-A区	—	920615	—	ウマ？	中手骨近位部	1	近位端部欠損
49	SD	3-A区	—	920615	—	シカ	角	1	片側半分
50	SD	3-A区	—	920615	—	不明	部位不明骨部	3	
51	SD	3-A区	—	920615	—	不明	部位不明直骨部片	1	片面欠損
52	SD	3-A区	—	920616	—	シカ	中手骨遠位端部	2	
53	SD	3-A区	—	920616	—	ウマ？	橈骨遠位端部	1	
54	SD	3-A区	—	920616	—	シカ	右距骨	1	半分欠損
55	SD	3-A区	上層	920616	—	ウマ	左上腕骨	1	遠位、近端部欠損
56	SD	3-A区	上層	920616	—	ウシ？	左?尺骨	1	完形
57	SD	3-A区	—	920616	—	イノシシ	右下顎骨	1	第一、二、三大臼歯付近顎骨
58	SD	3-A区	上層	—	—	シカ	前臼歯片	2	幼体
59	SD	3-A区	—	920610	—	不明	部位不明長骨部片	9	
60	SD	3-A区	—	920610	—	シカ	臼歯片	5	
61	SD	3-B区	—	920610	—	シカ	臼歯	1	
62	SD	3-B区	—	920612	—	ウシ?	臼歯片	3	
63	SD	3-B区	—	920612	—	シカ	左踵骨	1	
64	SD	3-B区	上層	920612	—	不明	？	1	成体大形個体
65	SD	3-B区	上層	920615	—	不明	臼歯片	1	
66	SD	3-B区	上層	920615	—	不明	部位不明長骨部	1	片側半分欠損

芝宮遺跡群出土動物骨

No	遺構種	遺構番号	位置	年月日	取上No	種名	部位	点数	備考
67	SD	3-B区	上層	920617	—	ウマ	下顎臼歯	1	
68	SD	3-B区	—	920618	7	ウマ	左踵骨	1	
69	SD	3-B区	—	920619	10	ウマ	左中手骨	1	成体完形
70	SD	3-B区	—	920622	22	不明	部位不明骨部	1	
71	SD	3-B区	—	920623	40	不明	？	1	反面欠損
72	SD	3-B区	—	920623	41	不明	部位不明骨片	1	
73	SD	3-B区	—	920625	59	シカ	臼歯片	1	土塊付着
74	SD	3-B区	—	920625	60	ウマ	上左小臼歯	2	欠損部あり
75	SD	3-B区	—	920625	61	シカ	上左小臼歯（左、右）	3	
76	SD	3-B区	—	920625	58	不明	？	1	幼体　近位遠位端部欠損
77	SD	3-B区	—	920625	67	イノシシ	第二、三前臼歯　第一、二後臼歯	1	
78	SD	3-B区	—	920626	70	イヌ	左下顎	1	第一～三後臼歯付近の骨あり
79	SD	3-B区	—	920626	72	シカ	右距骨	1	半分欠損
80	SD	3-B区	—	920626	69	シカ	角の一部	1	片側半分欠損
81	SD	3-B区	—	920626	71	シカ	頚椎	1	部分片
82	SD	3-B区	—	920626	73	シカ	左踵骨	1	
83	SD	3-B区	—	920626	77	不明	部位不明骨片	1	半面欠損
84	SD	3-B区	—	920701	62(82?)	シカ	右上腕骨	1	
85	SD	3-B区	—	920701	62(83?)	不明	部位不明長骨部片	1	半面欠損
86	SD	3-B区	—	920701	87	不明	部位不明骨片？	1	
87	SD	3-B区	—	920702	64	シカ？	部位不明骨片？	2	大小のうち小は焼変
88	SD	3-B区	—	9207	—	不明	？	1	
89	SD	3-B区	—	—	8	シカ？	撓骨遠位端部？	2	
90	SD	3-B区	—	—	11	イノシシ？	下顎犬歯？	1	幼体　骨部付
91	SD	3-B区	—	—	12	シカ	右中手骨	1	幼体　遠位端部欠損
92	SD	3-B区	—	—	78	イノシシ	下左２，３大臼歯	1	顎骨一部付
93	SD	3-B区	—	—	79	不明		1	部位不明丸棒状加工面取り 12cm直径1.5cm
94	SD	3-B区	北ﾍﾞﾙﾄ	921002	—	ウマ	大腿骨	1	1/2欠損
95	SD	3-B区	南ﾍﾞﾙﾄ	921002	—	イノシシ	下左M3臼歯？	1	
96	SD	3-C区	上層	920604	—	ウマ	上臼歯	1	1/2欠損
97	SD	3-C区	上層	920604	—	イノシシ	上左M3臼歯？	1	
98	SD	3-C区	上層	920604	—	ウマ	臼歯	1	

芝宮遺跡群出土動物骨									
No	遺構種	遺構番号	位置	年月日	取上No	種名	部位	点数	備考
99	SD	3-C区	上層	920604	—	ウマ	上左臼歯Ｐ2	1	
100	SD	3-C区	上層	920604	—	？	部位不明　端部片　？	1	
101	SD	3-B区	上層	920911	—	ウマ	下臼歯	3	体は1/2欠損
102	SD	3-D区	上層	920603	—	ウマ	左腕遠位部	1	端部欠損　成体大形個体
103	SD	3-D区	上層	920603	—	シカ	角　直部	1	片側1/2欠損
104	SD	3-D区	上層	920603	—	？	部位不明骨片	1	半面欠損
105	SD	3-C区	—	920611	—	ウシ	上腕骨遠位端部　左上腕	1	
106	SD	3-C区	検出面	920612	—	？	？	1	遠位端部欠損
107	SD	3-C区	上層	920612	—	？	？	1	半面欠損
108	SD	3-C区	上層	920617	—	？	？	1	片側欠損
109	SD	3-C区	上層	920617	—	ウシ	右下顎＋M3	1	前後下部分欠損　成体大形
110	SD	3-C区	—	920617	—	シカ	上腕?	1	近位端部片側1/2欠損
111	SD	3-C区	上層	920617	—	イノシシ	下大臼歯	1	
112	SD	3-C区	—	920617	—	シカ	部位不明直骨部位	1	
113	SD	3-C区	—	920617	—	？	？	1	
114	SD	3-C区	—	920618	3	ウシ	左中手骨	1	完全
115	SD	3-C区	—	920618	5	不明	部位不明骨片	1	半面欠損
116	SD	3-C区	—	920618	4	？	部位不明長骨部	1	
117	SD	3-C区	上層下部	920619	—	シカ	歯片	6	
118	SD	3-C区	上層下部	920619	—	？	？	1	
119	SD	3-C区	—	920622	27	シカ	右上腕骨遠位端部	1	
120	SD	3-C区	—	920622	25	？	？	1	片側1/2欠損
121	SD	3-C区	—	920622	25	シカ	左中足骨	1	
122	SD	3-C区	—	920622	20	イノシシ	下顎先端部1～3切歯、犬歯	1	歯の上部欠損
123	SD	3-C区	—	920622	31	？	？	1	端部欠損
124	SD	3-C区	—	920622	24	シカ	左上腕骨	1	遠位部のみ
125	SD	3-C区	—	920622	—	？	部位不明骨部小片	2	
126	SD	3-C区	—	920622	—	？	部位不明骨部片	1	
127	SD	3-C区	—	920622	35	シカ	臼歯片	1	幼体
128	SD	3-C区	—	920622	30	シカ	踵骨	1	
129	SD	3-C区	—	920622	36	不明	部位不明骨片	1	焼変　（炭化）
130	SD	3-C区	—	920622	28	？	部位不明骨片	1	
131	SD	3-C区	—	920622	—	不明	部位不明直骨	1	

芝宮遺跡群出土動物骨									
No	遺構種	遺構番号	位置	年月日	取上No	種名	部位	点数	備考
132	SD	3-C区	—	920622	—	シカ	臼歯片顎骨片	1	部分不明
133	SD	3-C区	—	920622	—	シカ	臼歯片	11	
134	SD	3-C区	—	920722	20	不明	部位不明直骨部片	1	
135	SD	3-C区	—	920623	43	？	？	1	
136	SD	3-C区	—	920623	38	？	部位不明小骨片	1	
137	SD	3-C区	—	920623	42	不明	部位不明小骨片	1	
138	SD	3-C区	—	920623	49	シカ	臼歯	4	破片3、も含む
139	SD	3-C区	—	920623	46	不明	左距骨	1	遠位端部1/2欠損
140	SD	3-C区	—	920623	45	イノシシ	右上腕骨	1	
141	SD	3-C区	—	920623	47	不明	部位不明直骨部片	1	片面欠損
142	SD	3-C区	—	920624	50		部位不明	1	
143	SD	3-C区	—	920625	65	シカ	中手骨　遠位端部	1	
144	SD	3-C区	—	920625	64	？	部位不明	1	片面欠損
145	SD	3-C区	—	920625	52	ウマ	右大腿骨	1	両位端部欠損
146	SD	3-C区	—	920625	—	ウマ	右肩甲骨	1	近位端部欠損
147	SD	3-C区	—	920625	53	シカ	臼歯	1	幼体
148	SD	3-C区	—	920625	56	シカ	臼歯	3	幼体　歯片3も含む
149	SD	3-C区	—	920625	51	？	部位不明小骨片	3	
150	SD	3-C区	—	920625	64	シカ	右距骨	1	
151	SD	3-C区	—	920625	54	シカ	臼歯	2	各一部欠損
152	SD	3-C区	—	920625	—	不明	部位不明直骨片	1	
153	SD	3-C区	—	920626	75	？	部位不明骨片	1	
154	SD	3-C区	—	920626	74	シカ	臼歯	2	
155	SD	3-C区	中層	920630	—	？	部位不明	1	焼変
156	SD	3-C区	—	920701	60	シカ	角	2	脆弱のため丸まった個体
157	SD	3-C区	—	920701	85	？	？	1	
158	SD	3-C区	—	920701	86	？	部位不明長骨部片	1	
159	SD	3-C区	—	920701	61	シカ	右中手骨	1	
160	SD	3-C区	—	920702	—	イノシシ	左上顎	2	第2、第3大臼歯骨つき
161	SD	3-C区	—	920702	—	？	部位不明長骨部片	2	焼変
162	SD	3-C区	—	920702	—	シカ	小臼歯他	2	小片
163	SD	3-C区	—	—	14	？	？	1	近位端のみ
164	SD	3-C区	—	—	13	イノシシ	下顎	1	先端部のみ

芝宮遺跡群出土動物骨

No	遺構種	遺構番号	位置	年月日	取上No	種名	部位	点数	備考
165	SD	3-C区	—	—	16	?	部位不明長骨部片	1	
166	SD	3-C区	—	—	2	シカ	左距骨	1	
167	SD	3-C区	—	—	17	イノシシ	上第3大臼歯	1	幼歯
168	SD	3-C区	—	—	84	シカ	撓骨遠端部	1	
169	SD	3-C区	—	—	1	シカ	大臼歯	1	完形1のみ他は片8
170	SD	3-C区	—	—	15	シカ	右寛骨	1	臼部のみ
171	SD	3-C区	—	—	18	イノシシ	下第3第臼歯	1	
172	SD	3-D区	—	9208	—	ウシ	右距骨	1	1/2欠損
173	SD	3-D区	東側	920811	—	ウシ	大臼歯．上	1	
174	SD	3-D区	上層	920811	—	ウシ	臼歯	1	
175	SD	3-D区	東側	920811	—	ウマ	?	1	1/2欠損
176	SD	3-D区	上層下	920817	—	ウマ	左上腕骨	1	遠位端部近位端部欠損
177	SD	3-D区	東側	920811	—	ウシ	左上腕骨遠位部	1	遠位端部欠損
178	SD	3-D区	上層下	920817	—	ウマ	第3切歯	1	
179	SD	3-D区	—	920819	—	?	?	1	1/2欠損
180	SD	3-D区	—	920820	—	ウシ	小臼歯．上	1	
181	SD	3-D区	上層	920820	—	ウシ	小臼歯	2	
182	SD	3-D区	上層	920820	—	シカ	右距骨	1	
183	SD	3-D区	上層	920821	—	ウシ	臼歯　小．大	大小2	
184	SD	3-D区	上層下	920821	—	ウシ	第4前臼歯？後臼歯?上	1	
185	SD	3-D区	上層	—	1	ウシ	小臼歯.下第3大臼歯	各1	
186	SD	3-D区	上層	—	2	イノシシ	臼歯　歯根欠損	1	
187	SD	3-D区	中層	920825	—	ウマ？	脛骨	1	
188	SD	3-D区	中層	920825	—	ウマ	左下M1～M3	1	顎骨つき　成体大形
189	SD	3-D区	中層	920825	1	シカ	臼歯	各1	
190	SD	3-D区	中層	920825	2	?	部位不明骨片？	1	
191	SD	3-D区	上層	—	—	ヒト	橈骨　脛骨？	1	バラ骨　遠位端なし
192	SK	280		920825	5	?	部位不明直骨部？	1	反面欠損
193	SD	3-A	上層			シカ？	臼歯	1	
194	SD	3-A	上層	920610		?	長骨部片	1	
195	SD	3-C区	—	920618	6	?	部位不明長骨片	1	
196	SD	3-B	—	920701	87	?	?	1	近端部欠損
197	SD	3-B	上層	920617	—	?	?	1	近端部欠損

芝宮遺跡群出土動物骨									
No	遺構種	遺構番号	位置	年月日	取上No	種名	部位	点数	備考
198	SB	80	—	921110	—	?	部位不明	1	直骨片
199	SB	86	ﾍﾞﾙﾄ	921117	—	不明	部位不明	1	直骨片
200	SB	80	—		—	ウシ	橈骨	1	遠位端
201	SB	80	中央	—	—	ウシ	左上腕骨	1	成体大形
202	SB	80	—	921110	—	シカ？	左下顎	1	臼歯部分の骨つき
203	SB	90	ﾍﾞﾙﾄ中央	921110	—	ウマ	右中足骨	1	近位
204	SB	90	床	921110	1	ウマ	左中手骨	1	
205	SB	90	床	921110	2	ウシ	基節骨	1	
206	SB	90	床	921110	3	ウシ	足根骨	2	大形　小形　成体
207	SB	90	床	921110	4	ウシ	距骨、踵骨	2	
208	SB	102	—	921110	—	ウシ	左上腕骨	1	遠位、近位端部欠損
209	SB	102	—	921110	—	ウシ	頚椎（１？）	1	
210	SB	80	—	921110	—	シカ	角　成体大形	1	
211	SB	89	—	921117	—	ウマ	左上腕骨遠位端部	1	
212	SB	112	ｶﾏﾄﾞ	921203	—	シカ	右下顎骨骨頭	1	
213	SB	94	床面	921102	—	アカニシ	水管部	1	軟体動物、海水性貝類、ｱｶﾆｼ科
214	SB	3	2層	930412	—	イノシシ	下M3	1	
215	SB	158	竈灰中	930513	—	ﾀﾃﾋﾀﾞｶﾜﾆﾅ		1	現生種、スワ湖
216	SB	170	竈	930708	—	トリ（小）	骨片（小）	8	
217	SB	179	竈	930622	—	小動物？	骨片	1	
218	SB	181		930512	—	巻き貝		3	
219	SB	194	竈付近	930	—	?	骨片	1	焼骨
220	SB	194		930820	No, 1	小動物	骨片	1	
221	SB	198	竈	930902	—	?	骨片	6	焼骨
222	SB	210	床面	930525	—	ウマ	上頚骨片	5	
223	SB	213		93	—	シカ	左上腕骨	1	焼骨
224	SB	214		93	—	ウマ	左尺骨	2	
225	SB	215		93	B-01	シカ	下頚骨片	2	二種類
226	SB	221		930903	B-01	ウマ？	中手骨	1	
227	SB	224	竈	931004	—	?	骨片	小多	焼骨
228	SB	227	竈	930803	—	カエル	上腕骨f2	3	
229	SK	1188		930701	—	シカ？		4	
230	SK	1235		930615	—	ウマ	上腕骨又は大腿骨	1	

芝宮遺跡群出土動物骨

No	遺構種	遺構番号	位置	年月日	取上No	種名	部位	点数	備考
231	SK	1235		930610	—	ウマ？	長骨	1	
232	SK	1235		930615	—	ウマ	右上腕骨	1	
233	T-14	ｸﾞﾘｯﾄ	表採	930526	—	イノシシ	臼歯(第３大臼歯)	1	(SB-184西側)
234	SD	03-A	1区2層	93	No, 1	ウマ？	中手骨	1	
235	SD	03-A		930511	—	ウシ	上腕骨頭	1	
236	SD	03-B		930603	B-02	シカ	歯	3	
237	SD	03-C	ｂ、2層	930423	No, 1	ウマ	歯片	9	
238	SD	03-D	コ、2層	930421	—	シカ	右脛骨遠位	1	
239	SD	03-E	ウ、4層	930426	B-02	シカ	右上腕骨	1	焼骨
240	SD	03-F	ウ	930426	B-01	ウマ？	上腕骨？	1	
241	SD	03-F	Ｉ　2層	930414	B-01	シカ？	角?つぶれている	1	
242	SD	03-F	ウ	930409	B-02	ウマ	下腿骨	1	
243	SD	03-G	イ　2層	930412	B-03	ウマ？	下腿骨	1	1
244	SD	03-G	イ	930409	B-01	シカ	歯	4	
245	SD	03-H	イ　1層	930413	B-01	ウマ？	下腿骨	1	
246	SD	03-H	ア　2層	930419	B-01	ウマ？	椎骨	2	
247	SD	03	D～E間ベルト	930820	—	ウマ	中手骨？	4	4点別収納
248	SD	03	E～F間ベルト	930727	—	シカ	歯	1	
249	SD	03	E～F間ベルト	930712	B-01	ウマ？		1	
250	SD	03	F～G間ベルト	930820	—	シカ	歯	2	
251	SD	03	ﾄﾚﾝﾁNO, 4	930420	B-01	魚類	椎骨　大型（マグロ）	6	新しい？
252	SD	03		93	—	魚類	椎骨	6	新しい？
253	不明	03		93	—	貝類		2	
254	不明	Ｉ区		93	—	ウマ	大腿骨	1	
255	不明	Ｉ区		93	—	ウマ	上腕骨	1	
256	不明	Ｉ区		93	—	ウマ	前腕骨	1	

中原遺跡群出土動物骨									
No	遺構	番号	位置	年月日	取上No	種名	部位	点数	備考
1	SB	22	竈火床灰中	930527	—	貝	一個体	1	
2	SB	38	竈付近	93	—	不明	骨片	1	
3	SB	44	竈近床下	930902	—	ウマ	上右小臼歯	2	
4	SB	63	掘り方	930513	—	シカ	臼歯片	1	
5	SB	106	竈	930408	—	不明	骨片	3	硬化して出土
6	SB	109	第1火床上面	930618	—	不明	椎骨骨端	2	
7	SB	109	竈床	930618	—	不明	骨片	3	
8	SB	109	竈火床上	930608	—	不明	椎骨(頚椎)片	4	半炭化状
9	SB	120	竈	930421	—	イノシシ	肋骨・左脛骨	2	
10	SB	127	覆土	9305	—	ウマシカ	臼歯(シカ)、右上腕骨	9	
11	SB	127	竈	930613	—	シカ	基節骨	1	
12	SX	13	覆土	930608	—	不明	上腕骨	4	
13	SX	50	覆土	92116	—	ウマ	臼歯(上左P2)、切歯3本	4	
14	不明			93	—	ウマ	右大腿骨	1	
15	不明			93	—	イノシシ	上腕骨、中手？	4	

芝　宮　遺　跡　群

写　真　図　版

左　1号住居跡
右　3号住居跡

左　5号住居跡
右　5号カマド

左　7号住居跡
右　12号住居跡

左　13号住居跡
右　12号遺物
　　出土状況

左　15号住居跡
右　18号住居跡

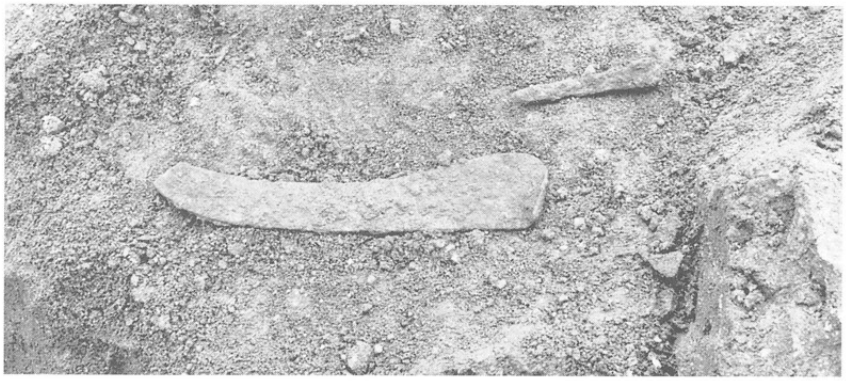
左　19号住居跡
右　20号住居跡

左　24号住居跡
右　24号遺物
　　出土状況

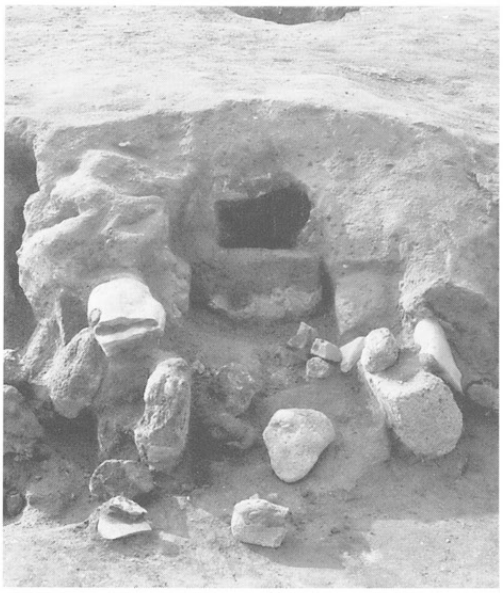
29号住居跡

左　27号住居跡
右　27号カマド

左　27号遺物
　　出土状況
右　27号カマド



左　30号住居跡
右　30号カマド



左　32号住居跡
右　32号カマド

左　34号住居跡
右　34号・35号住居跡

左　36号住居跡
右　38号住居跡

左　37号住居跡
右　40号住居跡

左　41号住居跡
右　42号住居跡

左　43号住居跡
右　45号遺物
　　出土状況

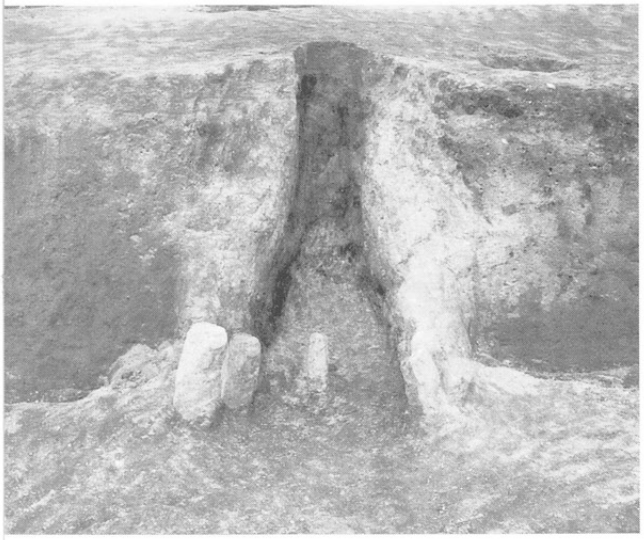
左　44号住居跡
右　46号住居跡

46号住居跡

左　46号住居跡
右　49号住居跡

左　49号カマド
右　51号住居跡

左　53号住居跡
右　54号住居跡



左　54号カマド
右　54号出入口

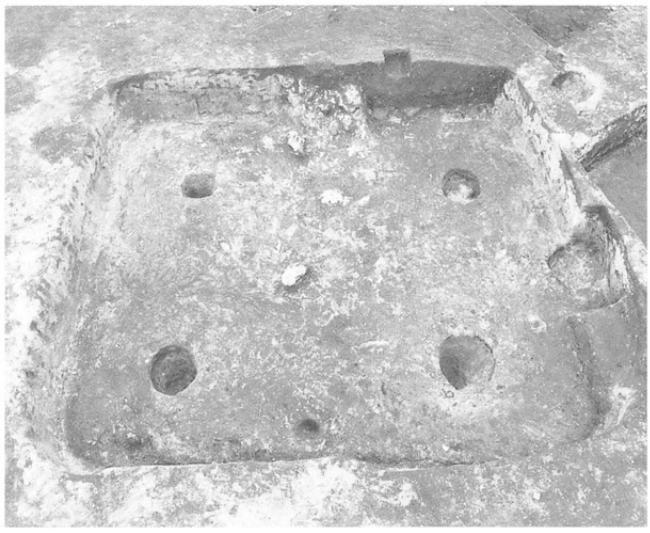
左　54号遺物
　　出土状況
右　54号遺物
　　出土状況

左　59号住居跡
右　71号住居跡

左　88号住居跡
右　89号住居跡

左　91号カマド
右　94号カマド遺物
出土状況

左　99号住居跡
右　99号カマド



左　102号住居跡
右　108号住居跡

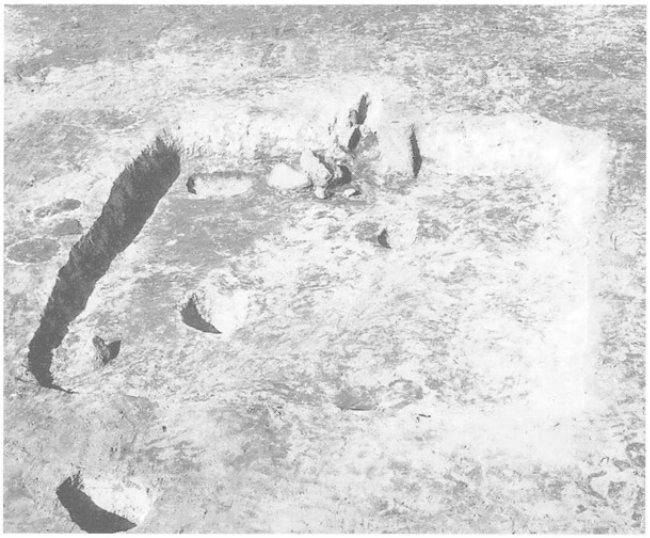
左　109号住居跡
右　110号住居跡

左　112号住居跡
右　110号遺物出土状況

左　113号住居跡
右　113号カマド遺物出土状況

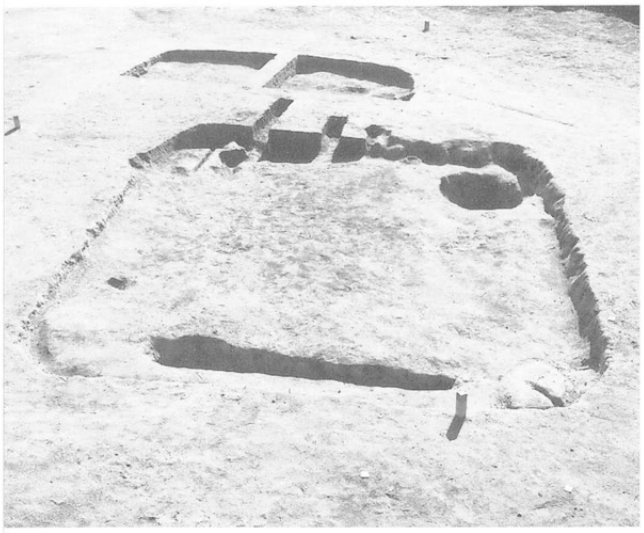
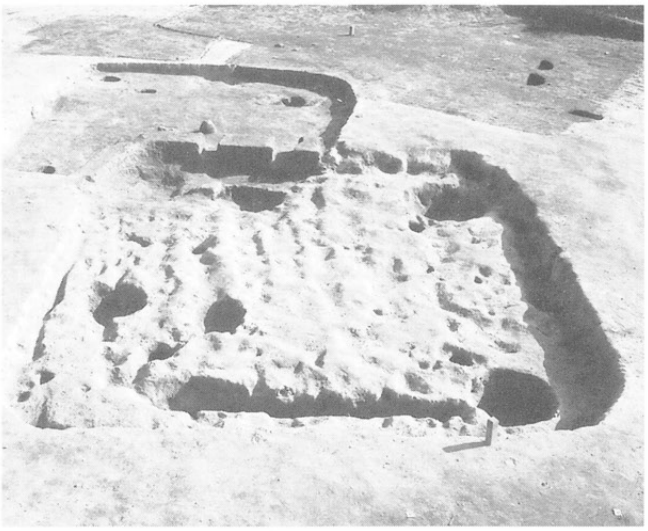
左　116号住居跡
右　117号住居跡

左　118号住居跡
右　119号住居跡

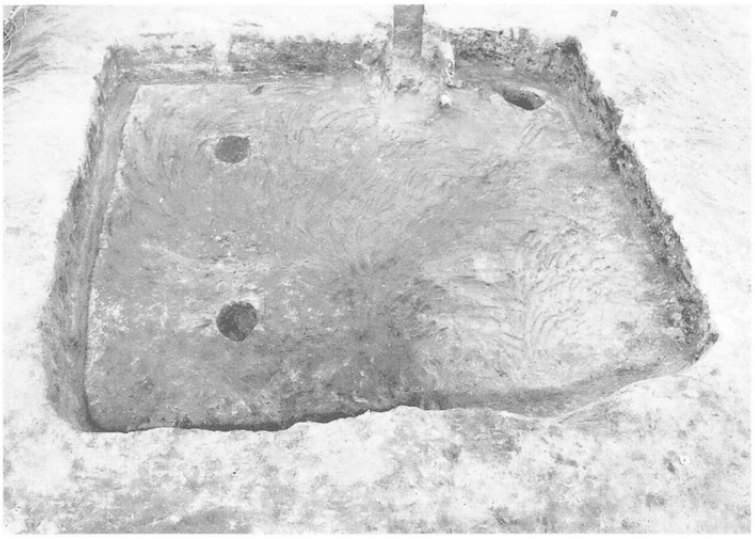


左　119号カマド
右　119号貯蔵穴

左　121号住居跡
右　129号住居跡

左　127号住居跡
右　127号掘形

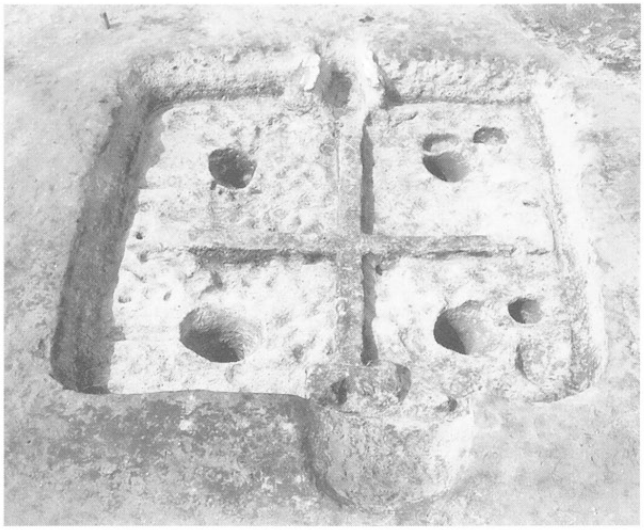


左　130号カマド
右　133号住居跡

左　133号カマド
右　133号遺物出土状況

左　134号遺物出土状況
右　134号住居跡

左　135号住居跡
右　135号掘形



左　138号住居跡
右　137号住居跡

左　140号住居跡
右　140号カマド

左　144号住居跡
右　145号遺物出土状況